

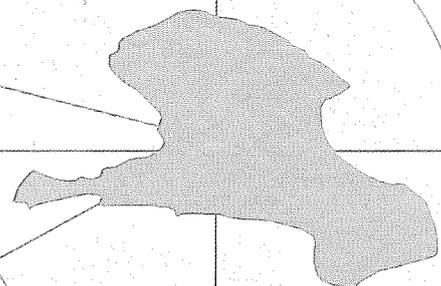
小 浜 島

SURVEY REPORTS ON NATURAL HISTORY,

総合調査

HISTORY AND CULTURE OF KOHAMAJIMA ISLAND

報告書 2004



沖縄県立博物館

Okinawa Prefectural Museum

小浜島総合調査報告書

**SURVEY REPORTS ON NATURAL HISTORY, HISTORY
AND CULTURE OF KOHAMAJIMA ISLAND**

2004年

沖縄県立博物館

OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM

まえがき

沖縄県は多くの島々から成り立っていますが、それぞれの島には、島の大きさや地史・地形・土壌などの違いによる独自の生態系があり、そのような自然環境を背景とした人々の暮らしがあります。沖縄県立博物館は、このような郷土の自然・歴史・文化についての調査研究や資料の掘り起こしをおこなうとともに、展示会の開催や出版物の刊行などを中心に、県民をはじめ多くの方々に本県の自然や文化について理解を深めていただくための活動をしています。これまで、個々の分野で研究成果が蓄積されつつあるとはいうものの、多くの島ではまだ研究が十分とはいえません。

今回の小浜島総合調査は、平成13年度から平成15年度まで3年間実施いたしました。本報告書には、自然・考古・歴史・美術工芸・民俗の各分野にわたって、職員がそれぞれのテーマを設定して調査研究した成果を収録しました。本報告書が小浜島の自然や文化を理解する一助になれば幸いです。

今回の調査を実施するにあたり、多大なご協力をいただきました小浜島在住の皆様、竹富町役場・同教育委員会、その他関係者各位に深くお礼申し上げます。

平成16年3月

沖縄県立博物館
館長 當眞嗣一

沖縄県立博物館 小浜島総合調査 調査員

自然史

宮城 勉	(沖縄県立北中城高等学校)
千木良芳範	(沖縄県教育庁文化課)
嵩原建二	(沖縄県立博物館)
田中 聡	(沖縄県立博物館)

考 古

當眞嗣一	(沖縄県立博物館)
仲座久宜	(沖縄県立博物館)

歴 史

前田真之	(西原町立坂田小学校)
園原 謙	(沖縄県教育庁文化施設建設室)

美術工芸

與那嶺一子	(沖縄県教育庁文化施設建設室)
瑞慶山昇	(浦添市立仲西中学校)
赤嶺新子	(南風原町役場)

民 俗

玉城善哲	(沖縄県立博物館)
桃原茂夫	(沖縄県立糸満高等学校)

※各調査員は、沖縄県立博物館在籍中に調査を実施した。

目 次

宮城勉 (Tsutomu MIYAGI)	
小浜島の地形地質……………	1
Topography and Geology of Kohamajima Island, Okinawa Prefecture	
千木良芳範・田中聡 (Yoshinori CHIGIRA and Satoshi TANAKA)	
小浜島で確認された蜘蛛形類、唇脚類および倍脚類について……………	13
Brief Notes on Arachnids, Centipedes and Millipedes in Kohamajima Island, the Yaeyama Islands	
田中聡 (Satoshi TANAKA)	
小浜島における両生爬虫類の現状について……………	21
Present Status of Amphibians and Reptiles of Kohamajima Island, the Yaeyama Islands	
高原建二 (Kenji TAKEHARA)	
小浜島における鳥類の記録について……………	35
Records on Birds from Kohamajima Island, the Yaeyama Islands	
川上和人・田中聡 (Kazuto KAWAKAMI and Satoshi TANAKA)	
沖縄県小浜島の路上におけるゴイサギの待ち伏せ型採食行動……………	61
"Standing" Foraging Behaviour of Black-crowned Night Heron <i>Nycticorax nycticorax</i> on the Road at Kohamajima Island of Yaeyama Islands, Southern Japan	
田中聡 (Satoshi TANAKA)	
小浜島におけるインドクジャクの現状について……………	65
Status of an Introduced Population of Common Peafowls, <i>Pavo cristatus</i> in Kohamajima Island, the Yaeyama Islands	
高原建二 (Kenji TAKEHARA)	
小浜島におけるヤエヤマオオコウモリ <i>Pteropus dasymallus yayeyamae</i> の 餌植物について……………	75
Food Plants of the Yaeyama Flying Fox, <i>Pteropus dasymallus yayeyamae</i> , in Kohamajima Island, the Yaeyama Islands	
仲座久宜 (Hisayoshi NAKAZA)	
小浜島の遺跡……………	79
The Sites of Kohamajima Island	

當眞嗣一 (Shiichi TOUMA)	
小浜島のスク (グスク)	95
Gusuku Sites in Kohamajima Island	
園原謙 (Ken SONOHARA)	
小浜島から流出した古記録と「沖縄文化展」について.....	107
Outflow of Ancient Documents from Kohamajima Island and "Exhibition about the Okinawa Culture"	
前田真之 (Masayuki MAEDA)	
小浜国民学校について.....	121
Kohama Elementary School during World War II	
與那嶺一子 (Ichiko YONAMINE)	
小浜島の染織概観.....	127
Overview of Dyeing and Weaving in Kohamajima Island	
玉城善哲 (Yoshitetsu TAMAKI)	
サトウキビ栽培と島の暮らし.....	137
Sugar Cane Cultivation and Life on Kohamajima Island	

小浜島の地形地質

宮城 勉*

Topography and Geology of Kohamajima Island, Okinawa Prefecture

Tsutomu MIYAGI*

はじめに

小浜島は沖縄県八重山諸島のほぼ中央(石垣島と西表島の間付近)、北緯 $24^{\circ} 21' 02''$ ~ 北緯 $24^{\circ} 19' 9''$ 、東経 $123^{\circ} 57' 10''$ ~ 東経 $123^{\circ} 59' 3''$ にまたがり位置する東西方向4.5km、南北方向2kmの小島である。平成8年全国都道府県市町村別面積調査(建設省国土地理院)によると面積8.14km²、海岸線延長約17kmに及び、八重山諸島においては西

表島、石垣島、波照間島、黒島に次ぐ大きさを持つ島である(図1)。

人口は500名ほどで、島の中央部にある集落村内にそのほとんどが集中し、島の北東部舟崎及び南西部の細崎に小規模な集落を持つ。

今回平成12年度から13年度にかけて総合調査の一環として二度の地質調査を行ったので、その概況を報告する。



図1 小浜島の位置及び地形図

※ 〒901-2302 沖縄県中頭郡北中城村字渡口1997-13 北中城高等学校

* Kitanakagusuku Senior High School, 1997-13, Toguchi, Kitanakagusuku-son, Okinawa 901-2302, Japan

小浜島の気象環境

小浜島の気象観測データは統計的には取られておらず、島よりおよそ12km離れた石垣市の観測データを小浜島の気象データと読み替えることも可能であるため、石垣市の観測データをもとに気象データを考えてみる。また参考に石垣市と正反対の方向で、ほぼ同じ距離にある西表島竹富町大原のデータを載せておく。比較のため、石垣市と北海道札幌市、東京都、福岡県福岡市、那覇市の気温のデータを表1に、それらをもとにしたグラフを図2に示す。

これらを見ると、特徴として年間を通して気温の変化、つまり最高気温と最低気温の差（年較差）が小さいことが第一に挙げられる。石垣島の平均気温

における年較差は11℃であり、福岡の21.2℃、東京の21.3℃や札幌の26.1℃に比べかなり小さい。

これは台湾付近を源に持つ暖流、黒潮の影響が大きい。この暖流は年間を通して高水温であり、冬場でも20℃を超える。小浜島はもとより沖縄県全体がその恩恵を受けていて、水蒸気のはたらきで空気を暖めている。水蒸気は蒸発するときに熱のエネルギーを潜熱という状態で保持している。つまり、

$$\text{水蒸気} = (\text{水滴}) + (\text{エネルギー})$$

の状態であり、その水蒸気が冷えて水滴になるとき、そのエネルギーを放出し空気全体を暖め、冷えるのを防ぐ。そのため冬季に北側から低温空気が入り込んでも、黒潮から導き出された水蒸気を含む高温の空気が島々を包み込み、温度を上昇させる。海

表1 各地の気温のデータ

平均気温 (°C)

	札幌	東京	福岡	那覇	石垣	大原
1月	-4.1	5.8	6.4	16.6	18.3	18
2月	-3.5	6.1	6.9	16.6	18.6	18.2
3月	0.1	8.9	9.9	18.6	20.6	20.4
4月	6.7	14.4	14.8	21.3	23.2	22.7
5月	12.1	18.7	19.1	23.8	25.5	25
6月	16.3	21.8	22.6	26.6	27.9	27.5
7月	20.5	25.4	26.9	28.5	29.3	28.8
8月	22	27.1	27.6	28.2	28.9	28.2
9月	17.6	23.5	23.9	27.2	27.7	26.9
10月	11.3	18.2	18.7	24.9	25.6	25
11月	4.6	13	13.4	21.7	22.8	22.4
12月	-1	8.4	8.7	18.4	19.8	19.4
年間	8.5	15.9	16.6	22.7	24	23.6

最高気温 (°C)

	札幌	東京	福岡	那覇	石垣	大原
1月	-0.9	9.8	9.8	19.1	20.9	20.5
2月	-0.3	10	10.5	19.2	21.1	20.6
3月	3.5	12.9	14	21.3	23.2	23
4月	11.1	18.4	19.2	24	25.8	25.3
5月	17	22.7	23.5	26.4	28.1	27.6
6月	21.1	25.2	26.5	29.2	30.3	29.9
7月	25	29	30.7	31.3	31.8	31.5
8月	26.1	30.8	31.6	30.9	31.5	31.2
9月	22	26.8	27.8	29.9	30.5	29.9
10月	15.8	21.6	23	27.5	28.4	27.7
11月	8.1	16.7	17.6	24.2	25.4	24.8
12月	2.1	12.3	12.5	20.9	22.4	21.8
年間	12.5	19.7	20.5	25.3	26.6	26.2

最低気温 (°C)

	札幌	東京	福岡	那覇	石垣	大原
1月	-7.7	2.1	3.2	14.3	16.1	15.7
2月	-7.2	2.4	3.5	14.3	16.4	16
3月	-3.5	5.1	6.1	16.2	18.3	18
4月	2.7	10.5	10.7	18.9	21	20.3
5月	7.8	15.1	15	21.5	23.5	22.6
6月	12.4	18.9	19.4	24.6	26	25.4
7月	17.1	22.5	24	26.4	27.3	26.5
8月	18.5	24.2	24.5	26.1	26.8	25.8
9月	13.6	20.7	20.6	25.1	25.5	24.4
10月	6.9	15	14.7	22.7	23.5	22.7
11月	0.9	9.5	9.6	19.5	20.6	20.2
12月	-4.4	4.6	5.2	16.1	17.7	17.2
年間	4.8	12.5	13	20.5	21.9	21.3

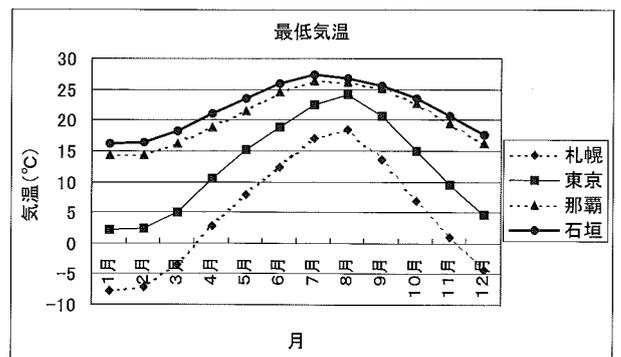
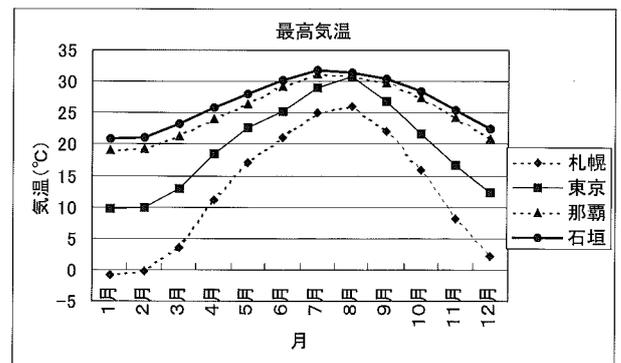
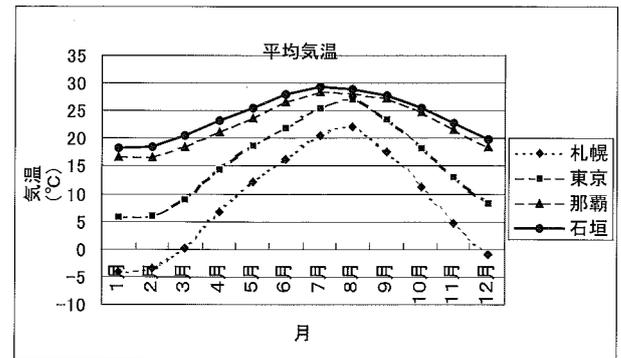


図2 各地の気温のグラフ

洋に囲まれた島々が温度変化が少ないのはこのため
で、亜熱帯海洋性気候の特徴の一つとして挙げるこ
とができる。

その他の特徴として、1日内の最高気温と最低
気温の差（日較差）が少ないこと、降水量が多いこ
とが挙げられる。

日較差は10℃より大きくなることはまれで、4～
7℃程度であり、他府県に比べてもその差は小さい。
2003年の資料によると、石垣では日較差10℃以上の
日数は1日もなかったのに対し、福岡市54日、東京
30日、札幌市72日と多い。

小浜島を含めて八重山地方は全国的に見ても降水
量が多い地域である。しかし小浜島では河川の発達
が見られず、雨水は比較的短時間で海へ注ぐ。

また、沖縄県地方は年間をとおり、他の地方に比
べ平均風速が強い。これは地表の起伏が少ないこと
に起因する。八重山地方での風の向きは、4月から
5月は南の風、6月から8月は南南西の風が最も多
く、9月から2月までは北北東の風が最も多くなる。

小浜島の地形

石西礁湖に浮かぶ小浜島

小浜島は、西はヨナラ水道によって西表島と隔離
され、東の黒島、竹富島、石垣島を含む大きな珊瑚
礁湖の中に浮かんでいる。石垣島とは同じ礁池でつ
ながり、石垣の「石」と西表の「西」の字を取り石
西礁湖とよばれる水深10m前後の礁湖で囲む、堡礁

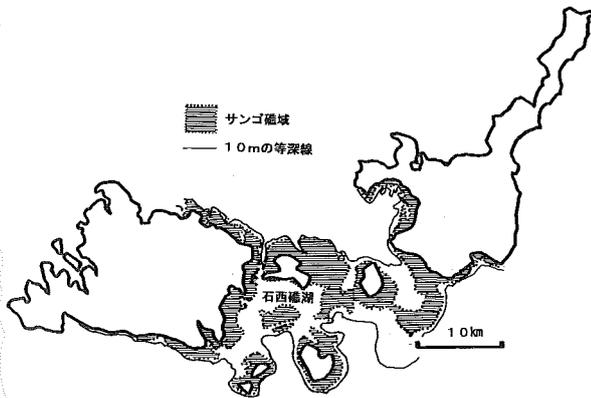


図3 石西礁湖

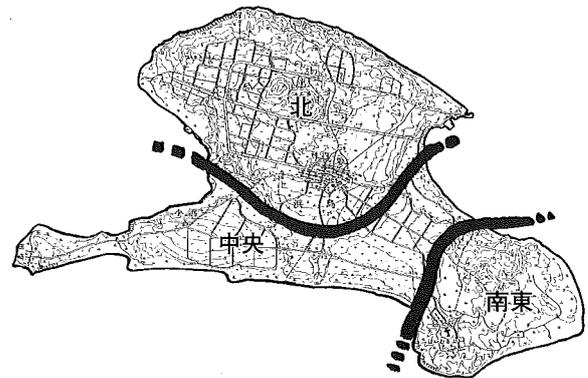


図4 小浜島の大地形区分

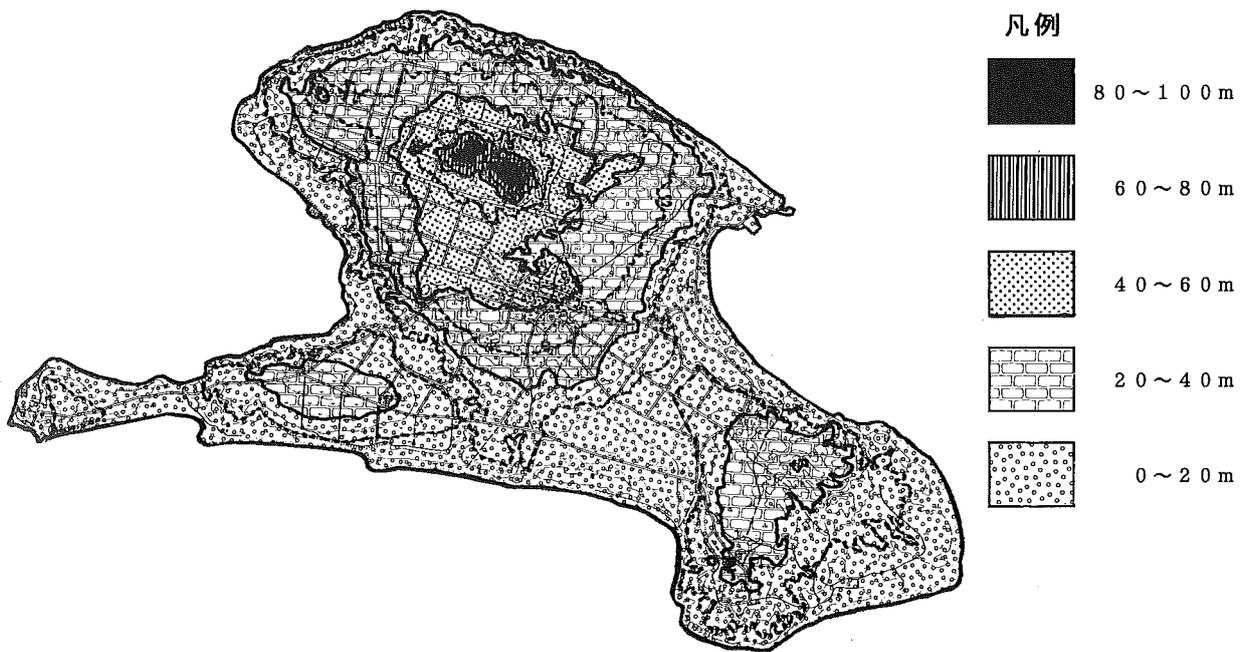


図5 小浜島の高度分布

を形成している（図3）。現在の礁湖は、琉球層群の平坦な地形の上に、約7000～6000年前頃からサンゴ礁が堆積し始め、5600～5000年前頃の海面近くに達する離礁形成、3600年前頃からの堡礁形成の3段階で現在の3列のサンゴ礁形成が指摘されている（町田他編，2001）。

地形概要

小浜島は石垣島や西表島のような高い山は見られないが、山地・丘陵を持つ「高島」に分類され、山地的特徴を持った地形である。八重山諸島中の台地的な地形を持つ他の小島とは様相を異にする。小浜島の地質も石垣島や西表島の地質に類似し、時代の古い変成岩を主軸に構成され地形的特徴にも同様のことがいえる。

島は大きく三つの地形に区分できる。（図4，5）それに仮に名前をつけると、島の北半分で大岳を含む丘陵地「北」、南東部の小丘陵地「南東」、南西部の小丘陵地「中央」であり、地質の違いによる影響を受けている。「北」では島の中央やや北側に標高99.4mの大岳を有し、大岳周辺は傾斜15°程度の丘陵地形である。その南側の標高40mほどの高台に段丘面状の緩傾斜があり、村内集落を形成する。さらにその周りは10°未滿の緩やかな傾斜面を持つ。

他の二地域では緩やかな傾斜面を持つ小丘陵の地形で、やはり地質が異なることによる影響を受けている。「南東」では八重山層の砂岩が存在し、「中央」では宮良層の凝灰角礫岩ないし砂岩が存在する。段丘の発達は顕著でないが、琉球石灰岩の存在する島北東～北側に見られ、中位面を形成する。標高的には30m～50m程度の面をなし、石垣島の北部沿岸に対比することができる。

河川

小浜島は面積が狭く、起伏の変化が大きいいため、河川の発達は見られない。地形図上では島北部の大岳周辺、及びビルマ崎北東部に流路の短い川が集中する。それらの中で島の中央部村内集落付近から東へ流れ下る川が一番長く、支流も含めおよそ3kmの長さをもつ。

海岸地形

海岸地形として、目をひくのがノッチである。ノッチは琉球層群の石灰岩との関わりが強く見られ、砂浜は周囲を取り巻く石西礁湖の関わりが強い。そのほか村内の西約1kmの海岸では湿地が見られ、小規模ながらマングローブを構成するヒルギ類が繁茂している。また地形ではないが、アカヤ崎においては数百mにわたる漁労用魚垣の積石が見られる（写真1）。積石に利用されている岩石は、その近くで見られる凝灰角礫岩、石灰岩、変ハンレイ岩などである。

その他、島の南東部においては、八重山層群の砂岩や宮良層群の凝灰岩・砂岩などが浸食を受け、小規模な波食台を形成している。また琉球石灰岩が露出する島の北側海岸では、ノッチのほか、小規模な海食崖がみられる。その他に、アカヤ崎では、やはり小規模ながら、ビーチロックが確認された。



写真1 魚垣

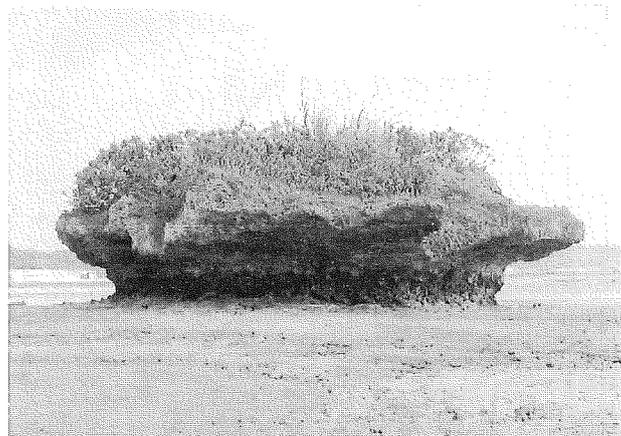


写真2 ダブルノッチ

小浜島の海岸線でも他の小島同様ノッチが見られる。特に島の北側海岸と、南部の局部的に分布する琉球石灰岩が大きく浸食されている。特に島南部の海岸に見られる岩塊はノッチが発達し、浸食時代の相違による2段のダブルノッチが見られる。岩塊がやや大きく、景観的にも十分楽しめる岩である（写真2）。石垣島では、同じ琉球石灰岩のノッチは1段の形成がほとんどで、小浜島のダブルノッチとの浸食条件の違いは不明だが、石垣島に比べ浸食条件面で大きな違いがあったとは考えにくく、礁池との関わりなど興味深い。また他の島の汀線変動と照らし合わせると、2段のうち下の段は現在浸食が進んでいるもので、高さ1mほどに見られる上段の浸食面は、数千年前のいわゆる縄文海進といわれる時代の暖かい時期の海岸線上昇期における浸食であろう。

砂丘

島の南東部においては、現在の海岸線よりも5mほど高いところに砂丘が発達する。現在は造成中で、砂が剥ぎ取られていく過程にあるが、風により吹き上げられた砂丘として、海岸より200mほど内陸に入り込むほどであり、規模としては大きい。

小浜島の地質

概要

小浜島の地質は、その西側3kmに位置する西表島、東側10kmに位置する石垣島の両島の地質特徴を合わせ持つ特異な島である。

先島諸島でも一番古い時代に形成されたと考えられているトムル層（石垣島）相当層である舟崎層の緑色片岩や石英質片岩の変成岩類をはじめ、ハンレ

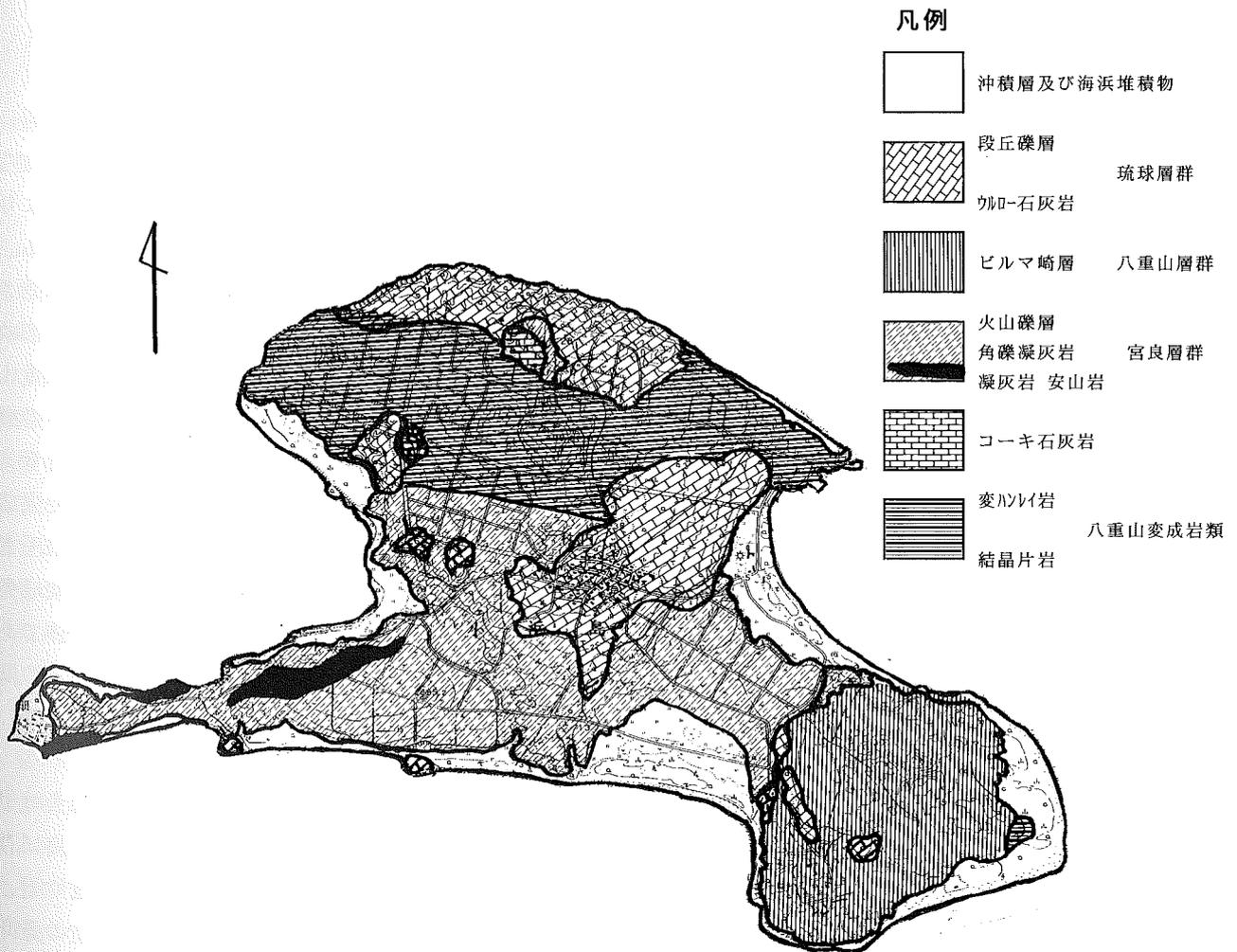


図6 小浜島の地質図

地質時代		絶対年代 X 100 万年前	層序	地質	出来事	
新 生 代	第 四 紀	完新世	0.01	沖積層	ビーチロック、沖積層砂礫層、海浜堆積物、砂丘の形成	
		更新世		琉球石灰岩		ウルロー石灰岩形成
	第 三 紀	新 鮮 新 世	1.7	(陸化)	八重山層群	温暖化による海面上昇。石灰岩・砂・礫の堆積
		古 第 三 紀	漸新世	23.3	(陸化)	安山岩の貫入、火山活動の活発化による凝灰岩・火山岩礫層の形成、砂層の形成、コーキ石灰岩の形成、
			始新世	35.4	宮良層群	
			暁新世	56.5	(陸化)	
			白亜紀	65	(陸化)	
	中 生 代	ジュラ紀	146	舟崎層群	舟崎層が広域変成作用を受ける。 舟崎層の変成岩・変ハンレイ岩の形成	
		トリアス紀	208	(陸化?)	舟崎層源岩(泥、砂)の堆積?	
ペルム紀		243	(舟崎層群源岩)			
古 生 代		290	?			

~~~~~ 不整合

年代は平凡社「地学事典」より

図7 小浜島の層序

イ岩が変成を受けた変ハンレイ岩類、宮良層群のコーキ石灰岩や凝灰角礫岩類、安山岩、八重山層群の礫岩、砂岩、琉球層群ウルロー石灰岩、海浜及び低地堆積物はその代表的な地層である。それらは互いに不整合関係で累重する(図6, 7)。以下各層について述べる。

#### トムル層(船崎変成岩類)

Foster (1965) は石垣島平久保・伊原間に分布する塩基性片岩(緑色片岩やランセン石片岩など)と泥質片岩をTumuru Formationとよび、小浜島・嘉弥真島に分布する変成岩もこれに含まれるとした。それらがトムル層と改められ、小浜島におけるトムル層相当層は舟崎変成岩類と名づけられた(篠田・木崎, 1976)。トムル層は、褶曲・微褶曲の激しい結晶質片岩主体の変成岩帯であり、小浜島に見られる舟崎変成岩類は、西表島東岸にあるトムル層と同様分布の西端に位置する。石垣島のトムル層や小浜島の舟崎変成岩類が変成作用を受けた時代は、放射性同位体による年代測定(K-Ar法)で175~202Ma(百万年)とされ、これは中生代ジュラ紀にあたる。塩基性岩の源岩は海底火山噴出物に由来している。

他の結晶片岩の変成作用を受ける前の岩石(源岩)としては、泥岩や砂岩などの細かい碎屑物が考えられ、それらの堆積時代は変成作用を受ける時代よりも古く、古生代後期~中生代三畳紀と考えられる。石垣島明石海岸や小浜島でランセン石片岩が確認されている。ランセン石は高压下の変成条件下で形成される鉱物であるため、小浜島を始めとする八重山諸島と大陸との位置関係を考えると、プレートの動きによって高い圧力を受け岩石が形成されたと考えられる。それは大洋底で堆積した泥質碎屑物や火成岩類が、大陸プレートの縁に折り重なるように圧力を受けて形成されたものであり、変成時代や変成条件を考えると、日本列島の西日本の主要構造体である三郡変成帯に比較され、琉球列島と日本列島の関係を知る上でも貴重な存在となっている(西村ほか, 1983)。

結晶片岩類は島の北側に分布する。これは大地形区分の「北」に大きく影響を及ぼしている。島に存在する結晶片岩のほとんどは緑色岩類、珪質片岩、石墨質片岩であり、褶曲が著しく、地質構造の走向傾斜を測定するのは困難であるが、大まかな構造は西北西-東南東を軸に全体的に南側へ緩やかに傾い

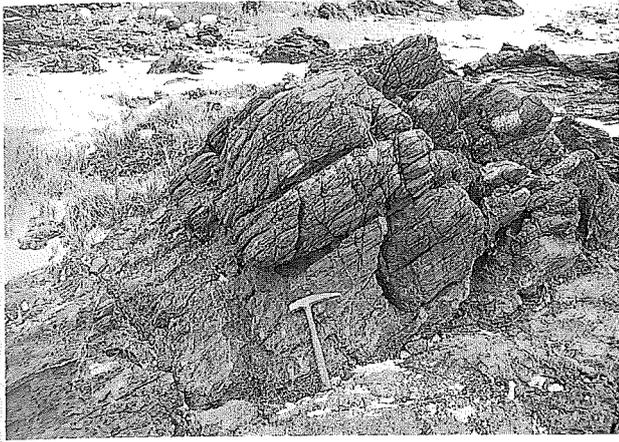


写真3 アカヤ崎北東の露頭



写真4 変ハンレイ岩顕微鏡写真

ている。岩相的には、緑色片岩が主体をなし、最高峰の大岳やその北東側に分布するが、これらは比較的風化が進み、もろくなっている。特に大岳周辺では、新鮮な緑色片岩は見られなかった。また小浜港周辺では石墨質片岩が見られ、その中には石英が多く挟まれ、層序によっては石英が顕著であったり、石墨が顕著であったりする。また局部的に島の最東端であるビルマ崎北東1kmほどのところに小規模な分布が見られ、構造として興味深い。

結晶片岩類は変ハンレイ岩と交錯するように分布し、宮良層群や八重山層群、琉球層群石灰岩によって不整合で覆われている。

変ハンレイ岩類は舟崎層（トムル層）の中でもアカヤ崎から大岳にかけて見られる緻密で固い変成岩である。火成岩であるハンレイ岩が変成作用を受けたもので、表面は緑がかった黒色で蛇紋岩に似る。片理はハッキリしないが、粒径の小さな構造をもち、角閃石が細長く伸びている。周りには長石、セキエイなどの無色鉱物や、緑泥石、緑廉石などの緑がかつ

た鉱物を取り囲む。変成前の深成岩の特徴である等粒状組織もハッキリしない。アカヤ崎においては、琉球層群ウルロー石灰岩や宮良層群の凝灰岩によって不整合で覆われるのが観察される。

### 宮良層群

宮良層群は石垣島によく発達し、下位に石灰岩、砂岩、頁岩を中心とした地層である宮良川層、上位に火砕堆積物を中心とした野底層が存在し両層は石垣島において整合関係にある事が確認されている。小浜島では、宮良川層に対比できる地層をコーキ石灰岩層、野底層に対比できる層を細崎層としている。それらの堆積時代は、石灰岩中にカヘイ石の化石が発見されたことにより、新生代第三紀始新世とされる。

小浜島では小規模ながら、明灰色を呈する緻密でやや堅い石灰岩が島の北側と西側に点在する。コーキ石灰岩が地表に露出すると、そこでは岩石表面が溶かされなめらかになっている（写真5）。

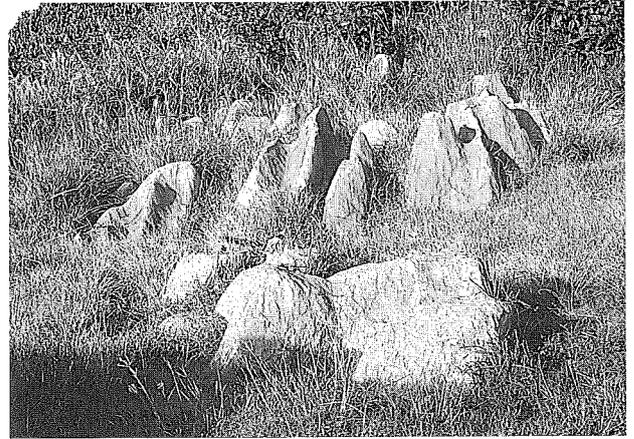


写真5 コーキ石灰岩

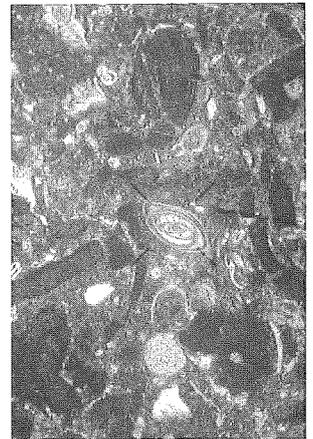
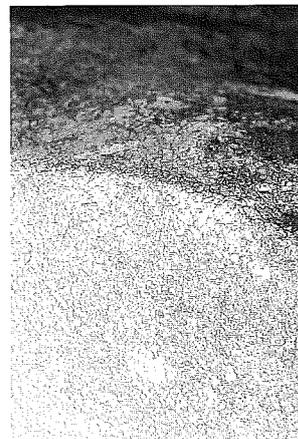


写真6 コーキ石灰岩表面(左)と顕微鏡写真(右)

土壌の中から、らくだの背のような石灰岩がいくつか現れ、カレンフェルトとよばれる景観をなす。これは中国桂林の岩塔の小型版で、暖かい地方における石灰岩地形の一つである。石灰岩の中には化石も多く存在し、その多くは石灰藻で球状あるいは豆状(写真6)の形をしており、その他多くの有孔虫化石が見られる。

その他、砂岩が南側海岸で見られ、南東部まで分布する。砂岩層は特に島の南部、宿泊施設「はいむるぶし」の南海岸に発達し、八重山層群の礫層により不整合で覆われる(写真7)。ここでの宮良層群は比較的粒度の粗い砂岩層、暗灰色の凝灰岩層で構成されており、砂のほとんどは石英質で、上位の八重山層群の砂礫層とよく似ている。そこでは走向はE W、傾斜 $10^{\circ}$  Nの構造を持つ。

細崎層の凝灰岩層、凝灰角礫岩は島の中央部や西側南側海岸に分布する。局所的に大岳北側でも見られ、どちらも著しい風化を受けている場合が多く、もろい。村内集落の南500mでは新しく切り開かれた場所があり、凝灰角礫岩の比較的新鮮な面が見られる。そこでの走向は $N40^{\circ}$  E、傾斜 $25^{\circ}$  Sの構造を持つ。礫種としては、安山岩系火成岩が含まれる。同じく島の南海岸においては、凝灰角礫岩の新鮮な部分が露出し、砂岩を覆っている。角礫はレンガ色に変色した安山岩が多く、その大きさも径5~15cm程度の中礫サイズのものが多い。基質は、少し緑がかった暗灰色で、新鮮なものほど色が濃い。その海岸周辺には、5~10cm程度の安山岩礫が海岸を埋めているのが観察できる。汀線付近から上では10cm程度の礫が密集し、沖に向かうほど礫サイズは小さ

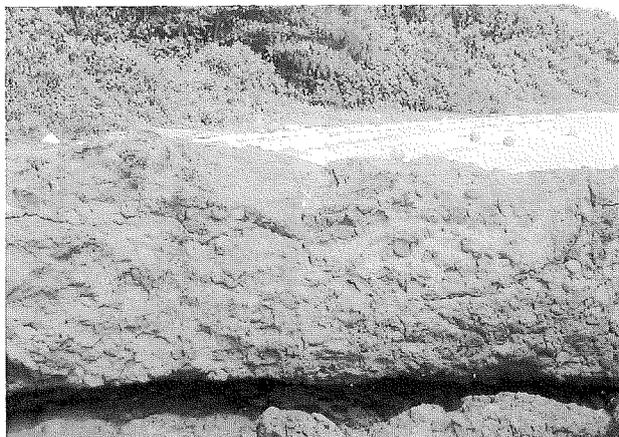


写真7 凝灰角礫岩

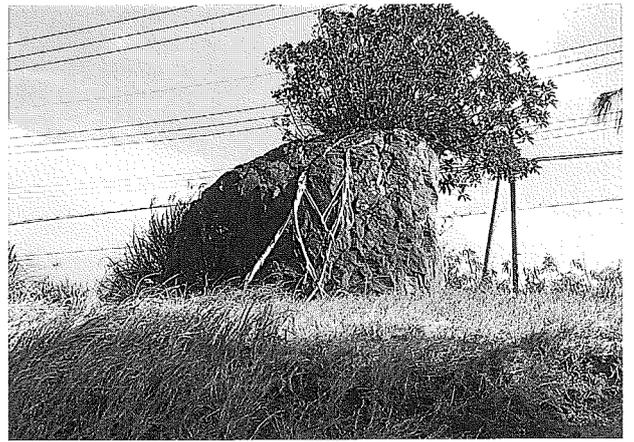


写真8 安山岩の産状(風化に強く、取り残された)

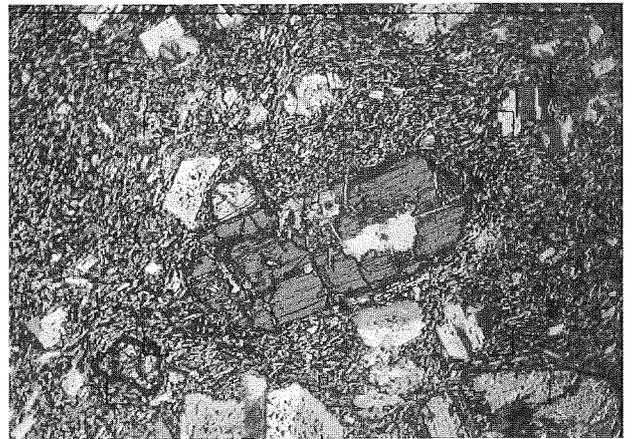


写真9 安山岩顕微鏡写真

くなる。地層の中に存在する角礫は角があるが、海岸を敷き詰める礫は波の作用などにより角が取れ、ほとんどが丸みを帯びている。

火成岩部は黒色を呈する安山岩が見られ、島の南西部、細崎周辺に局部的に分布する。見た目は黒色で、玄武岩的な外観を示すが、構成する鉱物を見ると斜長石、輝石が斑晶としてみられ、顕微鏡下では比較的大粒な石基に埋もれているのが確認される。

### 八重山層群

八重山層群は八重山諸島にしか分布していない地層で、礫岩を主体とし、砂岩が付随する。小浜島では宿泊施設の「はいむるぶし」周辺でよく発達し(写真10)、特に南海岸では、海岸線で数百mにわたって追うことができる。そのため、この地層は八重山層群ビルマ崎層と命名されている。そこでは、東側に $10^{\circ}$ 未満の角度で傾く。

最下部の礫岩は宮良層の砂岩・凝灰岩を不整合に覆う。礫は2cm未満の小礫で構成されており礫種は

そのほとんどが石英質で、基質のほとんどもセキエイ質である。礫は角が残っており、円磨度は低い。化石は、砂岩層中に二枚貝、サンドパイプ、小型の貝、ウニ、生痕化石がわずかに確認できるのみで、多くはない(写真11, 12)。礫種や礫のサイズから大きな河口付近の堆積環境が考えられている。位置的にみて、大陸の周縁部における河川の河口付近の堆積物と考えられ、ヨナラ水道はその河川の名残な

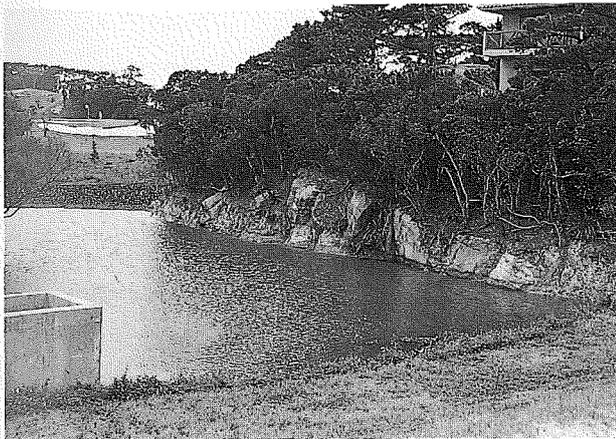


写真10 ゴルフ場内の砂層



写真11 八重山層内の化石

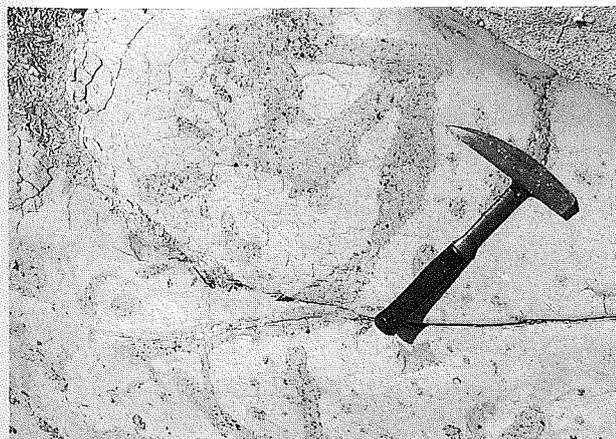


写真12 生痕化石

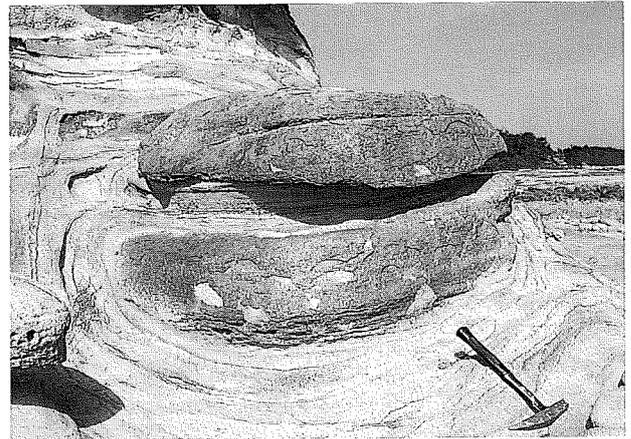


写真13 タマネギ状風化

のであろうかと、思いをはせることもおもしろい。

海岸では砂岩層の風化による模様が見られ、タマネギ状風化など様々な模様の景観を示す(写真13)。この模様は堆積による縞模様の「層理」や「葉理」ではなく、風化の度合いによる模様であり、酸化した模様が見える。

#### 琉球層群

琉球層群は主に石灰岩で構成され、標高40m付近を最上に平坦面を形成するが、層厚は薄い。南東部や北側では5~10、10~15mの平坦面を形成する。小浜島における琉球層群に属する琉球石灰岩は、ウルロー石灰岩とよばれ、比較的新しい石灰岩で、島の北側海岸及び中央部に分布する。また島南東部にある宿泊施設やゴルフ場がある緩やかな丘陵地帯にも点在している。これらは、沖縄本島における那覇石灰岩に対比されるもので、他地域ではよく見られる砂層や礫層は今調査では確認されなかった。小浜港から村内集落へ上る途中には段丘的地形があり、それらはこの琉球層群の石灰岩に由来する。石灰岩はサンゴ化石を多く含み、多孔質で貝化石などの肉眼的化石も多く含む。

島中央の村内集落に入ると、各家の塀で岩石が積まれているのが目につく(写真14, 15)。その材質のほとんどが石灰岩である。これは中央部の集落一帯から船崎方面にかけては琉球層群の石灰岩が広く分布し、その後開拓され畑などに利用されるに従い、じゃまになった石灰岩を石垣などに利用されたと考えられる。それらはサンゴ塊状質や石灰藻球質石灰岩のものであり、深度的には比較的浅い海での堆



写真14 民家の塀



写真15 塀に使われる石灰岩

積でできた岩石である。

#### その他

報告によると、段丘礫層が存在するとあるが、今回の調査では、礫層と思われる部分がうまく畑に利用され、畑の中の礫を調べるにとどまった。その他、海岸付近の低地や5 m以下の低地には泥質の堆積物



写真16 砂丘



写真17 八重山層群と宮良層群の不整合

が見られ、沖積層と思われる。同じように、ビルマ崎以東の低地には砂丘が見られる（写真16）。

#### 終わりに

以上今回の調査から、小浜島は石垣島および西表島を凝縮した地質を持ち、変成岩体と琉球層群石灰岩により島北部が構成され、八重山層群と宮良層群により島南部が構成されていること、またそれに伴い地形的共通点も多いことが確認できた。

島の地質分布からは大岳の南北に島を東西に分断する断層も考えられ、他の報告には推定断層として存在するが、今調査では直接確認されなかった。

「はいむるぶし」東における結晶片岩の存在や、断層の直接的確認がなかったことからそれぞれの地層の関係は不整合であると考え、断層の存在はないとも考えられる。

島東部にみられた局所的な変成岩と八重山層群の関係や、島北部と中央西部に局所的にみられるコーキ石灰岩の構造など問題点が残る、今後の課題となる。

## 文 献

- Foster, H.L.. 1965. Geology of Ishigaki-shima, Ryu-kyu-retto. *Prof. Pap. U. S. Geol. Surv.* 339-A, 1-119.
- 木崎甲子郎編. 1985. 『琉球弧の地質誌』沖縄タイムス社, 那覇.
- 西村祐二郎・松原康・中村栄三. 1983. 八重山変成岩類の変成分類とK-Ar年代. 地質学論集. (22) 27-37.
- 町田洋・太田陽子・河名俊男・森脇広・長岡信治編. 2001. 日本の地形7 九州・南西諸島. 東京大学出版会, 東京
- 沖縄県. 1985. 土地分類基本調査. 石垣地域5万分の1. 1-28.
- 篠田良明・木崎甲子郎. 1976. 八重山群島小浜島の地質. 琉球列島の地質学研究. 1: 37-42.

## 小浜島で確認された蜘蛛形類、唇脚類および倍脚類について

千木良 芳 範\*・田 中 聡\*\*

### Brief Notes on Arachnids, Centipedes and Millipedes in Kohamajima Island, the Yaeyama Islands

Yoshinori CHIGIRA\* and Satoshi TANAKA\*\*

#### はじめに

八重山諸島の真正クモ類(クモ目)については、大井(1963)、八木沼(1964)、下謝名(1967, 1970)らが報告しているが、いずれも石垣島や西表島に関するものである。八重山諸島の他の島々についても、わずかに大利・樋山(1976)が与那国島について、千木良・宮城(1981)が波照間島と与那国島について報告しているだけである。また、Shimojana (1977)や下謝名(1980)は、小浜島の洞穴に生息するクモ類について報告している。最近になって、谷川・佐々木(1999)が沖縄県の真正クモ類について総合的な見直しを行っている。これは、沖縄県内での採集・観察記録、分類学的研究、ならびに沖縄県をフィールドとした生態学的研究の中に記載されているクモ類の分布記録を修正し、まとめたものである。これには採集地も、島ごとに整理されているので、小浜島のクモ類についても拾い出すことができる。

一方、小浜島のサソリ・サソリモドキ類や多足類についてはほとんどわかっていない。これらの動物は飛翔によって島間を移動できない上、すみ場所も森林内のものが多い。そのため、特定の島の動物相を特徴づける要素とみなすことができる。

筆者らは2001年2月(千木良)と2002年9月、2003年7月(田中)に小浜島を訪れ、蜘蛛形類や多

足類の目撃観察あるいは採集に努めた。他の調査と並行して実施したこともあり、きわめて不十分な調査結果ではあるものの、ほとんど情報のない小浜島の蜘蛛形類や多足類について記録にとどめておくことは意味のないことではないと思われるため、ここに報告しておきたい。

なお、本報の証拠標本は沖縄県立博物館に保管されている。

#### 調査方法

自動車で島内を散策しながら、緑地の残っている地域を適当に選んで調査ポイントとした。主な調査ポイントは、嘉保根御嶽、西山御嶽、仲山御嶽、ユンドレスク付近の林、はいむるぶし近くのキャンプ場、はいむるぶし裏の海岸林、石長田地区のマングローブ林、アカヤ崎の海岸林、大岳などである。それぞれの調査ポイントで、林内を1~2時間ランダムに歩き回り、目撃したクモを採集あるいは記録した。なお、嘉保根御嶽、仲山御嶽、西山御嶽、ユンドレスク付近の林及び大岳は夜間調査も実施した。

#### 結果とまとめ

今回の調査では8科13属16種のクモ類を採集、目

\* 〒900-8570 沖縄県那覇市泉崎1丁目2番2号 沖縄県教育庁文化課

\*\* 〒903-0823 沖縄県那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

\* Culture Division, Education Department, Okinawa Prefectural Government, 1-2-2, Izumizaki, Naha, Okinawa 900-8570, Japan

\*\* Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

撃することができた。谷川・佐々木 (1999) はそれまでの報告を整理し、小浜島から13科28属34種のクモ類を報告している。今回の調査で確認された16種のうち、ヤエヤマジョウゴグモ、リュウキュウヒメグモ、ミナミノアカイトウロウグモ、オオジョウロウグモ、ハタケグモの一種及びアシダカグモの6種は、今回初めて小浜島から記録された種である。特にハタケグモの一種については、正確な種名の同定にはもう少し精査が必要であるものの、これまで沖縄県内でハタケグモ類が記録されたことはなく、本県から初めての記録となる。

今回の調査結果を含めて、小浜島のクモ類相について整理すると、小浜島からは15科32属42種が記録されたことになる。谷川・佐々木 (1999) によると、西表島からは32科103属186種が記録されているが、小浜島のクモ類はハタケグモの一種を除いて、すべて西表島との共通種である。今回の調査は、かなり粗い調査であったことから、もう少し詳細な調査を行えば、小浜島のクモ類の数は増加すると思われる。

サソリ・サソリモドキ類としては2種が確認された。ヤエヤマサソリはまだ腐植の進んでいない落枝や倒れた木の幹の樹皮の下で確認された。タイワンサソリモドキやトビズムカデは、夜間林内で活動している個体や昼間、転石や遺棄されたビニールシー

トなどの下に潜んでいるのが観察された。注意したが、今回はオオゲジ *Thereuopoda clunifera* を確認することはできなかった。ヤエヤママルヤスデは、昼間木の幹にとまっていた。ヤットコアマビコヤスデは、林内の落葉下にいた。

小浜島のクモ類は、ハタケグモの一種を除いて、ほとんどが西表島にも分布する種で構成されている。これらの種のほとんどは、バルーニングと呼ばれる空中分散を行う種である。こうしたことから、小浜島のクモ類相は西表島をメインランドとし、西表島から移動してきた種で成り立っていると思われる。しかしながら、ヤエヤマジョウゴグモやカンムリグモ、ジャバラグモはバルーニングを行わないと考えられることから、サソリ・サソリモドキ類や多足類などと同様に、西表島と陸続きの時代に渡ってきて、その後、西表島から分断された小浜島でも生き残ってきたのであろう。このような分散能力の低い種を中心にした、両島の種類相の詳細な比較検討は、小浜島の地史等を解明する手がかりを与えるかもしれない。小浜島は、大部分が牧草地や耕作地として開かれた場所が多いため、大岳、御嶽、海岸などに散在した形で残っている広葉樹林は、きわめて貴重な場所であることを強く指摘しておきたい。

### 小浜島で確認された蜘蛛形類・唇脚類・倍脚類リスト

筆者らが確認した種に加えて、クモ目については谷川・佐々木 (1999) の記録を含めた。学名の後ろの ( ) 内の数字 (引用文献に付した番号) により出典を示した。※印は今回著者らによって確認されたものである。

蜘蛛形 (クモ) 綱 Arachnida

クモ目 Araneae

ジョウゴグモ科 Hexathelidae

1. ヤエヤマジョウゴグモ *Macrothele yaginumai* Shimojana & Haupt 1998 (※)

エンコウグモ科 Ochyroceratidae

2. カンムリグモ *Speocera laureata* Komatsu 1974 (5, 6)

ユウレイグモ科 Pholcidae

3. ユウレイグモモドキ *Smeringopus pallidus* (Blackwall 1858) (6, 7)

ジャバラグモ科 Tetrablemmidae

4. ジャバラグモ *Ablemma shimojanai* (Komatsu 1968) (5, 6)

ウズグモ科 Uroboridae

5. マツガエウズグモ *Philoponella prominens* (Bosenberg & Strand 1906) (7)

ヒメグモ科 Theridiidae

6. リュウキュウヒメグモ *Achaearanea ryukyu* Yoshida 2000 (※)  
 7. アシプトヒメグモ *Anelosimus crassipes* (Bosenberg & Strand 1906) (7)  
 8. コアシプトヒメグモ *Anelosimus exiguus* Yoshida 1986 (7)  
 9. シロカネイソウロウグモ *Argyrodes bonadea* (Karsch 1881) (7)  
 10. ミナミノアカイソウロウグモ *Argyrodes flavescens* O. Pickard-Cambridge 1880 (※)  
 11. アシナガヒメグモ *Chryso spiniventris* (O. P.-Cambridge 1869) (7)  
 12. サヤヒメグモ *Coleosoma blandum* O. P.-Cambridge 1882 (7)

ヨリメグモ科 Anapidae

13. ヨリメグモ *Conculus lyugadinus* Komatsu 1940 (6)

アシナガグモ科 Tetragnathidae

14. チュウガタシロカネグモ *Leucauge blanda* (L. Koch 1878) (※, 7)  
 15. オオジョロウグモ *Nephila pilipes* (Fabricius 1793) (※)  
 16. ヒカリアシナガグモ *Tetragnatha nitens* (Audouin 1827) (7)

コガネグモ科 Araneidae

17. オニグモ *Araneus ventricosus* (L. Koch 1878) (※, 7)  
 18. コガタコガネグモ *Argiope minuta* Karsch 1879 (7)  
 19. ミナミノシマゴミグモ *Cyclosa confusa* Bosenberg & Strand 1906 (※, 7)  
 20. トゲゴミグモ *Cyclosa mulmeinensis* (Thorell 1887) (※, 7)  
 21. シロオビトリノフンダマシ *Cyrtarachne nagasakiensis* Strand 1918 (7)  
 22. ハラビロスズミグモ *Cyrtophora unicolor* (Doleschall 1857) (7)  
 23. チブサトゲグモ *Gasteracantha mammosa* C. Koch 1844 (※, 7)  
 24. コゲチャオニグモ *Neoscona punctigera* (Doleschall 1857) (7)  
 25. ヤマシロオニグモ *Neoscona scylla* (Karsch 1879) (※, 7)  
 26. ヘリジロオニグモ *Neoscona subpullata* (Bosenberg & Strand 1906) (7)  
 27. ホシスジオニグモ *Neoscona theisi* (Walckenaer 1841) (7)  
 28. ゲホウグモ *Poltys illepidus* C. Koch 1843 (※, 7)

コモリグモ科 Lycosidae

29. ナガズキンコモリグモ *Trochosa aquatica* Tanaka 1985 (7)  
 30. コモリグモ科の一種 *Lycosidae* sp. (※)

ササグモ科 Oxyopidae

31. シマササグモ *Oxyopes macilentus* L. Koch 1878 (7)

32. ササグモ *Oxyopes sertatus* L. Koch 1878 (7)

ハタケグモ科 Hahniidae

33. ハタケグモの一種 *Neoantistea* sp. (※)

アシダカグモ科 Heteropodidae

34. アシダカグモ *Heteropoda venatoria* (Linnaeus 1758) (※)

35. コアシダカグモ *Heteropoda* sp. (※)

カニグモ科 Thomisidae

36. ハナグモ *Misumenops tricuspidatus* (Fabricius 1775) (7)

37. ホシズナワカバグモ *Oxytate hoshizuna* Ono 1978 (7)

38. シロスジグモ *Runcinia albostrata* Bosenberg & Strand 1906 (7)

39. コキハダカニグモ *Takachioa trunciformis* (Bosenberg & Strand 1906) (7)

40. カラカニグモ *Xysticus ephippiatus* Simon 1880 (7)

ハエトリグモ科 Salticidae

41. アダンソンハエトリ *Hasarius adansoni* (Audouin 1827) (※, 7)

42. ヤハズハエトリ *Mendoza elongata* (Karsch 1879) (7)

サソリ目 Scorpionida

コガネサソリ科 Scorpionidae

ヤエヤマサソリ *Liocheles australasiae* (Fabricius, 1775) (※)

サソリモドキ目 THELYPHONIDA

サソリモドキ科 Thelyphonidae

タイワンサソリモドキ *Typopeltis crucifer* Kraepelin, 1899 (※)

唇脚 (ムカデ) 綱 Chilopoda

オオムカデ目 Scolopendromorpha

オオムカデ科 Scolopendridae

トビズムカデ *Scolopendra subspnipes mutilans* L. Koch, 1878 (※)

倍脚 (ヤスデ) 綱 Diplopoda

マルヤスデ目 Spirobolida

マルヤスデ科 Spirobolidae

ヤエヤママルヤスデ *Spirobolus* sp. (※)

オビヤスデ目 Polydesmida

ババヤスデ科 Xystodesmidae

ヤットコアマビコヤスデ *Riukiaria chelifera* (Takakuwa, 1941) (※)

## 謝 辞

本報をまとめるにあたり、多足類について有益な助言をいただいた安座間安史・下謝名松栄の両氏にあつくお礼申し上げます。

## 引用文献

1. 大井良次. 1963. 沖縄本島・西表島のクモ. *Atypus* (29) : 15-17.
2. 大利昌久・樋山御理男. 1976. 先島諸島(八重山群島・宮古群島)の真正蜘蛛類とその生息域. *Atypus* (66) : 15-23.
3. 下謝名松栄. 1967. 琉球列島のクモ相について. 沖縄生物学会誌 4 : 16-25.
4. 下謝名松栄. 1970. 動物の地理分布をどう指導したらよいか. 沖生教研会誌 (4) : 38-68.
5. 下謝名松栄. 1980. 先島(宮古諸島・八重山諸島)の洞窟動物. 沖縄県洞窟実態調査報告Ⅲ, 沖縄県教育委員会.
6. Shimojana, M. 1977. Preliminary report on the cave spider fauna of the Ryukyu Archipelago. *Acta arachnol.* 27 (spec. no.) : 337-365.
7. 谷川明男・佐々木健志. 1999. 沖縄県産クモ類目録. *Kishidaia* 76 : 61-101.
8. 八木沼健夫. 1964. 南西諸島のクモ. 関西自然文化研究会研究報告第1集, pp. 39-50.

写真 今回の調査で確認された蜘蛛形類・唇脚類・倍脚類



写真1 ヤエヤマジョウゴグモ(1)

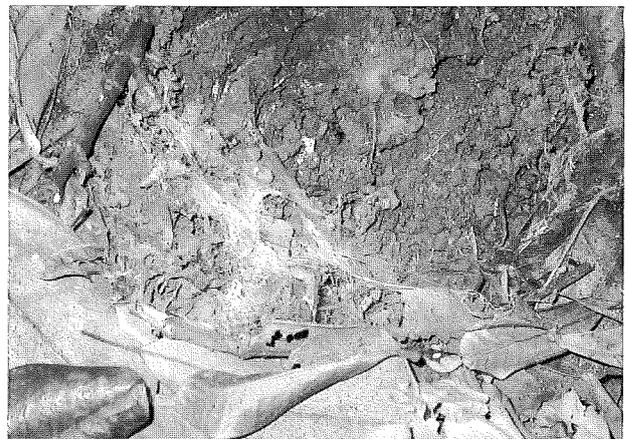


写真2 地中につくられたヤエヤマジョウゴグモ



写真3 樹洞につくられたヤエヤマジョウゴグモの巣

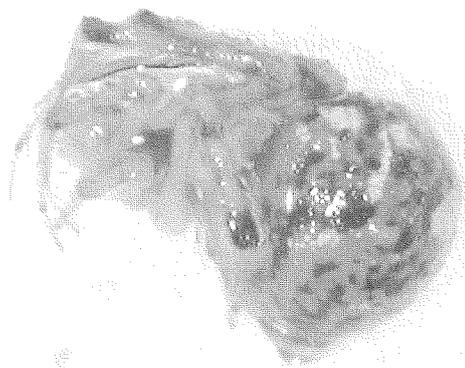


写真4 リュウキュウヒメグモ

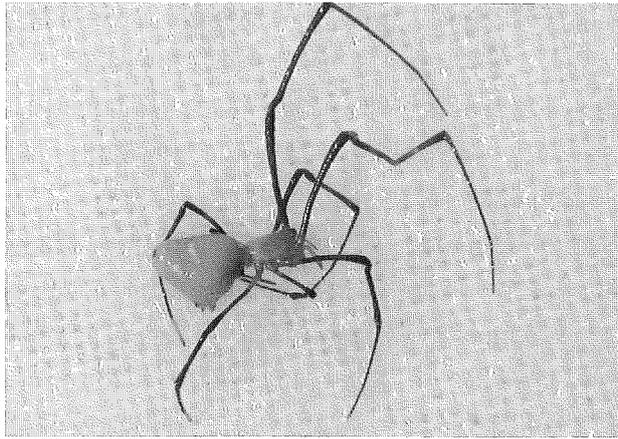


写真5 ミナミノアカイソウロウグモ

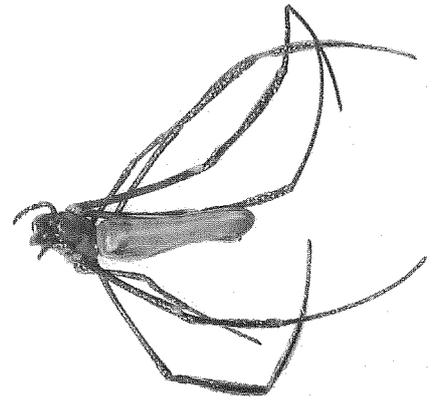


写真6 オオジョロウグモ



写真7 ミナミノシマゴミグモ

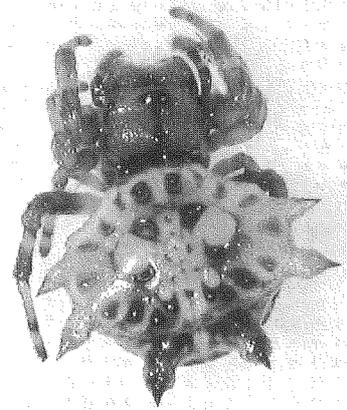


写真8 チブサトゲグモ

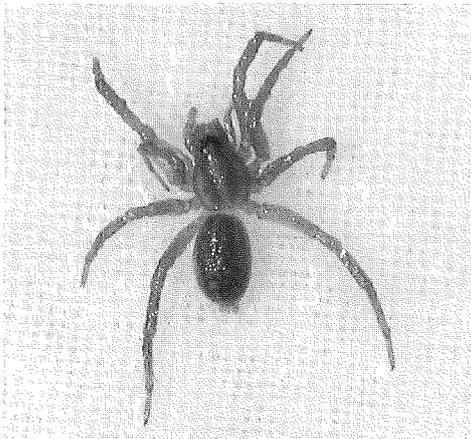


写真9 コモリグモ科の一種



写真10 ハタゲグモ科の一種

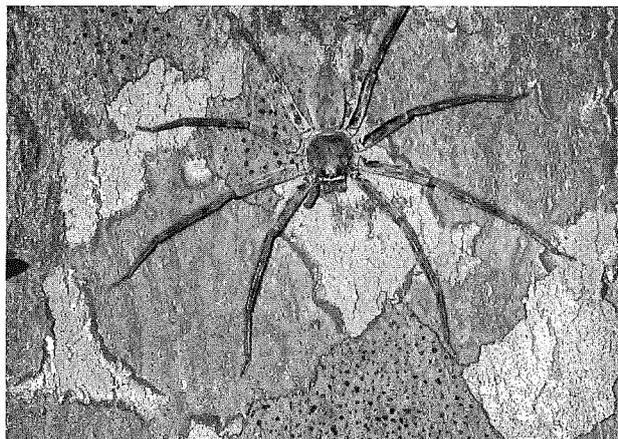


写真11 アシダカグモ

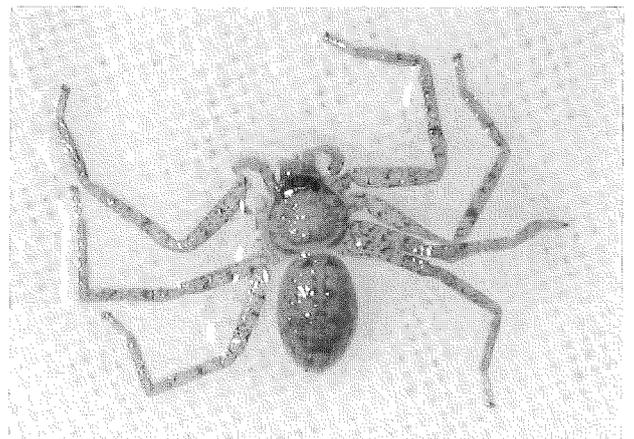


写真12 アシダカグモの幼生

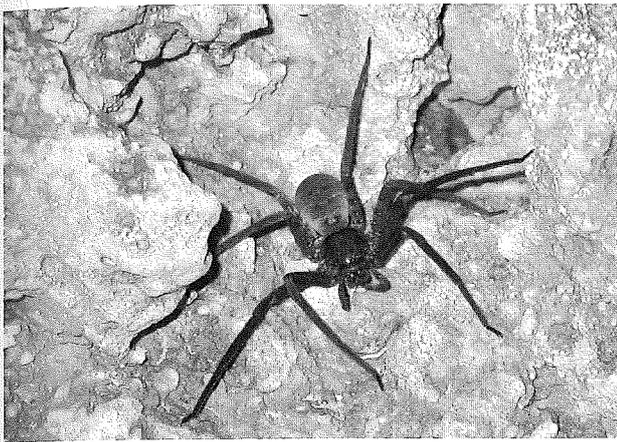


写真13 コアシダカグモ

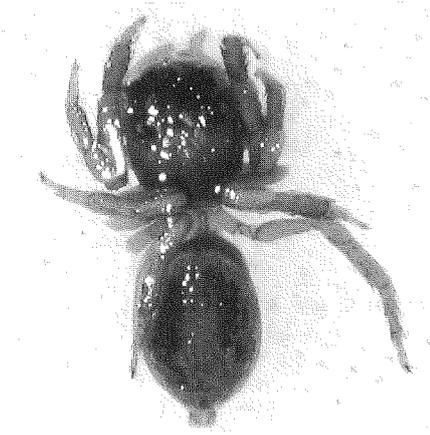


写真14 アダンソンハエトリ

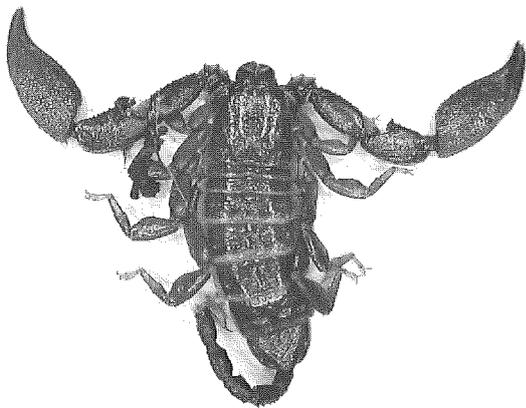


写真15 ヤエヤマサソリ



写真16 ヤエヤマサソリが確認された倒木



写真17 タイワンサソリモドキ

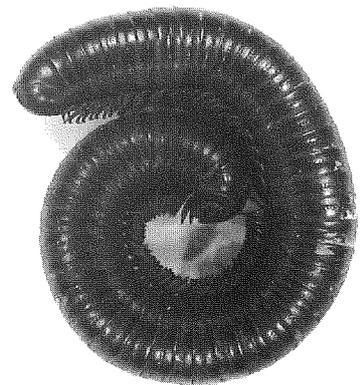


写真18 ヤエヤママルヤスデ

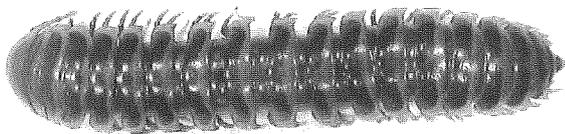


写真19 ヤットコアマビコヤスデ

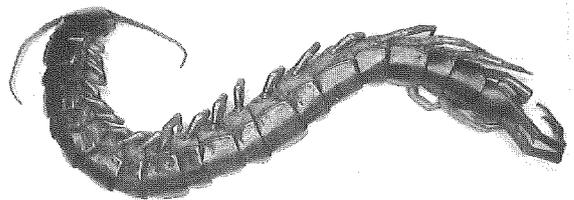


写真20 トビズムカデ

## 小浜島における両生爬虫類の現状について

田 中 聡\*

Present Status of Amphibians and Reptiles of Kohamajima Island, the Yaeyama Islands

Satoshi TANAKA\*

### はじめに

小浜島は八重山諸島の石垣島と西表島の間に位置し、面積7.84km<sup>2</sup>・周囲16.57kmの小島嶼である。しかし、石垣島・西表島・与那国島をのぞく八重山諸島の島々の中で、小浜島の地形はもっとも起伏に富み、中央部には標高99.4mの大岳がある。サトウキビ畑や牧草地がしめる面積が広いものの、島内には広葉樹林も散在し、両生類が好む水田などの湿性環境もある。

これまで、小浜島のヘビ類については高良(1962)が6種を、それ以外の両生爬虫類については太田(1983)が9種を報告しており、在来の両生爬虫類相についてはほぼ明らかにされている。しかしながら、近年における乱開発や外来種の定着による在来生物群集の変貌を考慮すると、琉球列島のいずれの島においても、陸上生物群集の中で重要な役割を演じていると思われる両生爬虫類のような小動物の現状を機会あるごとに調査することの意義は大きい。

本報では、小浜島における両生爬虫類の現状を示し、保全上の問題点について考察する。

なお、和名は日本爬虫両生類学会の日本爬虫両生類標準和名 (<http://zoo.zool.kyoto-u.ac.jp/herp/wamei.html>) に準拠した。

### 方 法

リゾート施設のある東部の私有地以外のほぼ全域を対象として、2002年9月8日～11日、2003年7月23日～26日に調査を実施した。基本的に、それぞれの種が好みそうな場所で、それぞれの種の利用する微細生息場所を考慮しながら動物を探した。目撃観察により相対密度の評価が可能なサキシマキノボリトカゲ、イシガキトカゲ、キシノウエトカゲについては、これらの種の生息場所になりそうな数カ所でセンサスをおこなった(写真1, 2)。センサスルートの距離や面積は記録しなかったが、一定の速度・方法でトカゲを探し、センサスに要した時間あたりの目撃数により相対密度の評価を試みた。

夜は自動車を時速5km程度の低速で走らせ、路上に出現するヘビ類やカエル類を記録した。特に、降



写真1 センサスをおこなった大岳林道 [3]

\* 〒903-0823 沖縄県那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

\* Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan



写真2 センサスをおこなった仲山御嶽 [25]

雨時に多くの個体が路上に出現するサキシマヌマガエルについては、2003年7月25日に道路を調査ルートとしたセンサスをおこなった。場所による密度の違いを明らかにするため、ルートを14のサブルートに分けた。サキシマヌマガエルは自動車の移動に対して敏感で、路上から道脇の草地等へ敏捷に逃避することが多く、個体数の多い場所では正確なカウントは困難であった。そこで、目撃数は大雑把に「多



写真3 サキシマヌマガエルの成体。白い背中線のない個体もある。

い」( $\geq 1$ 個体/10m)、「少ない」( $< 1$ 個体/10m)、「いない」の3段階で記録した。

### 結果

今回の調査で確認された種について、その概要を述べる。[ ]内の数字は島内の位置を示している(図1)。

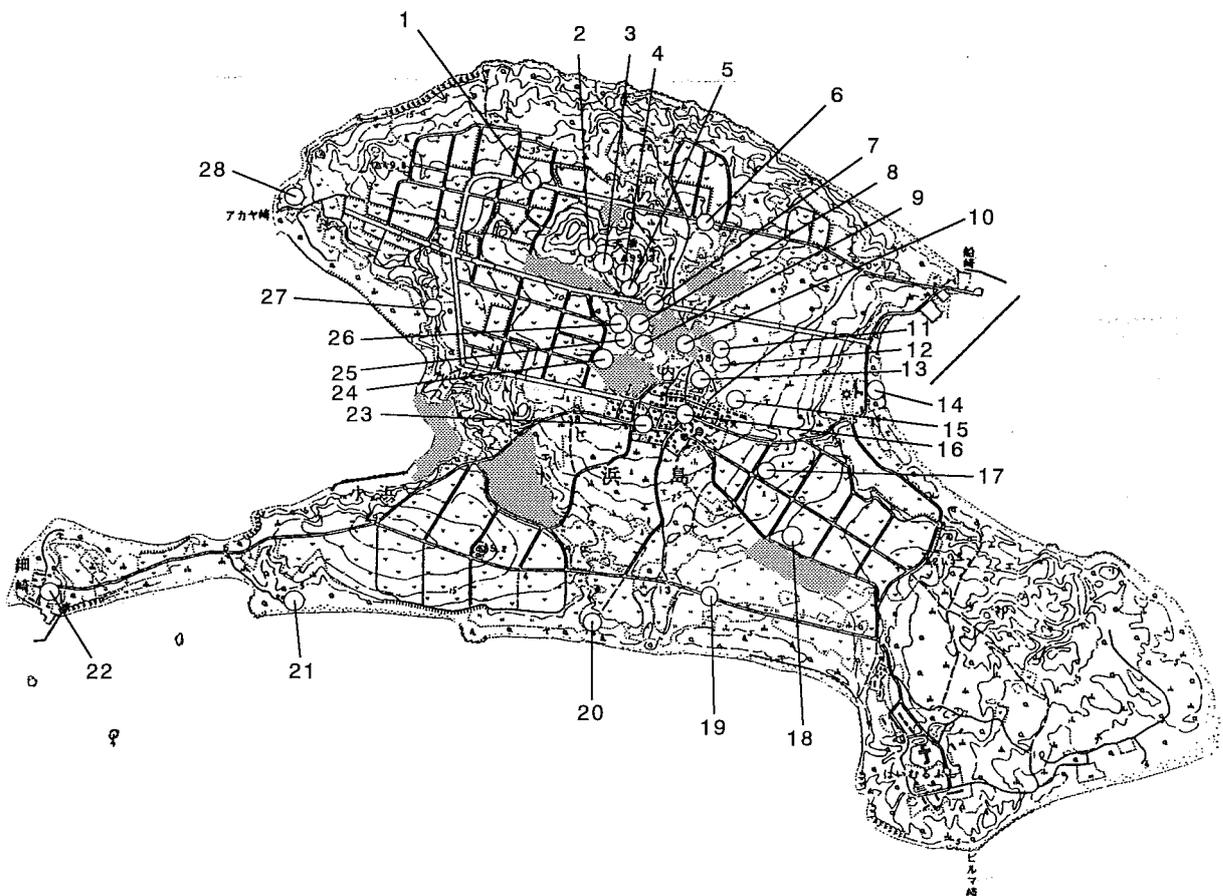


図1 島内のおもな湿性環境(湿地・水田)の位置(影の部分)と両生爬虫類を確認した場所(数字で表示)。確認された種については、結果で種別に記載している。

サキシマヌマガエル *Rana* sp.

サキシマヌマガエル(写真3)は先島諸島の固有種である。これまで、南アジア、東南アジアから西日本まで広域に分布するヌマガエル *Rana limnocharis*と同一種とされてきたが、近年の分子系統学的研究の結果、先島諸島の集団が他の地域の集団と種のレベルで遺伝的に異なることがわかっている(Toda et al., 1997)。ただ、新種記載がまだおこなわれていないため、学名は*Rana*属の1種とする。

ヌマガエルと異なり、サキシマヌマガエルは石垣島や西表島では低地から山地まで広く生息している。小浜島における徒歩による調査では、海岸付近[2002年:14; 2003年:27, 28]から御嶽林[2002・2003年:25, 26]や大岳[2002年:3]などの林内で成体が目撃された。また、水田[2002年:10; 2003年:24(写真4)]では幼生や幼体が確認された(写真5)。2003年7月25日のセンサスでは、降雨により路面が湿っていたこともあり、湿地周辺のアスファルト舗装された路上に数多くのサキシマヌマガエルが出現していた(図2)。特にサキシマヌマガエルの個体数の多い水田近くの路上では、ゴイサギがそれらをねらって採餌活動をおこなっているのが観察されている(川上・田中, 2004)。個体数が多いことから、サキシマヌマガエルはゴイサギのような鳥類だけでなく、サキシマダラ、サキシマハブなどにとっても重要な餌資源になっているものと思われる。

ウシガエル *Rana catesbeiana*

ウシガエルは北米原産のカエルで、日本には食用



写真4 サキシマヌマガエル・ヒメアマガエルの幼生が確認された水田[24]

として持ち込まれた外来種である(Ota, 1999)。小浜島に導入された正確な時期は不明だが、少なくとも昭和15年頃には多数みられたという(慶田盛, 私信)。1981・1982年に同島を調査した太田(1983)によれば、島全域の湿地・沼地から鳴き声が聞かれたという。また、2001年1月には多数の幼体が目撃されている(千木良, 私信)。しかし、2002年の私の調査では、島北西部のアスファルト舗装された路面上[1]で幼体の轢死体を確認したものの、2003年7月にはまったく確認できなかった。2003年にアカヤ崎付近で農作業をおこなっていた地元住民に尋ねたところ、2002年にはアカヤ崎付近でも目撃されたが、2003年には目撃したことがないということであった。また、仲山御嶽南側の水田[24]を耕していた地元住民も2002年には見たが2003年は見ていないという。ウシガエルが絶滅したかどうかは不明であるが、個体数が減少したことは間違いないであろう。

ヒメアマガエル *Microhyla ornata*

ヒメアマガエルは東南アジア・中国・台湾、国内では琉球列島に広く分布し、海岸付近から山地まで幅広く生息する。八重山諸島では12月頃から繁殖活動が始まる(Kuramoto, 1972)。Matsui and Ota(1984)は、小浜島で3月に採集されたヒメアマガエルが271~890個の成熟卵を持っていたことを報告している。

小浜島における2002年の調査では、水田[10]で多数の幼生を、海岸近くの草地[20]で1雄の繁殖声を確認し、2003年の調査では耕作地の間の側溝[17]や御嶽林[25]で活動している成体を確認した。



写真5 水田[24]付近にいたサキシマヌマガエルの幼体

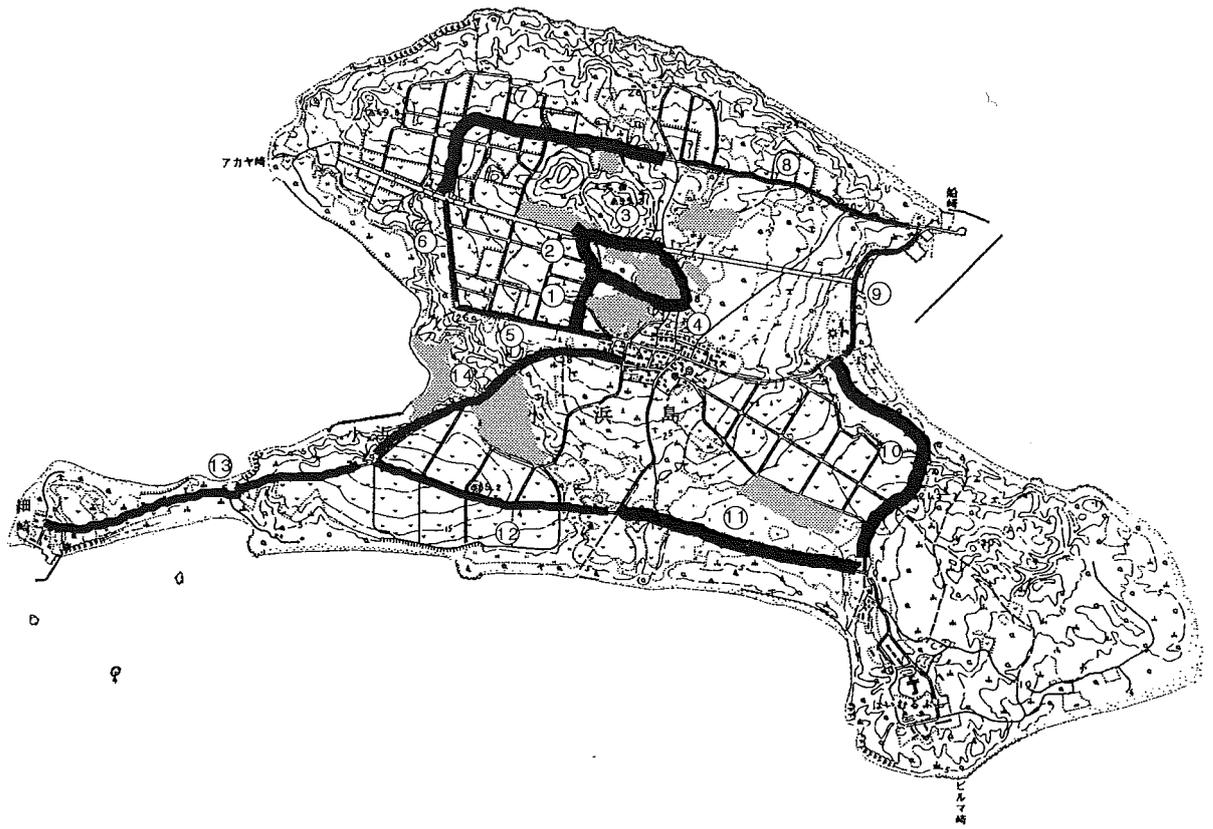


図2 路上で活動していたサキシマヌマガエルの個体群密度の場所による違い。影の部分は湿地・水田等を示している。①から⑭までのサブルート別に、細線：0個体/10m、太線：<1個体/10m、極太線：≥1個体/10mで相対密度を示している。

ニホンスッポン *Pelodiscus sinensis*

ニホンスッポンの琉球列島の集団は、台湾から直接的・間接的に導入されたものであることが酵素タンパク質の分析および導入についての聞き取り調査の結果から明らかにされており、琉球列島では奄美大島・沖縄島・久米島・石垣島・西表島・与那国島・伊平屋島・南大東島から記録されている（太田・佐藤，1997）。

今回の調査で、小浜集落近くの農道脇にあるため池 [18] で、2003年7月24日に1個体が吻を水面から出しているのを目撃した。このため池には柵があり、ニホンスッポンが自ら外へ出ることはできない状況であり、野生化しているといえるものではなかった。

ミナミヤモリ *Gekko hokouensis*

ミナミヤモリは九州南部・琉球列島・台湾・中国東部に広く分布する。おもに森林に生息するが、屋敷林や人家内でもしばしば見られる。

小浜島においては、2002年に嘉保根御嶽 [13]、2003年に仲山御嶽 [25] で本種を確認した。また、西山御嶽 [26] にある拝殿の梁には本種のものと思われる多数の卵がみられた（写真6）。



写真6 西山御嶽 [26] の拝殿に産みつけられたミナミヤモリとオガサワラヤモリのもと思われる卵（上の2個）。卵が産みつけられた痕跡もみられた。

ホオグロヤモリ *Hemidactylus frenatus*

ホオグロヤモリは、世界中の熱帯域で記録されているが、その多くは人為的移入と考えられている(太田, 1996)。宮古諸島では耕作地などにある木立などでもみられる(当山, 1984; 田中, 個人観察)。

今回は小浜集落 [16]・細崎集落 [22] の人家などで確認したが、建造物以外では確認できなかった。

オガサワラヤモリ *Lepidodactylus lugubris*: 小浜島新記録

オガサワラヤモリは太平洋・インド洋の熱帯・亜熱帯の島々やインド、中南米の太平洋沿岸地域、台湾など広域に分布する雌だけから構成される単為生殖種である(太田, 1996; Yamashiro et al., 2000)。日本では、小笠原諸島と大東諸島から記録されていたが、近年、琉球列島の島々からも定着が確認されている外来種で、八重山諸島では石垣島、竹富島、黒島、西表島、波照間島、与那国島から記録されている(Ota, 1999)、今回、新たに小浜島に定着していることを確認した。

オガサワラヤモリが昼間アダンの葉間に潜んでいることが多いということがわかったため、アダンを集中的に探した。確認することができたのは、小浜港の南側の海岸林 [14] (写真7, 8, 9)、大岳の麓 [7]、西山御嶽林縁部 [8]、東細崎海岸ぞい [21] であった(表1)。また、2002年9月10日に小浜港南側の海岸林 [14] でアダンの葉に産みつけられた一腹分(2個)の卵を確認した(写真10)。また、西山御嶽の拝殿の梁の角には、ミナミヤモリのものと思われる多数の卵に混ざって、オガサワラヤモリのもと思われる一腹分(2個)の卵があった(写真3)。

捕獲したオガサワラヤモリの頭胴長は39~41mm(平均値 $40.7 \pm 2.0$ 標準偏差)で、頭胴長が39mmの個体も輸卵管内卵を保有しているものがあつた(表2)。クローンタイプはこれまで琉球列島から報告されているものと同じクローンCであつた(Yamashiro et al., 2000, 写真11)。

測定しなかつたが、オガサワラヤモリが潜んでいたアダンの葉のまとまり(以後、シュートと表記する)は比較的大きなものであつた。小さいアダンにオガサワラヤモリが見つからなかつたのは、葉間が



写真7 小浜港近くの海岸林 [14]



写真8 海岸林内のアダン [14]



写真9 アダンの葉間に潜むオガサワラヤモリ

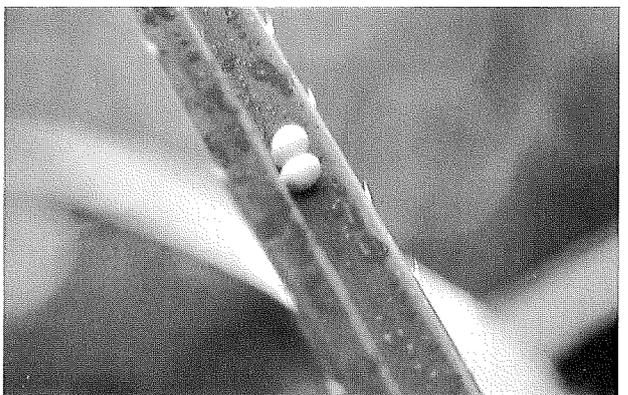


写真10 アダンの葉に産みつけられたオガサワラヤモリの卵

表1 小浜島で確認したオガサワラヤモリ。場所は図1参照。シュート数：調査したアダンのシュート数、  
 個体数：確認されたオガサワラヤモリの個体数、個体数/シュート数：アダンの1シュートあたりの  
 オガサワラヤモリの個体数。

| 日付        | 場所        | 調査時間        | シュート数 | 個体数 | 個体数/シュート |
|-----------|-----------|-------------|-------|-----|----------|
| 2002/9/10 | 海岸林 [14]  | 8:35-8:45   | 2     | 1   | 0.5      |
|           | 東細崎 [21]  | 8:57-9:07   | 3     | 1   | 0.3      |
|           | 大岳の麓 [7]  | 10:05-10:22 | 22    | 0   | 0.0      |
|           | 仲山御嶽 [25] | 10:35-12:14 | 18    | 1   | 0.1      |
|           | 大岳林内 [4]  | 13:35-13:58 | 8     | 1   | 0.1      |
|           | 海岸林 [14]  | 14:10-15:00 | 27    | 7   | 0.3      |
| 2003/7/25 | 北側の海岸付近   | 11:35-12:03 | 8     | 0   | 0.0      |
|           | 大岳北側の湿地の林 | 12:05-12:17 | 1     | 0   | 0.0      |
|           | 海岸林 [14]  | 12:34-12:59 | 18    | 5   | 0.3      |

※本報では、アダンの一本の枝からのひとまとまりの葉をシュートと呼ぶ。

表2 オガサワラヤモリの計測値。尾長の ( )  
 内は再生部分の長さ。

| 頭胴長<br>(mm) | 尾長<br>(mm) | 体重(g) | 輸卵管卵<br>の有無 |
|-------------|------------|-------|-------------|
| 43          | 23(19)     | 1.4   | なし          |
| 39          | 9(24)      | 1.3   | なし          |
| 43          | 4(30)      | 1.5   | 保有          |
| 41          | 44         | 1.6   | 保有          |
| 39          | 22(15)     | 0.9   | 保有          |
| 39          | 12(40)     | 1.4   | 保有          |

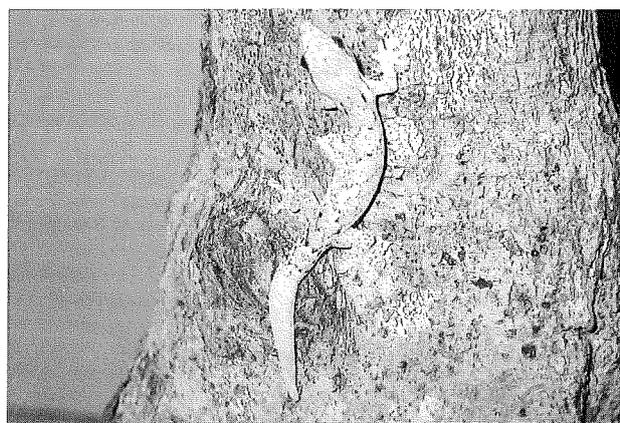


写真11 小浜島で採集されたオガサワラヤモリ。斑紋の  
 様子からクローンCと判定される。

狭いためオガサワラヤモリが潜むことができないた  
 めだろう。また、直射日光を受ける場所よりも低木  
 等で日光が遮られるような場所のアダンにオガサワ

ラヤモリがよく見られる傾向があった。直射日光に  
 より高温になりすぎる場所のアダンは昼間のシェル  
 ターとして利用しないのであろう。一つのシュート  
 に複数個体がいることはなかったことから、個体間  
 に何らかの社会的干渉（排斥行動）があるのかもし  
 れない。

なお、小浜島産オガサワラヤモリの証拠標本は沖  
 縄県立博物館に保管されている（ロット番号：OP  
 M-H-1406・OPM-H-1407）。

#### キノボリヤモリ *Hemiphyllodactylus typus typus*

キノボリヤモリは東南アジア・ニューギニアから  
 太平洋の島々に広域に分布する。オガサワラヤモリ  
 同様、単為生殖種で（太田，1996）、近年になって  
 琉球列島でも西表島と宮古島から記録されている  
 （当山，1985）。

2002年9月10日に、大岳の林縁部 [5] で相対的  
 に胴部が長い体形からキノボリヤモリと思われる個  
 体を発見したが、捕獲することができなかった。証  
 拠標本がないため記録にはならないが、今後、小浜  
 島を調査する際には注意を要する。

#### サキシマキノボリトカゲ *Japalura polygonata* *ishigakiensis*

サキシマキノボリトカゲは宮古諸島および八重山  
 諸島に分布している。与那国島の集団が、最近、別  
 の亜種ヨナグニキノボリトカゲ *J. p. donan* とし

表3 小浜島におけるトカゲ類のセンサス結果。センサス中に目撃された2種のみを示す。

| 調査月日      | 場所        | 開始時刻  | 終了時刻  | サキシマキノボリトカゲ |       | イシガキトカゲ |       |
|-----------|-----------|-------|-------|-------------|-------|---------|-------|
|           |           |       |       | 目撃個体数       | 個体数/分 | 目撃個体数   | 個体数/分 |
| 2002/9/9  | 大岳林道      | 9:51  | 10:08 | 1           | 0.06  | 0       | 0     |
| 2002/9/9  | 大岳林道      | 14:49 | 15:53 | 0           | 0     | 0       | 0     |
| 2002/9/10 | 大岳林内      | 10:05 | 10:22 | 0           | 0     | 0       | 0     |
| 2002/9/10 | 東側海岸林     | 8:17  | 8:24  | 0           | 0     | 0       | 0     |
| 2002/9/10 | 小浜集落      | 7:37  | 8:02  | 0           | 0     | 0       | 0     |
| 2002/9/9  | 仲山・西山御嶽   | 16:40 | 17:20 | 0           | 0     | 0       | 0     |
| 2002/9/10 | 細崎集落      | 9:12  | 9:22  | 0           | 0     | 0       | 0     |
| 2002/9/10 | 港近く海岸林    | 8:35  | 8:45  | 0           | 0     | 0       | 0     |
| 2003/7/23 | 大岳林道      | 15:22 | 15:44 | 0           | 0     | 0       | 0     |
| 2003/7/25 | 大岳林道      | 17:01 | 17:30 | 0           | 0     | 1       | 0.03  |
| 2003/7/25 | 仲山・西山御嶽   | 9:33  | 10:00 | 0           | 0     | 0       | 0     |
| 2003/7/25 | 東細崎海岸ぞい小道 | 10:15 | 10:25 | 0           | 0     | 5       | 0.50  |
| 2003/7/25 | 細崎集落      | 10:30 | 10:58 | 0           | 0     | 0       | 0     |



写真12 探索姿勢のサキシマキノボリトカゲの雄

て記載されたため (Ota, 2003)、サキシマキノボリトカゲは八重山諸島では石垣島・西表島・小浜島に分布することになる。

今回の調査では、大岳および小浜集落近くの嘉保根御嶽等の林内でのべ7個体しか目撃することができず [3, 11, 12, 13, 15]、そのすべてが雄の成体であった (写真12)。表3にセンサスの結果を、比較資料として西表島古見の山地林での調査結果 (田中, 個人観察) を表4に示した。センサスで目撃されたのは大岳林道の一度だけで、その時の相対密度は0.06個体/分であった。西表島では雄だけでも0.04~0.13個体/分、総数では0.34~0.45個体/分

表4 西表島におけるサキシマキノボリトカゲのセンサスの結果 (1983/7/20調査実施。数字は1分あたりの目撃個体数 (Tanaka, 1986の未処理資料を使用))。

| 開始時刻  | 終了時刻  | 雄     | 雌     | 幼体    | 総数    |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 7:00  | 8:22  | 0.085 | 0.122 | 0.171 | 0.378 |
| 9:00  | 10:16 | 0.132 | 0.092 | 0.184 | 0.408 |
| 11:00 | 12:26 | 0.105 | 0.058 | 0.174 | 0.337 |
| 13:00 | 14:13 | 0.110 | 0.096 | 0.247 | 0.452 |
| 15:00 | 16:15 | 0.107 | 0.053 | 0.253 | 0.413 |
| 17:00 | 17:47 | 0.043 | 0.064 | 0.340 | 0.447 |

であった。西表島の調査では、目撃した個体について行動等のデータも同時に記録したためセンサス所要時間が長くなり、時間あたりの個体数としては過小に評価されている。それにもかかわらず、小浜島での目撃個体数がきわめて少ないことは明らかである。生息環境そのものに違いがあるとはいえ、ほぼ同じ時期の調査で多くの幼体がみられる西表島と対照的に、小浜島では幼体がまったく確認されなかったことを特に強く指摘しておきたい。

#### イシガキトカゲ *Eumeces stimpsonii*

イシガキトカゲは八重山諸島の多くの島に分布し

ている。海岸から山地にかけて生息し、林縁部や林道ぞいなどの日向のある場所に生息する。晴天の日に、日向でバスキングをおこない体温を上昇させた後、採餌活動をおこなう。

本種の好みそうな場所を探したが、今回の調査では、大岳の林縁部 [2]・林道 [4]、小浜集落内 [23]、仲山・西山御嶽 [26]、東細崎の海岸付近 [21] でしか目撃されず、いずれもその年生まれの幼体であった。定量的なセンサスで目撃されたのは大岳 [4] と東細崎 [21] の2回だけで (表3)、前者は1個体 (0.06個体/分) で後者は5個体 (0.5個体/分) であった。比較資料として表5に西表島山地林におけるセンサスの結果を示した。センサスの時間帯により目撃個体数に大きな違いがあるが、正午前後がピークで、成体で0.20/分、幼体では1.00/分が目撃されている。もっとも多くの個体が目撃されたのは東細崎の海岸付近の私有地で、数棟の人家のある場所であった。

表5 西表島山地林道におけるイシガキトカゲのセンサスの結果 (1983/7/25実施、田中・仲地、2004の未処理資料を使用)。数字は1分あたりの目撃個体数。

| 開始時刻  | 終了時刻  | 成体   | 幼体   | 総数   |
|-------|-------|------|------|------|
| 7:34  | 7:54  | 0    | 0    | 0    |
| 8:30  | 8:52  | 0.05 | 0.05 | 0.09 |
| 9:30  | 9:54  | 0.13 | 0.25 | 0.38 |
| 10:30 | 11:04 | 0.09 | 0.38 | 0.47 |
| 11:30 | 11:59 | 0.21 | 1.00 | 1.21 |
| 12:30 | 13:00 | 0.13 | 0.60 | 0.73 |
| 13:30 | 13:59 | 0.10 | 0.31 | 0.41 |
| 14:30 | 15:00 | 0.03 | 0.17 | 0.20 |
| 15:30 | 16:00 | 0.03 | 0.00 | 0.03 |
| 16:30 | 17:01 | 0    | 0    | 0    |
| 17:30 | 17:50 | 0    | 0    | 0    |

#### キシノウエトカゲ *Eumeces kishinouyei*

キシノウエトカゲは宮古・八重山諸島に広く分布する種で、海岸林から山地林の林道ぞいなど開けた場所に生息する。全長40cmにもなることから、地元住民にもよく認識されている。国指定天然記念物

で、環境省レッドリストでは準絶滅危惧種となっている (環境庁自然保護局野生生物課, 2000)。

小浜島ではキシノウエトカゲの生息場所になりそうな場所はいたるところにみられたが、2002年9月と2003年7月の計7日間のうち本種を目撃したのは小浜集落近くの祭場 (ナカンドウ) 付近の林縁部 [11] を横切った、孵化後1年を経過したと思われる個体だけであった。

#### サキシマスベトカゲ *Scincella boettgeri*

本種は宮古・八重山諸島に分布する小形のトカゲで、林床の落葉の下などで活動する。小浜島の数個体をふくめた先島諸島全域のサキシマスベトカゲの標本の解剖の結果、一腹卵数が4~11個であることが報告されている (Okada et al., 1992)。

今回は、大岳 [3]、仲山御嶽・西山御嶽 [25] で本種を確認した。イシガキトカゲやキシノウエトカゲと違い、落葉の下などにいることが多いため、ゆっくり歩きながら確認するという方法のセンサスでは目撃されることは少ない (田中・仲地, 2004)。そのため、足や棒で落葉を散らしながら探した。定量的なデータはないが、ほかのトカゲ類よりは個体数が多かった。

#### サキシマアオヘビ *Cyclophiops herminae*

サキシマアオヘビは八重山諸島の比較的多くの島から記録されている。しかし、個体数は多いとはいえず (当山, 1985)、環境省のレッドリストでは準絶滅危惧種となっている (環境庁自然保護局野生生物課, 2000)。

2003年7月24日午前10時頃に、島南部を東西に走るアスファルト路上 [19] で、交通事故死した個体を確認した (写真13)。この付近は、牧草地・キビ畑と若干の疎林があった。また、2003年9月9日16時頃、調査とは別の目的で訪れた大岳林道 [3] の木漏れ日の当たる場所で活動している成体を目撃した (写真14)。

#### サキシママダラ *Dinodon rufozonatum walli*

サキシママダラは宮古諸島・八重山諸島の比較的多くの島に分布しており、石垣島や西表島ではもっとも頻繁に目撃されるヘビである (当山, 1985; 田



写真13 交通事故死したサキシマアオヘビ



写真14 活動中のサキシマアオヘビ

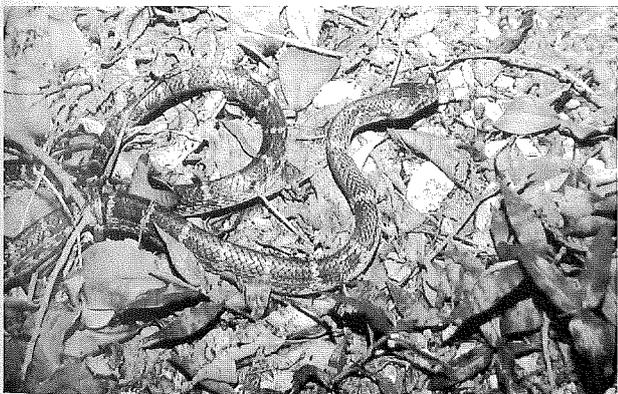


写真15 サキシママダラ



写真16 サキシママダラが潜んでいた樹洞 [3]。樹洞には水がたまっていた

中、個人観察)。

今回の調査ではアスファルト路上を移動している3個体 (2003/7/24幼体 [7]、2003/7/25幼体 [6]・成体 [9] 写真15) をいずれも夜間に確認したほか、2002年9月9日15:46に大岳林内 [3] の水のたまった樹洞 (地面からの高さ1.5m, 写真16) の中に潜んでいるところを捕獲した。樹洞は入口が直径7cmで、水深は15cmほどであった。たまたま、樹洞をのぞいた時に吻を水面に出していた。午前中に雨が降ったため、水のたまった樹洞に入ったのか、樹洞に入った後、雨水がたまったのかは不明である。

#### サキシマスジオ *Elaphe taeniura schmackeri*

サキシマスジオは宮古諸島と八重山諸島に分布する大型の無毒蛇で、齧歯類等の哺乳類や鳥類を捕食する (高良, 1962)。

2003年7月24日の調査で、西山御嶽の拝殿で脱皮殻を確認した ([26], 写真17)。



写真17 西山御嶽 [26] の拝殿にあったサキシマスジオの脱皮殻

#### 考 察

これまでに八重山諸島で記録されている両生爬虫類は34種である (表6)。これらの中で、オオヒキガエル、ウシガエル、ニホンスッポン、オガサワラヤモリ、キノボリヤモリは近年八重山諸島に持ち込まれた外来種である (Ota, 1999)。ハロウエルアマガエルは西表島からの報告があるが (Matsui and Matsui, 1982)、それ以来発見されておらず、自然分布かどうかは疑わしい。ヨナグニシュウダ、ミヤラヒメヘビは与那国島の固有亜種である。与那

表6 八重山諸島から記録されている両生爬虫類（小：小浜島、石：石垣島、西：西表島、竹：竹富島、黒：黒島、新：新城島、鳩：鳩間島、波：波照間島、与：与那国島、由：由布島）と今回小浜島で確認した種。

| 種名          | 学名                                          | 今回確認 | 八重山諸島での記録 |   |   |   |   |   |   |   |   |
|-------------|---------------------------------------------|------|-----------|---|---|---|---|---|---|---|---|
|             |                                             |      | 小         | 石 | 西 | 竹 | 黒 | 新 | 鳩 | 波 | 与 |
| 両生綱         |                                             |      |           |   |   |   |   |   |   |   |   |
| 無尾目         |                                             |      |           |   |   |   |   |   |   |   |   |
| オオヒキガエル     | <i>Bufo marinus</i>                         |      |           | ○ | ○ |   |   |   |   |   |   |
| ハロウエルアマガエル  | <i>Hyla hallowellii</i>                     |      |           |   | ○ |   |   |   |   |   |   |
| サキシマヌマガエル   | <i>Rana sp.</i>                             | ○    | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ |   |   | ○ | ○ |
| ウシガエル       | <i>Rana catesbeiana</i>                     | ○    | ○         |   |   |   |   |   |   |   |   |
| ヤエヤマハラブチガエル | <i>Rana psaltes</i>                         |      |           | ○ | ○ |   |   |   |   |   |   |
| リュウキュウカジガエル | <i>Buergeria japonica</i>                   |      |           | ○ | ○ |   |   |   |   |   |   |
| アイフィンガーガエル  | <i>Chirixalus eiffingeri</i>                |      |           | ○ | ○ |   |   |   |   |   |   |
| ヤエヤマアオガエル   | <i>Rhacophorus owstoni</i>                  |      |           | ○ | ○ |   |   |   |   |   |   |
| ヒメアマガエル     | <i>Microhyla ornata</i>                     | ○    | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ |   |   | ○ |   |
| 爬虫綱         |                                             |      |           |   |   |   |   |   |   |   |   |
| カメ目         |                                             |      |           |   |   |   |   |   |   |   |   |
| ヤエヤマイシガメ    | <i>Mauremys mutica kami</i>                 |      |           | ○ | ○ |   |   |   |   |   | ○ |
| ヤエヤマセマルハコガメ | <i>Cistoclemmys flavomarginata evelynae</i> |      |           | ○ | ○ |   |   |   |   |   |   |
| ニホンスッポン     | <i>Pelodiscus sinensis</i>                  | ○    |           | ○ | ○ |   |   |   |   |   | ○ |
| 有鱗目         |                                             |      |           |   |   |   |   |   |   |   |   |
| トカゲ亜目       |                                             |      |           |   |   |   |   |   |   |   |   |
| ミナミヤモリ      | <i>Gekko hokouensis</i>                     | ○    | ○         | ○ | ○ |   | ○ |   |   | ○ | ○ |
| ホオグロヤモリ     | <i>Hemidactylus frenatus</i>                | ○    | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |   | ○ | ○ |
| タシロヤモリ      | <i>Hemidactylus bowringii</i>               |      |           | ○ | ○ |   |   |   |   |   |   |
| オンナダケヤモリ    | <i>Gehyra mutilata</i>                      |      |           | ○ | ○ |   | ○ |   |   |   | ○ |
| オガサワラヤモリ    | <i>Lepidodactylus lugubris</i>              | ○    |           | ○ | ○ | ○ | ○ |   |   | ○ | ○ |
| キノボリヤモリ     | <i>Hemiphyllodactylus typus typus</i>       | △    |           |   | ○ |   |   |   |   |   |   |
| サキシマキノボリトカゲ | <i>Japalura polygonata ishigakiensis</i>    | ○    | ○         | ○ | ○ |   |   |   |   |   | ○ |
| イシガキトカゲ     | <i>Eumeces stimpsonii</i>                   | ○    | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |   |
| キシノウエトカゲ    | <i>Eumeces kishinouyei</i>                  | ○    | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| サキシマスベトカゲ   | <i>Scincella boettgeri</i>                  | ○    | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ |   |   | ○ | ○ |
| サキシマカナヘビ    | <i>Takydromus dorsalis</i>                  |      |           | ○ | ○ |   | ○ |   |   |   |   |
| ヘビ亜目        |                                             |      |           |   |   |   |   |   |   |   |   |
| ブラーミニメクラヘビ  | <i>Ramphotyphlops braminus</i>              |      | ○         | ○ | ○ |   | ○ |   | ○ | ○ | ○ |
| イワサキセダカヘビ   | <i>Pareas iwasakii</i>                      |      |           | ○ | ○ |   |   |   |   |   |   |
| ミヤラヒメヘビ     | <i>Calamaria pavimentata miyarai</i>        |      |           |   |   |   |   |   |   |   | ○ |
| サキシマアオヘビ    | <i>Cyclophiops herminae</i>                 | ○    | ○         | ○ | ○ |   | ○ |   |   | ○ | ○ |
| ヨナグニシュウダ    | <i>Elaphe carinata yonaguniensis</i>        |      |           |   |   |   |   |   |   |   | ○ |
| サキシマスジオ     | <i>Elaphe taeniura schmackeri</i>           | 脱皮殻  | ○         | ○ | ○ |   |   |   |   |   |   |
| サキシママダラ     | <i>Dinodon rufozonatum walli</i>            | ○    | ○         | ○ | ○ |   | ○ |   |   | ○ | ○ |
| サキシマバイカダ    | <i>Lycodon ruhstrati multifasciatus</i>     |      |           | ○ | ○ |   |   |   |   |   |   |
| ヤエヤマヒバア     | <i>Amphiesma ishigakiense</i>               |      | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ |   |   |   | ○ |
| イワサキワモンベニヘビ | <i>Sinomicrurus macclellandi iwasakii</i>   |      |           | ○ | ○ |   |   |   |   |   |   |
| サキシマハブ      | <i>Trimeresurus elegans</i>                 |      | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |   |   |   |

国島は、最近、キノボリトカゲが固有亜種とされるなど (Ota, 2003)、八重山諸島の他の島とは一線を画する。ヤエヤマハラブチガエル、リュウキュウカジカガエル、アイフィンガーガエル、ヤエヤマアオガエル、ヤエヤマセマルハコガメ、イワサキセダカヘビ、サキシマバイカダ、イワサキワモンベニヘビは西表島・石垣島という大きな島にしか分布していない。

以上をふまえると、小浜島からこれまでに分布が記録されている15種に加えて、近年発見された外来種をのぞくと、小浜島に分布している可能性のある種として、タシロヤモリ・オンナダケヤモリ・サキシマカナヘビをあげることができる。タシロヤモリやオンナダケヤモリは人家等の建造物でみられることが多い (Ota, 1989)。今回の調査では、人家を集中的に調査したわけではないため、これらの種は今後見つかる可能性がある。一方、サキシマカナヘビについては、調査中、常に注意したが発見できなかった。サキシマカナヘビは石垣島・西表島だけでなく、黒島にも分布している。黒島よりも標高が高く、自然環境の多様な小浜島に生息していないことは生態学的には理解しにくい。根拠はないが、黒島の個体群が人為的に導入された個体に由来する可能性はあるだろう。黒島での聞き取り調査や分子系統学的な分析が待たれる。

これまでに小浜島で分布が確認されていた15種に加えて、今回新たに2種を確認した。このうち、ニホンスッポンは柵で囲まれたため池の中にいたものであり、野生化しているといえる状態ではなかった。ニホンスッポンは行動が敏捷で、多くの水生動物を捕食するものと考えられるため、湿地等への持ち出しがないよう注意を要する。オガサワラヤモリは1971年7月に沖縄島 (名護市) と与那国島 (祖納) で採集されて以来、琉球列島各地で記録されている外来種である (Ota, 1999; 柴田, 1972)。今回の調査では小浜港近くの海岸林、東細崎海岸、西山御嶽林縁部および大岳麓で確認されたことから、小浜島ではすでに広い範囲に分布域を広げていると思われる。今回集中的に探したアダンの葉間はオガサワラヤモリがシェルターとしてよく利用しており、アダンの葉間の探索はオガサワラヤモリの生息を確認する上で効率的であることがわかった。

本調査の当初の目的は、主にトカゲ類の個体群生態学的な資料を得ることであったが、あまりにも個体数が少なく定量的な評価ができるほどの資料を得ることができなかった。これまで琉球列島の多くの島を調査したが、小浜島におけるトカゲ類の少なさは、きわめて不自然である印象を受けた。

少なくとも、外見上は好適な生息場所が残っている中で、トカゲ類がきわめて少ない原因として考えられることは外来種の影響である。その一つに人為的に導入されたニホンイタチ *Mustela itatsi* による捕食が考えられる。ニホンイタチの導入により、在来トカゲ類が激減したことは琉球列島 (当山, 1985; 沖縄県環境保健部自然保護課, 1996; 太田, 2000) や伊豆諸島 (長谷川・太田, 2000) など知られている。ニホンイタチは農業被害をもたらすネズミ類を駆除するために琉球列島各地に導入され、小浜島にも1966年11月~1968年1月に207個体が導入された (Uchida, 1969)。しかし、小浜島では導入後、1~2年でその姿が見られなくなったという (野原, 私信)。今回の調査でも、農作業中の住民にニホンイタチの存在を尋ねたが、生息しているとの回答は得られなかった。

在来の生物群集に大きな影響を与えそうなもう一つの外来種として、インドクジャク *Pavo cristatus* をあげることができる (写真18)。インドクジャクは1979年、島の東部にオープンしたりゾート施設に100個体程度が放し飼いにされ、それらの一部が施設外に逸走し、増殖を続けてきた (田中, 2004)。原産地においては、植物質のものから小型の哺乳類・爬虫類なども捕食することが知られている (del Hoyo et al., 1994; Johnsgard, 1999; Long, 1981)。



写真18 林縁部で活動しているインドクジャク

それ以外の原因がまったくないとは断言できないが、小浜島のトカゲ類の少なさは、インドクジャクの捕食が大きく影響しているものと思われる。

小浜島のトカゲ類のうち、サキシマスベトカゲはほかの種よりも個体数が多かった。視覚により餌に定位すると思われるインドクジャクにとって、落葉下で活動するサキシマスベトカゲは発見されにくいのもかもしれない。一方、イシガキトカゲやキシノウエトカゲは開けた日向でのバスキングが主要な活動の一つである。これらのトカゲ類は、活動している時も、光沢のある体がよく目立つため、視覚により餌に定位するインドクジャクのような動物には発見されやすいのではないと思われる。イシガキトカゲがもっとも多く見られた東細崎の海岸域には数棟の人家があるが、そこではインドクジャクはほとんど目撃されないという（比嘉，私信）。住民の往来により、インドクジャクが近づけないのかもしれない。また、西表島や石垣島の調査によると、サキシマキノボリトカゲの雄は雌や幼体にくらべ、樹上の高い場所で活動する頻度が高い。一方、幼体は地面から20cm~40cm程度の高さの落枝上や地面にすることが多い（田中，1997）。逃避行動も成体が樹上の高い場所へ逃げるのに対し、幼体は落枝等に体全体を密着させて静止するという隠蔽的な行動によって危険から逃れようとすることが多い（田中，個人観察）。視覚の発達しているインドクジャクにとって、サキシマキノボリトカゲの幼体が危険を察知した際、地面等から落枝などに移動し、そこで隠蔽的な行動をとったところで、隠蔽効果は大きいものではないと思われる。以上の点をふまえると、幼体が多数みられるはずの時期に、まったく幼体が見られなかったのはインドクジャクによる捕食の可能性が高い。

個体数がきわめて少なかったとはいえ、小浜島に在来の昼行性トカゲ類でまったく確認されなかった種はなかった。小浜島という小島嶼の生物群集において、大きな役割を演じていると思われるこれらの在来種個体群を存続させるためには、インドクジャクを早急に根絶しなければならない。

## 謝 辞

千木良芳範・川上和人・野原佳人・太田英利・当山昌直の各氏には、文献やその他の情報でお世話になった。小浜島在住の比嘉慶子氏は私有地での調査を許され、大盛肇・慶田盛正光両氏をはじめ、島民の方々からはさまざまな情報をいただいた。

以上の方々に厚くお礼申し上げる。

## 文 献

- del Hoyo, J., A. Elliott and J. Sargatal (eds.) 1994. *Handbook of the Birds of the World*. Vol. 2. Lynx Edicions, Barcelona.
- 長谷川雅美・太田英利. 2000. 三宅島, 八丈島, 青ヶ島のオカダトカゲ. 『改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック— (爬虫類・両生類)』 環境庁自然保護局野生生物課 (編). 自然環境研究センター. pp.66-68.
- Johnsgard, P. A. 1999. *The Pheasants of the World: Biology and Natural History*. Smithsonian Press, Washington, D. C.
- 環境庁自然保護局野生生物課 (編). 2000. 『改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック— (両生類・爬虫類)』 自然環境研究センター, 東京.
- 川上和人・田中聡. 2004. 沖縄県小浜島の路上におけるゴイサギの待ち伏せ型採食行動. 小浜島総合調査報告書, 沖縄県立博物館 61-64.
- Kuramoto, M. 1972. The amphibians of Iriomote of the Ryukyu Islands: Ecological and zoogeographical notes. *Bull. Fukuoka Univ. Educ.* 22:139-151.
- Long, J. L. 1981. *Introduced Birds of the World*. David & Charles, London.
- Matsui, M. and T. Matsui. 1982. *Hyla hallowelli* recorded from Iriomotejima, Yaeyama group, Ryukyu Archipelago. *Jpn. J. Herpetol.* 9:79-86.
- Matsui, M. and H. Ota. 1984. Parameters of fecundity in *Microhyla ornata* from the Yaeyama group of the Ryukyu Archipelago.

- Jpn. J. Herpetol.* 10:73-79.
- Okada, S., H. Ota, M. Hasegawa, T. Hikida, H. Miyaguni and J. Kato. 1992. Reproductive traits of seven species of lygosomine skinks (Squamata: Reptilia) from East Asia. *Nat. Hist. Res.*, 2:43-52.
- 沖縄県環境保健部自然保護課 (編). 1996. 『沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物』 沖縄県環境保健部自然保護課.
- 太田英利. 1996. ヤモリ科. 千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏 (編) 『日本動物大百科 5. 両生類・爬虫類・軟骨魚類』 平凡社. pp.69-71.
- 太田英利. 1983. 八重山群島の爬虫両生類相I. 沖縄生物学会誌 21:13-19.
- 太田英利・佐藤寛之. 1997. 第IV部 6. スッポン *Pelodiscus sinensis* (Wiegmann, 1834). 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料 (IV) 日本水産資源保護協会, pp.322-330.
- Ota H. 1989. A review of the geckos (Lacertilia: Reptilia) of the Ryukyu Archipelago and Taiwan. In Matsui, M., T. Hikida and R. C. Goris (eds.) *Current Herpetology in East Asia*. Herpetological Society of Japan. pp.222-261.
- Ota, H. 1999. Introduced amphibians and reptiles of the Ryukyu Archipelago, Japan. In Rodda, G. H., Y. Sawai, D. Chiszar and H. Tanaka (eds.) *Problem Snake Management: The Habu and the Brown Treesnake*. Cornell Univ. Press, Ithaca. pp.439-452.
- 太田英利. 2000. 悪石島以北のトカラ諸島のニホントカゲ. 『改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック— (爬虫類・両生類)』 環境庁自然保護局野生生物課 (編). 自然環境研究センター. pp.64-65.
- Ota, H. 2003. A new subspecies of the agamid lizard, *Japalura polygonata* (Hallowell, 1861) (Reptilia: Squamata), from Yonagunijima Island of the Yaeyama group, Ryukyu Archipelago. *Current Herpetology* 22:61-71.
- 柴田保彦. 1972. オガサワラヤモリの沖縄本島・与那国島からの記録. 爬虫両棲類学雑誌 5:11-12.
- 高良鉄夫. 1962. 琉球列島における陸棲蛇類の研究. 琉球大学農家政工学部学術報告、(9):1-202.
- Tanaka, S. 1986. Thermal ecology of the forest-dwelling agamid lizard *Japalura polygonata ishigakiensis*. *J. Herpetol.* 20:333-340.
- 田中聡. 1997. サキシマキノボリトカゲにおける perch の高さの選択. 爬虫両生類学雑誌 17:74-75 (講演要旨)
- 田中聡・仲地明. 2004. 西表島山地林におけるトカゲ類の活動について. 沖縄県立博物館紀要 30: (印刷中).
- 田中聡. 2004. 小浜島におけるインドクジャクの現状について. 小浜島総合調査報告書、沖縄県立博物館、(pp.65-74)
- Toda, M., M. Nishida, M. Matsui, G.-F. Wu and H. Ota . 1997. Allozyme variation among East Asian populations of the Indian Rice Frog, *Rana limnocharis* (Amphibia: Anura). *Biochem. Syst. Ecol.* 25:143-159.
- 当山昌直. 1984. 琉球の両生爬虫類. 『沖縄の生物』 pp.281-300. 沖縄生物教育研究会.
- 当山昌直. 1985. 1. 琉球の両生類・爬虫類—現状と問題—. 南西諸島とその自然保護 そのII. 世界野生生物基金日本委員会科学委員会 (編), (財)世界野生生物基金日本委員会:54-72.
- Uchida, T. A. 1969. Rat-control procedures on the Pacific islands, with special reference to the efficiency of biological control agent in the Ryukyus. *J. Fac. Agr., Kyushu Univ.*, 15:356-385.
- Yamashiro, S., M. Toda and H. Ota. 2000. Clonal composition of the parthenogenetic gecko, *Lepidodactylus lugubris*, at the northernmost extremity of its range. *Zool. Sci.* 17:1013-1020.

#### 追記

2004年3月16、17日、小浜島大岳の西側でウシガエルがさかんに鳴いているのが確認された (川上, 私信)。追加情報として記録しておきたい。

## 小浜島における鳥類の記録について

高原 建二\*

### Records on Birds, from Kohamajima Island, the Yaeyama Islands

Kenji TAKEHARA\*

#### はじめに

小浜島は八重山諸島西表島の東約2 kmに位置する広さ7.84km<sup>2</sup>、周囲約16kmの島である(図1)。島の中央やや西側に島の最高峰である99.4mの大岳が所在し、ここは聖域としての御嶽林が保存され、亜熱帯性の常緑広葉樹林がまとまった形で残されている(図版I-1, 2)。なお、小浜島の北方にはその属島としての嘉弥真島も所在する。

小浜島の人口は486人(平成13年度)で、集落は島のほぼ中央に形成されている(図版I-3)が、島の東側のアームルテやナカラレ、びるま崎にはリゾートホテルやゴルフ場等の観光施設が開設されている。また、島西側の細崎岬には漁業を中心とする細崎の小集落がある。

小浜島における鳥類の記録は、古くはOgawa (1905) やKuroda (1925) などの報告がみられる。それ以降の調査記録については資料が乏しく、最近では琉球新報社編(1982) や八重山野鳥の会(1983)、玉城(1985)、高原ら(1996)、Douglas et al. (1996) などの記録が見られるが、その報告は断片的な記録に限られているように思われる。

筆者は県立博物館小浜島総合調査の一環として、冬季に2回、夏季に1回のべ3回島を訪れ、鳥類に関する現地調査を実施した。本報告はその結果を概略的にまとめ、さらに今回の調査結果と、筆者が過去に独自に調査した資料やこれまでに報告されて

いる鳥類の記録をまとめて、小浜島における鳥類目録作成を試みた。

本報告が小浜島に生息する鳥類の概要を理解する一助になれば幸いである。なお、本報告を行うにあたり、貴重な野鳥情報をいただいた神奈川県大和市在住の土方秀行氏、埼玉県越谷市在住の鈴木功氏、調査協力をいただいたはえむるぶしリゾートの佐藤実氏と目仲正人氏に対し感謝申し上げる。

#### 調査地の概要

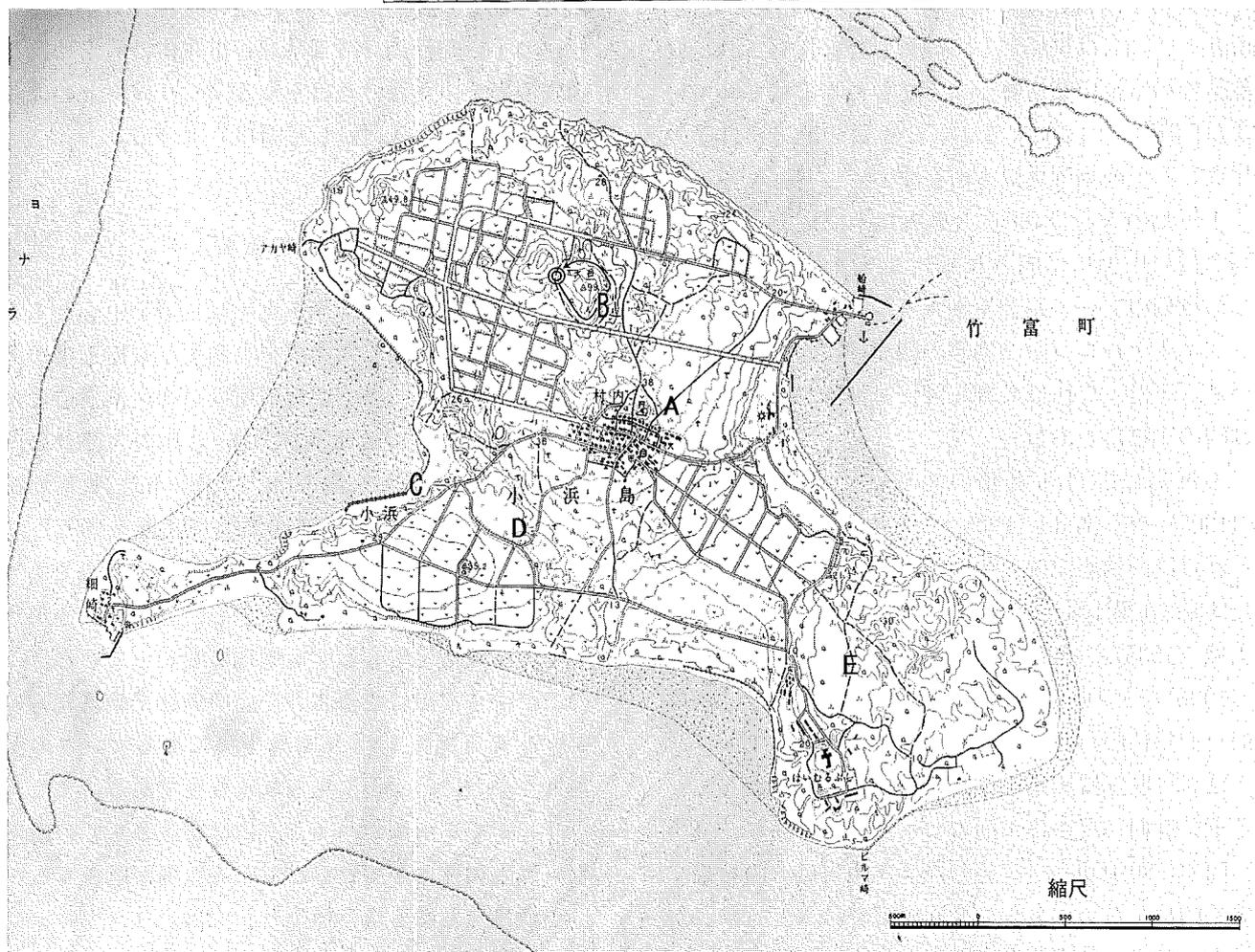
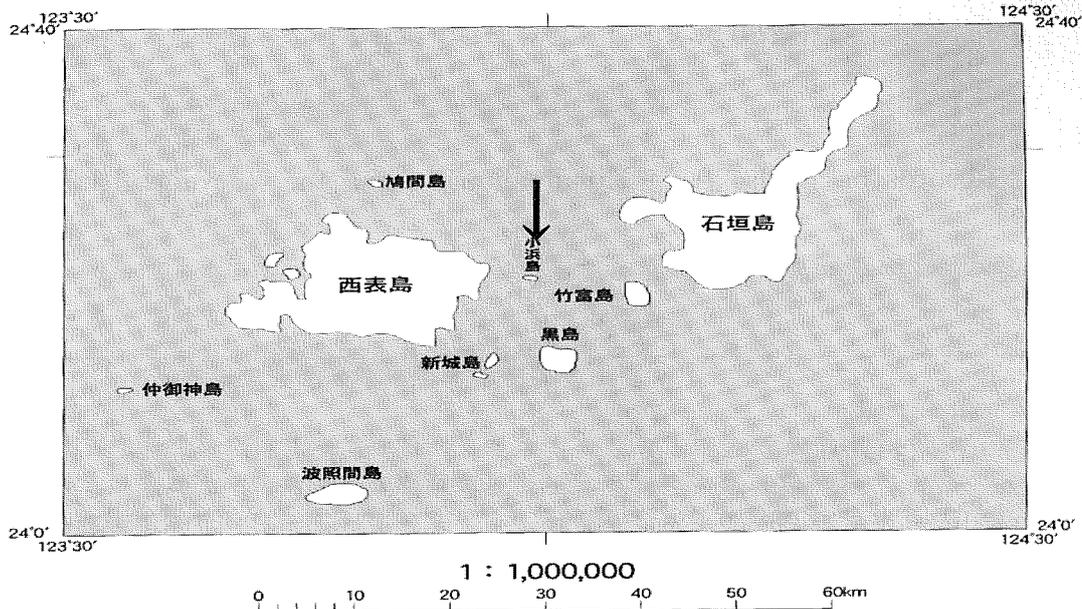
島の主要な産業は、サトウキビ栽培を中心とする農業で、小浜港近くに黒糖を生産する製糖工場がある。したがって、島の土地利用は島の産業構造と大きく関わり、農耕地面積が231haと島の大部分を占め、その内訳は畑地が192ha、水田29ha、牧草地10haとなっている(記念誌編集委員会編 1997)。小浜島はかつては畑地よりも水田面積が多い島であったが、現在では水田面積は減少し、島の大部分がサトウキビ栽培を中心とする畑地に変わっている。このことから水田は集落北方や島中央部や集落北方のヤマング(図版I-4) や島中央にあるマンツの湿地近くなどにわずかに見られる程度である。また、ウリダや島南側のハイダには畜産としての肉用牛(黒毛和種)が放牧されている牧場が所在する。

小浜島における現存植生としては、リュウキュウガキナガミボチョウジ群落、リュウキュウマツ群

\* 〒903-0823 沖縄県那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

\* Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

# 位置図



(国土地理院発行1/25000地形図改変)

図1 小浜島の位置と調査地 (凡例: A集落 B大岳 C石長田地区 D中央湿地 Eリゾート施設  
 — はセンサスライン (◎は起点, ↑終点)

落、マングローブ群落、チガヤーススキ群落、アダン-オオハマボウ群落、リュウキュウチク群落などが識別されている（記念誌編集委員会 1997）。

こうした植生の所在地として、島の西海岸であるスダ（石長田地区）海岸（図版 I-5）には、ヤエヤマヒルギやオヒルギ、ヒルギダマシなどのマングローブ林が広がっている。なお、このスダには護岸内側にもマングローブ林や小河川がせき止められた池沼地も見られ、鳥類の採餌や休息地となっている（図版 I-6）。

一方、アダン-オオハマボウ群落は、島南部の細崎近くの海岸やびるま崎などで見られる海岸林を構成している。

亜熱帯常緑広葉樹の見られる森林地域は、大岳一帯（図版 I-1, 2）や「なかやま（御嶽）」、「なかんどわん（御嶽）」などの御嶽林に残存している。また、島西部や島北部などの周辺地域にわずかに海岸林が残存している程度で森林面積は少ない。島東部はリゾート施設が整備され、宿泊施設やゴルフ場等が開設されているため、芝地の広がる環境で、一部にかつての森林が残存林として残されている。また、島の西方のカウンタレー湾（図版 I-6）は干潮時には干潟も出現するため、鳥類の採餌場所として重要な地域となっている。

なお、本報告で出てくる島の原（はる）名は、記念誌編集委員会編（1997）によった。

## 調査方法

現地調査は、2002年2月と5月下旬～6月上旬、2003年3月の3回島に滞在し、のべ9日間実施した。調査の際は車両をつかって島をくまなく走り、観察される鳥類を記録した。また、森林地域に生息する鳥類の概要を把握するため、大岳を1周するセンサスライン（約500m）をもうけ、ラインの両サイド50mの範囲で早朝の時間帯に2回のルートセンサス調査をおこなった。さらに、夜行性の鳥類を把握するために、島一円における車両を利用した夜間調査も実施した。なお、調査資料には、筆者自身が過去に独自に調査した資料も補足的に活用した。また、本報告で扱う鳥類の学名は、日本鳥学会編（2000）に準拠した。

## 結果と考察

鳥類調査の結果、表1に示したように、調査期間内で移入種を含み92種にのぼる鳥類の生息が確認された。以下に今回の観察記録を概観し、各環境ごとに生息する鳥類を概略的にまとめた。

### 小浜島における各環境ごとに出現する鳥類の概要

#### 1) 海洋や海岸、干潟に生息する鳥類

島周辺の砂浜海岸近くでは、留鳥のシロチドリ、クロサギ、イソヒヨドリなどが生息し、夏季には夏鳥のエリグロアジサシが繁殖のために東南アジアなどの南方から飛来してくる。秋季から冬季には細崎などの海岸や岩礁、護岸でメダイチドリ、ダイゼン、ムナグロ、ダイシャクシギ、チュウシャクシギ、ハマシギなどの旅鳥や冬鳥が観察された。また、島西部のカタウレー湾内のマングローブ林や干潮時に出現する干潟などでは、留鳥のカルガモ（図版 II-1）が観察され、他に旅鳥のオグロシギ（図版 II-2）やウズラシギ、冬鳥のアオサギやダイサギ、コサギなどのサギ類やアオアシシギ、クサシギなどのシギ類も観察された。

#### 2) 湿地やため池、マングローブ林、水田など水辺に生息する鳥類

島西部スダ（石長田）の護岸内側に形成されたマングローブ林には小規模の池や湿地があり、ここでは、留鳥のバンやカルガモ、カワセミ、オオクイナ、ムラサキサギ（図版 II-3）のほか、旅鳥や冬鳥のコガモ、セイタカシギ（図版 II-4）、アカアシシギ、オグロシギ、ヒバリシギ、イソシギ、トウネンなどが確認された。

島中央の内陸部にあるマンツの湿地や水田では、留鳥のバンやカルガモ、リュウキュウヨシゴイ、ヒクイナ、ムラサキサギ、ゴイサギなどが生息し、秋季から冬季にはエリマキシギ（図版 II-5）、アオアシシギ、クサシギなどが観察された。また、サギ類ではダイサギ、チュウサギ、アマサギ、アオサギとクイナ科のオオバンなどが飛来して生息していた。

島東部に開設されたリゾート施設内のため池では、留鳥のシロハラクイナとバン、カルガモなどがふつうに生息し、秋季から冬季にはキンクロハジロ、オ

表1 小浜島鳥類調査(集計)

| 調査日        | 02.2.25 | 02.5.29 | 03.3.6 | 備考 |
|------------|---------|---------|--------|----|
| カイツブリ      | ○       |         | ○      |    |
| リュウキュウヨシゴイ |         | ○       |        |    |
| ズグロミゾゴイ    | ○       | ○       | ○      |    |
| アカガシラサギ    |         | ○       |        |    |
| ゴイサギ       |         | ○       |        |    |
| ダイサギ       | ○       | ○       |        |    |
| チュウサギ      | ○       | ○       | ○      |    |
| コサギ        | ○       | ○       | ○      |    |
| アマサギ       | ○       | ○       | ○      |    |
| クロサギ       | ○       |         | ○      |    |
| アオサギ       | ○       |         | ○      |    |
| ムラサキサギ     | ○       |         | ○      |    |
| カルガモ       | ○       | ○       | ○      |    |
| コガモ        | ○       |         | ○      |    |
| ハシビロガモ     | ○       |         |        |    |
| キンクロハジロ    | ○       |         | ○      |    |
| ミサゴ        | ○       |         | ○      |    |
| ツミ         | ○       | ○       |        |    |
| ノスリ        | ○       |         |        |    |
| サシバ        | ○       |         | ○      |    |
| カンムリワシ     | ○       |         |        |    |
| チュウヒ       |         |         | ○      |    |
| チョウゲンボウ    | ○       |         | ○      |    |
| ミフウズラ      |         | ○       |        |    |
| オオクイナ      |         | ○       |        |    |
| ヒクイナ       |         |         | ○      |    |
| シロハラクイナ    | ○       | ○       | ○      |    |
| バン         | ○       | ○       | ○      |    |
| オオバン       | ○       |         | ○      |    |
| シロチドリ      | ○       |         | ○      |    |
| メダイチドリ     | ○       |         | ○      |    |
| オオメダイチドリ   | ○       |         | ○      |    |
| ムナグロ       | ○       |         | ○      |    |
| ダイゼン       | ○       |         | ○      |    |
| キョウジョシギ    | ○       | ○       | ○      |    |
| トウネン       |         | ○       |        |    |
| ウズラシギ      |         | ○       |        |    |
| ハマシギ       | ○       |         | ○      |    |
| エリマキシギ     |         |         | ○      |    |
| アカアシシギ     |         | ○       | ○      |    |
| コアオアシシギ    |         | ○       | ○      |    |
| アオアシシギ     | ○       | ○       | ○      |    |
| クサシギ       |         |         | ○      |    |
| キアシシギ      |         | ○       |        |    |
| イソシギ       | ○       | ○       |        |    |
| コオバシギ      |         | ○       |        |    |

| 調査日       | 02.2.25 | 02.5.29 | 03.3.6 | 備考  |
|-----------|---------|---------|--------|-----|
| オグロシギ     |         | ○       |        |     |
| ダイシャクシギ   | ○       |         |        |     |
| チュウシャクシギ  | ○       | ○       |        |     |
| タシギ       | ○       |         | ○      |     |
| ヤマシギ      | ○       |         |        |     |
| セイタカシギ    |         | ○       |        |     |
| クロハラアジサシ  |         | ○       |        |     |
| エリグロアジサシ  |         | ○       |        |     |
| キジバト      | ○       | ○       | ○      |     |
| ズアカアオバト   | ○       | ○       | ○      |     |
| キンバト      |         | ○       | ○      |     |
| コノハズク     | ○       |         | ○      |     |
| アオバズク     | ○       |         |        |     |
| アカショウビン   |         | ○       |        |     |
| カワセミ      |         |         | ○      |     |
| ヤツガシラ     | ○       |         |        |     |
| ツバメ       |         | ○       | ○      |     |
| ツメナガセキレイ  | ○       |         | ○      |     |
| キセキレイ     | ○       |         |        |     |
| ハクセキレイ    | ○       |         | ○      |     |
| ビンズイ      |         |         | ○      |     |
| ヒヨドリ      | ○       | ○       | ○      |     |
| シロガシラ     | ○       | ○       | ○      |     |
| アカモズ      | ○       |         | ○      |     |
| ノゴマ       |         |         | ○      |     |
| ルリビタキ     |         |         | ○      |     |
| ジョウビタキ    | ○       |         | ○      |     |
| イソヒヨドリ    | ○       | ○       | ○      |     |
| アカハラ      | ○       |         | ○      |     |
| シロハラ      | ○       |         | ○      |     |
| マミチャジナイ   |         |         | ○      |     |
| ツグミ       |         |         | ○      |     |
| ヤブサメ      |         |         |        |     |
| ウグイス      | ○       |         | ○      |     |
| キマユムシクイ   | ○       |         | ○      |     |
| ムジセッカ     | ○       |         | ○      |     |
| セッカ       | ○       | ○       |        |     |
| キビタキ      | ○       | ○       | ○      |     |
| サンコウチョウ   |         | ○       |        |     |
| メジロ       | ○       | ○       | ○      |     |
| カシラダカ     |         |         | ○      |     |
| スズメ       | ○       | ○       | ○      |     |
| ムクドリ      | ○       |         |        |     |
| ギンムクドリ    | ○       |         |        |     |
| オサハシフトガラス | ○       |         |        |     |
| インドクジャク   | ○       | ○       | ○      | 外来種 |
| 合計92種     | 67種     | 43種     | 61種    |     |

オバンなどの渡り鳥を見ることができる。

### 3) 牧草地や農耕地、草原などに生息する鳥類

牧草地や農耕地などでは留鳥のセッカやミフウズラ、ムラサキサギ、キジバト、ヒヨドリ、シロガシラなどが生息する。秋季から冬季にはサシバやチョウゲンボウなどの猛禽類が訪れ、越冬する場所となっている。それ以外にはチュウサギやアマサギなどのサギ類が牧草地の牛の回りに群れてエサをとる姿をよく見かけた。また、農耕地周辺の藪ではルリビタキやムジセッカなどが飛来し、越冬していた。さらに、公園の芝地や耕耘された畑などにはムナグロの小群が降りて採餌や休息していることがあった。

### 4) 森林や御嶽林などに生息する鳥類

森林地域では、表2に示したように大岳における早朝のラインセンサス調査を実施した。本調査では、留鳥のメジロ、ヒヨドリ、キジバト、キンバト、ズグロミゾゴイ（図版Ⅱ-6）、リュウキュウキビタキ（図版Ⅲ-1）、シジウカラなどの生息が確認

された。森林地域では特に夏場の時期に、ヒヨドリやオサハシブトガラス、メジロが優占的に生息していたが、最近帰化した外来種のインドクジャク（図版Ⅲ-2）の優占度もこれらの種に次いで優占度が高い傾向が見られた（表2）。また、本地域では雛を伴った雌個体が目撃され、繁殖も確認された。さらに、大岳の森林地域では留鳥のリュウキュウコノハズク（図版Ⅲ-3）が5月に抱卵しているのが確認された。他にリュウキュウキビタキが番（つがい）で観察されたことから、本種も本地域で繁殖している可能性が高い。

森林地域では、後述するようにしばしばカンムリワシ（図版Ⅲ-4）が観察されることがあったが、繁殖の確認はできなかった。おそらく西表島から漂鳥としての飛来であろうと思われる。

森林地域には夏場に夏鳥のアカショウビン飛来し、造巣する姿が確認され、同じ夏鳥のサンコウチョウのなき声が聞かれた。秋季の9月はじめには、旅鳥のアカハラダカの飛来が確認され、その後、サシバ、エゾビタキ、キマユムシクイ、シロハラなどの旅鳥

表2 大岳で確認された鳥類

| 調査期日       | 02. 2. 27 |       | 02. 5. 31 |       |
|------------|-----------|-------|-----------|-------|
| 天気         | 曇り        |       | 晴れ        |       |
| 調査開始時間     | 7:20      |       | 7:15      |       |
| 調査終了時間     | 7:45      |       | 7:50      |       |
| 調査距離 (km)  | 0.5       |       | 0.5       |       |
| 種名         | 個体数       | 相対優占度 | 個体数       | 相対優占度 |
| ヒヨドリ       | 9         | 23.7  | 28        | 34.1  |
| メジロ        | 5         | 13.7  | 9         | 11    |
| ウグイス       | 5         | 13.7  | 0         |       |
| キジバト       | 5         | 13.7  | 4         | 4.9   |
| リュウキュウキビタキ | 3         | 7.9   | 2         | 2.4   |
| キンバト       | 0         |       | 1         | 1.2   |
| インドクジャク    | 3         | 7.9   | 7         | 8.5   |
| ズグロミゾゴイ    | 0         |       | 3         | 3.7   |
| アカショウビン    | 0         |       | 6         | 7.3   |
| サンコウチョウ    | 0         |       | 5         | 6.1   |
| シロハラ       | 2         | 5.3   | 0         |       |
| キマユムシクイ    | 2         | 5.3   | 0         |       |
| シロハラクイナ    | 1         | 2.6   | 4         | 4.9   |
| ズアカアオバト    | 0         |       | 1         | 1.2   |
| ヤブサメ       | 1         | 2.6   | 0         |       |
| サシバ        | 1         | 2.6   | 0         |       |
| ハシブトガラス    | 1         | 2.6   | 12        | 14.7  |
|            | 38        | 100.0 | 82        | 100.0 |
| 種数合計17種    | 12        |       | 12        |       |

や冬鳥の飛来が確認された。

大岳の森林地域以外では、島東部にある海岸林で、留鳥のツミとリュウキュウサンショウクイが確認された。特にリュウキュウツミ（図版Ⅲ-5）は2002年5月の調査でリゾート施設内森林でタブノキに営巣している1番が確認された。

### 小浜島で確認された鳥類

小浜島からは前述したように、古くは1904年6月のOsada and Osaによる採集記録をもとにOgawa (1905) によってルツクイナ（♀）やオサハシブトガラスの採集記録が知られ、その後は1921年の折居彪二郎氏による採集記録（齊藤・嵩原 2002参照）をまとめたKuroda (1925) によって、オサハシブトガラス、イシガキヒヨドリ、ミフウズラの3種の鳥類記録が報告されている。それ以降は鳥類の記録が乏しく、最近では八重山野鳥の会編（1983）によって、「八重山諸島鳥類目録」が作成され、293種の鳥類が記録されているが、その目録中に小浜島からコウノトリ（1981.11.29-82.3）とオオハクチョウ（1975.11.15）の2種の迷鳥記録が収録されている。また、琉球新報社編（1982）の「奄美・沖縄鳥類目録」の中では、小浜島と明記した鳥類記録と、生息範囲を八重山諸島と広域的に記述した鳥類記録を合計すると31種の分布記録が見られるが、これは日本鳥学会編（1974）の目録に大部分を準拠している。さらに、玉城（1985）は春期の調査で37種の鳥類を記録し、クイナとホオジロの希少な飛来種の記録を

報告している。他に嵩原ら（1996）は小浜島の湿地環境で21種、日本鳥学会編（2000）による「日本産鳥類目録（改訂）」中では生息分布地を小浜島と明記した20種の分布記録が示されている。しかしながら、その詳細な観察場所や日時等については記述していないものが多い。

今回の調査では前述したように91種の鳥類が記録された。その中にはこれまでに観察記録が報告されていないカンムリワシやオオバン、メダイチドリ、セイタカシギ、オグロシギ、ヤツガシラ（図版Ⅲ-6）など44種が新たに確認された。

今回の観察記録とこれまでに報告のある鳥類の生活様式をおおよその区分（留鳥・夏鳥・旅鳥・冬鳥、現状不明）でまとめ、巻末（付表1）に鳥類目録作成を試みた。その「小浜島の鳥類目録」（暫定）に示したように、小浜島においては合計11目35科112種の鳥類が記録されたことになるものと思われる。その鳥類をおおよその生息区分で分けると、図2に示したように、留鳥が33種（漂鳥や現状不明種含む）、夏鳥が3種、旅鳥及び冬鳥が75種、帰化種が1種あった。したがって、確認された鳥類の約7割は渡り鳥（飛来種）で占められている。しかしながら、数少ない留鳥の中には、八重山諸島が琉球列島の北限であるカンムリワシの生息が確認された。同様に宮古・八重山諸島が繁殖分布の北限であるキンバト、ズグロミゾゴイ、ムラサキサギの3種も確認され、石垣島や西表島と同様にこれらの鳥種の生息地となっていることは特筆されるべきことであろう。

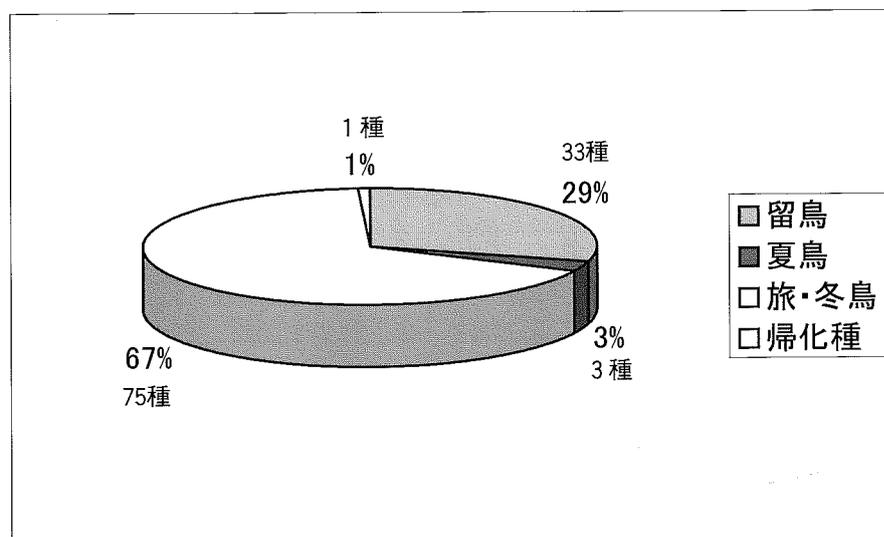


図2 小浜島の鳥区分

小浜島における鳥類の生息状況については、留鳥と帰化鳥、飛来種としての渡り鳥（夏鳥・旅鳥・冬鳥）に区分し、概観的に以下にまとめた。

#### 1) 留鳥について

留鳥については、表3に示したように、暫定的に留鳥とした種や現状不明種を含み33種の鳥類が記録された。この中で繁殖確認されたのは、カルガモとコノハズク、リュウキュウツミの3種のみで、大部分の種については繁殖確認はできなかった。したがって、その大部分が八重山諸島における生息状況を加味して留鳥として扱った種が多い。また、この表に示された種の中には、カンムリワシのように繁殖は確認できなかったが、「漂鳥」として隣接する西表島から飛来している種をいくつか含んでいるものと思われる。なお、採集記録の見られるツルクイナは、八重山諸島では留鳥扱いをされている種である。しかしながら、本調査での生息確認できなかったため現状不明であるが、留鳥とした。さらに、八重山諸島に広く生息するとされるリュウキュウガモは、近年の生息状況が不明であることにより本報告では目録から除外してある。

玉城（1985）は小浜島から17種の留鳥を記録していることから、当時の調査に比べ16種留鳥の種数が増加したことになる。これは今回の調査では繁殖確認ができず漂鳥と考えられるカンムリワシやクロサギ、シロチドリ、現状不明種であるツルクイナ、そして、後述するように今日ふつうに生息し繁殖している可能性が高いゴイサギ、シマアカモズなどを含んでいることによる。また、玉城（1985）は夜間調査を実施していないことから夜行性の留鳥は記録は報告されていないが、今回の調査ではリュウキュウコノハズクとリュウキュウアオバズクが確認された。八重山諸島で通常留鳥として扱われているシロハラクイナ、ズグロミゾゴイ、ムラサキサギ、ヒクイナ、カワセミ、リュウキュウサンショウクイ、リュウキュウキビタキの8種は、当時は確認されていないことから、単に調査時に出現しなかったことも考えられるが、これらの中には新たに分布域を広げてきた種もいるものと思われる。

なお、県内では留鳥として扱われるカイツブリについては、八重山諸島では冬鳥として扱われているため（八重山野鳥の会、1983）、留鳥からは除

外した。また、小浜島に生息する留鳥の種数は、石垣島や西表島とほぼ同様な生息状況であるが、本調査では西表島に生息するオリエヤマガラとオリエコゲラの2亜種は確認されなかった。

さらに、留鳥の中には後述するように、島内東部のリゾート施設内で飼育されていた外来種のインドクジャクの数が増加し、リゾート施設内から逸出して、島全体に広がり農耕地や放牧地、森林地域など至る場所で観察され、広範囲に帰化している様子が見える。

これら確認された留鳥の中で、主な種類について5種（外来種含む）を取り上げ、以下にその生息状況をまとめた。なお、後述するように留鳥の中には環境省編（2002）や沖縄県自然保護課編（1996）により選定された保護すべき貴重種も含まれていることから、その生息状況については、貴重種の項目でまとめて示した。

#### a) カルガモ（図版Ⅱ、写真1）

集落北方のヤマダの水田や島中央にあるマンツの湿地とその近くに開かれた水田域、島の西海岸であるスダ（石長田）海岸近くのマングローブ林、リゾート施設内のため池などで採餌する数個体がしばしば目撃された。特にマンツ湿地では2002年5月の調査で、雛を3個体連れた個体が目撃され、小浜島で繁殖していることが確認された。

#### b) ウグイス

本調査においては、冬季のみで確認された。八重山野鳥の会（1983）は、夏季に西表島で確認されている以外に記録が見られないことから、八重山諸島では冬鳥である可能性もあることを指摘しているが、玉城（1985）は4月の調査で確認し留鳥としている。本報告では暫定的に留鳥として扱っているが、沖縄県内で繁殖するとされる亜種リュウキュウウグイスの存在に疑問を呈する報告（梶田ら、2002）も見られるため、八重山諸島において留鳥かどうかの確認のためには、今後詳細な調査が必要と思われる。

#### c) ゴイサギ

八重山野鳥の会（1983）は、八重山諸島でほぼ周年生息していることを指摘しているが、繁殖の確認

表3 小浜島に留鳥として生息する種（暫定）

| 確認種         | 玉城 (1985) | 生息環境           | 備考                           |
|-------------|-----------|----------------|------------------------------|
| リュウキュウヨシゴイ  | ◎         | 湿地・水田          |                              |
| ゴイサギ        |           | 湿地・貯水池・水田      | 繁殖未確認                        |
| クロサギ        |           | 海岸             | 繁殖未確認（漂鳥？）                   |
| ズグロミゾゴイ     |           | 森林             |                              |
| ムラサキサギ      |           | 牧場・牧草地・農耕地     |                              |
| カルガモ        | ◎         | 湿地・ため池         | 繁殖確認                         |
| カンムリワシ      |           | 森林（海岸林）        | 繁殖未確認（漂鳥？）                   |
| ミフウズラ       | ◎         | 農耕地・草原         | かなり少ない                       |
| ツルクイナ       |           | 水田・湿地          | 1904年に捕獲記録有り                 |
| オオクイナ       | ◎         | 森林・農耕地         |                              |
| ヒクイナ        |           | 水田・湿地          | 亜種リュウキュウヒクイナ                 |
| シロハラクイナ     |           | 湿地・道路沿い・森林・農耕地 |                              |
| バン          | ◎         | 湿地・ため池         |                              |
| シロチドリ       |           | 海岸・岩礁          | 繁殖未確認（漂鳥？）                   |
| キジバト        | ◎         | 農耕地・牧場・農耕地     | 亜種リュウキュウキジバト                 |
| キンバト        | ◎         | 森林             |                              |
| ズアカアオバト     | ◎         | 森林             | 亜種チュウク <sup>*</sup> イズアカアオバト |
| リュウキュウコノハズク |           | 森林             | 繁殖確認                         |
| アオバズク       |           | 森林             | 亜種リュウキュウアオバズク                |
| カワセミ        |           | 河川・池沼          | 繁殖未確認（漂鳥？）                   |
| リュウキュウツバメ   |           | 集落・農耕地         |                              |
| サンショウクイ     |           | 森林             | 亜種リュウキュウサンショウクイ              |
| シロガシラ       | ◎         | 農耕地            | 亜種ヤエヤマシロガシラ                  |
| ヒヨドリ        | ◎         | 森林・集落          | 亜種イシガキヒヨドリ                   |
| シマアカモズ      |           | 農耕地・牧草地        | 繁殖未確認# 1                     |
| ウグイス        | ◎         | 森林・草原          | （冬鳥？）# 2                     |
| イソヒヨドリ      | ◎         | 集落・海岸          |                              |
| セッカ         | ◎         | 牧場・農耕地         |                              |
| キビタキ        |           | 森林             | 亜種リュウキュウキビタキ                 |
| シジュウカラ      | ◎         | 森林             | 亜種イシガキシジュウカラ                 |
| メジロ         | ◎         | 森林             | 亜種リュウキュウメジロ                  |
| スズメ         | ◎         | 集落・畜舎          |                              |
| ハシブトガラス     | ◎         | 集落・牧場・農耕地      | 亜種オサハシブトガラス                  |
| 合計33種       | 17種       |                |                              |

備考：本リストには漂鳥や繁殖未確認種、現状不明種を含む

# 1：八重山野鳥の会（1983）は冬鳥としている。

# 2：冬鳥（？）は八重山野鳥の会（1983）によるが、玉城（1985）は留鳥としている。

はしていない。本調査では初夏から夏季にも生息確認しているが、繁殖は確認されなかった。しかしながら、夏季に若鳥が数多く確認されることから小浜島では繁殖している可能性が高いように思われる。

沖縄野鳥研究会（2002）は、沖縄島では金武町や名護市において繁殖確認されていることを指摘している。したがって、八重山諸島でも留鳥として繁殖分布している可能性が十分考えられる。

d) シマアカモズ

八重山野鳥の会（1983）は、八重山諸島では冬鳥として扱っているが、筆者は与那国島において繁殖期にあたる夏季に尾羽が伸びきっていない本亜種の若鳥を確認している（高原、未発表）。したがって、八重山諸島では一部が繁殖している可能性が高いものと思われる。小浜島においても、初夏の時期に農耕地周辺でしばしば目撃していることから、本亜種の一部定着し繁殖している可能性が考えられ、暫定的に留鳥とした。しかしながら、繁殖確認など今後詳細な調査が必要であろう。

e) インドクジャク（外来種）

本種は島東方に所在するリゾート施設に愛玩用として1970年代に導入されたが、数が増加して、施設内から逸出して島全体に広がり、その生息個体数が増加している傾向が認められる。前述したように森林地域では、在来種に比べて相対的に優占度が高い傾向が認められることから、天敵のいないこの島ではほぼ定着していることが示唆される（図版Ⅲ、写真2）。

2002年2月の島全域を対象とした分布確認調査では、図2に示したようにリゾート施設をのぞき島全体で45個体が確認された。特に島北部の海岸林や大岳などの森林地域、「なかやまおん（御嶽）」のような御嶽林などでは見られる機会が多く、他に農耕地、牧場周辺などで採餌している個体がしばしば目撃された。

本種は餌として、主に植物種子や若芽を食し、その他にも昆虫、軟体動物、トカゲ、ヘビなど食べられそうな物は何でも食べるとされる（朝日新聞社編、1975）。したがって、こうした食性によって、地上

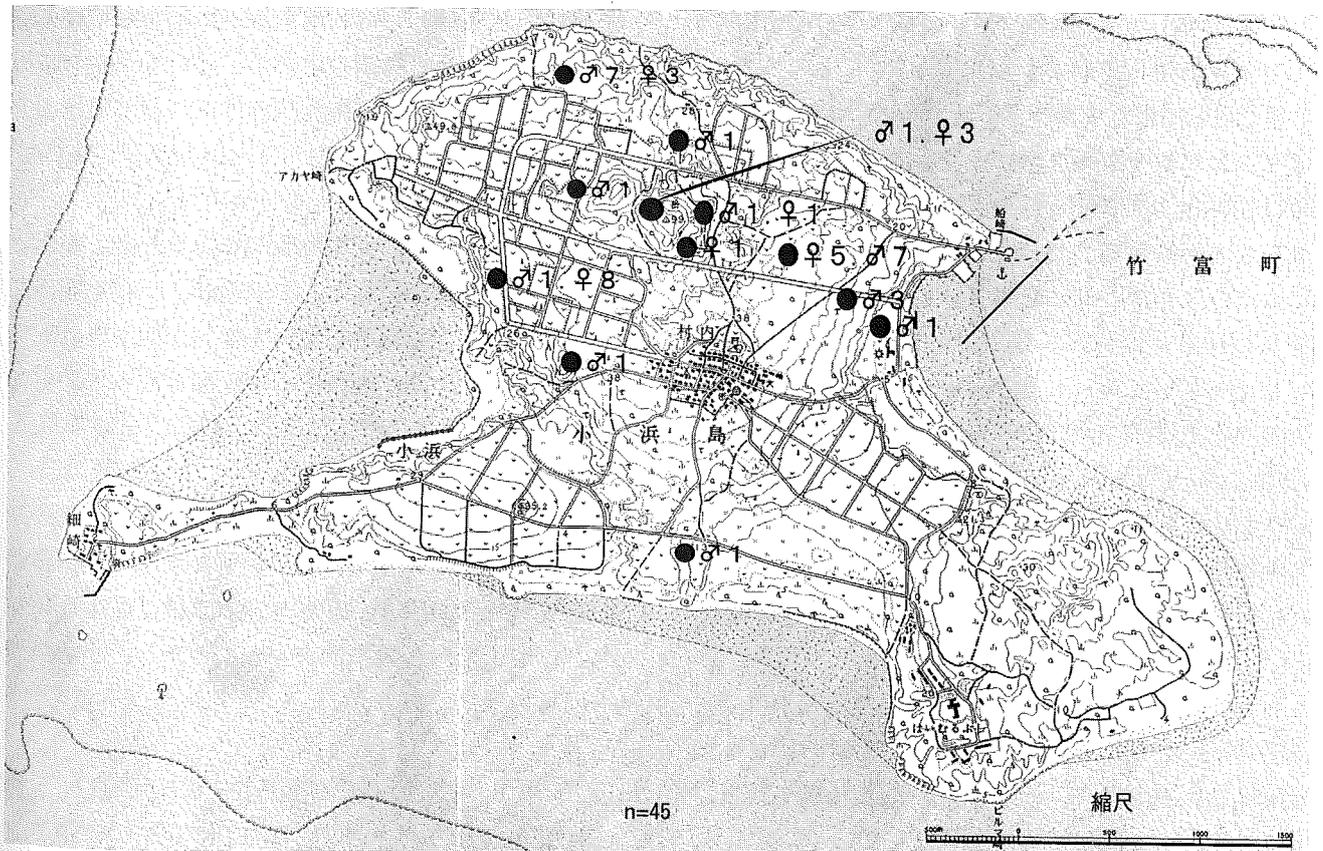


図2 クジャクの確認地（2002・2・26、8：00—19：00） 凡例：●確認地 （国土地理院発行1/25000地形図改変）  
（備考：リゾート施設内は未調査）

を徘徊する在来の爬虫類や両生類などが餌となり、その種類数や生息個体数が激減していることが指摘され（田中・嵩原，2003）、島の自然環境に大きな影響を及ぼしていることが懸念される。このことから、本来の自然生態系を保全するためには、捕獲等の方法で早急に個体数をコントロールする必要があるものと思われる。

なお、同リゾート施設では自己責任において、リゾート施設外の島内各地に24カ所にもおよぶ箱形トラップを設置し、捕獲作業を行っている（目仲，私信）。したがって、徐々に施設外の個体数は今後減少していくものと思われる。

## 2) 飛来種について

飛来種については、夏鳥と旅鳥及び冬鳥に分け、その主な種について、生息状況等について以下に言及した。なお、渡来種の中にも環境省編（2002）や沖縄県自然保護課編（1996）による保護すべき貴重種として選定されている種が見られるが、これらの種は後述するように貴重種の項目でまとめて、その確認状況を示した。

### ア) 夏鳥として飛来する種

夏鳥としては、アカショウビン、サンコウチョウ、エリグロアジサシの3種が確認された。八重山諸島では他にベニアジサシ、セグロアジサシ、クロアジサシなどが飛来市、繁殖することから、小浜島周辺でもこうしたアジサシ類の採餌個体が飛来するものと思われる。しかしながら、調査時間が短く、確認には至っていない。したがって、今後調査がすすむと夏鳥として飛来するアジサシ類の確認種数は増加するものと思われる。

大岳の森林地域では県内の他の島と同様にアカショウビンとサンコウチョウの2種が確認された。

#### a) アカショウビン

2002年6月の調査で大岳の森林内で枯死木に巣穴掘りを行っている個体を目撃した。おそらく、小浜島でも森林地域を中心に飛来し、繁殖活動を行っているものと思われる。

#### b) サンコウチョウ

2002年6月の調査で大岳の森林地域内で確認された。本地域も他の県内の島と同様に本種の夏季の繁殖地となっているものと思われる。

#### イ) 旅鳥及び冬鳥（迷鳥含む）として飛来する種 旅鳥としては、

水田や湿地、ため池、マングローブ干潟などの環境に旅鳥や冬鳥として飛来するシギ類として、オグロシギ、トウネン、イソシギ、セイタカシギ、アカアシシギなどが観察された。同様にサギ類としては、アオサギ、ダイサギ、コサギなどが見られた。また、土地改良区内のため池やハイバナの湿地、リゾート施設内にあるため池などには、ここで越冬するオオバンやキンクロハジロなどが飛来して来ていた。また、筆者による秋季（9月）における独自の調査で、大岳でアカハラダカ、リゾート施設内の海岸林でエゾビタキが確認された。また、リゾート施設内芝地では希少な旅鳥であるヤツガシラが確認された。したがって、小浜島はこれら旅鳥がより南下して越冬する際の中継地として、さらに冬鳥にとっては寒さを避けて越冬地として利用する場所になっている。

以下にこうした鳥類の中からそのいくつかを取り上げ、その生息状況や確認状況等について述べる。

#### a) アカハラダカ（旅鳥）

1995年9月25日に大岳で数羽を観察した。小浜島でも他の島同様に旅鳥として飛来し、一夜を明かし、早朝に飛び立ち通過していく様相が観察されたことから、本種の渡りのルートの一部となっていることが示唆される。

#### b) エリマキシギ（旅鳥）

2003年3月の調査で、ハインダの水田で1個体が観察された（図版Ⅱ，写真5）。本種は数少ない旅鳥として、県内各地に飛来することから、小浜島でも同様の飛来であろう。

#### c) オグロシギ（旅鳥及び冬鳥）

2002年5月の調査でスندا（石長田）の湿地で2個体が観察された（図版Ⅱ，写真2）。本種は数少ない旅鳥として、県内各地に飛来する。

d) ヤツガシラ (旅鳥)

2002年3月の調査で、島東方のリゾート施設内芝地で1個体観察した(図版Ⅲ写真6)。県内では春季と秋季に通過していく希な旅鳥で、小浜島でも同様に旅鳥として立ち寄ってのものであろう。

e) セジロタヒバリ

2002年3月に小浜島で1個体が確認された(鈴木功氏私信)。本種は希な冬鳥あるいは迷鳥として飛来し(Douglas et al., 1996)、県内各地で記録されるが、小浜島からの確認はこれが初めてと思われる。

小浜島で記録された保護すべき貴重種と鳥類の種及びその生息地保全について

小浜島では過去の文献や本調査によって、国指定の特別天然記念物で国内貴重野生生物種指定のカムリワシをはじめとして、環境省編(2002)によって選定されている「改訂日本の絶滅のおそれのある野生生物—鳥類編—」(以下NRDBと略記)と沖縄県自然保護課編(1996)によって選定されている「沖縄の絶滅のおそれのある野生生物」(以下ORDBと略記)の中で保護すべき種として選定されている貴重種が、表4に示したように30種確認された。その中で留鳥は18種とほぼ半数を占めている。したがって、島における人為的な改変にあたっては、これら貴重種を含む鳥類の種の保全とその生息する地域の保全に十分配慮することが重要と思われる。

そうすることでわれわれ人間側にとっても、潤いのある生活環境の維持と将来に引き継ぐことのできる豊かな自然環境を残すことができ、同時に将来的に島におけるエコツーリズムやエコミュージアムへの活用と学校教育における理科教育や環境教育等の学習の場としての利用が期待されるものと思われる。

以下にその貴重種の中から、留鳥と渡来種に分け、そのいくつかの種について生息状況や確認状況について述べる。

1) 留鳥の中における貴重種

a) ズグロミゾゴイ (NRDB:準絶滅危惧種 ORDB:希少種)

大岳や島西方のびるま崎(リゾート施設)に隣接

する海岸林でしばしば観察された。繁殖は確認されなかったが、おそらく海岸低地林や山手の森林地域を中心に留鳥として生息しているものと思われる。

b) カムリワシ (特別天然記念物、NRDB:絶滅危惧ⅠA類、ORDB:絶滅危惧種)

本種は琉球列島では八重山諸島が北限の種で、国指定特別天然記念物である。本調査では図3に示したように、冬季の調査で島西部の海岸林や農耕地近くの残存林で採餌行動を行っているのべ4個体が目撃された。しかしながら、繁殖時期にあたる6月の調査では生息が確認できなかったことから、冬期に隣接する西表島からの漂鳥としての飛来個体である可能性が高いものと思われる。なお、島西方のスンダ(石長田)海岸林やマングローブ林、島中央部の大岳などでははまとまった形で森林が残存していることから、今後本種が繁殖地として利用する可能性は高いものと思われる。

最近日本野鳥の会八重山支部編(1998)では、石垣島と西表島で一斉カウント調査を実施し、両島で約200個体ほどのカムリワシが生息していることが報告されている。しかしながら、この両島以外でのカムリワシの生息実態についての調査は行われていないため小浜島からの本種の分布記録はこれまで知られていない。したがって、今後小浜島における繁殖の有無や個体数等について継続した調査が望まれる。

c) リュキュウツミ (NRDB:絶滅危惧Ⅱ類ORDB:希少種)

2002年5月の調査で、ナカワレに所在するリゾート施設内海岸林で営巣中の1番を確認した。本種は森林地域を中心に生息しているものと思われる。他にもおそらく大岳や島北部の海岸林、御嶽林等のまとまった森林地域で繁殖しているものと思われる。

d) ミフウズラ (ORDB:希少種)

2002年5月の調査によって、ナアカの農耕地でわずか1個体が確認されたのみである。本島では前述したように、ミフウズラと同様に地上を徘徊し、植物の種子や軟体動物、昆虫類などの小動物を採餌するタイプの鳥類であるインドクジャクが定着してい

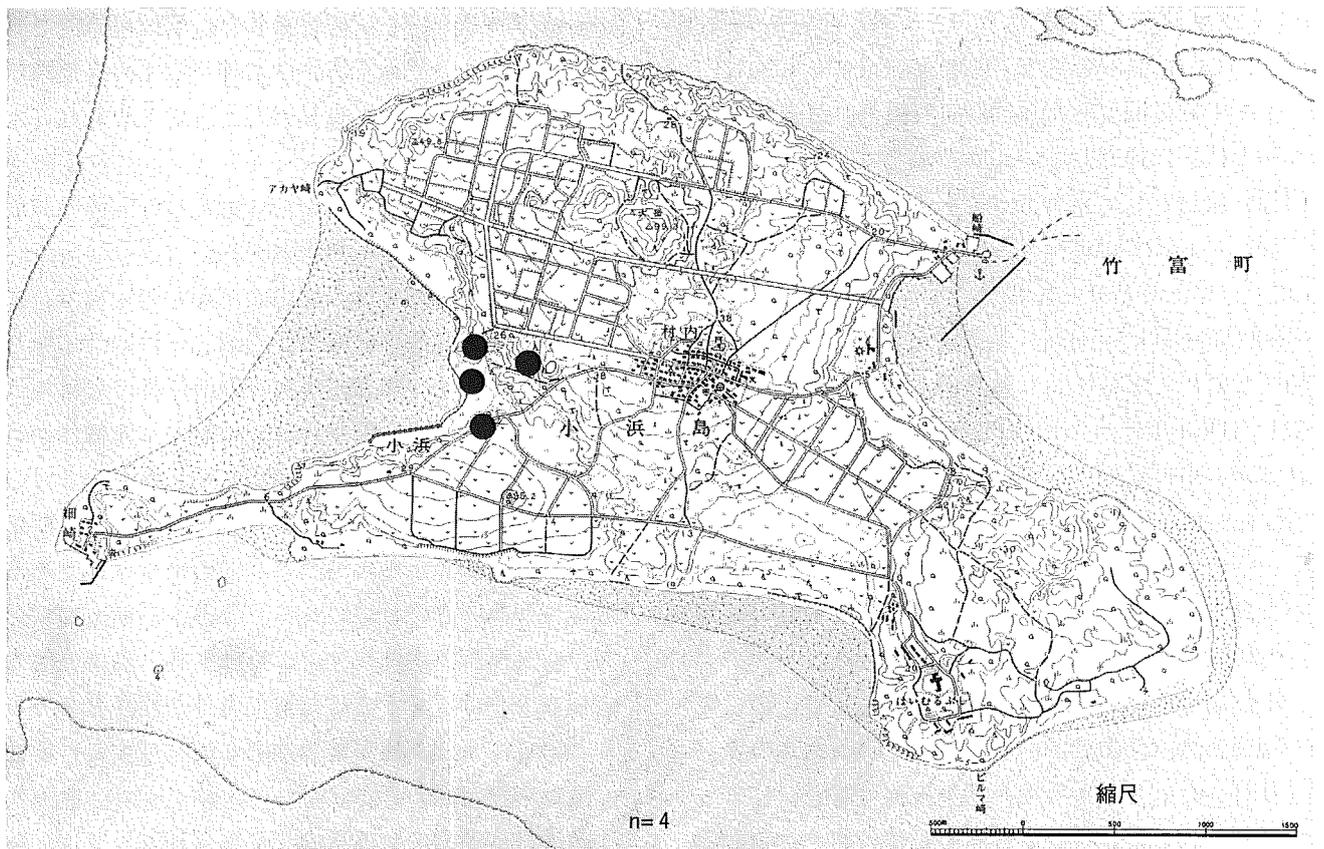


図3 カムリワシの確認地 (2002・2・25—2・27) (凡例：●確認地) (国土地理院発行1/25000地形図改変)

る。本種(体長11cm)に比較して、雄成鳥で体長220cmにもなるクジャクは、一日における餌の要求量も本種に比べ格段に多いことが予想される。したがって、ミフウズラとクジャクとは、一部の餌資源について競合関係があるものと思われ、インドクジャクが定着する以前のミフウズラの生息個体数については、何ら資料は得られていないが、本調査で観察された個体数がわずかであったことから、クジャクの定着とその個体数の増加は、本種の生息に何らかの影響を及ぼしていることが考えられる。

e) ツルクイナ (ORDB: 危急種)

Ogawa (1905) により、1904年6月18日に♀1個体の採集記録が知られているが、本調査では確認できなかった。クイナ類は水田や湿地などの水生生物を餌にしていることから、1904年の採集地も水田となっている。おそらく、本種は水田の減少とともに数を減らしているものと思われる。

本種は八重山諸島では繁殖記録があり、留鳥とされていることから、本島でも留鳥として生息している可能性がある。

f) シロチドリ (ORDB: 希少種)

細崎の砂浜海岸で30個体ほど群れて観察された。また、小浜港(埋め立て地)でハマシギと混群でねぐらをとる20個体ほどが観察された。しかしながら、本調査では繁殖の確認はできなかった。おそらく、島周囲の砂浜海岸などを中心に繁殖分布しているものと思われるが、他の島から飛来する漂鳥の可能性や一部冬鳥としての飛来もあるものと思われる。

g) リュウキュウキビタキ (ORDB: 危急種)

繁殖時期にあたる5~6月の調査で、図5に示したように大岳に残存する森林地域と島西方の海岸林で複数個体を確認した。したがって、石垣島や西表島と同様に繁殖個体群が存在していることが示唆される。

h) キンバト (国指定天然記念物、NRDB: 絶滅危惧IA類、ORDB: 絶滅危惧種)

図4に示したように、大岳の森林地域や製糖工場近くの海岸林でしばしば目撃された。本種も繁殖は確認できなかったが、森林地域を中心に留鳥として

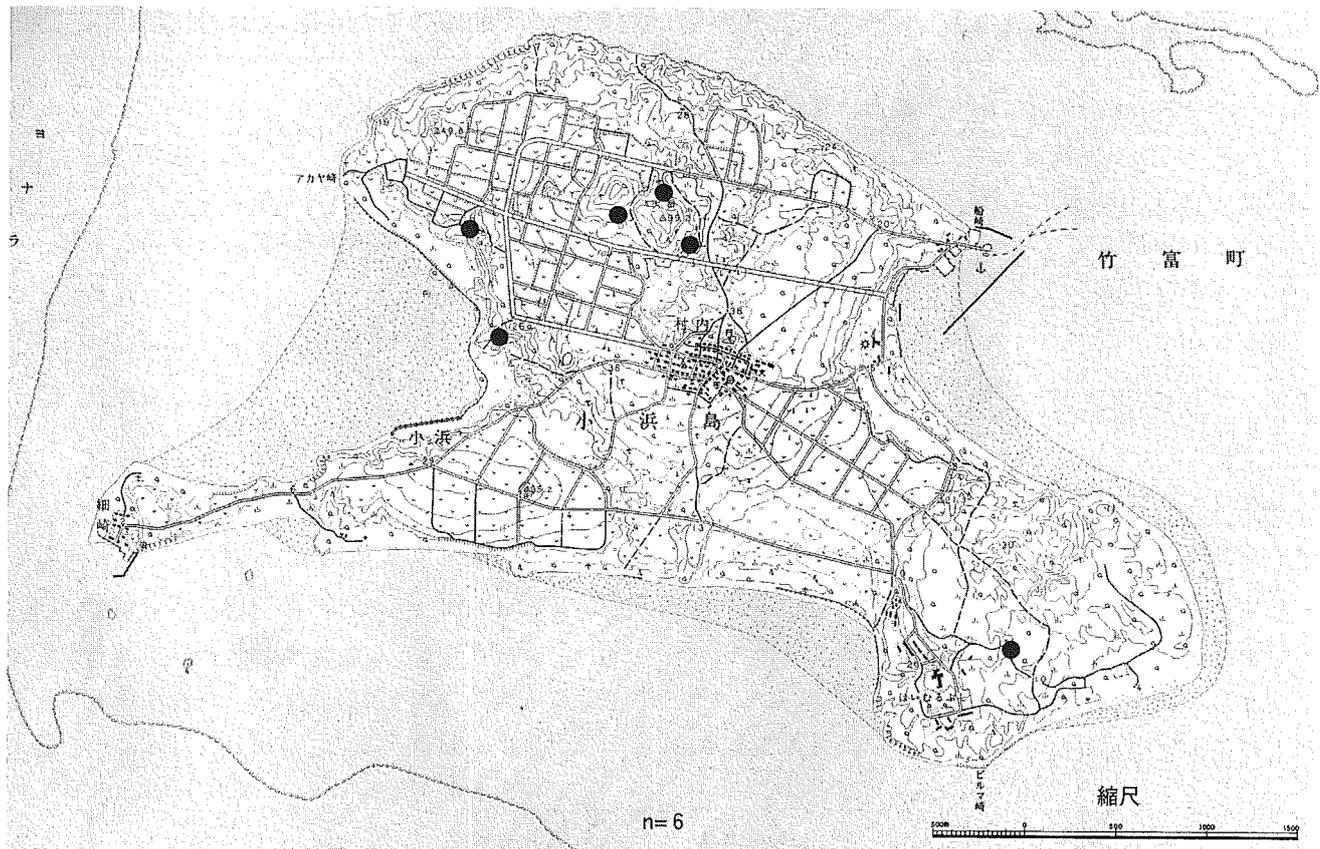


図4 リュウキュウキビタキの確認地 (2002・2・26-2・27) (凡例：●確認地) (国土地理院発行1/25000地形図改変)

生息しているものと思われる。

i) リュウキュウコノハズク (ORDB:希少種)

2002年6月には大岳周辺にある森林内でタカサゴシロアリの巣にできたうろ (おそらくアカショウビンの古巣) で営巣し、抱卵している個体が確認された。本種は夜間に集落周辺で鳴き声もよく聞かれる。

j) カワセミ (ORDB:希少種)

島西方にあるスダ (石長田) 海岸のマングローブ林に囲まれた池沼地でしばしば観察された。本種も繁殖は確認されなかったが、留鳥として少数が生息しているものと思われる。しかしながら、西表島に隣接していることから、西表島から漂鳥として飛来してくる個体もいる可能性は否定できない。

3) 飛来種の中における貴重種について

a) ミサゴ (NRDB:準絶滅危惧種 ORDB:危急種)

調査期間中、いずれの時期でも細崎海岸や島北方の海岸線などで飛翔する個体を目撃した。本種は魚食性のワシタカ類で、海岸線を餌場としていること

から、小浜島でも島の海岸線が餌場として利用しているものと思われる。

b) オオバン (ORDB:希少種)

冬期にリゾート施設内のため池や島中央のテナナにある湿地で1個体が観察された。本地域でも冬鳥としての飛来であろう。

c) セイタカシギ (NRDB:絶滅危惧 I B類 ORDB:希少種)

2002年5月の調査でスダ (石長田) の湿地で2個体が観察された。本種は数少ない冬鳥や旅鳥として県内各地に飛来することから、小浜島でも同様な冬鳥及び旅鳥であろう。

d) アカアシシギ (NRDB:絶滅危惧 II ORDB:希少種)

2002年5月の調査でスダ (石長田) の湿地で2個体が観察された。本種は数少ない旅鳥や冬鳥として、県内各地に飛来する。

表4 小浜島で確認された貴重種

| 種名            | ランク区分          |             |             | 生息状況         |
|---------------|----------------|-------------|-------------|--------------|
|               | 天然記念物          | 環境省版 (NRDB) | 沖縄県版 (ORDB) |              |
|               |                | (2002)      | (1996)      |              |
| コウノトリ         | 国指定特別<br>天然記念物 | 絶滅危惧 I A類   | 絶滅危惧種       | 希な冬鳥<br>(迷鳥) |
| カンムリワシ        | 国指定特別<br>天然記念物 | 絶滅危惧 I A類   | 絶滅危惧種       | 留鳥?<br>(漂鳥)  |
| キンバト          | 国指定天然記念物       | 絶滅危惧 I B類   | 絶滅危惧種       | 留鳥           |
| ズグロミゾゴイ       |                | 準絶滅危惧種      | 危急種         | 留鳥           |
| ムラサキサギ        |                |             | 危急種         | 留鳥           |
| オオクイナ         |                | 絶滅危惧 II 類   | 危急種         | 留鳥           |
| リュウキュウキビタキ    |                |             | 危急種         | 留鳥           |
| カイツブリ         |                |             | 希少種         | 留鳥           |
| リュウキュウヨシゴイ    |                |             | 希少種         | 留鳥           |
| リュウキュウツミ      |                | 絶滅危惧 II 類   | 希少種         | 留鳥           |
| ミフウズラ         |                |             | 希少種         | 留鳥           |
| リュウキュウヒクイナ    |                |             | 希少種         | 留鳥           |
| ツルクイナ         |                |             | 希少種         | 留鳥           |
| シロチドリ         |                |             | 希少種         | 留鳥           |
| カワセミ          |                |             | 希少種         | 留鳥           |
| リュウキュウコノハズク   |                |             | 希少種         | 留鳥           |
| リュウキュウサンショウクイ |                |             | 希少種         | 留鳥           |
| ヤエヤマシロガシラ     |                |             | 希少種         | 留鳥           |
| イシガキシジュウカラ    |                |             | 希少種         | 留鳥           |
| セイタカシギ        |                | 絶滅危惧 I B類   | 希少種         | 冬鳥           |
| アカアシシギ        |                | 絶滅危惧 II 類   | 希少種         | 冬鳥           |
| チュウビ          |                | 絶滅危惧 II 類   |             | 希な冬鳥         |
| ツバメチドリ        |                | 絶滅危惧 II 類   | 危急種         | 冬鳥           |
| コアジサシ         |                | 絶滅危惧 II 類   | 希少種         | 夏鳥           |
| チュウサギ         |                | 準絶滅危惧種      | 希少種         | 冬鳥           |
| ミサゴ           |                | 準絶滅危惧種      | 危急種         | 冬鳥           |
| エリグロアジサシ      |                | 準絶滅危惧種      | 希少種         | 夏鳥           |
| アカモズ          |                | 準絶滅危惧種      |             | 冬鳥           |
| オオバン          |                |             | 希少種         | 冬鳥           |
| ヤツガシラ         |                |             | 希少種         | 希な旅鳥         |

e) エリグロアジサシ (NRDB:準絶滅危惧種、  
ORDB:危急種)

2002年6月の調査で、細崎南東の岩礁(ハトパナリ)で休息する数個体を目撃した。おそらく、島のまわりにある岩礁で繁殖活動を行い、海岸近くで採餌行動を行っている可能性が考えられる。

### 調査課題

本調査では冬季に2回、夏季に1回の合計3回の調査を実施しただけであり、この調査回数では、小浜島における鳥類の生息状況を把握するには不十分と思われる。特に留鳥が繁殖を行う夏季の調査が不足しており、今回繁殖確認ができた種はわずか3種にとどまっている。したがって、今後、夏季における繁殖調査を含め、秋季の渡り鳥調査等調査の継続が望まれる。特に、前述したように国指定天然記念物で環境省編(2002)による絶滅危惧IA類であるカンムリワシをはじめとして、ズグロミゾゴイやリュウキュウキビタキなどの貴重種の繁殖の有無についての調査は、これらの種の生息地保全を考える上で不可欠と考えられるため、今後とも継続した調査が望まれる。

### 要約

1. 博物館総合調査の一環として、小浜島で鳥類調査を実施し、カンムリワシやキンバトなど92種の鳥類を確認し、環境ごとに生息する鳥類を概説した。

2. 本調査とこれまでの鳥類記録をまとめ、112種の小浜島鳥類目録(暫定)を作成した。その中には、外来種としてインドクジャクが帰化し島全域で見られるため、その食性を考慮すると本来の自然生態系がそこなわれる恐れがあり、その個体数管理の必要性を指摘した。

3. 確認された鳥類の中では環境省編(2002)や沖縄県自然保護課編(1996)で選定されている保護すべき貴重種が30種確認され、その種の保全や生息地の保全の必要性を指摘した。

### 文献

朝日新聞社事典編集室編 1975. 『朝日ラールス世界動物百科第8巻』朝日新聞社.

Douglas M., Ikenaga, H., Iozawa, H., Shoyama, M. and Takehara, K. 1996. A Check-list of the birds of Okinawa Prefecture with notes on recent status including hypothetical records. *Bulls Okinawa Pref Mus* (22) : 33-152.

藤波不二雄 1982. 春季の沖縄の野鳥. *Strix* (1) : 125.

梶田学・真野徹・佐藤文男. 2002. 沖縄島に生息するウグイス *Cettia diphone* の二型について—多変量解析によるリュウキュウウグイスとダイトウウグイスの再評価—. 山階鳥類研究所研究報告 33 : 148-167.

記念誌委員会(編) 1997. 『創立百周年記念誌うふたき』竹富町立小浜小学校.

Kuroda, N.M. 1925. A Contribution to the Knowledge of the Avifauna of the Riu Kiu Islands and the Vicinity. published by the author, Tokyo.

環境省自然環境局野生生物課編. 2002. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—, 2. 鳥類. 自然環境研究センター, 東京.

日本鳥学会編. 1974. 『日本鳥類目録 改訂第5版』日本鳥学会.

日本鳥学会編. 2000. 『日本鳥類目録 改訂第6版』日本鳥学会.

Ogawa M. 1905. Notes on Mr. Alan Owston's collection of birds from the islands lying between Kiushu and Formosa. *Annot. Zool. Jap.* 5:175-232.

沖縄県環境保健部自然保護課(編). 1996. 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータおきなわ—. 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇.

沖縄県環境保健部自然保護課(編). 1997. 特殊鳥類生息環境調査 伊平屋島・久米島・南大東島・北大東島湿地編. 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇.

沖縄野鳥研究会(編). 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇.

- 嵩原建二・崎山陽一郎・庄山守・久貝勝盛・比嘉邦昭・池間幸男・山城正邦・大城亀信. 1996. 八重山諸島の主要な干潟及び湿地とその周辺地域における鳥類について. 特殊鳥類等生息環境調査IX 八重山湿地編. 沖縄県環境保健部自然保護課, pp. 1-53.
- 田中聡・嵩原建二. 2003. 先島諸島における野生化したクジャクの分布と現状について. 沖縄県立博物館紀要 (29) :19-24.
- 玉城常雄. 1995. 小浜島の鳥類とその生態. 沖生教研会誌 (18) :4-14.
- 齊藤郁子・嵩原建二. 2003. 折居彪二郎資料「大隅・琉球列島採集日誌 (1921) について」地域研究所叢書 1. 沖縄大学.
- 琉球新報社編. 1982. 奄美・沖縄の鳥類目録、写真集沖縄の野鳥. 62pp.
- 八重山野鳥の会編. 1982. 八重山地方鳥類目録. 10周年記念誌, pp. 28-38.
- 日本野鳥の会八重山支部編. 1998. カンムリワシ保護対策検討調査報告書.

図版 I 小浜島における調査地環境



写真1 大岳



写真2 大岳森林景観



写真3 小浜集落



写真4 ヤマンダの水田



写真5 石長田（イシンダ）の海岸



写真6 カタウレー湾とマングローブ林内の池

図版Ⅱ 小浜島で観察された鳥類（1）



写真1 カルガモ



写真2 オグロシギ



写真3 ムラサキサギ



写真4 セイタカシギ（右2固体）



写真5 エリマキシギ



写真6 リュウキュウキビタキ（♀）

図版Ⅲ 小浜島で観察された鳥類（2）



写真1 ズグロミゾゴイ

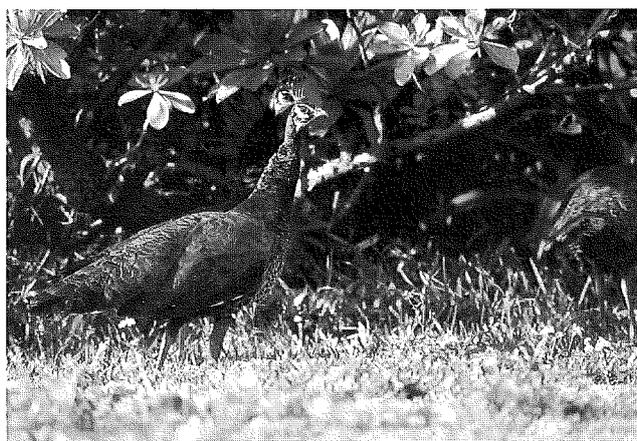


写真2 インドクジャク（♂）



写真3 リュウキュウコノハズク（抱卵）



写真4 カンムリワシ

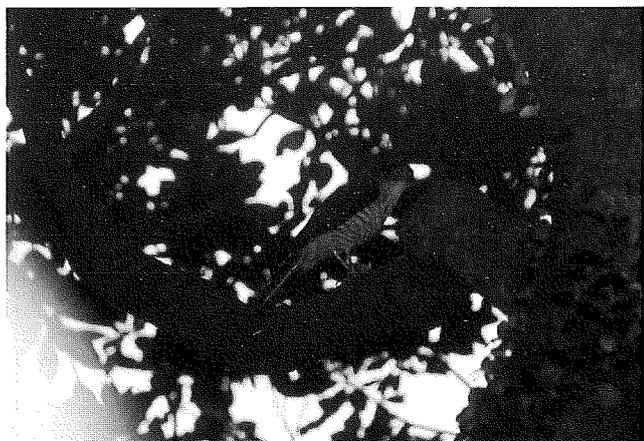


写真5 リュウキュウツミ



写真6 ヤツガシラ

付表1 小浜島鳥類目録 (暫定)

生息現状・特記事項等：R：留鳥、S：夏鳥、T：旅鳥 W：冬鳥 ST：迷鳥  
 文献等：a：Douglas et al. (1996) b：八重山野鳥の会 (1982) c：Ogawa (1905)  
 d：琉球新報社編 (1983) e：日本鳥学会編 (2000) f：藤波 (1982) g：玉城 (1985)

| 和名                        | 学名                                      | 生息現状・特記事項等 | 文献等     |
|---------------------------|-----------------------------------------|------------|---------|
| カイツブリ目 PODICIPEDIFORMES   |                                         |            |         |
| カイツブリ科 PODICIPEDIDAE      |                                         |            |         |
| カイツブリ                     | <i>Tachybaptus ruficollis poggei</i>    | W          |         |
| 2002/2/25, 2003/3/6       | リゾート施設ため池                               |            |         |
| コウノトリ目 CICONIIFORMES      |                                         |            |         |
| サギ科 ARDEIDAE              |                                         |            |         |
| ゴイサギ                      | <i>Nycticorax nycticorax nycticorax</i> | WあるいはR     |         |
| 2002/5/29                 | 石長田マングローブ林湿地                            |            |         |
| ササゴイ                      | <i>Butorides striatus amurensis</i>     | W          |         |
| 2002/5/29                 | 石長田マングローブ林湿地                            |            |         |
| アカガシラサギ                   | <i>Ardeola bacchus</i>                  | W (まれ)     |         |
| 2002/5/29                 | 石長田マングローブ林湿地                            |            |         |
| リュウキュウヨシゴイ                | <i>Ixobrychus cinnamoneus</i>           | R          |         |
| 2002/5/29                 | テンダの沈砂地                                 |            |         |
| アマサギ                      | <i>Bubulcus ibis coromandus</i>         |            |         |
| 2002/5/29                 | テナヤやハイバナなどの農耕地・牧場                       |            |         |
| ダイサギ                      | <i>Ardea alba modesta</i>               | W          |         |
| 2002/5/29                 | 石長田マングローブ林湿地                            |            |         |
| チュウサギ                     | <i>Egretta intermedia intermedia</i>    | W          |         |
| 2002/5/29                 | テナの農耕地・リゾート施設内芝地                        |            |         |
| コサギ                       | <i>Egretta garzetta garzetta</i>        | W          |         |
| 2002/2/25, 5/29           | マングローブ湿地・中央湿地                           |            |         |
| クロサギ                      | <i>Egretta sacra sacra</i>              | R          |         |
| 2002/2/25                 | 細崎・小浜港                                  |            |         |
| アオサギ                      | <i>Ardea cinerea jouyi</i>              | W          |         |
| 2002/2/25, 2003/3/6       | 石長田マングローブ湿地・小浜港                         |            |         |
| ムラサキサギ                    | <i>Ardea purpurea manilensis</i>        | R          |         |
| 2002/2/25, 2003/3/6       | ハインダの農耕地・牧場                             |            |         |
| コウノトリ科 CICONIIDAE         |                                         |            |         |
| コウノトリ                     | <i>Ciconia ciconia boyciana</i>         |            |         |
| 1981/11/29-1982/3         | 小浜島西方海岸(成鳥2, 若鳥1)                       | ST(w)      | a, b, f |
| ガンカンモ目 ANSERIFORMES       |                                         |            |         |
| ガンカモ科 ANATIDAE            |                                         |            |         |
| オオハクチョウ                   | <i>Cygnus cygnus</i>                    | ST(w)      | a, b    |
| 1975/11/26                | 小浜島                                     |            |         |
| カルガモ                      | <i>Anas poecilorhyncha zonorhyncha</i>  | R          |         |
| 2002/2/25, 5/29, 2003/3/6 | マングローブ湿地、水田、中央湿地                        |            |         |
| コガモ                       | <i>Anas crecca crecca</i>               | W          |         |
| 2002/2/25                 | マングローブ湿地、水田、中央湿地                        |            |         |
| ヒドリガモ                     | <i>Anas penelope</i>                    | W          | a       |
|                           | 小浜島                                     |            | d       |
| シマアジ                      | <i>Anas querquedula</i>                 | W          | a, c    |
|                           | 小浜島                                     |            |         |
| ハシビロガモ                    | <i>Anas clypeata</i>                    | W          |         |
| 2002/2/25                 | 石長田マングローブ湿地                             |            |         |
| キンクロハジロ                   | <i>Aythya fuligula</i>                  | W          |         |

| 和名                   | 学名                                        | 生息現状・特記事項等      | 文献等 |
|----------------------|-------------------------------------------|-----------------|-----|
| 2002/2/25            | リゾート施設内ため池                                |                 |     |
| タカ目 FALCONIFORMES    |                                           |                 |     |
| タカ科 ACCIPITRIDAE     |                                           |                 |     |
| ミサゴ                  | <i>Pandion haliaetus haliaetus</i>        | W               |     |
| 2002/2/25, 2003/3/6  | 細崎・小浜港                                    |                 |     |
| アカハラダカ               | <i>Accipiter soloensis</i>                | T               |     |
| 1995/9/25            | 大岳 (26 個体)                                |                 |     |
| リュウキュウツミ             | <i>Accipiter gularis</i>                  | R(繁殖:リゾート施設内森林) |     |
| 2002/2/25, 5/31      | 大岳・リゾート施設内森林                              |                 |     |
| チュウビ                 | <i>Circus spilonotus spilonotus</i>       | W               |     |
| 2002/2/25            | リゾート施設内海岸林                                |                 |     |
| サシバ                  | <i>Butastur indicus</i>                   | W・T             |     |
| 2002/2/25            | 島内各地                                      |                 |     |
| カンムリワシ               | <i>Spilornis cheela perplexus</i>         | R               |     |
| 1995/9/25            | リゾート施設内海岸林                                |                 |     |
| ハヤブサ科 FALCONIDAE     |                                           |                 |     |
| チョウゲンボウ              | <i>Falco tinnunculus interstinctus</i>    | W               |     |
| 2002/2/25            | 島内各地                                      |                 |     |
| キジ目 GALLIFORMES      |                                           |                 |     |
| キジ科 PHASIANIDAE      |                                           |                 |     |
| インドクジャク              | <i>Pavo cristatus</i>                     | R(外来種)          |     |
|                      | 島内各地 (帰化)                                 |                 |     |
| ツル目 GRUIFORMES       |                                           |                 |     |
| ミフウズラ科 TURNICIDAE    |                                           |                 |     |
| ミフウズラ                | <i>Turnix suscitator okinavensis</i>      | R               |     |
| 2002/5/29            |                                           |                 |     |
| クイナ科 RALLIDAE        |                                           |                 |     |
| クイナ                  | <i>Rallus aquaticus</i>                   | W               | g   |
| リュウキュウヒクイナ           | <i>Porzana fusca phaeopyga</i>            | R               |     |
| 2003/3/6             | 中央湿地                                      |                 |     |
| オオクイナ                | <i>Rallina eurizonoides sepiaria</i>      | R               |     |
| 1995/9/25            | 石長田マングローブ林                                |                 |     |
| シロハラクイナ              | <i>Amaurornis phoenicurus chinensis</i>   | R               |     |
| 2002/2/25, 2003/3/6  | 石長田マングローブ林・水田                             |                 |     |
| ツルクイナ                | <i>Gallinex cinerea</i>                   | R?(現状不明)        |     |
| 1904/6/18            | 小浜島                                       | ♀               | c   |
| バン                   | <i>Gallinula chloropus indica</i>         | R               |     |
| 2002/2/25, 2003/3/6  | 石長田マングローブ林・水田                             |                 |     |
| オオバン                 | <i>Fulica atra</i>                        | W               |     |
| 2002/2/25, 2003/3/6  | 中央湿地・リゾート施設内ため池                           |                 |     |
| チドリ目 CHARADRIIFORMES |                                           |                 |     |
| チドリ科 CHARADRIIDAE    |                                           |                 |     |
| コチドリ                 | <i>Charadrius dubius curonicus</i>        | W               |     |
| シロチドリ                | <i>Charadrius alexandrinus nihonensis</i> | R               |     |
| 2002/2/25, 2003/3/6  | 石長田マングローブ林湿地                              |                 |     |
| メダイチドリ               | <i>Charadrius mongolus stegmanni</i>      | T               |     |
| 1995/9/25            | 石長田マングローブ林湿地                              |                 |     |
| 2002/2/25, 2003/3/6  | 細崎海岸                                      |                 |     |

| 和名                       | 学名                                      | 生息現状・特記事項等 | 文献等  |
|--------------------------|-----------------------------------------|------------|------|
| ムナグロ                     | <i>Pluvialis dominica fulva</i>         | W          |      |
| 2002/2/25, 2003/3/6      | 細崎海岸                                    |            |      |
| ダイゼン                     | <i>Pluvialis Squatarola</i>             | W          |      |
| 2002/2/25, 2003/3/6      | 細崎海岸                                    |            |      |
| シギ科 SCOLOPACIDAE         |                                         |            |      |
| キョウジョシギ                  | <i>Arenaria interpres interpres</i>     | T          |      |
| 1995/9/25                | 石長田マングローブ林湿地                            |            |      |
| 2002/2/25, 2003/3/6      | 細崎海岸                                    |            |      |
| トウネン                     | <i>Calidris ruficollis</i>              | W          |      |
| 2002/5/29                | 石長田マングローブ林湿地                            |            |      |
| ウズラシギ                    | <i>Calidris acuminata</i>               | T          |      |
| 2002/5/29                | 石長田マングローブ林湿地                            |            |      |
| ハマシギ                     | <i>Calidris alpina sakhalina</i>        | W          |      |
| 2002/2/25, 2003/3/6      | 細崎海岸・小浜港                                |            |      |
| コオバシギ                    | <i>Calidris canutus rogersi</i>         | T          |      |
| 2002/5/29                | 石長田マングローブ林湿地                            |            |      |
| エリマキシギ                   | <i>Philomachus pugnax</i>               | T          |      |
| 2003/3/6                 | ハインダの水田                                 |            |      |
| アカアシシギ                   | <i>Tringa totanus ussuriensis</i>       | W          |      |
| 2002/5/29                | 石長田マングローブ林湿地                            |            |      |
| アオアシシギ                   | <i>Tringa nebularia</i>                 | W          |      |
| 1995/9/25                | 石長田マングローブ林湿地                            |            |      |
| 2002/2/25, 2003/3/6      | 細崎海岸                                    |            |      |
| コアオアシシギ                  | <i>Tringa stagnatillis</i>              | W          |      |
| 1995/9/25                | 石長田マングローブ林湿地                            |            |      |
| クサシギ                     | <i>Tringa ochropus</i>                  | W          |      |
| 2003/3/6                 | 石長田マングローブ林湿地                            |            |      |
| タカブシギ                    | <i>Tringa glareola</i>                  | W          |      |
| 2002/5/29                | 石長田マングローブ林湿地                            |            |      |
| キアシシギ                    | <i>Tringa brevipes</i>                  | T          |      |
| 1995/9/27                | マングローブ湿地                                |            |      |
| イソシギ                     | <i>Tringa hypoleucos</i>                | W          |      |
| 2002/2/25.5/29           | リゾート施設内芝地                               |            |      |
| オグロシギ                    | <i>Limosa limosa melanuroides</i>       | T          |      |
| 2002/5/29                | 石長田マングローブ林湿地                            |            |      |
| ヤマシギ                     | <i>Scolopax rusticola</i>               | W          |      |
| 2002/2/25                | リゾート施設内芝地                               |            |      |
| タシギ                      | <i>Gallinago gallinago gollinago</i>    | W          |      |
| 2002/2/25, 2003/3/6      | 石長田マングローブ林湿地                            |            |      |
| ダイシャクシギ                  | <i>Numenius arquata orientalis</i>      | T          |      |
| 2002/2/25                | 石長田マングローブ林湿地                            |            |      |
| チュウシャクシギ                 | <i>Numenius phaeopus uarigatus</i>      | T          |      |
| 1995/9/27, 2002/2/25     | 石長田マングローブ林湿地                            |            |      |
| セイタカシギ科 RECURVIROSTRIDAE |                                         |            |      |
| セイタカシギ                   | <i>Himantopus himantopus himantopus</i> | W          |      |
| 2002/5/29                | 石長田マングローブ林湿地                            |            |      |
| ツバメチドリ科 GLAREOLIDAE      |                                         |            |      |
| ツバメチドリ                   | <i>Glareola maldivarum</i>              | T          | d, e |

| 和名                    | 学名                                       | 生息現状・特記事項等 | 文献等 |
|-----------------------|------------------------------------------|------------|-----|
|                       | 小浜島                                      |            |     |
| カモメ科 LARIDAE          |                                          |            |     |
| エリグロアジサシ              | <i>Sterna sumatrana sumatrana</i>        | S          |     |
| 2002/5/29             | 細崎海岸                                     |            |     |
| クロハラアジサシ              | <i>Sterna hybrida javanica</i>           | T          |     |
| 1995/9/25             | 石長田マングローブ林湿地                             |            |     |
| ハト目 COLUMBIFORMES     |                                          |            |     |
| ハト科 COLUMBIDAE        |                                          |            |     |
| リュウキュウキジバト            | <i>Streptopelia orientalis stimpsoni</i> | R          |     |
| 2002/2/25, 2003/3/6   | 島内各地                                     |            |     |
| チュウアイアカハト             | <i>Treron formosae permagnus</i>         | R          |     |
| 2002/2/25             | 大岳                                       |            |     |
| キンバト                  | <i>Chalcophaps indica yamashinai</i>     | R          |     |
| 2002/2/25, 2003/3/6   | 海岸林・大岳                                   |            |     |
| フクロウ目 STRIGIFORMES    |                                          |            |     |
| フクロウ科 STRIGIDAE       |                                          |            |     |
| リュウキュウコノハズク           | <i>Otus scops elegans</i>                | R          |     |
| 1995/9/25             | 大岳                                       |            |     |
| リュウキュウアオバズク           | <i>Ninox scutulata totogo</i>            | R          |     |
| 1995/9/25             | リゾート施設内海岸林                               |            |     |
| 2002/2/25             | リゾート施設内海岸林                               |            |     |
| アマツバメ目 APODIFORMES    |                                          |            |     |
| アマツバメ科 APODIDAE       |                                          |            |     |
| アマツバメ                 | <i>Apus pacificus kurodae</i>            | T          |     |
| 1995/9/26             | リゾート施設内海岸                                |            |     |
| ブッポウソウ目 CORACTIFORMES |                                          |            |     |
| カワセミ科 ALCEDINIDAE     |                                          |            |     |
| アカショウビン               | <i>Halcyon coromanda major</i>           | S          |     |
| 2002/5/29             | 大岳                                       |            |     |
| カワセミ                  | <i>Alcedo atthis bengalensis</i>         | R          |     |
| 1995/9/25             | 石長田マングローブ林内湿地                            |            |     |
| ヤツガシラ科 UPUPIDAE       |                                          |            |     |
| ヤツガシラ                 | <i>Upupa epops saturata</i>              | T          |     |
| 2002/2/25             | リゾート施設内芝地                                |            |     |
| スズメ目 PASSERIFORMES    |                                          |            |     |
| ツバメ科 HIRUNDINIDAE     |                                          |            |     |
| ツバメ                   | <i>Hirundo rustica gutturalis</i>        | T          |     |
| 2002/2/25, 2003/3/6   | 集落                                       |            |     |
| リュウキュウツバメ             | <i>Hirundo tahitica namiyei</i>          | R? (漂鳥?)   |     |
|                       | 小浜島                                      |            | d   |
| セキレイ科 MOTACILLIDAE    |                                          |            |     |
| ツメナガセキレイ              | <i>Motacilla flava</i>                   | T/W        |     |
| 1995/9/25             | マゴスの農耕地                                  |            |     |
| キセキレイ                 | <i>Motacilla cinerea robusta</i>         | W          |     |
| 2002/2/25, 2003/3/6   | マゴスの農耕地                                  |            |     |
| ハクセキレイ                | <i>Motacilla alba lugens</i>             | W          |     |
| 2002/2/25, 2003/3/6   | マゴスの農耕地                                  |            |     |
| ホオジロハクセキレイ            | <i>Motacilla alba leucopsis</i>          | W          |     |

| 和名                        | 学名                                       | 生息現状・特記事項等 | 文献等 |
|---------------------------|------------------------------------------|------------|-----|
| 2003/3/6                  | マゴスの農耕地                                  |            |     |
| セジロタヒバリ                   | <i>Anthus gustavi gustavi</i>            | W          |     |
| 2002/3/1                  | 小浜島                                      | 鈴木私信       |     |
| ムネアカタヒバリ                  | <i>Anthus ceevinus</i>                   | W          |     |
|                           | 小浜島                                      |            | d   |
| サンショウクイ科CAMPEPHAGIDAE     |                                          |            |     |
| リュウキュウサンショウクイ             | <i>Pericrocotus divaricatus tegimae</i>  | R          |     |
| 1995/9/25                 | リゾート施設内海岸林                               |            |     |
| ヒヨドリ科 PYCNONOTIDAE        |                                          |            |     |
| シロガシラ                     | <i>Pycnonotus sinensis orii</i>          | R          |     |
| 2002/2/25, 5/29, 2003/3/6 | ヤマダの農耕地                                  |            |     |
| イシガキヒヨドリ                  | <i>Hypsipetes amaurotis stejnegeri</i>   | R          |     |
| 2002/2/25, 2003/3/6       | 森林・農耕地                                   |            |     |
| モズ科LANIIDAE               |                                          |            |     |
| モズ                        | <i>Lanius bucephalus bucephalus</i>      | W          |     |
| 1995/9/25                 | リゾート施設内海岸林                               |            |     |
| シマアカモズ                    | <i>Lanius cristatus lucionensis</i>      |            |     |
| 200/2/25, 2003/3/6        | マゴスの農耕地                                  | R?         |     |
| ツグミ科 TURDINAE             |                                          |            |     |
| ジョウビタキ                    | <i>Phoenicurus aureus aureus</i>         | W          |     |
| 200/2/25, 2003/3/6        | リゾート施設内海岸林                               |            |     |
| ルリビタキ                     | <i>Tarsiger cynurus</i>                  | W          |     |
| 2003/3/6                  | テナナの農耕地                                  |            |     |
| イソヒヨドリ                    | <i>Monticola solitarius philippensis</i> | R          |     |
| 200/2/25, 2003/3/6        | 集落・細崎海岸・小浜港                              |            |     |
| シロハラ                      | <i>Turdus pallidus</i>                   | W          |     |
| 200/2/25, 2003/3/6        | 大岳・リゾート施設内海岸林                            |            |     |
| アカハラ                      | <i>Turdus chrysolaus chrysolaus</i>      | W          |     |
| 200/2/25, 2003/3/6        | 大岳・リゾート施設内海岸林                            |            |     |
| マミチャジナイ                   | <i>Turdus obscurus</i>                   | W          |     |
| 2003/3/6                  | 大岳                                       |            |     |
| ツグミ                       | <i>Turdus naummanni eunomus</i>          | W          |     |
| 2003/3/6                  | リゾート施設内芝地                                |            |     |
| ウグイス亜科 SYLVIINAE          |                                          |            |     |
| ヤブサメ                      | <i>Cettia sguamiceps</i>                 | W          |     |
| 2002/2/27                 | 大岳                                       |            |     |
| ウグイス                      | <i>Cettia diphone</i>                    | R? (W?)    |     |
| 200/2/25, 2003/3/6        | 大岳・リゾート施設内海岸林                            |            |     |
| セッカ                       | <i>Cisticola juncidis bruniceps</i>      | R          |     |
| 200/2/25, 2003/3/6        | 農耕地・牧草地など                                |            |     |
| キマユムシクイ                   | <i>Phylloscopus inornatus inornatus</i>  | W          |     |
| 200/2/25, 2003/3/6        | 大岳・リゾート施設内海岸林                            |            |     |
| ムジセッカ                     | <i>Phylloscopus fuscatus fuscatus</i>    | W          |     |
| 200/2/25, 2003/3/6        | テナナの農耕地                                  |            |     |
| ヒタキ科MUSCICAPIDAE          |                                          |            |     |
| エゾビタキ                     | <i>Muscicapa griseisticta</i>            | T          |     |
| 1995/9/25                 | リゾート施設内海岸林                               |            |     |
| リュウキュウキビタキ                | <i>Ficedula narcissina</i>               | R          |     |

| 和名                    | 学名                                     | 生息現状・特記事項等 | 文献等     |
|-----------------------|----------------------------------------|------------|---------|
| 2002/5/29             | 大岳・リゾート施設内海岸林                          |            |         |
| カササギヒタキ亜科 MONARCHINAE |                                        |            |         |
| リュウキュウサンコウチョウ         | <i>Terpsiphone atrocaudata</i>         | S          |         |
| 2002/5/29             | 大岳                                     |            |         |
| シジュウカラ科 PARIDAE       |                                        |            |         |
| イシガキシジュウカラ            | <i>Parus major okinawae</i>            | R          |         |
| 200/2/25, 2003/3/6    | 大岳                                     |            |         |
| メジロ科 ZOSTEROPIDAE     |                                        |            |         |
| リュウキュウメジロ             | <i>Zosterops japonica loochooensis</i> | R          |         |
| 200/2/25, 2003/3/6    | 大岳・リゾート施設内海岸林                          |            |         |
| ホオジロ科 EMBERIZIDAE     |                                        |            |         |
| ホオジロ                  | <i>Emberiza cioides</i>                | W          | g       |
| アオジ                   | <i>Emberiza spodocephala personata</i> | W          |         |
| 2003/3/6              | 大岳                                     |            |         |
| アトリ科 FRINGILLIDAE     |                                        |            |         |
| オオカワラヒワ               | <i>Carduelis sinica kawarahiba</i>     | W          |         |
|                       | 小浜島                                    |            | d, e    |
| ハタオリドリ科 PLOCEIDAE     |                                        |            |         |
| スズメ                   | <i>Passer montanus saturatus</i>       |            |         |
| 200/2/25, 2003/3/6    | 集落・農耕地                                 | R          |         |
| ムクドリ科 STURNIDAE       |                                        |            |         |
| ムクドリ                  | <i>Sturnus cineraceus</i>              | W          |         |
| 2002/2/25             | マゴスの農耕地                                |            |         |
| ギンムクドリ                | <i>Sturnus sriceus</i>                 | W          |         |
| 2002/2/25             | マゴスの農耕地                                |            |         |
| カラムクドリ                | <i>Sturnus sinensis</i>                | W          |         |
| 1995/9/25             | リゾート施設内 (5 個体)                         |            |         |
| カラス科 CORVIDAE         |                                        |            |         |
| オサハシブトガラス             | <i>Corvus macrorhynchos</i>            | R          | c, d, e |
| 200/2/25, 2003/3/6    | 集落・森林・農耕地など                            |            |         |

## 沖縄県小浜島の路上におけるゴイサギの待ち伏せ型採食行動

川上和人\*・田中聡\*\*

"Standing" Foraging Behaviour of Black-crowned Night Heron *Nycticorax nycticorax* on the Road at Kohamajima Island of Yaeyama Islands, Southern Japan

Kazuto KAWAKAMI\* and Satoshi TANAKA\*

### はじめに

ゴイサギ *Nycticorax nycticorax* は、ユーラシア大陸、南北アメリカ大陸、アフリカ大陸の温帯及び熱帯地域に広く分布するサギ科鳥類である (del Hoyo et al., 1992)。日本では、本州以南で繁殖記録がある。本種は、本州北部では夏鳥であるが、本州中部以南では、留鳥と渡り個体が混在している (樋口ら, 1996)。沖縄県においては、沖縄本島金武町、名護市などでの繁殖記録があり、周年観察されている (沖縄野鳥研究会, 2002)。ただし、県内では留鳥個体と越冬個体が混在していると考えられている (沖縄野鳥研究会, 2002)。八重山諸島ではゴイサギは周年観察記録があり、小浜島 (24° 20' N, 123° 59' E) でも同様である (髙原, 2004)。

ゴイサギは、繁殖期には日中も採食活動を行うことが知られているが、基本的には夜間に採食する夜行性の鳥である (Fasola, 1984; 遠藤・佐原, 2000)。本種は、魚類、両生類、昆虫類などを主要な食物としており (小杉, 1960; 遠藤・佐原, 2000)、特に繁殖期にはカエルを採食する頻度が高くなることが報告されている (山階, 1941)。

ゴイサギの主要な採食場所は、水田や河川、湖沼など水辺周辺であるが (小杉, 1960; 出町ら, 1991; 遠藤・佐原, 2000)、採食環境の融通性は大きく、

動物園内でペンギンの餌を横取りして採食する事例も報告されている (遠藤, 2002)。しかし、これまでに道路上をゴイサギが採食場所として積極的に利用している例は報告されていない。小浜島には、サキシマヌマガエル *Rana* sp. が多数生息しており、降雨時や降雨後の夜間に多くの個体が路上に出現する (田中, 未発表)。このサキシマヌマガエルの出現する路上において、ゴイサギが待ち伏せ型の採食行動を行っていることが観察された。本報告では、小浜島内におけるゴイサギの路上への出現状況を明らかにすると共に、サキシマヌマガエルの分布状況について明らかにすることを目的とする。

### 方法

#### ゴイサギの待ち伏せ行動の観察

ゴイサギの路上への出現状況を明らかにするため、2002年9月9日及び2003年7月25日の夜間に、沖縄県竹富町小浜島において観察を行った。2002年の調査では、小浜島中央部の大岳南部に位置する湿地帯において、20:30~21:10の間に、5 km/h以下で車で走行しながら、路上で待ち伏せを行っているゴイサギを探索し、観察した地点を地図上にプロットした。この地区の道路周辺の環境は、水田及び湿地であった。2003年の調査では、20:20~22:10の間

\* 〒193-0843 東京都八王子市廿里町1833 森林総合研究所多摩森林科学園

\*\* 〒903-0823 沖縄県那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

\* Tama Forest Science Garden, Forestry and Forest Products Research Institute, Todorii 1833, Hachioji, Tokyo 193-0843, Japan

\*\* Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan



図1 夜間に路上で待ち伏せ行動をしていたゴイサギの目撃地点。●は2002年、○は2003年の目撃地点。太線は2002年の調査ルート。2003年の調査ルートは図2に示す。影の部分は湿地または水田。

に、島内全域の道路を5 km/h以下で車で走行しながら、同様の記録を行った。調査経路は、2002年は図1の通り、2003年は図2のルート1～14である。

サキシマヌマガエルは、降雨時や降雨後の路面が濡れている夜間に多くの個体が、道路上に出現する傾向があるため、調査は降雨の直後または降雨中に行った。

#### ヌマガエルの相対密度

ゴイサギの採食対象と考えられるヌマガエルの小浜島の各地域における個体群密度を評価するため、島内の14ヶ所においてラインセンサスを行った。センサスは2003年7月25日20：20～22：10の間に行い、5km/h以下の速度で自動車で走行しながら路上に出現する個体数を把握した。サキシマヌマガエルは車の移動を感知すると、路上から道脇の草地等へ敏捷に逃避することが多かったため、正確な個体数の計数は難かった。このため、個体群密度は「多い」「少ない」「いない」の3段階のカテゴリーに分類した。「多い」は道路10mに対し1個体以上、少ないは1個体未満とした。センサスルートは、図2の

通りである。

## 結果

### ゴイサギの待ち伏せ行動の観察

2002年の調査では、のべ8個体のゴイサギが路上で待ち伏せ行動をしていることが確認された(図1)。目撃された全ての個体は、道路の辺縁部で道路中央部に向かって定位していた。このうち1個体では、サキシマヌマガエルに対する採食行動が観察された。隣り合う2個体の距離は、最短で10m程度であった。目撃された個体は全て成鳥だった。

2003年の調査では、1個体のゴイサギが路上で待ち伏せ行動をしていることが確認された(図1)。確認された場所は、大岳南側の湿地帯周辺だった。

### サキシマヌマガエルの個体群密度

サキシマヌマガエルは、島中央部のルート1、2、3、4、北西部の7、南東部の10、11において個体群密度が「多い」となった。このうち1、2、3、4においては特に個体群密度が高かった。12、13、14の各

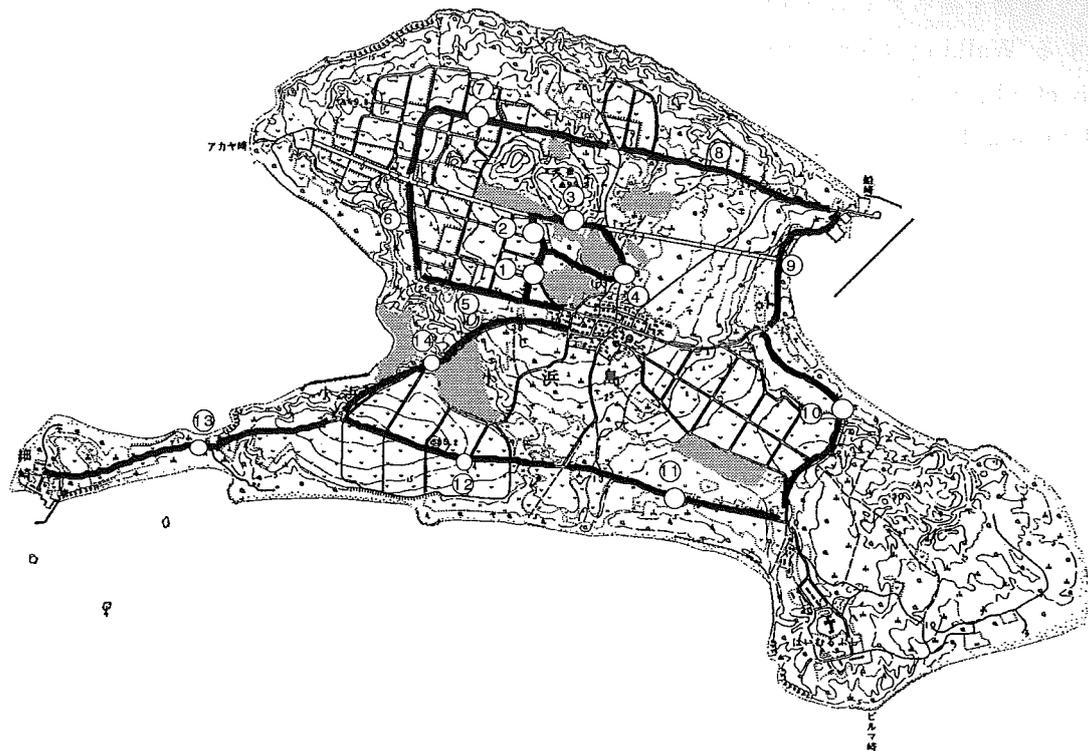


図2 路上に出現したサキシマヌマガエルの個体群密度。太線は各センサスルート（数字はセンサスのサブルート番号）。各ルートの記号は以下の通りの相対密度を示す。○：1個体/10 m以上，○：1個体/10 m未満，記号なし：0個体/10m。影の部分は湿地または水田。

ルートでは個体群密度は「少ない」となり、これら以外では、サキシマヌマガエルは観察されなかった。個体群密度の多かったルートの近くには、いずれも水田、湿地が分布していた。

### 考 察

小浜島では、降雨中または降雨直後の夜間にゴイサギが路上で待ち伏せ行動をしていることが観察された。観察地点はいずれも小浜島中央部の、水田及び湿地が集中している地域で、他の地域では同様の行動は観察されなかった。この場所は、サキシマヌマガエルが高密度で生息している場所と一致しており、ゴイサギがサキシマヌマガエルを捕食しようとする行動が見られた。また、これまでに、路面の濡れていない夜間には、同地点におけるゴイサギの路上への出現はほとんど観察されていない（田中、未発表）。これらのことから、ゴイサギはサキシマヌマガエルが路上に出現しやすい時機と場所を選択し、待ち伏せをしていたと考えられる。

遠藤・佐原（2000）は、青森県において、ゴイサ

ギが夜間は水田地帯で、日中は河川での採食が多くなることを報告している。これは、水田で主要な食物となるドジョウ *Misgurnus anguillicaudatus* が夜間に活動し、河川で主要な食物となるウグイ *Tribolodon hakonensis* やオイカワ *Zacco platypus* 等が昼行性であるため、その活動にあわせて採食場所をスイッチしているのだと考えられている（遠藤・佐原、2000）。この報告と同様に、今回の観察結果も、サキシマヌマガエルの活動にあわせた行動と考えられる。

サキシマヌマガエルが路上に出現する理由是不明であるが、夜間路上に出現する昆虫等を採食するためと考えられる。小浜島には、サキシマヌマガエルの他にヒメアママガエル *Microhyla ornata* が自然分布しているが、サキシマヌマガエルほど頻繁に路上に出現することはない（田中、未発表）。また、外来種としてウシガエル *Rana catesbeiana* の記録があるが、現在その個体数は極めて少なく（田中、未発表）、サキシマヌマガエルが採食対象として比較的重要であると考えられる。

ゴイサギの主要な採食方法は、水中や水際などで

待ち伏せをし獲物を捕らえる"Standing"と、歩きながら採食する"Walking Slowly"の2通りである (del Hoyo et al., 1992)。小浜島で観察された行動は、前者の"Standing"型の一例と考えられる。サキシマヌマガエルは、警戒心が強く行動が敏捷であるため、待ち伏せ型の採食方法が適していると考えられる。

サキシマヌマガエルは、ゴイサギが観察された地域にある御嶽林内 (仲山御嶽、西山御嶽) においても、夜間に多数が活動していることが観察された。しかし、これら林内では、ゴイサギの待ち伏せ行動は見られなかった。ゴイサギは夜行性の鳥ではあるが、嗅覚や聴覚について器官を発達させてはおらず、視覚により食物を探索していると考えられる。このため、夜間でも比較的明るく、遮蔽物のない路上を採食場所として選択していたと考えられる。フクロウ類でも、障害物がない開けた場所において、捕食効率が高いことが報告されている (Kotler, 1991)。

路上で待ち伏せをしているゴイサギの個体間の間隔は最短で約10mであった。フランスのラカマルグ地域の農耕地では、夜間にゴイサギが多数で採食する場合に、個体間の間隔が約10mになっていることを報告しており (Hancock et al., 1978)、この距離は個体間の相互作用で決定される最低限の距離である可能性がある。

今回観察された路上での採食は、ゴイサギの多様な採食行動の一つと考えられる。このような行動が、小浜島独特のものであるかどうかは不明である。今後は、他の地域における同様の行動の有無を明らかにしていく必要がある。

## 文 献

- del Hoyo, J., A. Elliott and J. Sargatal (eds.). 1992. *Handbook of the Birds of the World*. Vol. 1. Lynx Edicions, Barcelona.
- 出町玄・作山宗樹・佐原雄二. 1991. 繁殖期におけるゴイサギの採餌生態. *Sci. Rep. Hirosaki Univ.* 38: 129-135.
- 遠藤奈緒子. 2002. ゴイサギの昼と夜. *野鳥* 67 (6): 10-13.
- 遠藤奈緒子・佐原雄二. 2000. ゴイサギ (*Nycticorax nycticorax*) の繁殖期の日周活動と採餌場の利用. *Jpn. J. Ornithol.* 48: 183-196.
- Fasola, M. 1984. Activity rhythm and feeding success of nesting Night Herons *Nycticorax nycticorax*. *Ardea* 72: 217-222.
- Hancock, J., Elliott, H. and Gilmer, R. 1978. *The herons of the world*. Harper & Row Pub. Inc, New York.
- 樋口広芳・森岡弘之・山岸哲 (編). 1996. 『日本動物大百科3: 鳥類』 平凡社, 東京.
- 小杉昭光. 1960. 数種のサギ科の鳥類の食性について. *山階鳥研報* 2:89-98.
- Kotler, B. P. 1991 Factors affecting gerbil foraging behavior and rates of owl predation. *Ecol. Soc. Ame.* 72: 2249-2260.
- 沖縄野鳥研究会. 2002. 『沖縄の野鳥』 新報出版, 沖縄.
- 嵩原建二. 2004. 小浜島の鳥類について. 小浜島総合調査報告書, 沖縄県立博物館: 35-59.
- 山階芳麿. 1941. 『日本の鳥類と其の生態 第2巻』 岩波書店, 東京.

## 小浜島におけるインドクジャクの現状について

田中 聡\*

### Status of an Introduced Population of Common Peafowls *Pavo cristatus* in Kohamajima Island, the Yaeyama Islands

Satoshi TANAKA\*

#### はじめに

両生爬虫類を中心とした小動物の調査を目的に2002年9月に初めて訪れた小浜島において、小島では通常高密度で生息するトカゲ類の個体群密度がきわめて低い一方で(田中, 2004)、大形の外来鳥類であるインドクジャク *Pavo cristatus* (写真1)の密度がきわめて高いことに愕然とした。そこで、島内における分布等の情報だけでも収集するため、当初予定していなかったインドクジャクの生息状況の調査を実施した。その後、インドクジャクが野生化し、定着しているのが小浜島だけに限られたことではなく、その実態がまったく把握されていなかったため、緊急にアンケート調査を実施したところ、対象とした先島諸島の15島のうち、8島でインドクジャクが目撃されており、西表島以外の7島(宮古島・

伊良部島・石垣島・小浜島・黒島・新城島・与那国島)で定着しているらしいことがわかった(田中・髙原, 2003)。

インドクジャクはスリランカおよびインド亜大陸に広く分布する普通種で、食性の幅も広く、植物質のものから小型の哺乳類・爬虫類なども捕食する(del Hoyo et al., 1994; Johnsgard, 1999; Long, 1981)。雄では大きいもので体重が6 kgにもなる(del Hoyo et al., 1994; Johnsgard, 1999; Long, 1981; Madge, 2002)。これだけ大形の鳥類の体を支えるためには、かなりの量の生物が消費されなければならない、在来の生物群集に対する影響はきわめて大きいことが予想される。また、ストックされている牛の飼料までもがインドクジャクによる食害を受けるという人間に対する被害もある(写真2)。先島諸島の島々で現在も増殖を続けているインドク

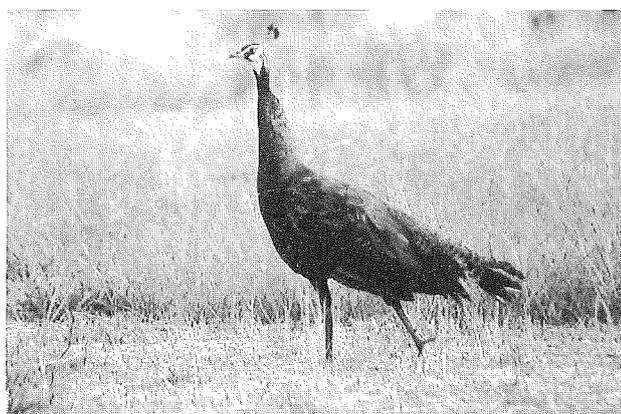


写真1 インドクジャクの雌

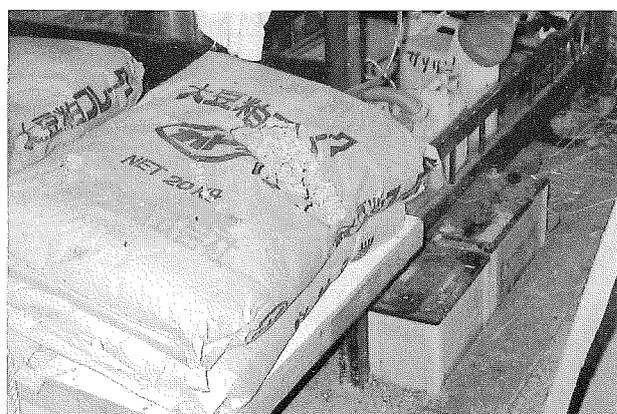


写真2 インドクジャクに破られた飼料袋

※ 〒903-0823 沖縄県那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

\* Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan



図1 小浜島の地形図。インдукジャク調査のため、便宜的に島を5つのエリアに分けた。

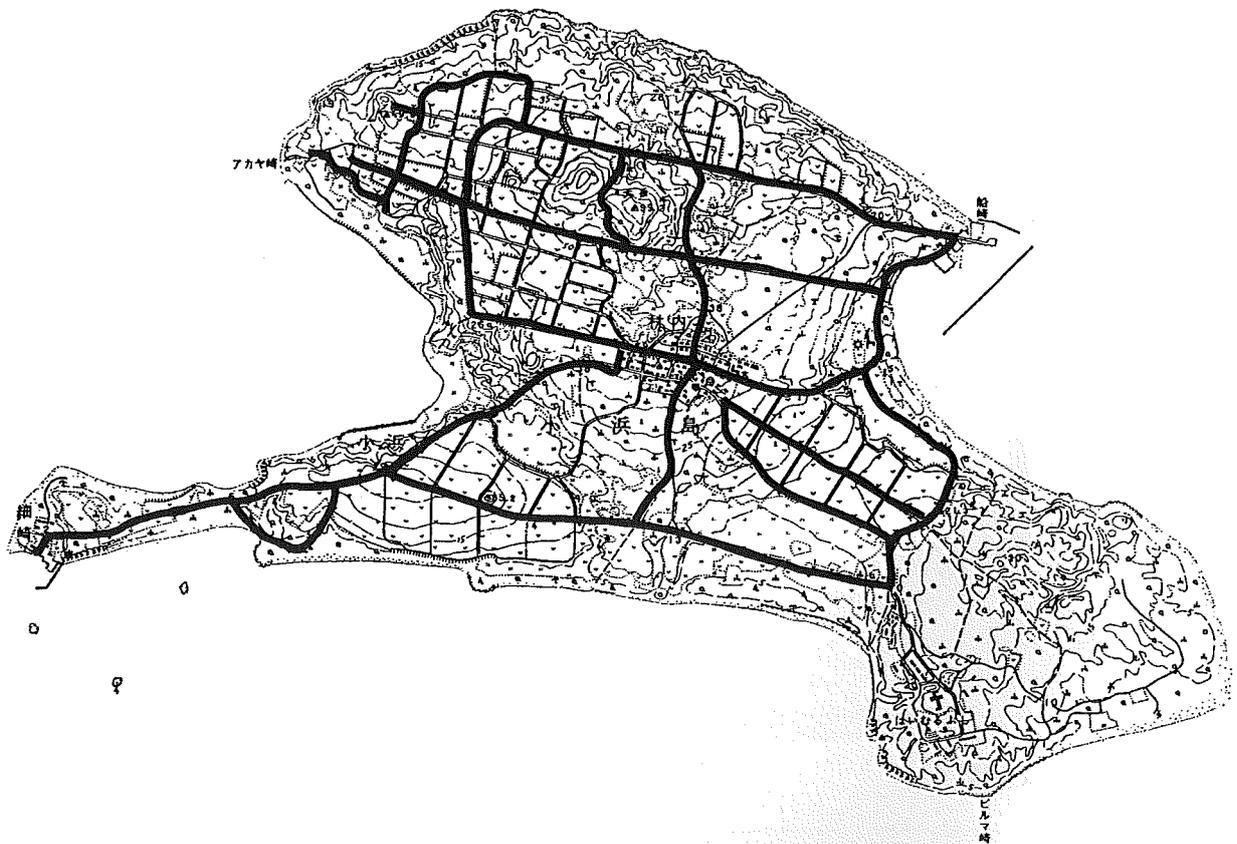


図2 自動車によるセンサスをおこなったセンサスルート（太線）。

表1 エリア別にみたインドクジャクの密度（目撃個体数/㎏）および目撃個体数。（ ）内は目撃個体数。

| エリア<br>面積 (㎏) |      | A<br>2.02 |      | B<br>1.22 |     | C<br>1.93 |     | D<br>1.18 |     | 合計<br>6.35 |      |
|---------------|------|-----------|------|-----------|-----|-----------|-----|-----------|-----|------------|------|
| 2002/9/9      | センサス | 10.4      | (21) | 4.9       | (6) | 0.5       | (1) | 0.8       | (1) | 4.6        | (29) |
|               | その他  | 4.5       | (9)  | 0         | (0) | 2.6       | (5) | 0         | (0) | 2.2        | (14) |
| 2003/7/24     | センサス | 8.4       | (17) | 2.5       | (3) | 0         | (0) | 0         | (0) | 3.2        | (20) |
|               | その他  | 7.4       | (15) | 0         | (0) | 1.0       | (2) | 1.7       | (2) | 3.0        | (19) |

ジャクを早急に駆除することが望ましいが、小浜島以外ではまったく駆除がおこなわれていない。さらに、小浜島をふくめて先島諸島において定着しているインドクジャクについての調査報告はまったくない。そこで本報告では、小浜島での野外調査結果を報告するとともに、リゾート会社が発行している駆除の結果をあわせて若干の考察をおこなう。

### 調査場所と方法

小浜島は八重山諸島の石垣島と西表島の間に位置する面積7.84㎏の小島である。西表島・石垣島・与那国島以外の島々の中ではもっとも起伏に富む地形で、島の最高峰である標高99.4mの大岳をのせるドーム状丘陵、その南東部の丘陵と島の南西部の丘陵の3つの部分に分けられる（小浜小学校記念誌委員会、1997）。開けた場所の大部分はサトウキビ畑や牧場として利用されているが、所々にパッチ状の林が散在しており、危険が近づいた際のクジャクの避難場所となっている。

### 自動車によるセンサス

インドクジャクは警戒心が強く、人の姿を見つくとすぐに藪の中へ走り去ったが、自動車からの観



写真3 開けた場所で活動しているインドクジャク

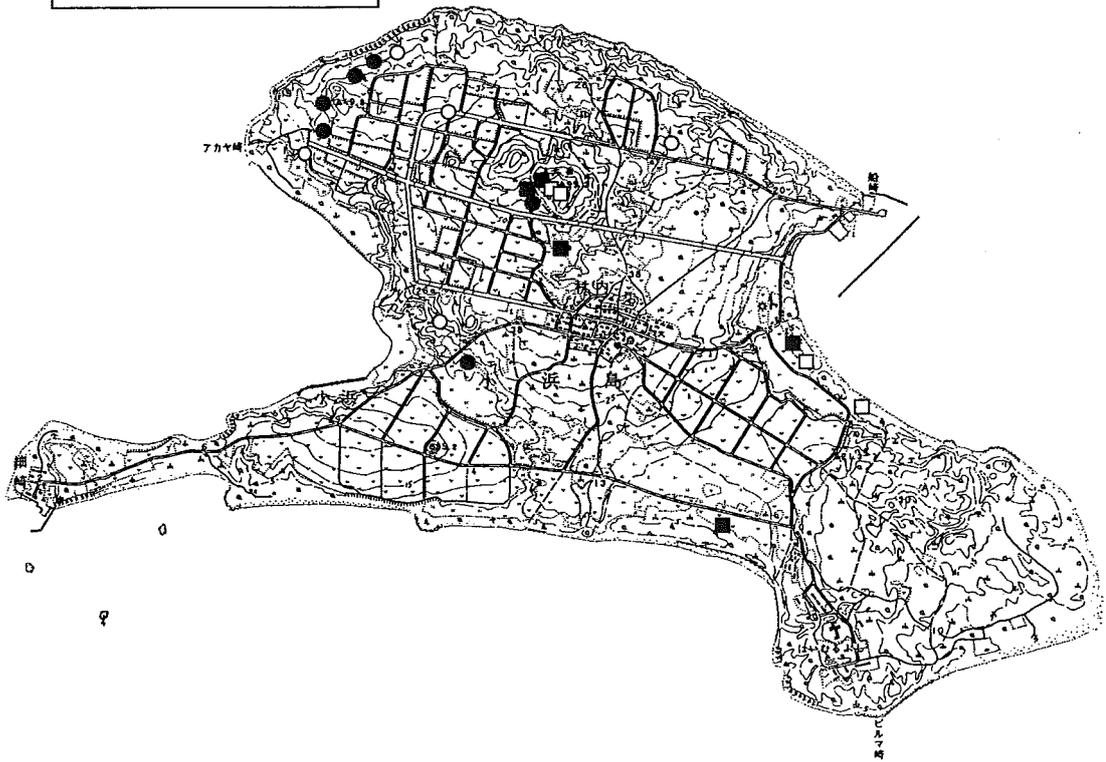
察に対しては比較的寛容であった。島に散在する森林をのぞけば、島内には耕作地・牧草地などの開けた場所が多いが、インドクジャクは朝夕にこのような開けた場所に出現する傾向があった（写真3）。そのため、島内におけるインドクジャクの分布と相対密度を把握するため、2002年9月9日10時10分～13時3分および2003年7月24日6時30分～10時13分（8時36分～9時3分中断）に島の東側の私有地（図1：エリアE）をのぞく島内のほぼ全域で自動車を走らせながらセンサスをおこなった。見通しの良い場所では粗に、見通しの悪い場所では密になるようセンサスルートを設定し（図2）、カバーできる範囲をできるだけ大きくするように努めた。時速5km程度の低速でセンサスルートぞいにインドクジャクの姿を探すのに加えて、見通しの良い場所では自動車を停止させ、双眼鏡（8X）でインドクジャクの姿を探した。センサスをおこなった順序は、おおそエリアA→C→D→Bであった。インドクジャクを目撃した場合、目撃地点を地図上に記録し、単独か群れか、群れである場合は群れ個体数を数えた。性別、発育段階までは記録できなかったが、少なくともセンサスをおこなった時期には尾羽の長い雄はみられなかった。センサス時の天気は2002年9月9日は雨～小雨、2003年7月24日は晴れであった。

2003年のセンサスでは、体の大きさはずっと小さいが、インドクジャク同様雑食性の歩行性鳥類であるシロハラクイナ *Amaurornis phoenicurus* とミフウズラ *Turnix suscitator* の目撃地点も同時に記録した。

### 任意サンプリング

小動物の調査や島内移動の際にインドクジャクを目撃した場合も地図上にその位置と単独か群れか、群れであれば群れ個体数を記録した。

2002年9月調査



2003年7月調査

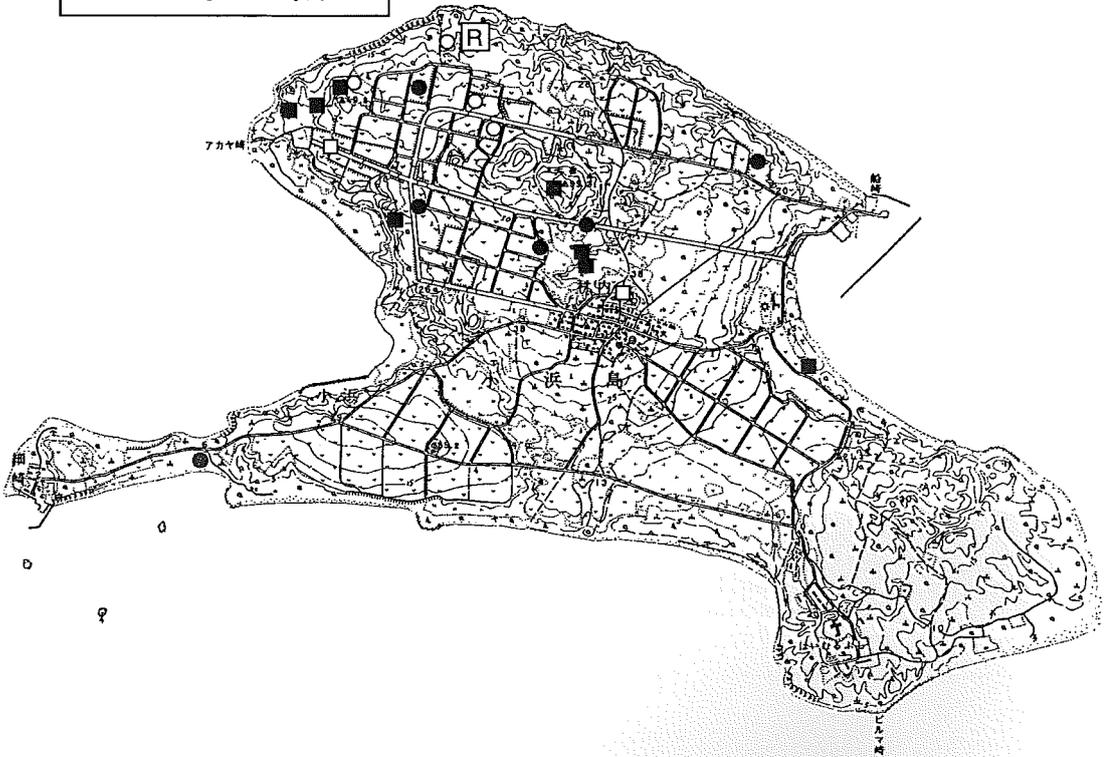


図3 インドクジャクの目撃地点。○：センサスで目撃した単独個体の位置、●：センサスで目撃した群れの位置、□：センサス以外で目撃した単独個体の位置、■：センサス以外で目撃した群れの位置。2003年7月（下図）の[R]はねぐらの位置を示す。

## トラップによる捕獲状況

リゾート会社から提供されたインドクジャクの捕獲記録を整理した。

## 結果

### 島内におけるインドクジャクの分布と目撃数

2002年9月および2003年7月にインドクジャクが目撃された地点を図3に示した。また場所による相対密度の違いを検討するため、エリア別の目撃数を表1に示した。エリアEをのぞく島内全域で目撃した個体数は2002年は29個体、2003年は20個体で、2003年は若干目撃数が少なかった。エリア別にみても、2002年から2003年にかけて目撃個体数は減少した。

表2 目撃されたインドクジャクの群れサイズ。

|           | 群れサイズ (個体数) |    |   |   |   |   |
|-----------|-------------|----|---|---|---|---|
|           | 1           | 2  | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 2002/9/8  | 1           | 0  | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 2002/9/9  | 9           | 2  | 1 | 0 | 2 | 1 |
| 2002/9/10 | 1           | 3  | 1 | 1 | 0 | 0 |
| 合計        | 11          | 5  | 2 | 1 | 2 | 1 |
| 2003/7/23 | 0           | 1  | 0 | 4 | 0 | 0 |
| 2003/7/24 | 4           | 3  | 1 | 3 | 0 | 0 |
| 2003/7/25 | 1           | 2  | 1 | 0 | 1 | 1 |
| 2003/7/26 | 1           | 0  | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 合計        | 6           | 6  | 2 | 7 | 1 | 1 |
| 2年分合計     | 17          | 11 | 4 | 8 | 3 | 2 |



写真4 群れで行動するインドクジャク。大きな1羽とひとまわり小さな若い個体から構成される親子と思われる群れ。

目撃されたインドクジャクの群れサイズを表2に示した。いずれの年も単独の場合がもっとも多かったが、最高6羽の群れがみられ、2002年9月は平均 $2.1 \pm 1.6$  (標準偏差) 個体、2003年7月は $2.4 \pm 1.5$  個体であった。ただ、個体の行動観察に基づいた判定ではないので、群れ個体数を過小に評価した可能性が残る。群れがどのような構成かは明確ではないが、大きな雌 (体色から判定) とそれよりもひとまわり小さな若い個体から構成されている、親子と思われるものもあった (2003年7月25日、写真4)。任意サンプリングの際、2003年に東細崎の西側と仲山御嶽で白色個体が目撃された (写真5)。

ねぐらについては直接確認することができなかったが、住民の情報によりエリアAの広葉樹林内に一カ所あるらしいことがわかった (図3下図のR:大盛, 私信)。定量的なデータはないが、林内でインドクジャクが目撃されたのは、2002年9月9日15:37大岳林道 (1個体)、2003年7月23日15:08仲山御嶽 (2個体で、内1個体は白色)、同日18:10大岳林道ぞい林内 (4個体) と、すべて正午以降であった。

図4に2003年のセンサスにおけるシロハラクイナとミフウズラが目撃地点を示した。シロハラクイナは14個体と比較的頻繁に目撃されたが、ミフウズラは1番しか目撃することができなかった。

### リゾート会社による捕獲状況

小浜島のインドクジャクは、エリアEのリゾート施設が1979年にオープンした際、県外から100個体



写真5 インドクジャクの白色個体。白色個体は、2003年に島内の2カ所で目撃された。

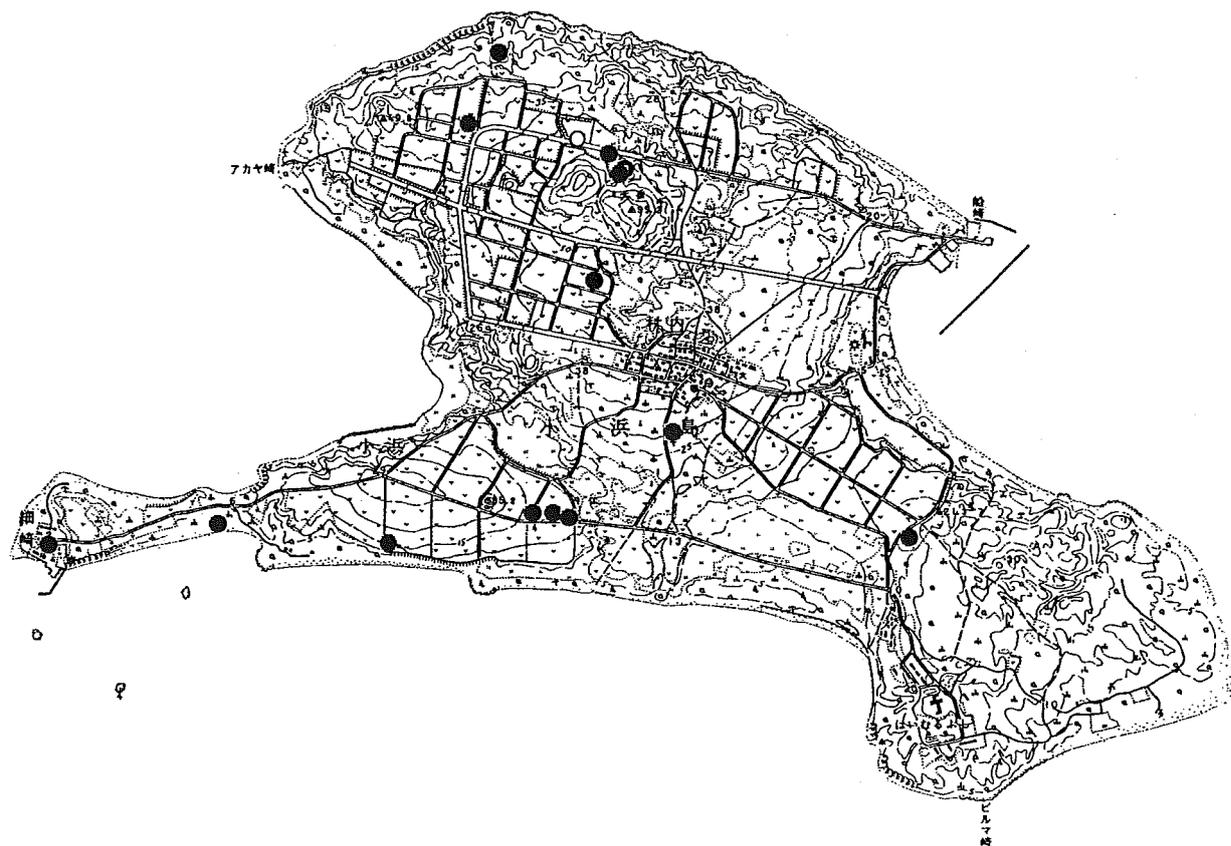


図4 2003年7月のセンサスにおけるシロハラクイナ (●) とミフウズラ (○) の目撃地点。

程度が導入され、敷地内に放し飼いにされていた。そこから敷地外に逸走した個体が増殖したため、20年ほど前から自主的な駆除を始め、毎年20個体程度を駆除していたという。2002年2月からは現在も使用されているトラップ(写真6)を使った方法で計画的に駆除が続けられており、当初5個しか設置されなかったトラップの数も現在は24個にまで増やされている。職員が2日に一度の見回りをおこない、インドクジャクがかりにくい場所から時々設置場所を変えたという。現在およびこれまでにトラップが設置された場所を図5に示した。

2002年2月~2004年2月までにトラップにより捕獲されたインドクジャクの総数は754個体であった。2日に一度の見回りであるので、この期間に設置されたトラップののべ数(1カ月あたりのトラップ設置回数×トラップ数)を概算すると4221個で、トラップ1個・1回あたりの捕獲数は0.18個体となる。

私が調査した2002年9月から2003年7月までの捕獲数を表3に示した。この期間に捕獲された総数は338個体であった。トラップののべ数は1670個であ

るので、トラップ1個・1回あたりの捕獲数は0.20個体となる。

エリアごとの捕獲数は、7~154と大きな幅があった。しかし、これはエリアごとの密度を反映しているというよりも、設置したトラップ数が違うためであり(トラップ数と捕獲数との相関： $r^2=0.797$ ;  $p=0.0415$ )、捕獲数のばらつきの約8割が設置したトラップののべ数で説明された。そこでトラップ1個・1回あたりの平均捕獲数を計算したところ、0.1~0.3個体となり、エリアC、Eが多く、エリアA、Dが少ないという結果となった。

### 考 察

今回の調査で、小浜島においてインドクジャクが集落等の人の往来の多い場所をのぞいて、ほぼ全域に分布していることがわかった。原産地では、インドクジャクは早朝、見晴らしの良い高い樹上のねぐらから移動し、開けた場所で採餌をおこなう(Johnsgard, 1999; Madge, 2002)。牧草地など

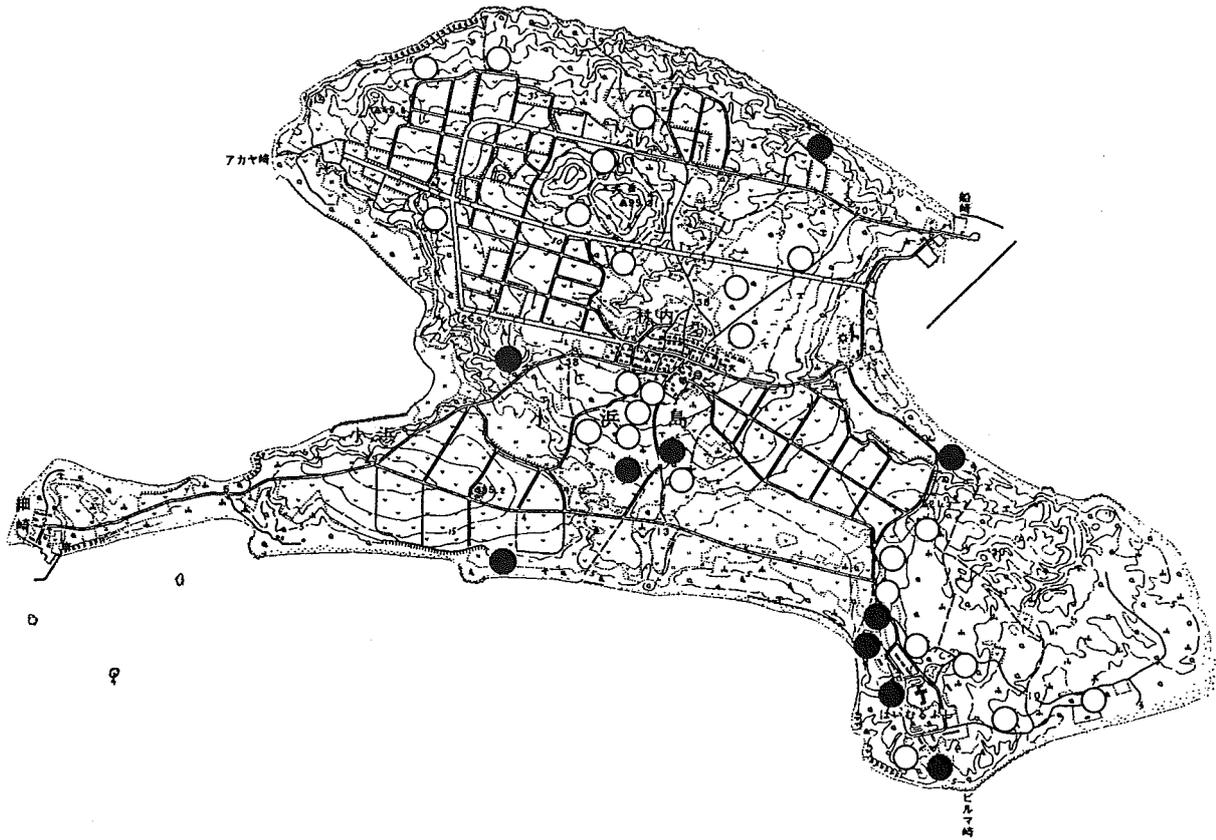


図5 リゾート会社が2004年2月時点で設置している24個のトラップの位置 (○) とそれら以外にこれまでにトラップが設置されたことのある位置 (●)。

の開けた場所が多い上、ねぐらや避難場所になる林が散在する小浜島は、インドクジャクにとっては格好の環境にみえる。

野外におけるインドクジャクの寿命は不明だが、成熟に3年も要することから (Johnsgard, 1999)、寿命も短くはないだろう。そのことをふまえると、8 km<sup>2</sup>足らずの島から2年間で750個体を越えるイン

ドクジャクが捕獲されたことは驚きであり、小浜島のインドクジャク個体群がほぼ飽和状態に達していたという印象を受ける。厳密な調査に基づいたものではないが、インド南部では個体群密度は1 haあたり1個体程度という報告がある (Johnsgard, 1999)。小浜島では、少なくとも、そのレベルは超えていたものと思われる。インドクジャクの天敵として、原産地ではハイイロマングース *Herpestes edwardsi*、ジャングルキャット *Felis chaus*、ヒョウ *Panthera pardus*、ベンガルトラ *Panthera tigris* などの食肉類が分布している (Johnsgard, 1999)。しかし、イリオモテヤマネコ *Felis iriomotensis* が分布する西表島をのぞけば、小浜島をはじめ先島諸島にはインドクジャクにとって強力な捕食者になりそうな動物はいない。餌はあるが天敵不在の下、インドクジャクは着実に増殖を続けている。



写真6 インドクジャクを捕獲するためのトラップ。左側の部屋にはおとりの個体が1~3個体収容されており、右側の部屋には餌が置かれている。

琉球列島のいくつかの島において、ニホンイタチ *Mustela itatsi* の捕食が原因と思われるトカゲ類の激減が知られている (当山, 1985; 沖縄県環境保

表3. トラップにより捕獲されたインドクジャクの個体数。トラップ数：そのエリアに設置されているトラップの数、個体数/トラップ/回（トラップ1個・1回あたりの捕獲数）：1個のトラップを1回（2日間設置）設置した場合の捕獲数、トラップのべ数：トラップ数×1カ月に設置された回数。

| 年    | 月  | エリアA (1.98km <sup>2</sup> ) |       |         |            | エリアB (1.14km <sup>2</sup> ) |       |         |            | エリアC (1.91km <sup>2</sup> ) |       |         |            |      |     |     |
|------|----|-----------------------------|-------|---------|------------|-----------------------------|-------|---------|------------|-----------------------------|-------|---------|------------|------|-----|-----|
|      |    | 捕獲数                         | トラップ数 | トラップのべ数 | 個体数/トラップ/回 | 捕獲数                         | トラップ数 | トラップのべ数 | 個体数/トラップ/回 | 捕獲数                         | トラップ数 | トラップのべ数 | 個体数/トラップ/回 |      |     |     |
| 2002 | 9  | 4                           | 2     | 30      | 1          | 0.1                         | 3     | 2       | 30         | 1.8                         | 0.1   | 6       | 1          | 15   | 0.5 | 0.4 |
|      | 10 | 0                           | 2     | 30      | 1          | 0                           | 4     | 2       | 30         | 1.8                         | 0.1   | 4       | 1          | 15   | 0.5 | 0.3 |
|      | 11 | 21                          | 3     | 45      | 1.5        | 0.5                         | 13    | 3       | 45         | 2.6                         | 0.3   | 10      | 1          | 15   | 0.5 | 0.7 |
|      | 12 | 8                           | 3     | 45      | 1.5        | 0.2                         | 17    | 3       | 45         | 2.6                         | 0.4   | 7       | 1          | 15   | 0.5 | 0.5 |
| 2003 | 1  | 6                           | 3     | 45      | 1.5        | 0.1                         | 10    | 3       | 45         | 2.6                         | 0.2   | 11      | 1          | 15   | 0.5 | 0.7 |
|      | 2  | 14                          | 3     | 42      | 1.5        | 0.3                         | 13    | 3       | 42         | 2.6                         | 0.3   | 8       | 1          | 14   | 0.5 | 0.6 |
|      | 3  | 0                           | 3     | 45      | 1.5        | 0                           | 1     | 3       | 45         | 2.6                         | 0     | 0       | 1          | 15   | 0.5 | 0   |
|      | 4  | 2                           | 3     | 45      | 1.5        | 0                           | 0     | 3       | 45         | 2.6                         | 0     | 0       | 1          | 15   | 0.5 | 0   |
|      | 5  | 9                           | 3     | 45      | 1.5        | 0.2                         | 2     | 3       | 45         | 2.6                         | 0     | 2       | 1          | 15   | 0.5 | 0.1 |
|      | 6  | 3                           | 3     | 45      | 1.5        | 0.1                         | 1     | 3       | 45         | 2.6                         | 0     | 0       | 1          | 15   | 0.5 | 0   |
|      | 7  | 2                           | 3     | 45      | 1.5        | 0                           | 9     | 3       | 45         | 2.6                         | 0.2   | 0       | 1          | 15   | 0.5 | 0   |
| 総数   |    | 65                          | 29    | 432     |            |                             | 70    | 29      | 432        |                             |       | 42      | 10         | 149  |     |     |
| 最小値  |    | 0                           | 2     | 30      | 1          | 0                           | 0     | 2       | 30         | 1.8                         | 0     | 0       | 1          | 14   | 0.5 | 0   |
| 最大値  |    | 21                          | 3     | 45      | 1.5        | 0.5                         | 17    | 3       | 45         | 2.6                         | 0.4   | 11      | 1          | 15   | 0.5 | 0.7 |
| 平均値  |    | 6.5                         | 2.9   | 43.2    | 1.5        | 0.1                         | 7     | 2.9     | 43.2       | 2.5                         | 0.2   | 4.2     | 1          | 14.9 | 0.5 | 0.3 |
| 標準偏差 |    | 6.8                         | 0.3   | 4.7     | 0.2        | 0.2                         | 6.1   | 0.3     | 4.7        | 0.3                         | 0.1   | 4.4     | 0          | 0.3  | 0   | 0.3 |

| 年    | 月  | エリアD (1.14km <sup>2</sup> ) |       |         |            | エリアE (1.68km <sup>2</sup> ) |       |         |            | 全域 (7.84km <sup>2</sup> ) |       |         |            |      |     |     |
|------|----|-----------------------------|-------|---------|------------|-----------------------------|-------|---------|------------|---------------------------|-------|---------|------------|------|-----|-----|
|      |    | 捕獲数                         | トラップ数 | トラップのべ数 | 個体数/トラップ/回 | 捕獲数                         | トラップ数 | トラップのべ数 | 個体数/トラップ/回 | 捕獲数                       | トラップ数 | トラップのべ数 | 個体数/トラップ/回 |      |     |     |
| 2002 | 9  |                             | 0     |         |            |                             | 0     |         |            |                           | 13    | 5       | 75         | 0.6  | 0.2 |     |
|      | 10 |                             | 0     |         |            |                             | 0     |         |            |                           | 8     | 5       | 75         | 0.6  | 0.1 |     |
|      | 11 |                             | 0     |         |            | 25                          | 3     | 45      | 1.8        | 0.6                       | 69    | 10      | 150        | 1.3  | 0.5 |     |
|      | 12 |                             | 0     |         |            | 19                          | 3     | 45      | 1.8        | 0.4                       | 51    | 10      | 150        | 1.3  | 0.3 |     |
| 2003 | 1  |                             | 0     |         |            | 20                          | 3     | 45      | 1.8        | 0.4                       | 47    | 10      | 150        | 1.3  | 0.3 |     |
|      | 2  | 3                           | 1     | 14      | 0.9        | 0.2                         | 11    | 2       | 28         | 1.2                       | 0.4   | 49      | 10         | 140  | 1.3 | 0.4 |
|      | 3  | 2                           | 1     | 15      | 0.9        | 0.1                         | 2     | 2       | 30         | 1.2                       | 0.1   | 5       | 10         | 150  | 1.3 | 0   |
|      | 4  | 0                           | 1     | 15      | 0.9        | 0                           | 9     | 4       | 60         | 2.4                       | 0.2   | 11      | 12         | 180  | 1.5 | 0.1 |
|      | 5  | 0                           | 1     | 15      | 0.9        | 0                           | 22    | 7       | 105        | 4.2                       | 0.2   | 35      | 15         | 225  | 1.9 | 0.2 |
|      | 6  | 0                           | 1     | 15      | 0.9        | 0                           | 29    | 7       | 105        | 4.2                       | 0.3   | 33      | 15         | 225  | 1.9 | 0.1 |
|      | 7  | 2                           | 1     | 15      | 0.9        | 0.1                         | 17    | 7       | 105        | 4.2                       | 0.2   | 30      | 15         | 225  | 1.9 | 0.1 |
| 総数   |    | 7                           | 6     | 89      |            | 154                         | 38    | 568     |            |                           | 338   | 112     | 1670       |      |     |     |
| 最小値  |    | 0                           | 0     | 0       | 0          | 0                           | 0     | 0       | 0          | 0.1                       | 5     | 5       | 75         | 0.6  | 0   |     |
| 最大値  |    | 3                           | 1     | 15      | 0.9        | 0.2                         | 29    | 7       | 105        | 4.2                       | 0.6   | 69      | 15         | 225  | 1.9 | 0.5 |
| 平均値  |    | 1.167                       | 0.6   | 8.9     | 0.5        | 0.1                         | 17.11 | 3.8     | 56.8       | 2.3                       | 0.3   | 33.8    | 11.2       | 167  | 1.4 | 0.2 |
| 標準偏差 |    | 1.3                         | 0.5   | 7.7     | 0.5        | 0.1                         | 8.4   | 2.4     | 36.8       | 1.5                       | 0.2   | 21      | 3.2        | 47.9 | 0.4 | 0.1 |

健部自然保護課, 1996)。小浜島にも1966年11月～1968年1月にネズミ駆除を目的として207個体のニホンイタチが導入された (Uchida, 1969)。しかし、理由は不明だが、小浜島では導入後1～2年でニホンイタチは姿を消したらしい (野原, 私信)。今回の調査でも、農作業中の住民からも、現在もニホンイタチが島に生息しているという証言は得られなかった。そうすると、小浜島におけるミフウズラの少なさは同じ餌資源をめぐり、インドクジャクに圧迫された結果である可能性は否定できず、トカゲ類の少なさはインドクジャクによる捕食の可能性が高い (田中, 2004)。トカゲ類などの小動物について、インドクジャクが島に導入される前のデータはないが、体が大きく、よく目立つキシノウエトカゲなどは昔は頻繁に見られたという (大盛, 私信)。

センサスによって得られた相対密度のデータは、北西部のエリアAの密度が特に高いことを示している。しかしトラップによる捕獲結果をみると、センサスとは異なる傾向を示している。たとえば、トラップ1個・1回あたりの捕獲個体数をみると、エリアAはむしろ少なかった。センサスでの目撃数とトラップによる捕獲個体数のこのような不一致はいったい何に起因するのであろうか。

インドクジャクは比較的定住性が高いとされているが (del Hoyo et al., 1994; Johnsgard, 1999; Long, 1981)、日々の行動圏は明らかではない。しかし、オーストラリアに導入された個体群では、時々、数km離れたところでも個体が記録されたということから (del Hoyo et al., 1994)、もしその程度の距離を日々移動するのであれば、インドクジャクにとって小浜島はかなり小さいことになる。そうであれば、目撃個体数はエリアごとの密度を反映しているというよりも、単に、インドクジャクの活動の一面を見てのみにすぎないということになる。

目撃数と捕獲数の不一致が生じた理由として、より可能性が高いのは、調査結果がインドクジャクの日周活動に影響されたということである。原産地において、インドクジャクは日中の多くの時間は低木林内で過ごすらしい (Johnsgard, 1999; Madge, 2002)。今回の観察でも、自動車によるセンサスでは目撃できないような林内でインドクジャクが目撃されたのはいずれも午後であった。小浜島のインド

クジャクの活動パターンも同様であるとすれば、開始から終了まで3時間ほど要した今回のセンサスでは、センサスをおこなう時間が遅くなるエリアほど個体数が過小評価されていた可能性がある。今後、各島において、相対密度を評価する際には、早朝に1時間程度で調査できる範囲に区分し、複数の調査者がそれぞれの範囲で並行してセンサスを実施するという方法が望ましい。インドクジャクは大型で、鳥類の観察に熟練していなくてもそれほど大きな見落としはないため、調査員確保も困難ではないと思われる。さらに、すみ場所利用についてのデータは効率的な捕獲計画を立てる上で不可欠である。インドクジャクは、特定のねぐらを毎日利用するらしいため (Johnsgard, 1999)、より効率的なトラップ設置計画を立てるためには、ねぐらを中心とした個体 (群れ) の1日の活動・活動範囲やすみ場所利用を個体追跡サンプリング法 (マーティン・ペイトソン, 1990) などにより明らかにすることが有効であると思われる。

2003年は2002年よりも目撃個体数が少なかった。2002年の調査は10時10分から午後1時までであり、早朝に調査をおこなった2003年よりは個体数が過小評価されているかもしれない。そうであれば、インドクジャクの個体数は今回の調査結果以上に減少していたかもしれない。この減少の理由は明らかにリゾート会社による駆除の結果であろう。小浜島のインドクジャクのように、施設から逸走した動物が定着・増殖している例はほかにも多いが、沖縄県内で自主的に駆除をおこなっている例を私は知らない。責任の自覚のもと、自主的に駆除を続けてきたことは評価される。おそらく今後、インドクジャクの個体数が減少するにつれ、捕獲率は悪くなっていくに違いない。しかしそれは個体数の減少を反映していることと受け止め、駆除を思いとどまることにはいけない。インドクジャクという動物は、体が大きく、それほど隠蔽的でないため、完全に駆除することは十分可能である。たとえ捕獲率が悪くなくても、撲滅するまで駆除作業を続けなければ結果的に間引きをただけということになってしまう。近い将来、小浜島から完全に駆除されることを期待したい。

島内において、インドクジャクは牛の飼料も餌として利用している。飼料を餌として利用できること

によって、インドクジャクがトラップにかかりにくくなる可能性は否定できない。鳥の在来の自然を残すためには、住民の理解と協力が不可欠であるということも課題としてあげておきたい。

### 謝 辞

株式会社はいむるぶしの渥美真次・佐藤実の両氏は駆除状況についての資料の使用を許され、また、さまざまな情報を提供された。文献については、山階鳥類研究所および太田英利・当山昌直・川上和人の各氏にお世話になった。また、竹富町役場農林水産課野原佳人氏・小浜島在住の大盛肇氏にはいろいろな情報をいただいた。

以上の方々に厚くお礼申し上げる。

### 文 献

沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996.

『沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物』沖縄県環境保護部自然保護課.

del Hoyo, J., A. Elliott and J. Sargatal (eds.).  
1994. *Handbook of the Birds of the World*.  
Vol. 2. Lynx Edicions, Barcelona.

Johnsgard, P. A. 1999. *The Pheasants of the World: Biology and Natural History*. Smithsonian Press, Washington, D. C.

記念誌委員会(編). 1997. 『創立百周年記念誌  
うふたき』竹富町立小浜小学校.

Long, J. L. 1981. *Introduced Birds of the World*. David & Charles, London.

Madge, S. 2002. *Pheasants, Partridges, and Grouse: A Guide to the Pheasants, Partridges, Quails, Grouse, Guineafowl, Button-quails and Sandgrouse of the World*. Princeton Univ. Press, Princeton.

マーティン, P., P. ベイトソン(粕谷英一・近雅博・細馬宏通 訳). 1990. 『行動研究入門』東海大学出版会, 東京.

田中聡・嵩原建二. 2003. 先島諸島における野生化したインドクジャクの分布と現状について. 沖縄県立博物館紀要 (29):19-24.

田中聡. 2004. 小浜島における両生爬虫類の現状について. 小浜島総合調査報告書, 沖縄県立博物館: 21-33.

当山昌直. 1985. 1. 琉球の両生類・爬虫類—現状と問題—. 南西諸島とその自然保護 そのII. 世界野生生物基金日本委員会科学委員会(編), (財)世界野生生物基金日本委員会, pp. 54-72.

Uchida, T. A. 1969. Rat-control procedures on the Pacific islands, with special reference to the efficiency of biological control agents. II. *J. Fac. Agric. Kyushu Univ.* 15:355-385.

## 小浜島におけるヤエヤマオオコウモリ *Pteropus dasymallus yayeyamae*の餌植物について

嵩原 健二\*

Food Plants of the Yaeyama Flying Fox, *Pteropus dasymallus yayeyamae*,  
in Kohamajima Island, the Yaeyama Islands

Kenji TAKEHARA\*

### はじめに

南西諸島にはクビワオオコウモリ *Pteropus dasymallus* に属する4亜種 (エラブオオコウモリ *P. d. dasymallus*、ダイトウオオコウモリ *P. d. daitoensis*、オレイオオコウモリ *P. d. inopinatus*、ヤエヤマオオコウモリ *P. d. yayeyamae*) のオオコウモリが地域ごとに分かれて生息している (阿部ら 1994; 太田, 1992)。こうしたクビワオオコウモリ類の食性については、口永良部島やトカラ列島に生息するエラブオオコウモリについて船越 (1989) の先駆的な研究が見られ、大東諸島に生息するダイトウオオコウモリについては、池原 (1973)、下謝名 (1978) などの報告の他、最近では横田ら (1992 a・b)、伊礼 (1998) などによる餌植物とその植物季節に関する研究などが見られる。

沖縄諸島を中心に生息する亜種オレイオオコウモリについては、丸山 (1992) によって飼育下における餌植物の報告がみられるが、野外においての知見は、池原ら (1981)、高良 (1975)、横田ら (1992)、嵩原 (1994a・b, 1995, 1998)、中本 (2003) など数多くの報告が見られる。さらに、南西諸島の南部の宮古・八重山諸島に生息する亜種ヤエヤマオオコウモリについては、高良 (1969, 1975, 1981) によってフクギ、イヌビワ、ヤエヤマヤシなど10種の餌植物が報告され、サトウキビやパイナップルなどの農作物に食害があることが指摘されている。また、

伊澤・金城 (1998) は宮古諸島に生息する本種の餌植物として、フトモモ、テリハボクなど6種を報告しているが、他の亜種に比較して食性についての知見は少ないように思える。

最近、嵩原 (1995) や宮城・嵩原 (2000) は、南西諸島に生息するクビワオオコウモリ4亜種の餌植物に関する知見をまとめ、特に宮城・嵩原 (2000) は59種にのぼる餌植物を報告している。

筆者は小浜島に生息する亜種ヤエヤマオオコウモリ (写真1) が利用する餌植物について、断片的ではあるが若干の知見を得たので報告する。本報告がヤエヤマオオコウモリの餌植物を把握する一助になれば幸いである。

### 調査地及び調査方法

調査地である小浜島は、八重山諸島の西表島に隣接する広さ7.84km<sup>2</sup>の島である (図1)。ヤエヤマオオコウモリの主な休息地となる森林地域は、島で最も高い大岳 (99.4m) や「なかやまおん」などの御嶽林、石長田のマングローブ林を主体とした海岸林などに残存している。

本調査は総合調査の一環として実施された島全域を対象とした鳥類調査 (2002/2/25, 5/29, 2003/3/6) の際に、本亜種の採餌行動の直接観察や餌植物を採食した後に樹下に落下するペリットや果実に残る食痕等に着目し、直接観察により調査を実施し

※ 〒903-0823 沖縄県那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

\* Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

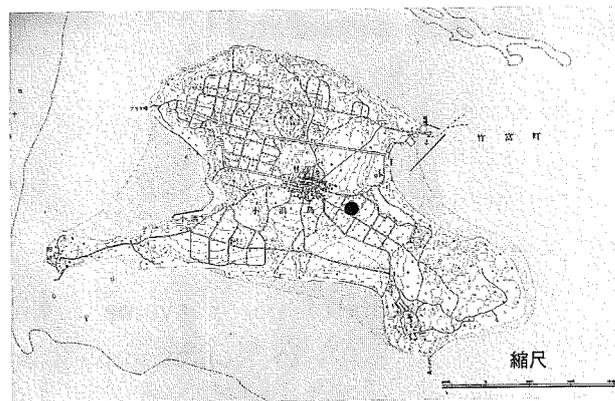
た。なお、1995年9月に実施した筆者による独自の調査資料の他、鳥類調査の際に住民や学校等での餌植物に関する聞き取り調査資料も本報告に加味した。

## 結果と考察

調査の結果、オオバイヌビワ、ギランイヌビワ、ピロウ（写真2）、サトウキビ、シマグワ、テリハボク（写真3）、モモタマナ、デイゴなど8種の利用が確認された（表1）。特にサトウキビについては、2003年3月6日の調査時に製糖工場南東側の農耕地で（図1）、収穫中途のサトウキビ畑の一角に多数の食痕が確認され、その食害が追認された（写真4, 5）。採食部位は収穫のため梢頭部が切断された茎上部の部分で、その部分は鋭利な歯でかみ砕かれて毛羽立った食痕を呈していた。

本亜種のサトウキビの被食（食害）については、高良（1981）や沖縄タイムス社の記事（1981年3月27日付朝刊）などによって、石垣島吉原での採食例が知られている。小浜島で観察されたサトウキビの被食部位の観察状況は、高良（1981）の記録に酷似していたことから、今回の観察はその指摘を裏付けるもので、石垣島以外では初めての報告になるものと思われる。

さらに2002年2月25日の調査で、本亜種によってピロウの花茎が利用された。本亜種ではヤシ科であるヤエヤマヤシやコミノクロツグの採食が知られ（高良, 1975）、ピロウ類の花茎の採食は、横田ら（1992b）によって、ダイトウオオコモリがダイトウピロウを好んで採食することが知られている。し



（国土地理院発行1/25000地形図改変）

図1 ヤエヤマオオコウモリによるサトウキビ採食確認地（凡例：確認地●）

かしながら、それ以外の亜種ではその採食は確認されていない。したがって、本亜種はダイトウオオコウモリと同様にピロウ類を利用することが確認された。

他にオバイヌビワやギランイヌビワなどのクワ科の植物利用が確認された。これらクワ科植物はオオコウモリ類に好んで採食されることが知られていることから、本調査では採食が未確認のガジュマルやイヌビワ、ハマイヌビワ、カジノキなどが利用されている可能性は高いものと思われる。

## 調査課題

今回の餌植物調査は、鳥類調査のため島を3回訪れた際に実施したものであり、かなり見落としがあるものと思われる。

宮城・嵩原（2000）は南西諸島に生息するクビワ

表1 小浜島で確認されたヤエヤマオオコウモリの餌植物

| 種名      | 採食部位 | 採食確認時期 | 備考  |
|---------|------|--------|-----|
| オオバイヌビワ | 果実   | 2月     |     |
| ギランイヌビワ | 果実   | 9月     |     |
| ピロウ     | 花茎   | 2月     | 屋敷内 |
| サトウキビ   | 茎    | 2月     | 栽培  |
| シマグワ    | 果実   | 9月     |     |
| モモタマナ   | 果実   | 2月     | 植栽  |
| テリハボク   | 果実   | 2月     | 植栽  |
| デイゴ     | 花    | 3月     | 植栽  |

オオコウモリ類の餌植物が59種におよぶことを報告しているが、その餌植物リスト中には小浜島に分布する植物がいくつかあり、今後こうした調査を継続することで、本亜種が利用する餌植物の種類はさらに増加するものと思われる。また、餌植物の採食期間等についてもさらに新たな知見が加えられるであろう。

## 引用文献

- 阿部永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明. 1994. 日本の哺乳類. 東海大学出版会.
- 船越公威. 1989. エラブオオコウモリの食性について. 自然愛護. 15:2-7.
- 池原貞雄. 1973. 大東島の陸産脊椎動物. 大東島天然記念物特別調査報告, 文化庁, pp. 52-63.
- 池原貞雄・安部琢哉・知念盛俊・与那城義春・千木良芳範・日越国昭・三井興治. 1981. 北部山地の特殊脊椎動物, ケナガネズミ実態調査報告書. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第22集, 沖縄県教育委員会, pp. 51-57.
- 伊礼青勝. 1998. ダイトウオオコウモリ *Pteropus dasymallus daitoensis* の南大東島における野外観察. 学会記事. 沖縄生物学会第35回大会プログラム・講演要旨. 沖縄生物学会.
- 中本敦. 2003. オリイオオコウモリ *Pteropus dasymallus inopinatus* の採餌戦略・餌資源の季節変化の影響. 琉球大学大学院理工学研究科修士論文. 53pp.
- 丸山勝彦. 1992. 飼育条件下におけるオリイオオコウモリの生態的研究. ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書, 沖縄県教育委員会, pp. 257-269.
- 宮城朝章・髙原健二. 2000. 末吉公園の植物相とオオコウモリの餌植物. 沖縄県立博物館紀要 (26) : 47-84.
- 太田英利. 1992. ダイトウオオコウモリを含むクビワオオコウモリの分類学的・生物地理学的研究の歴史と問題点. ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書, 沖縄県教育委員会, pp. 91-98.
- 下謝名松榮. 1978. 南・北大東島および沖縄南部地域の洞穴動物相. 沖縄県洞穴実態調査報 I. 沖縄県教育委員会, pp. 75-111.
- 髙原健二. 1994a. 宜野湾市伊佐、大山、宇地泊周辺地域の鳥類と哺乳類. 沖縄県立博物館紀要 (20) : 67-97.
- 髙原健二. 1994b. 沖縄県立博物館周辺地域におけるオリイオオコウモリの食性と餌植物の季節変化について (予報). 博友. (8):11-25. 沖縄県立博物館友の会.
- 髙原健二. 1995. 南西諸島に生息するオオコウモリ類の餌植物について. 博友. (9):73-79. 沖縄県立博物館友の会.
- 高良鉄夫. 1969. 琉球の自然と風物. 琉球文教図書.
- 高良鉄夫. 1975. 動物. 自然保護のためのおきなわの自然. 沖縄県, pp. 115-121.
- 高良鉄夫. 1981. 於茂登岳および周辺地域の動物相. 沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告 於茂登岳及びその周辺地域. 沖縄県, pp. 143-159.
- 横田昌嗣・宮城康一・西平守孝・髙原健二・宮城邦治. 1992a. 北大東島におけるダイトウオオコウモリの餌植物相と食痕の地理的分布からみた場所利用. ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書. 沖縄県教育委員会, pp. 161-182.
- 横田昌嗣・宮城康一・丸山勝彦. 1992b. 南・北大東島の植物季節—ダイトウオオコウモリの餌植物を中心に—. ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書. 沖縄県教育委員会, pp. 183-190.

図版 I



写真1 ヤエヤマオオコウモリ



写真2 ビロウの食痕とペリット



写真3 テリハボクの食痕



写真4 サトウキビ食痕(1)



写真5 サトウキビ食痕(2)

## 小浜島の遺跡

仲 座 久 宜\*

### The Sites of Kohamajima Island

Hisayoshi NAKAZA\*

#### はじめに

小浜島では、これまでに実施された遺跡分布調査等により、地籍上は字小浜に属する嘉弥真島の遺跡及び、近年になって新たに確認された遺跡を含めると、現時点で9ヶ所の遺跡が確認されている(図1・表1)。これらの遺跡は、1994(平成6)年に沖縄県教育委員会が行った分布調査<sup>註1</sup>以降、その所在や状況等について確認が行われていない。

県内では、本土復帰を境としてリゾート開発や公共工事を中心とした開発行為により、環境は大きく改変されることになる。小浜島もその例にもれず開発が行われ、このことは遺跡周辺についても同様な状況が推測できた。今回の調査では、時間の制約上、発掘及び測量調査等を実施することは困難なため、従前行われた分布調査の追調査による現状確認及び、新たに発見された遺跡の状況把握を行い、さらに踏査時に採集した遺物を紹介することで、遺跡の性格

及び年代特定の助けとしたい。調査の期間は平成14年度・15年度の2次にわたり、それぞれ3日間の日程で実施した。なお、八重山諸島の時代区分については、県内外の研究者によりいくつかの編年<sup>註2</sup>が提示されているが、ここでは早稲田大学八重山学術調査団による、いわゆる早稲田編年<sup>註2</sup>を用いる。

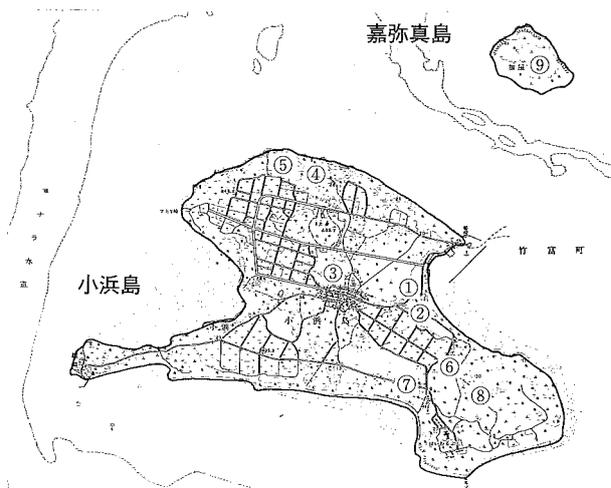


図1 小浜島の遺跡分布(表1参照)

表1 小浜島の遺跡一覧

| No | 遺跡名        | 早稲田編年    | 遺構   | 主な遺物          | 現況        |
|----|------------|----------|------|---------------|-----------|
| 1  | トゥマール貝塚    | 第I期      | —    | 石斧、焼石、貝類      | サトウキビ畑    |
| 2  | ニシダ原遺跡     | 第IV期     | —    | 陶磁器、土器、貝類     | 畑         |
| 3  | 小浜旧部落遺跡    | 第IV期     | —    | 陶磁器           | サトウキビ畑    |
| 4  | ウテイスク山遺跡   | 第III期    | 石積み  | 土器、陶磁器、石器、貝製品 | 山林        |
| 5  | ユンドウレースク遺跡 | 第III期    | 石積み  | 土器、貝類         | 山林        |
| 6  | フルロウ山遺跡    | 第III期    | 石積み  | 陶磁器、土器        | 山林        |
| 7  | 南風田原遺跡     | 第I期      | —    | 焼石、貝類         | サトウキビ畑    |
| 8  | イハマムル遺跡    | 第III期    | 石列ほか | 土器、陶磁器        | 山林(ゴルフ場内) |
| 9  | 嘉弥真遺跡      | 第III・IV期 | 石積み  | 土器、陶磁器        | 原野・山林     |

※ 〒903-0823 沖縄県那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

\* Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

## 小浜島の考古学研究史

八重山諸島の考古学研究は、南西諸島の中でも早い時期から行われる。ここでは、その中でも小浜島の調査・研究について、戦前・戦後に大別し、さらに調査ごとに区分けして紹介することで研究史としたい。

### 戦前の調査

八重山諸島の考古学研究については、西表島や石垣島の遺跡を皮切りに、田代安定や笹森儀助らにより明治期に始まることになるが、その時点では、中央の書物に遺跡の発見や表面採集による資料について報告される程度にとどまっていた。

その中で小浜島の考古資料について初めて言及されたのは、1894（明治27）年に『東京人類学会雑誌』に掲載された鳥居龍蔵による「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」<sup>註3</sup>である。この中で鳥居は、西國男により石垣島、西表島、黒島、新城島、小浜島、波照間島からもたらされた石斧から、石垣島2点、西表島1点、波照間島1点の磨製石斧を図入りで紹介し、沖縄にも石器時代の遺跡が存在することを確信した。その後鳥居は、1903（明治36）年頃に文教大学で言語学の講義を聴講していた伊波普猷と出会い、1904（明治37）年に、伊波が沖縄帰省の際に同行して人類学調査を行う。その際鳥居は、本島各地の史跡等をめぐりながら、伊波貝塚、萩堂貝塚等の遺跡を発見し、その土器の特徴から、沖縄の土器が九州の縄文文化に属するものとして位置付けた<sup>註4</sup>。

鳥居はその後、小浜島には上陸していないが、宮古・八重山にも赴いている。石垣島の川平貝塚では発掘調査を行い、出土した土器の特徴が沖縄本島の土器と著しく異なることから、その系統を異にすることを指摘した上で、側面に把手を有するその土器に「外耳土器」の名称を与えた<sup>註5</sup>。これらの見解は、今日の学界でも有効なものであり、短期間の調査により、その地域の文化的特質を的確に捉えることができる鳥居の観察眼の正確さが窺える。

このように、小浜島の考古資料については、一部であるが八重山諸島の先史文化として早くから認識されるようになる。鳥居の調査後、八重山の考古学的調査はしばらく行われず、次に文献上に小浜島の

名称が現れるのは、1940（昭和15）年に三宅宗悦がまとめた「南島の先史時代」<sup>註6</sup>であるが、掲載資料は先に鳥居が論じた磨製石斧である。

このような状況で戦前の小浜島に関する調査については、県外の研究者による断片的なものでしかなく、本格的な調査が行われることはなかった。

### 戦後の調査

第二次世界大戦により、沖縄は甚大な被害を被った。それは多くの文化財にしても同様で、遺跡は戦場へと変わり、これまで収集されてきた考古資料を含む貴重な文化財資料も失われてしまった。しかし、このような状況下でも八重山の考古学研究の勢いは衰えることなく、むしろ戦前より盛んに行われるようになる。特に多和田真淳、高宮廣衛、大濱永巨ら県出身者による地道な調査・研究の功績は大きく、その後の八重山考古学研究に大きな影響を与えた。

ここでは、1945（昭和20）～1974（昭和49）年を学術目的の調査が主体であったことから、「戦後の調査Ⅰ」とし、1975（昭和50）年～2001（平成13）年は、教育委員会等が行った開発時の事前協議資料の作成を目的とした調査が中心であることから、「戦後の調査Ⅱ」として前後に分けて紹介する。

#### ・戦後の調査Ⅰ（1945～1974年）

##### （1）多和田真淳による調査

沖縄では、1945（昭和20）年の第二次世界大戦で壊滅的なダメージを受けたことにより、しばらくの間考古学的調査が行われた痕跡はない。しかし、沖縄考古学の先駆者である多和田真淳氏らによる精力的な調査により、1954（昭和29）年頃から県内各地において多くの遺跡が発見され、その分布状況や性格が報告されるようになる。

小浜島に関しては、多和田氏が1955（昭和30）年に訪れた際、フルロウ山遺跡、南風原（南風田原）遺跡、小浜旧部落遺跡を発見し、「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」<sup>註7</sup>の中で紹介している。

当時、八重山先史文化の流れについてはまだ模索の段階であったが、1960（昭和35）年、早稲田大学八重山学術調査団により「無土器→有土器」とする見解が提示される<sup>註8</sup>。しかし、多和田氏は前論考の中で、この早稲田大学による見解に先行して「有土

器→無土器→有土器」の見解を指摘し、その後の編年研究への糸口を開いている。

## (2) ジョージH. ケアによる調査

アメリカの人類学者であるジョージH. ケア氏により、琉球政府立博物館とホノルル美術館合同の琉球文化財調査が、1961(昭和36)年～1963(昭和38)年に行われた。ケア氏は琉球列島遺跡調査として県内各地を調査する中、小浜島へも足を運んでいる。小浜島での資料採集地は南風田原遺跡(Haebana Site)、仲宗根村(Nakasone Village)、ニシダバル(Nishidabaru)、道路(Road Side)、ヤサカ遺跡(Yasaka Site)の5ヶ所<sup>註9</sup>である。採集資料は土器や陶磁器が中心であるが、資料の詳細な内訳についてはこれまで公表されていなかった。そこで本稿では、ケア氏が採集した小浜島採集資料の内訳をまとめ、後に紹介する。

## (3) 琉球大学歴史研究会による調査

1966(昭和41)年9月、琉球大学歴史研究会は石垣島及び小浜島の調査を行い、石垣島で10ヶ所、小浜島で5ヶ所の遺跡を踏査している。この中で報告されている小浜島の遺跡で、ウテイスク山遺跡以外の4遺跡は現集落周辺にあたることから、小浜旧部落遺跡と関連する遺跡と考えられる。踏査時に採集した土器片の集計、計測、分類が実測図とともに『歴史研究 第3号』<sup>註10</sup>の中で報告されている。

## (4) 琉球政府立博物館による調査

1967(昭和42)年5月、琉球政府立博物館の玉城盛勝氏は、八重山諸島考古学調査の際に小浜島を訪れ、泊遺跡(トゥマール貝塚)から採集した6点の石斧を『琉球政府立博物館館報』<sup>註11</sup>に紹介している。この中で玉城氏は、泊遺跡のほかに小浜旧部落遺跡及びフルロウ山遺跡の位置を明示しているが、その詳細については記述していない。

## (5) 沖縄大学学生文化協会による調査

沖縄大学の沖縄学生文化協会は、黒島、波照間島、西表島に続いて、1974(昭和49)年に小浜島の村落の変遷過程について考古学的調査を行い、その成果を『郷土』<sup>註12</sup>にまとめている。調査は、現集落をA

～Cの3ブロックに分け、さらに旧集落と関連すると考えられる御嶽周辺を調査することにより、地点ごとに採集した遺物の構成から集落の移動・拡張の変遷を考察しようと試みた。しかし、海岸周辺に散在していたヤサキ村、クァンテ村、カニク村等の集落が明和の大津波以降に移動し、現集落にまとまったとする伝承<sup>註13</sup>を裏付ける結果は得られていない。

## ・戦後の調査Ⅱ(1975年～2001年)

### (1) 遺跡詳細分布調査

沖縄県教育委員会は、本土復帰を境に増加の一途をたどる大規模開発から、県内に所在する埋蔵文化財を適切に保護することを目的に、1977(昭和52)年に県内全域を対象とした遺跡分布調査報告書を刊行した<sup>註14</sup>。この中で小浜島の遺跡は4遺跡が掲載されている。その後、竹富町、与那国町に地域を限定した詳細分布調査を行い、1980(昭和55)年に『竹富町・与那国町の遺跡—詳細分布調査報告書—』を刊行する<sup>註15</sup>。この中で小浜島では8ヶ所の遺跡が報告されており、前回の分布調査結果に加え新たに4遺跡を追加している。

### (2) グスク分布調査

沖縄県教育委員会では、県内に所在するグスク及びグスク時代の遺跡の実態調査を行い、グスク分布調査報告書をまとめている。報告書は、Ⅰ. 沖縄本島及び周辺離島、Ⅱ. 宮古諸島、Ⅲ. 八重山諸島の3分冊となっており、その内容はグスクや関連する古島、元島等の集落跡をも網羅したものである。八重山諸島編は1994(平成6)年に刊行され、その中で小浜島のグスク時代相当期の遺跡は6遺跡が報告されている<sup>註16</sup>。その内ユンドゥレスク遺跡及びウテイスク山遺跡の石積みの概略図を紹介している。

### (3) 開発に係る調査

復帰後、県内各地で大規模開発が行われるようになり、遺跡の緊急発掘調査も増加の傾向にあった。小浜島も例外でなく、大型リゾート施設の建設や農地改良、採石等の開発の波に乗せられることになるが、幸いなことに遺跡地内での開発は行われておらず、現時点で緊急調査の実績はない。

しかし、2001(平成13)年1月、島の南東部で行

われていたゴルフ場造成の際に、新たな遺跡が発見された。竹富町教育委員会は開発業者と遺跡の取り扱いについて協議した結果、ゴルフ場のコースレイアウトを変更することにより、現状のまま保存することで双方合意した。ここでは開発業者の協力のもと、町教育委員会の文化財担当職員が迅速に対応したことで破壊は免れたが、発見が遅れていたらその所在すら知られることなく、造成されてゴルフコースへと変わっていたことであろう。遺跡名は当初、隣接する御嶽の名称からアールムティ遺跡としていたが、小浜在の松原浩氏により、遺跡の丘陵が古くからイハマムルと称されていることを教示いただいたことから、イハマムル遺跡を命名し、現在もゴルフコース内に鎮座している。遺跡の概要については次項で記す。

### 遺跡の概要

今回の調査では、これまでに実施されてきた分布調査等の成果をもとに遺跡を踏査し、現況を再確認することに主眼を置いた。また、新たに発見された遺跡については、関係する方々から発見に至る経緯及び発見時の状況等を聴取しながら踏査を行い、その性格究明に努めた。ここでは、遺跡ごとにその概

要を説明するとともに、今踏査で採集した資料と合わせ、過去に収集された資料も一部図示し解説する。

#### ① トゥマール貝塚・・・・・・・・・・第I期

小浜港の南側海岸近くに位置する無土器の遺跡である(写真1)。1967(昭和42)年に琉球政府立博物館の玉城盛勝氏が八重山諸島の考古学調査の際に発見した遺跡で、玉城氏はその際に6点の石斧を採集し、『館報』<sup>註17</sup>の中で実測図とともに紹介している(図2)。続いて沖縄大学の沖縄学生文化協会が1974(昭和49)年に実施した調査では<sup>註18</sup>、多量の貝類とともに土器片が採取されているほか、大濱永亘氏も数十点の石斧とともに、貝製品等を採集し

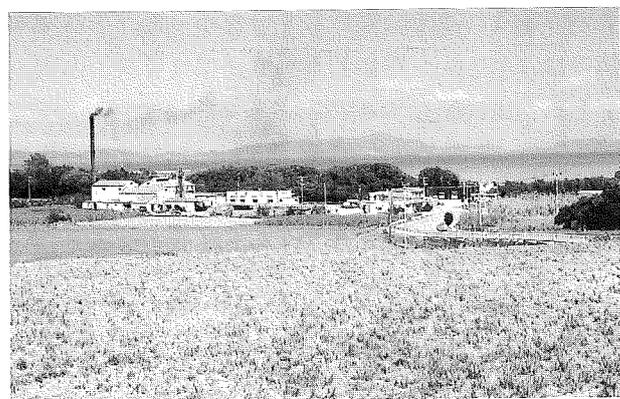


写真1 トゥマール貝塚遠景

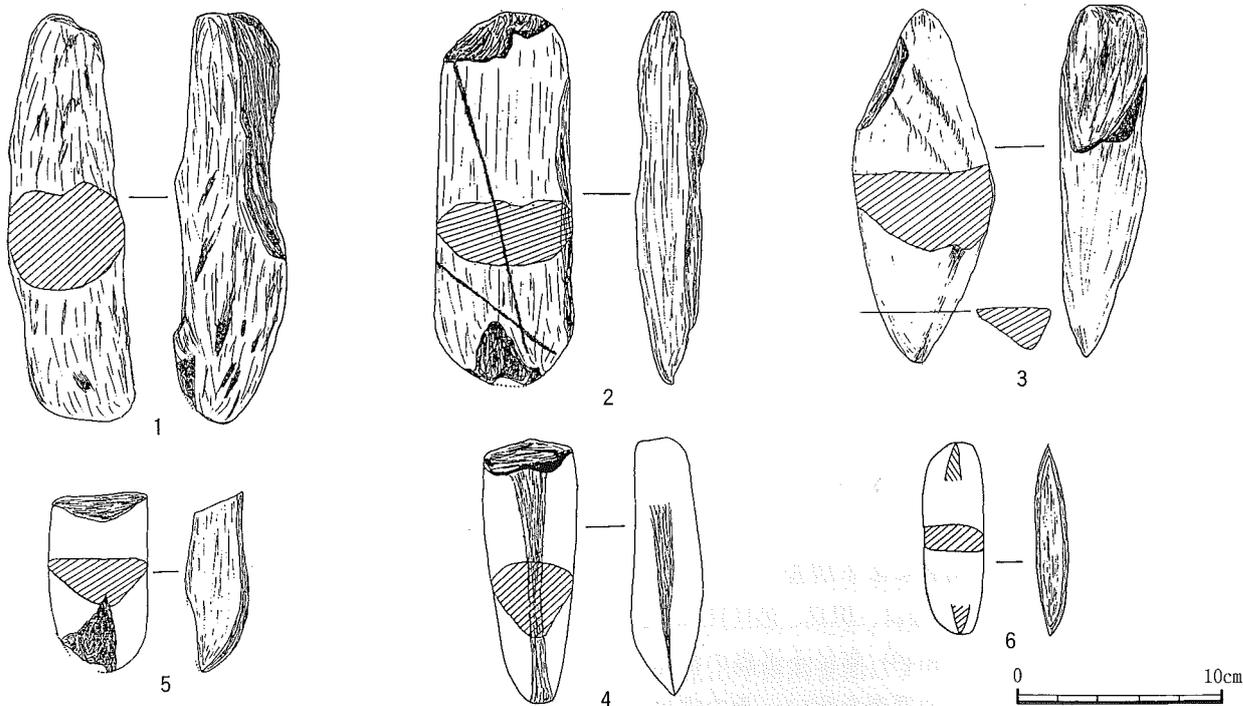


図2 トゥマール貝塚採集石斧(『琉球政府立博物館館報』1969年度版より)

ている<sup>註19</sup>。しかし、本遺跡は基本的に無土器の遺跡であることから、沖縄大学が採集した土器等の資料は、南側に近接するニシンダ原遺跡から採集された可能性がある。

現在はサトウキビ畑になっており、その灰色砂の地表には耕作により多くの貝類及び焼石が露呈している状況が見られた。今踏査では石器等の人工遺物は確認できず、シャコガイやサラサバティ等の大型貝類の破片を中心に、ほかに石材が含まれている状況が確認できた。なお、本遺跡では製糖工場建設時に石器や人骨が出土した<sup>註20</sup>という情報もあるが、その際の詳細な状況及び遺物の所在は不明である。

②ニシンダ原遺跡・・・・・・・・・・第IV期

トゥマール貝塚の南側海岸線に接する近世の遺跡である(写真2)。多和田氏が小浜島で調査を行った1955(昭和30)年12月にはすでに知られており、本遺跡を旧部落と関連させて「新しいものようである」<sup>註21</sup>としている。その後ジョージH. ケア氏によって土器片が採集されている<sup>註22</sup>。

今回の調査では陶磁器片、土器片、自然遺物を採集した。遺物は観光バス会社の南側畑地、オオハマボウなど海岸林の内側に多く見られ、その散布状況から海岸林内部にも広がっている様子が窺える(写真3)。灰褐色砂の畑には、シャコガイ、イモガイ、サラサバティなどの大型貝類が白く目立ち、焼石をわずかながら伴っている。人工遺物の量は少なく、土器細片が多い。表面採集した資料から、土器口縁部1点、褐釉陶器口縁部1点を紹介する。

図3の1は土器の口縁部で、口径は不明。わずかに残る口唇断面は舌状に尖り、ゆるやかに外反する。器厚は6mmと薄手で、小型の壺になるものと思われる。焼成は良好で、外面には横位に擦痕が見られる。器色は橙褐色を呈し、胎土に微砂粒及び貝片を含む。

図3の2は褐釉陶器壺の口縁部で、推定による口径は18cm。口唇上面は平たく鐔状にのび、口唇上部からS字を描くように胴部へ移行する。口縁内面は、蓋受けと思われる隆帯を経て、鋭角に胴部へと至る。釉色はつや消しの茶色で、口唇外側及び口縁脇のくぼみ、口縁内面下部には釉溜りにより、周囲より濃色を呈している。釉全体に細かい貫入が見られ、口唇角の部分では貫入に沿って剥落している。



写真2 ニシンダ原遺跡遠景

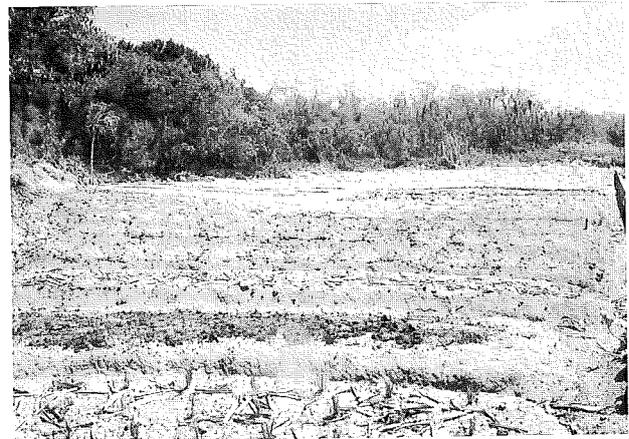


写真3 ニシンダ原遺跡近景

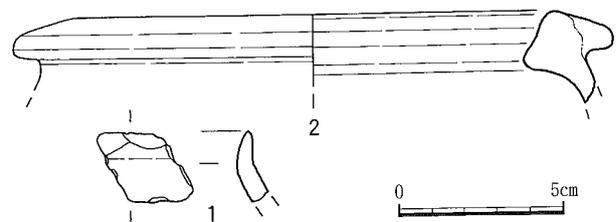


図3 ニシンダ原遺跡採集遺物

③小浜旧部落遺跡・・・・・・・・・・第IV期

小浜旧部落遺跡は、多和田氏により「この遺跡は津波のため180年前に西方台地に移動した旧部落跡である」<sup>註23</sup>と報告されている近世の遺跡である。津波とは1771(明和8)年に起こった明和の津波を指す。現小浜集落の北西側一帯、クバントウと呼ばれる地域が集落跡とされ、県教育委員会が行った分布調査<sup>註24</sup>では、沖縄産陶器をはじめとした近世の陶磁器片及び土器片が採集されているが、今回の調査では確認できなかった。現在はサトウキビ畑が広



写真4 小浜旧部落遺跡遠景

がっており、その中に仲山御嶽、佐久伊御嶽、嘉保根御嶽が点在している(写真4)。畑の形状から区画整理が行われた形跡はないが、一部に盛土されている状況が見られたことから、遺跡は埋められている可能性が考えられる。

④ウティスク山遺跡・・・・・・・・・・第Ⅲ期

ウティスク山遺跡は島の北側中央部に位置する遺跡である。遺跡周辺は、復帰後に行われた大規模なリゾート開発により、コテージ等の建物が多く建てられ賑わったが、現在は廃業し、物件は売別荘へと変わっている。また、遺跡一帯は良質の石灰岩の産地でもあることから、一時は採石の危機にもさらされたが、幸いにも破壊されず、地形は往時の状態を保っている(写真5)。

リゾート施設内の通路から、急勾配の深い森を分け入ると、頂上付近に琉球石灰岩の石積み配した平場が数枚確認できる。石積みは崩壊が進み、かなり拡散しているが、その延びやつながりについては地形の状態等を勘案することで読みとることができた。その区画等については、別項に縄張図が掲載されているので参照していただきたい。平場の一角には土器片が多量に見られ、ほかに石器片及び貝製品を採集することができた。採集資料の内訳は、土器片46点、石器1点、骨製品1点、貝製品1点である。その内11点を報告する。

図4の1は外反する土器の口縁部で口径は不明。口唇断面は隅丸の台形で、口縁断面は緩やかな「く」の字状を呈する。外面下部は1段稜を付けて盛り上がり、胴部へほぼ垂直に落ちる。器厚は口唇部で5

mm、口縁下部で8mmを測る。色調は淡茶褐色で焼成は良好。胎土には微砂粒がわずかに見られる。

図4の2は皿状に浅くなると思われる土器の口縁部で、口径は不明。口唇断面は破片下部より厚手で丸く、わずかに内湾する。器厚は最大で5mmを測る。焼成は良好。器色は茶褐色で表面に石灰分が付着し、胎土には微砂粒を含む。図4の3は外傾する土器の口縁部で、口径は不明。口縁断面は口唇部が厚めに成形され、内側で舌状に尖る。焼成は良好で器厚は6mm。胎土には微砂粒が見られ、裏面に石灰分が付く。

図4の4は土器の外耳部分である。断面観は「ト」の字状で、外耳部分は上面が外側に向けて傾斜し、下面はほぼ水平で器壁から約17mmのびる。上面観は中央及び両端に弱い角を有する形状で、表面には指頭押圧及び指ナデと思われる調整痕が見られる。正面からの形状は浅いかまぼこ型である。器厚は8mm内外で、焼成は良好。色調は器壁が内外ともに暗褐色で、断面は茶褐色を呈する。胎土には微砂粒が入り、表面に石灰分が貼り付く。

図4の5も外耳の資料である。外耳の先端部はわずかに欠けているが、その断面は外側に薄くなりつつ、器壁からほぼ水平に約1cmのびる。器厚は破片上部が7mm、下部が11mmとなっている。焼成良好で色調は表が赤褐色、裏面が黒褐色化しており、石灰分が付く。胎土には貝の碎片が多く見られる。

図4の6～8は土器の底部資料である。断面は内外面とも底面からゆるやかに丸く胴部へと立ち上がる資料がほとんどであるが、6の資料は底面から直に立ち上がり、稜を付けて外傾しながら胴部へと至



写真5 ウティスク山遺跡遠景



図4 ウテイスク山遺跡採集遺物

る形状をしている。底径はいずれも不明で、器厚は6mm~11mm。器型は概ね鍋型になるものと思われる。焼成はいずれも良好で、外面が赤褐色、内面が黒褐色を呈する点で共通している。胎土には微砂粒を含み、表面に石灰分が付着している。

図4の9はイモガイ科の製品である。側面部に幅0.7mmほどの太さで、断面が「V」字状の溝が縦方向にやや不規則に刻まれていることから製品としたが、用途については不明である。輪郭は風化及び摩耗が進んでいることから、本来の形状は窺い知れないが、現状のサイズは、縦が約29mm、横が約40mmの方形を呈している。

図4の10はメジロザメ椎骨製品である。長径18mm、厚さ7mm。中央部の薄くなった箇所径2mmの穴が開けられている。

図4の11は石器の半欠品である。砂岩製で、半月形の縁辺に敲打痕が見られる。縦50mm、横56mm、厚さ19mmである。

#### ⑤ユンドゥレスク遺跡・・・・・・・・・・第三期

ユンドゥレスク遺跡は、島の北側海岸線に突出した琉球石灰岩台地上に位置する遺跡である。周辺は、島の人でもあまり立ち入らないような深い森に包まれているため、位置を特定するのに難渋したが、竹富町教育委員会教育長の黒島精耕氏らの案内により辿り着くことができた(写真6)。

深い森の内部は、八重山でグスクを意味する「スク」を名乗るのに相応しく、累々と琉球石灰岩の野面積みによる石積みが積み、いくつもの区画に分けられていた。中でも、入口部に小規模だが馬出しと見られる区画が明瞭に残されていることから、保存の良好さを確信した(写真7)。

数枚の平場を経て内部へ進むと、中央部に香炉が配置された広めの平場があり、そこから海側に構築された数枚のテラスを越えると海へ通ずる。海岸は遠浅の岩礁で砂浜はほとんど見られず、北東側の対岸には嘉弥真島が望める。海に面する岩礁には、波により深く抉られたノッチと、崖に沿って積まれた石積みとが、海からの侵入者を硬く拒んでいる様子が窺えた。石積みは高いところで2m以上あり、それが幾重にも重なっている(写真8)。

今踏査では深い森林に阻まれ、全体を把握するに

は至らなかったが、石積みのつながりから複雑な構造を有する遺跡であることが理解できた。遺跡の縄張りについては、別項を参照していただきたい。今踏査で遺物の確認はできなかったが、以前の分布調査の際、土器片と貝類が採取されている。



写真6 ユンドゥレスク遺跡遠景(北岸から)



写真7 ユンドゥレスク遺跡内石積み(入口)



写真8 ユンドゥレスク遺跡内石積み(内部)

⑥フルロウ山遺跡・・・・・・・・・・・・・第三期

多和田真淳氏により1955（昭和30）年12月21日に発見された遺跡である。多和田氏はその状況を「小浜島の東海岸西平田原の奥にある岡で岡の上が住居跡で珊瑚礁崖下から外耳土器、青磁破片が得られる」と記している<sup>註25</sup>。

遺跡は島の南東部に突き出した半島のくびれ部分に位置する。標高約32mのほぼ南北にのびる丘陵北側を占めており、遺跡へのルートは北側海岸から砂丘を越え、防潮林の中を歩いていく（写真9）。丘陵の麓から斜面にかけ、鬱蒼とした竹林が覆っており、容易に入り込めない。この竹は地元で「カラタギ」と呼ばれ、八重山古典芸能で奏でられる横笛の原材料になるという<sup>註26</sup>。木々をかき分けながら崖を数メートル登ると、内部は数枚の平場によって区分けされ、その縁辺に琉球石灰岩の野面積みによる石積みが廻らされている。北側は急峻な崖で、木々の間からは海が望めるが、南側は緩やかな傾斜で竹林が埋め尽くしている。このような地形から、南側の石積みは北側の石積みに比べて高さ、幅ともに強固に作られているようである。

石積みに用いられる石は、最大でも人頭大程度のもので、現状はかなり崩れて拡散しているが、大方の輪郭は確認できた。平場は3枚ほどが確認でき、最高所の楕円形をした平場からつながるように、北及び東側に次の平場が延びている状況である。東側の斜面には、虎口様の形態を有する場所が確認できたが、深い竹林の壁と石積みの崩壊により詳細は判然としない。

遺物は最高所に位置する平場の北側周辺に比較的多く見られ、そこから流れ落ちたと思われるものが、わずかに斜面や崖下に見られた。採集遺物は11点で、その内訳は土器片が8点、褐釉陶器片2点、白磁片1点である。ここでは、その内の5点を図化し、紹介する。

図5の1は白磁碗の口縁部である。ピロースクタイプ碗<sup>註27</sup>と称されるもので、図上復元による口径は14.4cmを測る。口唇端はやや内傾し、断面は舌状に尖る。器厚は口唇で5mm、胴下部で9mmを測る。釉の色調は外面が半透明の青みを帯びた黄色で、内面は半透明の薄黄色である。いずれも細かい貫入が密に見られる。胎土中には間隙が多く見られ、色調

は黄色みを帯びており、陶器様で焼きは良好と言えない。口唇外面に弱い稜をつける。破片下部に無釉の部分が見られる。ろくろ痕が均一でなく、成形及び焼成時に生じたと思われるあばたや傷が目立つ。内面は、口唇端から12mm下に細く浅い沈線が1条廻らされているほかは無文である。釉は外面より厚く、クリアで均質である。年代は13世紀末～14世紀中頃に位置付けられている。

図5の2は褐釉陶器壺の頸部片である。破片下部には1条の隆帯が廻らされている。釉は外面につや消しの暗褐色釉が施され、隆帯の上下で明茶褐色に発色している。裏面は横位のろくろ痕とともに、釉が薄くなでられ、赤褐色を呈している。器厚は最大で10mmと薄手であることから、小型の壺になるものと思われる。

図5の3は土器の口縁部で口径は不明。傾きはやや内傾するものと見られ、器型は鉢型になると思われる。口唇断面は丸く、その直下よりやや厚手に成形されている。口唇の厚さは7mm、口縁下は5mmと薄く、胴部へ移行するにつれ、膨らむものと思われる。整形は丁寧で、焼成は良好。胎土に貝の碎片をわずかに含む。色調は口唇部が茶褐色で、ほかは煤により黒褐色化している。図5の4も土器口縁部で口径は不明。わずかに内湾する資料で、口唇断面は丸く、厚さ7mmと少々厚手に成形されている。胎土には貝の碎片が多く含まれ、焼成は良好。器色は茶褐色で、表面に白い石灰分が付着する。

図5の5は土器底部で、図上復元による底径は、15.4cmを測る。小型の鍋型土器で焼成は良好。底面から胴部にかけての角度はほぼ直角。外面角は粗く



写真9 フルロウ山遺跡遠景

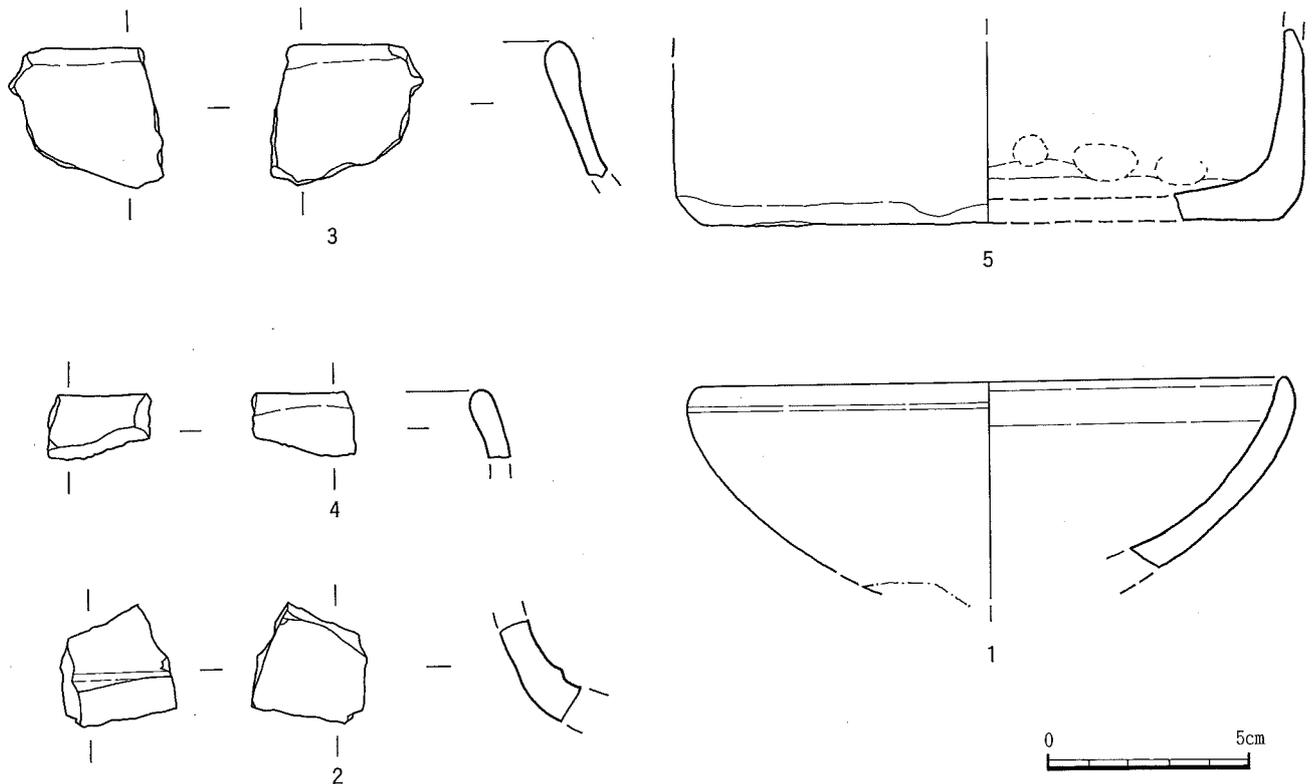


図5 フルロウ山遺跡採集遺物

面取りがされ、内面角には指頭痕が横位に3ヶ所確認できる。器厚は胴部が5mm、底部が8mm、角の部分が11mmと全体的に薄手である。胎土には粗い貝の碎片が多量に含まれ、外面に浮き出ているため凹凸があり、煤で黒褐色化した上に、石灰分が付着している。内面は茶褐色で、横位にナデによる調整痕が全面に見られる。

⑦南風田原（ハインダバル）遺跡……第Ⅰ期

多和田真淳氏により1955（昭和30）年に発見された遺跡である。遺跡の名称は、発見時には「小浜島南風原遺跡」<sup>註28</sup>と称されていたが、後に正式な地名に倣って南風田原遺跡に修正している<sup>註29</sup>。報告の中で多和田氏は「南海岸田地に夥しく貝が散布しているが新しいもの」としている<sup>註30</sup>。

現在はサトウキビ畑になっており、砂地の畑にはシャコガイやサラサバテイ等の大型貝類が広範囲に散布しているため、面白く見える（写真10）。中には焼けて灰色に変色した石や貝類の破片なども見られることから、焼石による調理法を行っていた可能性が考えられる。人工遺物の確認はできなかった。



写真10 南風田原遺跡遠景

⑧イハマムル遺跡……第Ⅲ期

イハマムル遺跡は2001（平成13）年にゴルフ場造成のための測量時に発見された遺跡で、竹富町教育委員会文化財担当者の迅速な対応及び、開発業者の協力により、開発計画を変更し保存されることになった遺跡である。

遺跡は島の南東部、フルロウ山遺跡の南東側に位置する。開発以前は湿地帯に囲まれた小高い丘であったが、現在はゴルフコース内に山林の状態が残されている（写真11）。

標高約30mの北西から南東方向にのびる楕円形をした丘は、現地で古くからイハマムルと呼ばれ、武士が暮らしていたとする伝承<sup>註31</sup>が残る場所であり、丘を意味するムルの周辺一帯は、水田が広がっていたという。丘は現在、低木で覆われている。その中に分け入ると、数枚の平場が設けられ、斜面には等高線状に土留めと見られる石列が配された状況が確認できた。内部には竹が密生しているため、詳細な範囲や形状をうかがい知ることはできないが、人為的に手加えられているのは確かである。発見の発端となった重機により開けられた測量用の通路に、遺物包含層の断面が露出しており、そこから流れ出たと思われる土器片24点を採取した。その内、特徴的な3点を図化したので報告する。

図6の1は土器の口縁部で口径は不明。口縁端は直口で、20mmほど下ると外側に折れ、厚みを増しながら胴部へと移行していく。焼成は悪く、触れると粉が手に付く。口唇断面は丸い。表面は凹凸が多く、茶褐色を呈する。裏面は煤けて黒褐色化しており、断面は橙褐色を呈する。胎土には微砂粒を含んでいる。器厚は口唇で6mm、破片下部で10mmを測る。

図6の2も土器口縁部である。口唇は外反し、頸部で緩やかに折れて胴部へと広がるタイプの土器と思われる。焼成は良好だが、器面はあばた状で、断面にも隙間が見られる。口唇断面は丸く、器厚は最大12mmである。胎土には砂粒がわずかに見られる。

図6の3は土器の頸部片である。口唇は欠損して

いるが直上にあると見られる。かなり弧状に湾曲することと、器厚が約6mmと薄手であることから、小型の壺になると思われる。色調は全面茶褐色を呈し、胎土には微砂粒がわずかに混入している。



写真11 イハマムル遺跡遠景

⑨嘉弥真遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・第Ⅲ・Ⅳ期

嘉弥真島は、小浜島の北北東約1.6kmに位置する周囲約2kmの島である。現在は栈橋やゲストルームが設けられ、夏場は無人島ツアーと称した定期便により、多くの観光客が訪れている（写真12）。

島は従来無人島であったが、近世になると小浜島の島民が通って田畑を耕作したり、牧場として使用していたとされる<sup>註32</sup>。また、島の周辺は船の避難場所として良好な海域であったことから、当時の八重山在番は治安維持等を理由に、1751（乾隆16）年

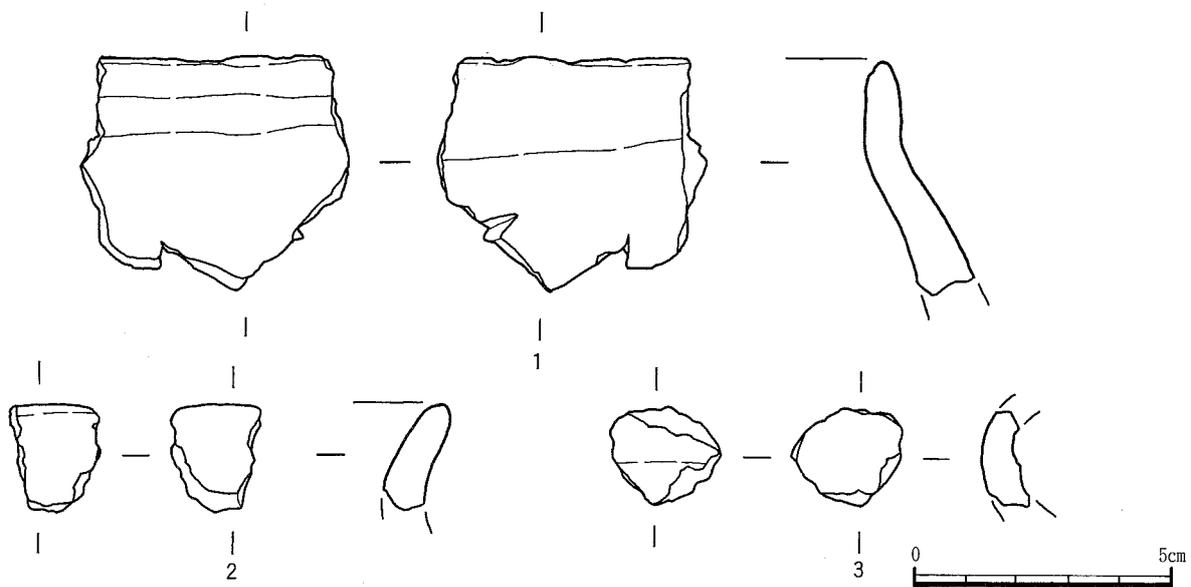


図6 イハマムル遺跡採集遺物

に小浜島の百姓を移住させて津口の管理をさせるよう八重山蔵元を通して王府に上申するが、認められなかったことが、首里王府と八重山蔵元との往復文書集である「参遣状」に遺されている<sup>註33</sup>。このように、歴史の上で嘉弥真島は耕作及び放牧のための一時的な滞在の場として使われることはあったが、基本的に無人の島であったようである。

島の内陸部には、観光用のトレッキングコースとして、ゲストハウスを中心に原野の中に小道が広がっている。今回の調査では可能な限りこの小道及び周辺原野・島の外周の踏査を行った。

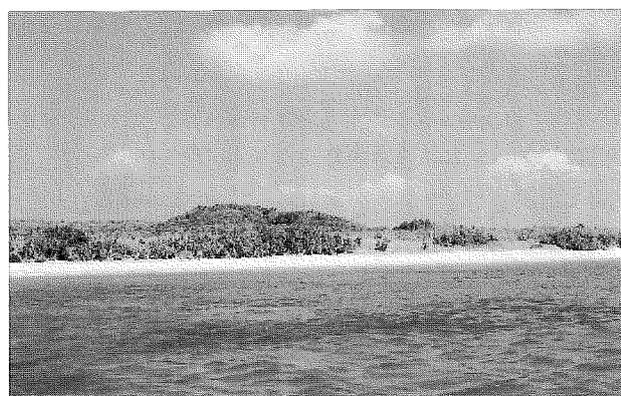


写真12 嘉弥真遺跡遠景

その結果、小浜島及び石垣島が望める南東海岸周辺の数ヶ所において、灰色砂に包含された状態で、サラサバティやシャコガイ等の大型貝類が多量に包含されている状況が確認できた。人工遺物は見られないが、自然に堆積したものではなさそうなので、貝塚の可能性が高いと思われる。なお、県が行った分布調査<sup>註34</sup>では、島の東側に位置する小高い丘に、遠見台と考えられる石積みをも有する遺構が確認されているが、今回は深いヤブに阻まれて確認することができなかった。

表面採集による遺物は、島の南東側低地及び標高約31mの島の最高所付近の小道に見られた。遺物の構成は、前者が土器片及び沖縄産無釉陶器片であるのに対し、後者は15世紀頃の中国産陶磁器が占める割合が高く、年代に開きがある。このことから、嘉弥真島には少なくとも二時期の遺跡が存在する可能性がある。次に採集資料について説明する。なお、図7の2、10、11は島の南東部採集資料で、それ以外は小道からの採集資料となっている。

図7の1は土器の外耳部分である。全体に風化が進み凹凸が目立つ。両端及び先端部はわずかに欠損しているため詳細な形状は判然としないが、外耳上面の断面形状は斜位に傾き、下面はほぼ水平。器壁は外耳上部が9mm、下部が6mmである。器色は橙褐色で、胎土は灰色、間隙が多く混入物は見られない。

図7の2は、口唇端が外反する青磁碗の口縁部である。図上復元による口径は17.6cmを測る。釉はつや消しの淡緑色で、粗く貫入が見られる。器厚は5mmで、胎土は灰色である。図7の3も外反する青磁碗の口縁部であるが、2の資料に比べ緩やかに外反していくタイプである。釉は厚手でつやのある暗緑色。器厚は4mmと薄く、胎土は灰色を呈する。

図7の4も青磁碗口縁部である。口縁はやや外傾する直口で、淡緑色の釉が厚くかかる。全面に細かい貫入が見られ、表面は二次的に火を受けたのか発泡し、一部ではシワが形成され変形している。

図7の5は青磁碗底部である。釉は薄手でやや光沢のあるうぐいす色を呈し、全体に細かい貫入が見られる。見込部分には唐草文のスタンプが押され、高台角は粗く面取りが施されている。畳付け及び高台内中央は無釉で茶褐色を呈すが、高台の内側角には輪状に釉が残る。胎土は明灰色である。

図7の6・7は白磁碗の口縁部である。6の資料は口径不明。口唇は外反し、その直下でわずかにすぼまり、少々ふくらみつつ胴へ移行する。外面に不規則なるくろ痕が見られる。釉は透明で内外面ともに貫入が走る。色調は表面が明灰色で胎土は灰色。器厚は口唇が4mm、胴が5mm。7は図上復元による口径17.8cmの端反りの碗で、形態は6の白磁に似るが、器厚は口唇・胴部ともに5.5mmとやや厚手。釉薬は半透明で胎土ともに灰白色を呈する。

図7の8・9は褐釉陶器口縁部である。8は推定口径9.8cmを測る玉縁口縁の壺である。頸部で緩やかにびれを成して胴部へ移る。光沢のある黒褐色の釉が薄く全面にかかる。9も褐釉陶器壺の口縁部で、復元口径は10.6cmを測る。口唇断面は上部は丸く、外側は鉤状に湾曲している。淡褐色の釉が口唇外面にかかる。胎土には8・9ともに灰褐色で、茶褐色、橙色、白色の粒子が混入する。

図7の10は沖縄製の播鉢口縁部で、復元口径は27.4cm。口唇は鏝状に張り出し、断面は方形。口唇

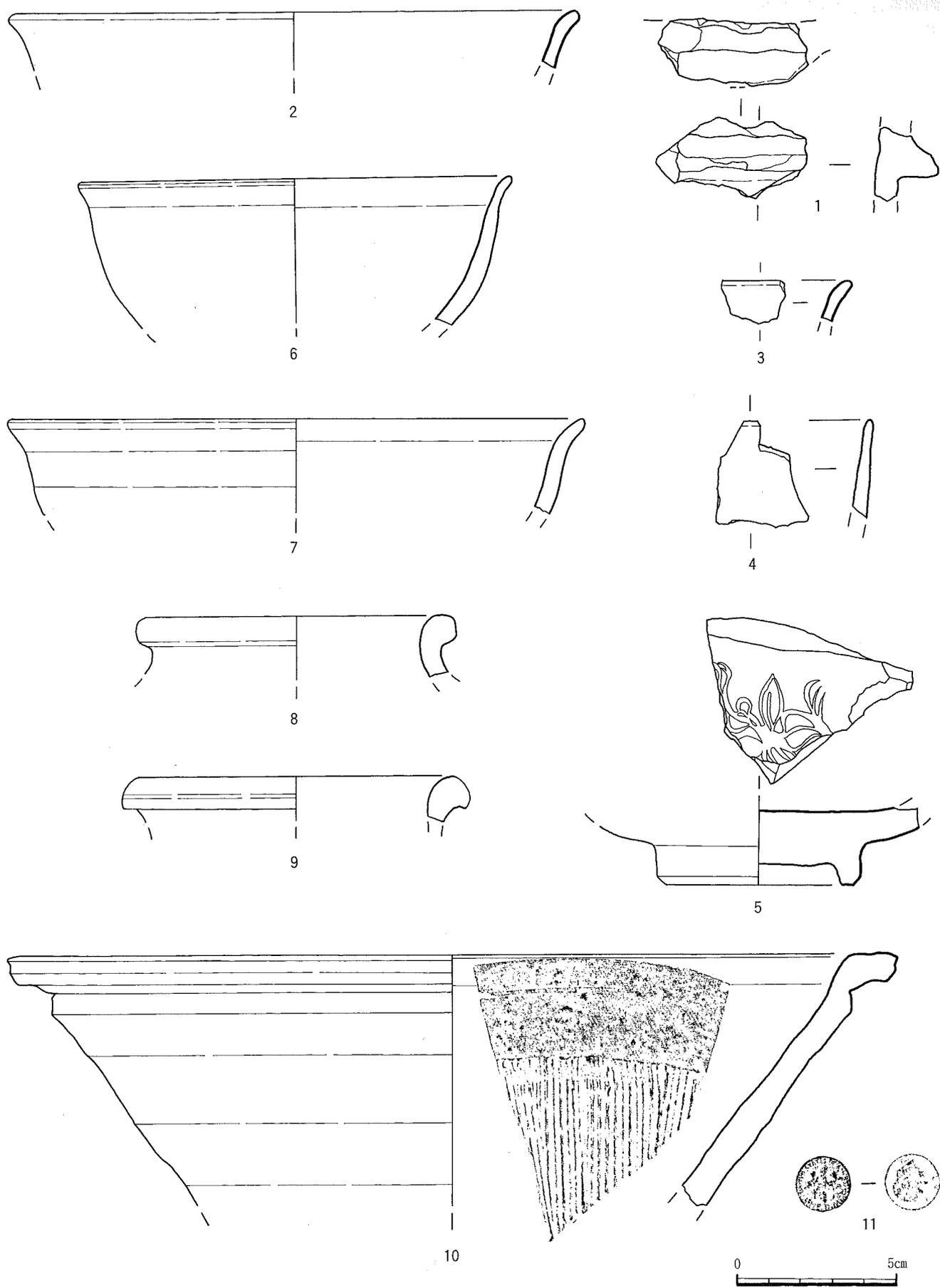


图7 嘉弥真遺跡採集遺物

外面直下で内側に折れ、さらに外側に稜を付けて折れたあと、斜位に胴へ向かう。内面は口唇から約3cm下部に櫛目がある。櫛目は密に12条一組の施文具が用いられ、1mm内外の深さで見込部分に向かってほぼ垂直に引かれる。器色は口縁付近が茶褐色で、胴部が赤褐色。胎土も赤褐色で、赤色の粒子が混入する。器厚は胴部で7mm～10mmを測る。

図7の11は、1954年に製造されたアメリカの白銅製10セント硬貨（ダイム）である。直径18mm、厚さ約1.5mm。

### ジョージH. ケア小浜島収集資料内訳

アメリカの人類学者であるジョージH. ケア氏は、1960（昭和35）年～1962（昭和37）年に琉球列島遺跡調査として、県内の144遺跡を踏査している。その中でも先島諸島の遺跡は全体の96%を占める139遺跡におよび、精力的に調査が行われている。この成果については、『沖縄出土の中国陶磁（上）—ジョージH. ケア氏調査収集資料—先島編』<sup>註36</sup>に代表的な資料がまとめられているが、すべての内訳は掲載されていない。ここでは、当館に収蔵されている小

浜島収集資料の内訳を表2に示した。ケア氏による小浜島での採集地は、次の5ヶ所である。ハエバナ遺跡（Haebana Site）、仲宗根村（Nakasone Village）、ニシダバル（Nishidabaru）、道路（Road Side）、ヤサカ遺跡（Yasaka Site）。これらの採集地を分布調査の成果や現存する地名から辿り、照合した結果、ハエバナ遺跡は南風田原遺跡に、ニシダバルはニシダ原遺跡に対応すると思われる。しかし、現在確認されている南風田原遺跡は無土器の遺跡であり、ケア氏が土器片や陶磁器片を採集している点で時代的に符合しない。次にニシダ原遺跡については、ケア氏収集資料が土器の底部片で、分布調査及び今回の調査で採集されている資料も土器や陶磁器といった近世の資料であることから、時代的にも合致するものと思われる。

また、ヤサカ遺跡は、島の沿岸部に散在していたヤサキ村、クァンテ村、カニク村等の集落を、明和の津波以降に現集落に統合したとする伝承<sup>註36</sup>が残ることから、その中のヤサキ村に対応させることができれば、小浜旧部落遺跡の範疇に含んでも良いと考える。しかし、分布調査により確認されている小浜旧部落遺跡は内陸部で、現集落の北側に近接して

表2 小浜島におけるジョージH. ケア収集資料一覧

| No      | 採集地名                    | 資料名     | 器種  | 部位 |    |    |     | 合計       | 備考      |
|---------|-------------------------|---------|-----|----|----|----|-----|----------|---------|
|         |                         |         |     | 口縁 | 胴部 | 底部 | その他 |          |         |
| 1       | ハエバナ遺跡 (Haebana Site)   | 土器      | 壺   |    | 11 | 2  |     | 13       | 南風田原遺跡か |
|         |                         | 青磁      | 碗   | 4  | 16 | 3  |     | 23       |         |
|         |                         |         | 壺   |    | 1  |    |     | 1        |         |
|         |                         | 白磁      | 碗   | 3  | 4  |    |     | 7        |         |
|         |                         |         | 染付  | 碗  |    | 3  |     |          |         |
|         |                         | 褐釉陶器    | 壺   |    | 41 | 4  |     | 45       |         |
|         |                         |         | 鉢   | 1  |    |    |     | 1        |         |
|         |                         | 本土産磁器   | 碗   | 2  | 1  |    |     | 3        |         |
|         |                         |         | 小碗  |    |    | 1  |     | 1        |         |
|         |                         | 沖縄産施釉陶器 | 香炉  | 1  |    |    |     | 1        |         |
|         |                         |         | 碗   | 2  | 1  |    |     | 3        |         |
| 沖縄産無釉陶器 | 小碗                      |         |     | 1  |    | 1  |     |          |         |
|         | 壺                       |         | 7   |    |    | 7  |     |          |         |
| 2       | 仲宗根村 (Nakasone Village) | 沖縄産無釉陶器 | 搦鉢  |    | 1  |    | 1   | 採集場所不明   |         |
|         |                         |         | 鍋   |    | 2  |    | 2   |          |         |
| 3       | ニシダバル (Nishidabaru)     | 土器      | 壺   |    | 2  |    | 2   | ニシダ原遺跡か  |         |
|         |                         |         | 鍋   |    | 2  |    | 2   |          |         |
| 4       | 道路 (Road Side)          | 沖縄産無釉陶器 | キセル |    |    |    | 1   | 採集場所不明   |         |
|         |                         |         | 平瓦  |    |    |    | 1   |          |         |
|         |                         | 土器      | 鍋   |    |    | 1  |     |          | 1       |
|         |                         |         | 碗   | 1  | 1  |    |     |          | 2       |
| 沖縄産施釉陶器 | 壺                       |         |     | 1  |    | 1  |     |          |         |
|         | 鉢                       | 1       |     |    |    | 1  |     |          |         |
| 沖縄産無釉陶器 | キセル                     |         |     |    | 1  | 1  |     |          |         |
|         | 鍋                       |         | 1   |    |    | 1  |     |          |         |
| 5       | ヤサカ遺跡 (Yasaka Site)     | 褐釉陶器    | 壺   |    | 1  |    | 1   | 小浜旧部落遺跡か |         |
|         |                         |         | 鍋   |    | 1  | 3  | 4   |          |         |
| 合計      |                         |         |     | 15 | 93 | 17 | 3   | 128      |         |

いる。このヤサカ村において、ケア氏は土器及び褐釉陶器片を採集していることから、時期的には近世ということで分布調査の成果と共通するが、採集地の特定には至らない。残りの仲宗根村及び道路についても、この名称以外に採集場所を裏付ける記録が見あたらないことから、場所の特定はできなかった。

## おわりに

今回の小浜島総合調査は、2度にわたり合計6日間の日程で、次の二つのことを主な目的として調査を実施した。①分布調査等により把握されている遺跡とその周辺環境の変化を確認すること、②可能な限り踏査の際に資料を採集し、遺跡の性格をさらに詳細に把握すること、である。

踏査により確認できた遺跡周辺の現況については、総体的に見て特段変貌を遂げた様子もなく、良好な状況を保っている様子であった。特にユンドウレスク遺跡及びウティスク山遺跡等の石積みを有する遺跡は、現在も信仰の対象になっていることが幸いしたのか開発の手が及ばず、石積みが累々と積み上げられたままの状態に残されている。今調査において、當眞嗣一によりこれらの縄張図が作成され、別項で紹介されているが、今後も継続して調査を進めていくことにより、遺跡の性格がより明らかになることはもとより、島内の近接するスクとの関係及び、小浜島周辺の島々との関係についても判明してくるものと思われる。

しかし、復帰後あたりを頂点としたリゾート開発及び公共工事の勢いは衰えるところを知らず、小浜島の一部では今日も山林原野が切り開かれ、開発が進行している。近年になり、開発側と文化行政との連携もとれ、事前協議により文化財を優先して保護する例も増加してきたが、本稿で新発見の遺跡として報告したイハマムル遺跡の例に見られるように、開発中に発見される可能性もあることから、文化財保護当局は、従来通り開発協議及び事前調査を徹底することはもちろんだが、定期的に分布調査等を行い、状況確認を行う必要性を感じた。また、中でも特に重要な遺跡に対しては、試掘調査及び確認調査により多くの情報を得ることで学術的価値を高めつつ、文化財指定等の適切な保護措置をとり、現

状のまま後世に引き継いでいくことが今後の課題となるであろう。

今回の調査では、延べ6日間という厳しい日程の中で、これまでの分布調査等により報告されている遺跡及び、分布調査以降に新たに発見された遺跡すべてを踏査することができたが、これらの遺跡の外観を観察し、数点の資料を採集することで時間切れになり、ついに現地で詳細な記録を取るまでに至らなかった。これらのことは今後の課題としたい。また、今回報告した周知の遺跡以外の地域においても可能な限り踏査を行うよう努めたが、遺跡と認められる状況は確認できなかった。

最後に、今回の調査を実施し、まとめるにあたり、多くの方々から協力を得ることができた。特に小浜島民俗資料館の慶田盛正光氏、竹富町教育委員会教育長の黒島精耕氏、竹富町教育委員会の仲盛敦氏には、ユンドウレスク遺跡、ウティスク山遺跡、イハマムル遺跡等、場所を特定しがたい遺跡に同行していただき、松原浩氏には、イハマムル遺跡の地名及び伝承等について、現地で多くの有益な教示をいただいた。また、株式会社南西楽園小浜島リゾートの宮崎誠氏には、イハマムル遺跡の確認の際、長時間にわたり対応していただいた。山城直子氏、知念政樹氏には、採集資料の図化等について、伊集ゆきの氏には図版作成にあたり協力をいただいた。記して感謝申し上げたい。

## 註文献

1. 沖縄県教育委員会、1994. 沖縄県文化財調査報告書第113集『グスク分布調査報告書(Ⅲ)八重山諸島』沖縄県教育委員会
2. 滝口宏編、1960. 『沖縄八重山』朝倉書房
3. 鳥居龍蔵、1894. 「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」『東京人類学会雑誌』9巻94号、東京人類学会
4. 鳥居龍蔵、1905. 「沖縄諸島に居住せし先住民に就て」『太陽』第11巻1号
5. 鳥居龍蔵、1905. 「八重山の石器時代の住民に就て」『太陽』第11巻5号
6. 三宅宗悦、1940. 「南島の先史時代」『人類学・先史学講座』第16巻

7. 多和田真淳. 1956. 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『琉球政府文化財要覧』1956年版. 琉球政府文化財保護委員会
8. 2文献に同じ
9. ジョージH. ケア・亀井明德・知念勇. 1982. 『沖縄出土の中国陶磁(上) —ジョージH. ケア氏調査収集資料— 先島編』沖縄県立博物館
10. 琉球大学歴史研究会編. 1967. 「八重山調査報告」『歴史研究 第3号』琉球大学歴史研究会
11. 玉城盛勝. 1969. 「八重山小浜島泊採集石器について」『琉球政府立博物館 館報』琉球政府立博物館
12. 沖縄大学 沖縄学生文化協会. 1974. 「小浜島の先史遺跡概要」『郷土 第13号 八重山小浜島調査』沖縄大学 沖縄学生文化協会
13. 山城浩. 1972. 『小浜島誌』小浜島郷友会
14. 沖縄県教育委員会. 1977. 沖縄県文化財調査報告書第10集『沖縄県の遺跡分布』沖縄県教育委員会
15. 沖縄県教育委員会. 1980. 沖縄県文化財調査報告書第29集『竹富町・与那国町の遺跡 —詳細分布調査報告書—』沖縄県教育委員会
16. 1文献に同じ
17. 11文献に同じ
18. 12文献に同じ
19. 大濱永亘. 1999. 『八重山の考古学』先島文化研究所
20. 14文献に同じ
21. 7文献に同じ
22. 9文献に同じ
23. 多和田真淳. 1960. 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺(一)」『琉球政府文化財要覧』1960年版. 琉球政府文化財保護委員会
24. 14文献に同じ
25. 7文献に同じ
26. 竹富町教育委員会教育長 黒島精耕氏の教示による
27. 金武正紀. 1988. 「ビロースクタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究』第8号. 貿易陶磁研究会
28. 23文献に同じ
29. 14文献に同じ
30. 23文献に同じ
31. 竹富町小浜. 松原浩氏(大正13年4月26日生)の教示による
32. 高良倉吉ほか. 2002. 『日本歴史地名体系第48巻 沖縄県の地名』株式会社 平凡社
33. 石垣市総務部市史編集室. 1995. 『石垣市史叢書9. 参遣状抜書(下巻)』石垣市
34. 14文献に同じ
35. 9文献に同じ
36. 13文献に同じ

### 参考文献

- 多和田真淳. 1980. 『古希記念多和田真淳選集(考古・民俗・歴史・工芸篇)』古希記念多和田真淳選集刊行会
- ジョージH. ケア・亀井明德・知念勇. 1983. 『沖縄出土の中国陶磁(下) —ジョージH. ケア氏調査収集資料— 沖縄本島編』沖縄県立博物館
- 沖縄県編纂委員会. 1986. 『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』株式会社角川書店
- 金武正紀. 1989. 「沖縄における12・13世紀の陶磁器」『沖縄県立博物館紀要』第15号. 沖縄県立博物館
- 沖縄県教育委員会. 1990. 『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅶ—八重山諸島の道—』沖縄県教育委員会
- 安里嗣淳. 1994. 「東京大学研究資料館所蔵の沖縄関係考古資料」『史料編集室紀要』第19号. 沖縄県立図書館史料編集室
- 沖縄県立図書館史料編集室. 1996. 『沖縄県史料前近代1 考古関係資料1』沖縄県教育委員会
- 當眞嗣一. 1998. 「波照間島の考古学」『波照間島総合調査報告書』沖縄県立博物館
- 黒島精耕. 2000. 『小浜島の歴史と文化』
- 大城 慧. 2001. 「西表島の遺跡」『西表島総合調査報告書』沖縄県立博物館

## 小浜島のスク (グスク)

當 眞 嗣 一\*

### Gusuku Sites in Kohamajima Island

Shiichi TOUMA\*

#### はじめに

沖縄県立博物館では小浜島の自然・考古・歴史・民俗・美術工芸を対象とした総合調査を平成12年度から継続的に実施してきた。平成15年2月27日から2泊3日の日程でこれに参加する機会を得た筆者は、考古学分野を分担することになったが、短い調査日程の中でより効率的に調査を行うためとくにスクと呼ばれている遺跡やそれに類する遺跡に限って調査することにした。

調査初日の午前中は、地元竹富町教育委員会の黒島精耕教育長や歴史民俗資料館の慶田盛正光館長に同行してもらいイハマムル遺跡を、また、午後からは、同町教育委員会文化財担当の仲盛敦氏とともにフルロウ山遺跡の踏査を行った。二日目は、当館で考古学を担当する仲座久宜学芸員とともにユンドウレースク遺跡の調査を行うことができた。

小浜島については昨年も私用で二日間滞在し、その間ウティスク山遺跡の調査を行いその成果を縄張図にしていたので今回新たに調査したユンドウレースク遺跡の縄張図を加え報告しその責を果たすことにする。なお、調査の結果、イハマムル遺跡やアールムティワンについても貴重な遺構を残すスクだということがわかったが時間的な制約から縄張図を完成させるまでにはいたらなかった。再調査後あらためて報告したいと考えている。

調査にあたっては、地元の慶田盛正光氏や宮里俊

治氏のお世話になり、また竹富町教育委員会教育長の黒島精耕氏と文化財担当の仲盛敦氏には現地での確認調査と資料収集等について便宜を図っていただいた。紙面を借りて感謝申し上げます。

#### 小浜島のスク

小浜島では現在8カ所の遺跡が報告されている。そのうち6カ所がグスク時代から近世期にかけての遺跡であり、いわゆる早稲田編年で第Ⅲ期から第Ⅳ期に編年されているものである。残る2遺跡が所謂無土器の遺跡で第Ⅰ期に属するものとなっている。今回筆者が調査した遺跡は、第Ⅳ期のなかで独立した石灰岩の上に築かれ、且つ琉球石灰岩の石積み遺構を伴いスクと呼ばれている遺跡である。この種の遺跡は、沖縄本島やその周辺離島などではグスクと称されている。スクやグスクはいずれも「防御された平場(曲輪)」を有すという特徴を備えている。小浜島で現在確認されているスクあるいはスク類似の遺跡は図1の分布図で示したように5カ所である。

さて、沖縄本島やその周辺離島では、古い集落を歩くとその後方にたいてい小高くなった森を控えている。ブッシュをかきわけ中に入るとちよとした広場があって傍らに祠があり聖地になっているところが多い。村人たちはその森をグスクだと言っている。だからグスクは地域の人々の間で聖域としてよく知られた存在になっている。

※ 〒903-0823 沖縄県那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

\* Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

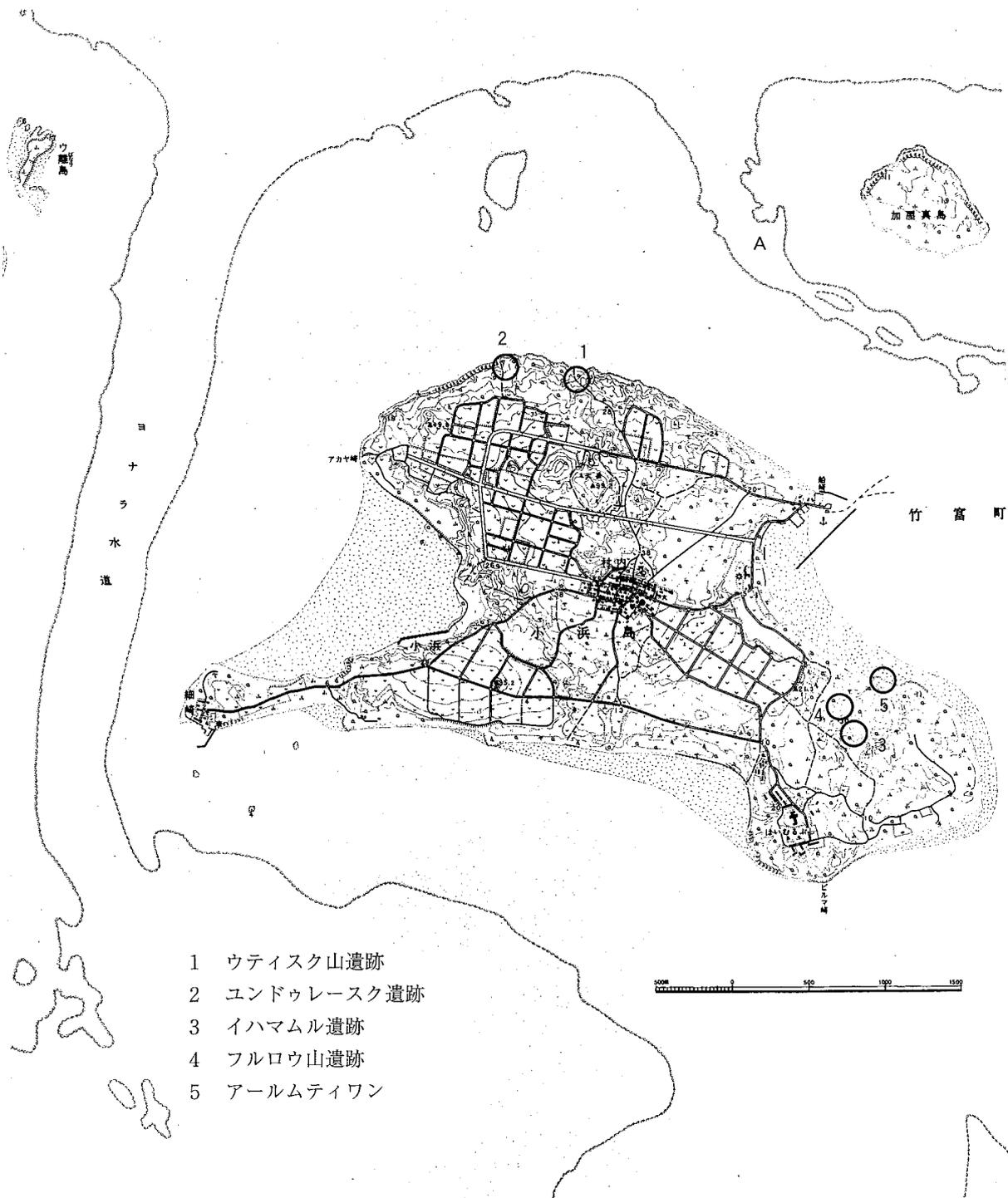


図1 小浜島のスク分布図（バカレスクについては場所が未確認のため図にプロットしていない）

ところが宮古諸島や八重山諸島の先島では少し事情が異なる。つまり先島地方ではグスクとは呼ばないのである。例えば宮古諸島ではグスクのことを「ジョウ」と呼び、八重山諸島では今回報告する小浜島の例のように「ウテISK」「エンドウレスク」等と「スク」と呼ばれるのが一般的である。

では、今回の総合調査の舞台となった小浜島では、防壁された平場を有しグスク類似の遺跡を全てスク

と呼んでいるかといえ一概にそうとは言えない。イハマムル遺跡、フルロウ山遺跡、アールムティワン等のように明らかにスクだと認識できても、地元ではスクとは言われてないのである。また、これらの遺跡の中には、アールムティワンのように御嶽として島人から深く信仰されているのがある一方、イハマムル遺跡やフルロウ山遺跡のように全く信仰の対象になっていないものもある。

## 小浜島におけるスクの立地状況とその環境

小浜島は石垣島から南西12km、西表島から東3km、八重山群島のほぼ中央部の海上に浮かび、東西の最大幅5km、南北2.5km、周囲12km、最高所99.4m、面積10.49km<sup>2</sup>の小さな島である。島の中央部はくびれており、その北寄りに最高所の大岳があり、その南側には現在の集落が展開している。

1646年に編纂された「正保の国絵図」の写しではないかといわれる都城島津家所蔵の古地図には、海上の里程について「タケトミヨリ小浜迄二里」「小浜ヨリ古見迄三里」「小浜ヨリ黒嶋迄二里一八町」と記され、島嶼間の海上交通路が詳細に描かれている。それによると、トゥマール（現在の小浜港）を起点にして、①石垣島御崎泊間、②西表古見間切平西村間、③黒島間の三つのルートが記されている。①では直接御崎泊に向かうのと竹富島を経由する二つのルートが描かれ、②のルートではウティスク山遺跡やユンドゥレスク遺跡の沖合の海上を通過するルートが描かれている。また、③は黒島に達するルートであるが、新城島上地、同下地を経てその先は波照間島に達するルートとして描かれている(図2)。この島嶼間海上交通路網からは小浜島周辺の海域が島々を結ぶ海上交通路のセンター的役割を担っ

ていたということをうかがうことができる。島のほぼ中央に聳える大岳からは晴天のとき与那国島を除く八重山の島々が望見できるため「八重山の臍」に例えられている。小浜島における海上交通路網の中心的位置を示すに相応しい呼び方であると思う。

小浜島の地元での呼称はクモーマ、クバマ、クンマーマという<sup>(註1)</sup>。現在は小浜島の北北東約1.6kmに浮かぶ嘉弥真島の二島で字小浜を構成する。集落の中心は島の中央から北寄りに聳える大岳（標高99.4m）を背後にその南側一帯の緩やかな段丘の上に立地する。一説によれば古くは9つのムラが存在していたという。ナカンズニ・クファンテ・トヌレ・ニセナク・ギサキ・ハイナク・シマンドウ・ヤサキ・クーヤと呼ばれる小集落<sup>(註2)</sup>がそれで、それぞれが沿岸部を中心に点在していたようだが集落移動等によって現在の場所に落ち着いたといわれる。

沖縄タイムス社発行の沖縄大百科事典の小浜島の項で、牧野清は島の人口動態について「1651年152人、1737年544人、明和の大津波（1771）当時は900人」と記述している<sup>(註3)</sup>。

島のまわりは南島特有のサンゴ礁が広がる地域である。とくに小浜島周辺のサンゴ礁群は石西礁湖とも呼ばれ、海底はやや深く10m内外の水深が顕著となっている。さらに小浜島と嘉弥真島の間にはサン

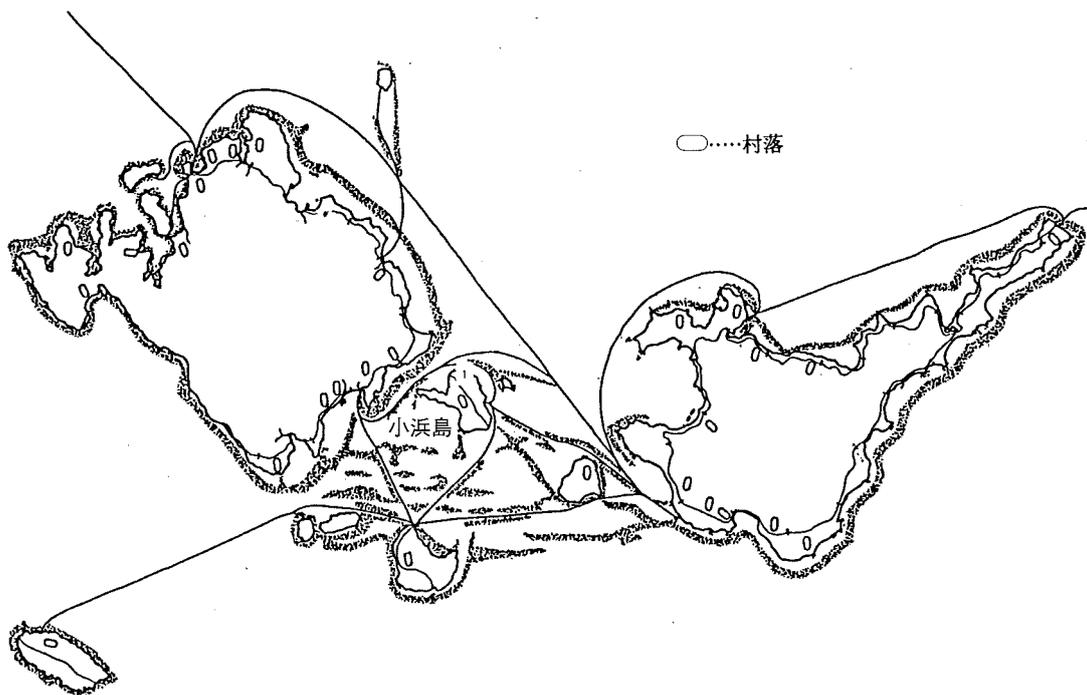


図2 元禄琉球絵図に描かれた海上交通路の模写図（『沖縄県歴史の道調査報告書VII』より）

ゴ礁の空白地帯もみられ(図1の中のA)、この水域では水深の深い自然の開水域になっていて諸船が航行するには適した海域であった。そのため古くから八重山の島々を結ぶ海上交通路として発展した。事実『八重山島由来記』には、「嘉山津口亥子之方向、広式町口拾四間、深三拾尋、船繫所迄広四拾六間、角深三尋半より七尋迄」と、船泊の記述がみられる。

以上のように周囲を取り巻く海域の環境は海上交通の要衝たる位置を占め、そこにウティスク山遺跡とユンドウレスク遺跡が選地しているということこそが両スクの機能や性格を考えるキーワードではないかと思うのである。

ウティスク山遺跡は島の北側海岸にある。遺跡近くの海岸では海食崖が未発達で、長さ約120~130mの砂浜(ハマ)を形成し南国特有のビーチになっている。近年、この海浜景観に目をつけた開発業者がリゾート開発を進め営業を行っていたが、バブル崩壊等も重なりうまく稼働してないようである。

海域と陸地部は砂浜を挟んで接続する。遺跡はその砂浜から約130m入ったところにあり、標高33mの独立した琉球石灰岩の岩山の上を平坦に造成して築かれている。遺跡周辺では石材である良質のトラバーチンを産出し、1935年~1943年まで業者による採掘が行われていた。切り出されたトラバーチンは、砂浜近くの海岸に集積されそこから小型船によって嘉弥真島との間の自然の開水域(船泊)まで運ばれ停泊していた大型船に積み込まれ那覇や日本本土へと移出されたという。国会議事堂にも小浜産のトラ

### ウティスク山遺跡の立地と周辺の環境

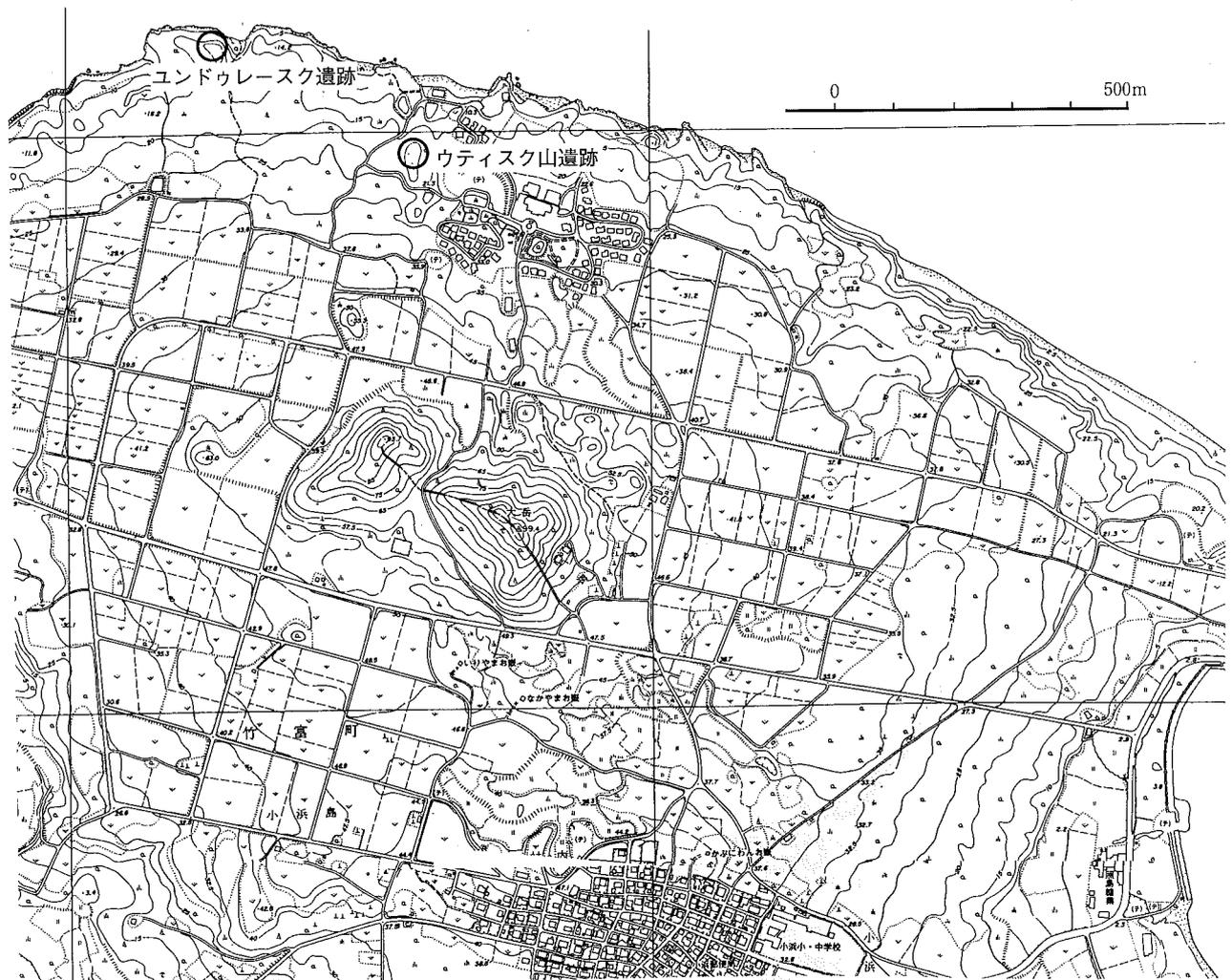


図3 ウティスク山遺跡とユンドウレスク遺跡の位置図

バーチンが使用されていると島の人々は教えてくれた。

ウティスク山遺跡の南側約150mには聖域コーキワンがあり、さらに400m南には標高93.7mの西の大岳、さらにその東に標高99.4mの大岳が聳えている。このウティスク山遺跡は信仰の対象にはなっていないが、聖なる山として出入りがタブー視され、近くに農地を所有する島人でもほとんど出入りしたことがないとのことであった。そのため、ウティスク山に関する伝承や昔から語られている由来など全く聞くことができなかった。もちろん築城主体者についても不明である。

なお、次項でとり挙げるユンドウレスク遺跡はこの遺跡の西側500mほど離れた海岸沿いにある(図3)。また、そのほぼ中間には石積み遺構を有するバカレスクという遺跡の存在が知られているが今回の調査では確認できなかった。

### ウティスク山遺跡の縄張り構造

ウティスク山遺跡は、前述したように、海岸砂浜から内陸部に僅かに入った小高い石灰岩の岩山を巧みに利用して構築されている。砂浜に出れば、近くには諸船が航行する水深の深い自然の開水域があり、海上交通の要衝という好位置にある(図1)。

小規模の岩山を利用したグスクは、通常最上部のみを平坦にしてその周辺に石積みを鉢巻状にめぐらすというのが一般的である。ところがこのウティスク山遺跡の場合には、最上部の平坦地を二つに区切り、そのエリア内への侵入を阻止するために石積みをめぐらしている。石積みは琉球石灰岩の野面積みになっている。断崖上の石積みは登りにくい箇所では低く、登りやすくなったところの石積みは幅が厚く、しかも高い。さらに平地に続く下位にも曲輪を配置し、最上部の主郭への侵入を阻んでいる。石積みを張りめぐらし外部から容易に侵入できないようにした空間、つまり防御された空間(平場)のことを曲輪と呼んでいる。

グスクとは広義の城のことであるが、前述したように八重山地方ではスク等と称されている。ところで城であるかないかは、防御された空間=曲輪があるかないかがその決め手となる。このウティスク山

遺跡の場合には、上下二つの曲輪によって嚴重なる軍事的防御機能をもった遺構が存在していることからみても明瞭な城郭遺跡だといえる。

さて、図4は縄張り調査をもとに私が描いたウティスク山遺跡の縄張図である。城郭用語でいう「縄張り」とは、城の設計のことであり、平面プランのことである。城造りの現場で図面に描いた設計図どおりに城地に縄を張りめぐらしたことに由来する城の専門用語である。城の研究には縄張り調査が重要となる。住宅の間取りからその家のライフスタイルが想像できるように、城の縄張りからはその城の性格や機能がよく理解できる。石積みはどのようなところにどのように積まれているか、その高さや幅はどうなっているか。そして城の出入口(虎口という)はどこに開き、どのような構造をとっているか等々、城の防御性に着目しつつ城の平面プランを把握する事を縄張り調査といい、その成果は縄張図によって表現される。

では図4の縄張図を見ながらウティスク山遺跡の城郭としての構造について考えることにしよう。

この城の主郭部は、図中のⅠとⅡから成り立っている。主郭部は城にとって一番大事なところで、築城主体者は主郭部を防御するため築城にあたっていろいろと工夫をこらした。城を攻める側は、まず縄張図の中の①、②、③の方向から城内への侵入を試みるだろう。縄張図でもわかるように、この①、②、③一帯は谷間でスク側の壁が崖になっている。谷底と主郭部との比高差は10mを測る。つまり、スクは石灰岩の岩山が露呈している尾根山頂を取り込んで選地されているため周囲が急崖をなし谷間からの侵攻を難しくしているのである。谷底から敵が登って来たとしても城内から石を落とすなどして敵の侵入を食い止めることができる。④、⑤、⑥からの侵入はどうだろうか。この方向には、主郭部を守るため幅2m以上(現状での石積みの高さは約1.5m程度だが、残存する石積みの幅が2~3mもあることから考えて、当時の高さは3.5~4mはあったものと推測される)の石積みが二重にめぐらされていてやはり主郭部へ攻め入るには攻城軍に多大なりスクが伴う。とくに④と⑥では急峻な斜面になっていて、もし敵がそこを這い上がって城壁に迫ったとしても曲輪Ⅲの石積みの上から丸見えとなり、迎撃の憂き

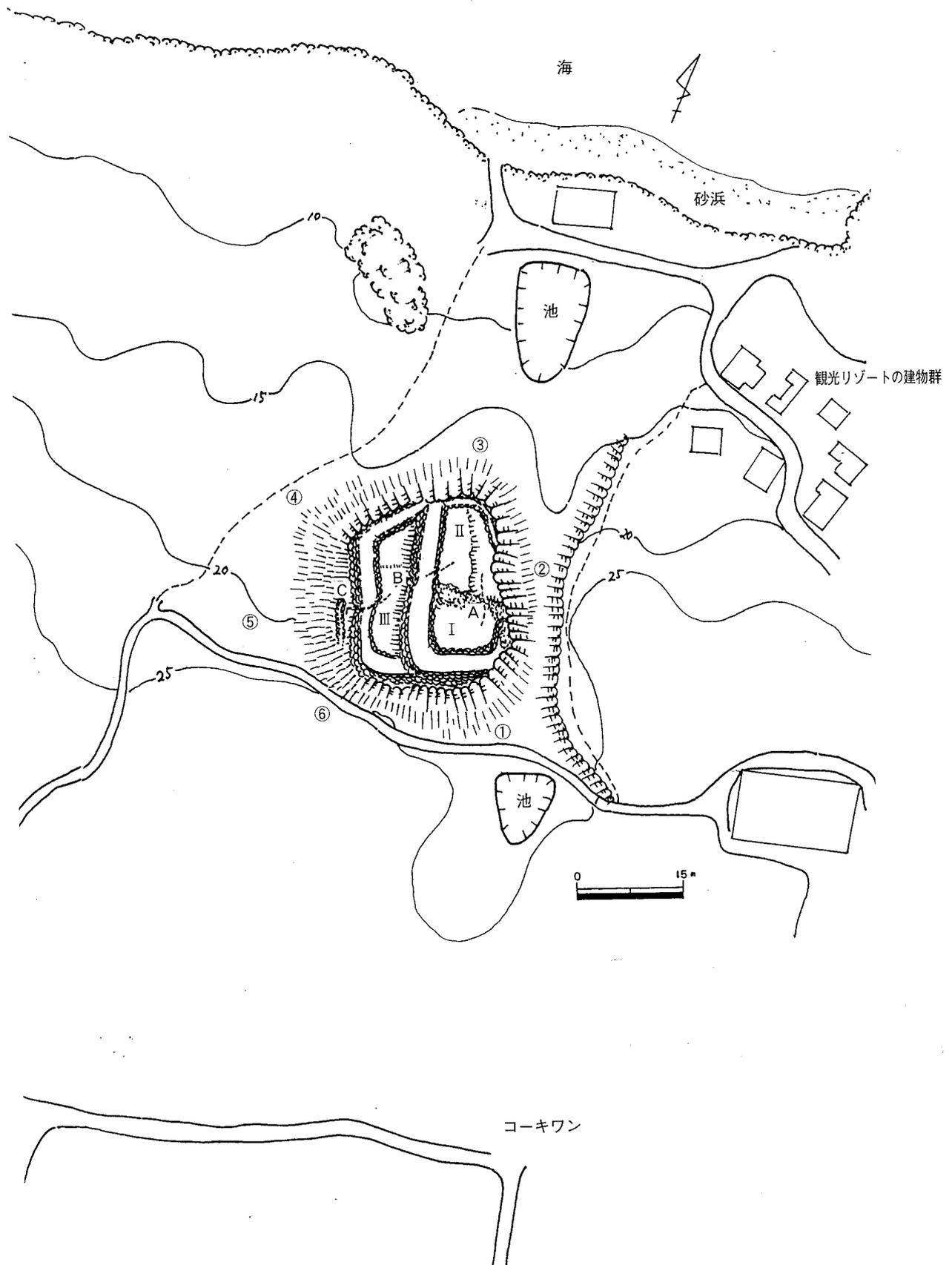


図4 ウテスク山遺跡縄張図(写真作図)

目にあうのは必至であろう。琉球石灰岩の岩山を利用して三方(図4の①・②・③)からの敵に対しては自然の断崖を城壁に見立てることでその侵攻を防ぎ、平地続きの方向(図4の④・⑤・⑥)には厚く高い頑丈な石積みをめぐらすことで防御ラインを固めるといった築城主体者の意図がうかがえ興味深い。したがって当スクは、規模こそ小さいものの敵の侵攻に対して防御性に富み、城郭としての機能を十分備えた城郭として理解できるのである。

ところが城の攻防を考えた場合にはどうなのだろうか。たしかに城の防御にあたっては非常に注意深く、しかも神経質ともいえるほど工夫がこらされている。しかし、出撃についてはゴツゴツした岩山の上に構築されていることや、曲輪構造などからみても効果的な構えが認められない。このような状況から推察すると、ウティスク山遺跡の性格は有事の際における立籠りを考えた海上貿易のためのスクであり、城主がいて領土支配をしながら日常的に生活するような城ではなかったのではないかと思う。

以下もう少し内部構造について観察を続けることにしよう。

主郭部を構成する曲輪ⅠとⅡは岩山の頂部を平らにし、急峻な断崖に面する東側にはほとんど石積みはない。石積みが認められるのは平地に続く西側とやや傾斜が緩い北側の一部と南側の一部に限られる。

曲輪Ⅰは東西20m×南北24mの広さを有し、所々に琉球石灰岩の岩盤が露出する。曲輪Ⅱとの境界以外はすべて石積みで囲まれる。石積みは現状の高さが1.5m程であるが幅は3mもある。曲輪Ⅱとは露頭した石灰岩によって区画される。この露頭石灰岩には90cmの幅で切れているところがあり、そこに曲輪Ⅰと曲輪Ⅱの間の出入口、つまり虎口Aがある。曲輪の内部では遺物包含層が確認される。また、この曲輪は、石灰岩が露出しているためかなり狭くなっているが、それでも100坪ほどの平坦地が確保されている。何らかの機能をもった建物が建っていた可能性が高い。本格的な発掘調査がまたれる。最も標高の高い位置にあって城郭中で一番防御性の高い場所である。つまり、主郭部の奥の一面にあって戦闘面で最も有利な位置を占める曲輪であるということである。

曲輪Ⅱは東西20m×南北13mの広さで曲輪Ⅰより

僅かに低く、両者の比高差は1m内外である。東と北は崖縁となり石積みは顕著でない。平地に続く西側に幅3mの石積みが認められるが崩落が著しい。その崩落がかなり進んでいる箇所には曲輪Ⅲとの虎口と思えるところが確認される。この場所は、ⅠとⅡを取り巻く石積みの中央にあたる場所である。曲輪Ⅱからは北に展開する砂浜を眼下に、東シナ海を眺望することができる。曲輪の縁辺、とくに崖に面したところで遺物包含層が確認される。

曲輪Ⅲは、曲輪ⅠとⅡを取り巻くように積み上げられた石積み空間である。周辺部に積み上げられた石積みが崩壊して曲輪内部を覆っており、確認できる平坦面は幅5m×長さ37mの広さである。石積みの中央部付近に若干くびれた部分(図4のB)があり、そこに虎口が取り付けられていたものと考えられるが、石垣の崩壊が著しいことと、ブッシュが深く今回の調査で正確に確認するにはいたらなかった。この虎口らしいところの外側には一条の石積みが認められ(図4のC)、そこも同様の理由から今回の調査では確認できなかった。

ところでこのスクはどのような目的で築城されたのであろうか。その立地から考えるとある程度推測できる。このスクは、砂浜から少し内陸部に入ったところにあつてしかも東シナ海を遠くまで眺望できる岩山の上に構築されていること。また、海域の環境が前述したように海上交通の要衝にあたる位置にあること。そして、主郭部を中心に居住活動を証明する遺物包含層が確認されるということ等々を考慮に入れて考えると、海に関わって機能した海上貿易のためのスクだという姿が浮かび上がってくるのではないだろうか。今後、本格的な発掘調査と詳細な縄張り調査の必要性が痛感される。

ウティスク山遺跡の築城主体者は不明である。これだけの構築物を残しながら何時、誰が築いたのか現在のところ全く明らかにされてない。ただ、前述したように主郭部で認められる遺物包含層の中から地元で焼かれた土器に混じって貿易陶磁器が採集されており、その陶磁器の年代観から14、15世紀頃の築城にかかるものではないかと考えられる。表面調査で採集された遺物についての詳細については別項を参照して頂きたい。

## ユンドゥレスク遺跡の立地と周辺環境

ユンドゥレスク遺跡は、前述したウテイスク山遺跡の500m西側に位置し、海岸沿いの海食崖を巧みに利用して築かれている。この一帯の海岸線は海に面する岩礁が波によって深くえぐられたノッチやゴツゴツ切り立つ断崖等が発達し、あたかも陸地と海上を遮断するかのようには屏風状に連なっている。ところがそうした海食崖も場所によってはところどころ途切れ、小さな砂浜が発達を見せるところがある。こうした海岸は障壁となる岩礁がないことから海から陸へ、あるいは陸から海への出入が可能であり付近の住民が海との往復に頻繁に利用するところになっている。事実、沖縄県歴史の道調査の成果によれば地元で「インメー道」という旧道が集落からユンドゥレスクの前を通り海岸まで延びていることが報告されている(図5)。こうした条件を備えたところにちょうどユンドゥレスクは立地する。標高13~15mの小高くなった琉球石灰岩の岩盤の

頂部と周辺の露出した岩と岩を巧みに利用して構築されたこのスクは、周辺が低地になっていることもあって、周辺低地との比高差が3~5mもあり小高い丘を形成している。そのため外から見るその姿も一見こんもりとした森に包まれ一種独特な雰囲気醸し出している。

前述したウテイスク山遺跡とは僅か500m程しか離れていない。島人の話では両スクの間にはバカレスクと呼ばれるスクが存在するといっている。バカレスクについては今回確認することができなかった。

さて、このユンドゥレスクの沖合1.8km先には裾礁と呼ばれるサンゴ礁が島の周辺を縁取っている。前にも述べたようにこの一帯の海域は石西礁湖とも呼ばれ他の礁湖に比べ水深の深い地域になっている。さらに右手に広がる海上(東北)には嘉弥真島との間を流れる水路があり、左手方向(西)には海流の激しいヨナラ水道が西表島と小浜島の間を流れている(図1)。こうした立地場所や周辺の環境を眺め

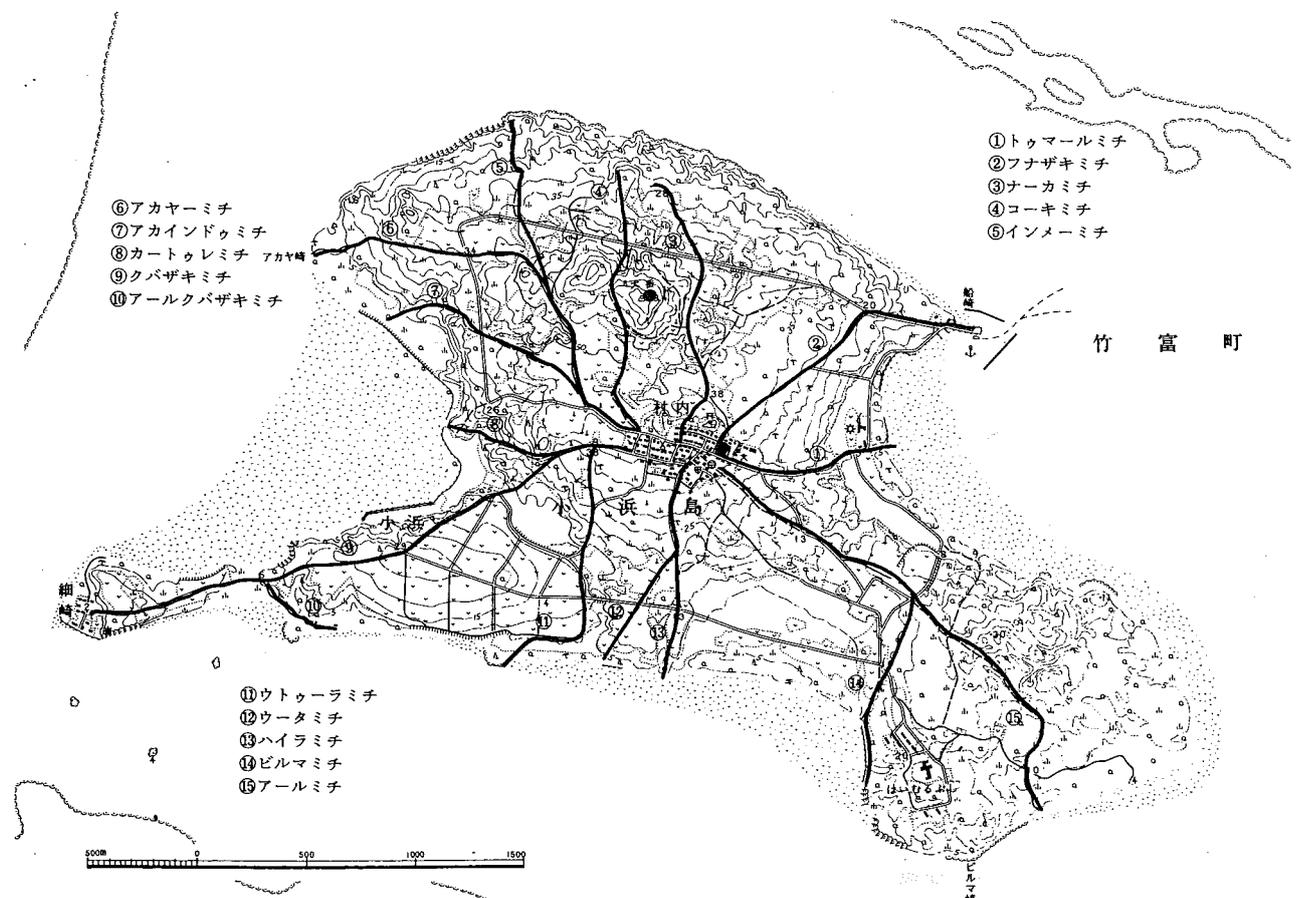


図5 小浜島の歴史の道(『沖縄県歴史の道調査報告書VII』より)

ると、このユンドゥレスクとウテイスクは、前にも指摘したように陸上というより海との関連でつくられた蓋然性は強い。島にはユンドゥレスクの伝承が海上交通との関連で僅かに残されている。

山城浩編『小濱島誌』によれば、「昔、古見から兄妹がオールザ参りの旅出の途中、帆船の航海故に小浜島の北海岸に寄港し泊まることになった。その後は船の通路上この地点に立ち寄ることになって船宿りの場になってしまった。ある神びようる（神を祀る日）の日に此の場所に神の火が現れた。更には上国への旅出の節この場所に立ち寄って祈願すると航海は安全で無事目的が達成された。これらの事が王府へ上申されご下間になり感銘を呼んでこの地を聖地と祀るように許可された」。また、「兄妹は世間態を保つために、妹はユンドゥレスクに住みつき、兄はその隣り合うバカレスクに住むようになった。おってツカサの妹はウニ大主と連れ合うようになった」ということである<sup>(註4)</sup>。

こうした由来があった後、ユンドゥレスクは島

人の信仰を深めることとなり聖域となったといわれる。さらにその後、ユンドゥレスク→ウテイスク山→コーキワン→西山（いりやま）という遷座の歴史を経て現在の西山が聖域として決まり定着していったということである。

### ユンドゥレスクの縄張り構造

東シナ海を睨むかのように海岸線の海食崖の上に構築されたこのスクは、小規模ながらすぐれたプランを残す貴重な遺構である（図6ユンドゥレスク縄張図）。二重の石垣にぐるりと囲まれた中に、30m×15mの広さを有する曲輪Ⅱを置き、それに接続して10m×8m程の曲輪Ⅰを配置する。曲輪Ⅰは標高17mを測りスク内で最も高い位置にある。この曲輪Ⅰが主郭であろう。曲輪Ⅰの北側は波によって深く抉られたノッチの上に幅1.5mの琉球石灰岩の野面積みによる石積みをめぐらし、東は折りをもつ石積みが曲輪内を包み込むようにして曲輪Ⅱに向かっ



図6 ユンドゥレスク縄張図（写真作図）

て延び、曲輪Ⅲや曲輪Ⅳとを区切っている。曲輪Ⅲからの侵入者に厳しい横矢をかけるため工夫されて積まれた石積みである。また、西側では琉球石灰岩の岩盤の上に幅2m程の厚みの石積みを張りめぐらし、海からの侵入者(図6の①→)に対して横矢を効かす工夫がされている。その石積みの外側にも東西が断崖や石積みによって囲まれ袋小路になった小区画の曲輪ⅤとⅥが認められる。海からの侵入者をこの曲輪内に封じ込め、図5のbのマス状になった小さな石囲いの中から迎撃し、殲滅するためのものである。こうした発想は曲輪Ⅲや曲輪Ⅳでも見て取れる。

曲輪ⅢとⅣは、曲輪Ⅰの主郭を防御するための一種の腰曲輪である。その曲輪の廻りを取り囲む障壁は、基本的に琉球石灰岩の野面の石積みであるが、ここでは特に露出岩盤が発達をみせていることから岩盤そのものを巧みに利用して障壁に見立てたり、露出した岩盤の間を石積みで結んだり、直接岩盤を利用してその上に積み上げるたりするなどいろいろな方法がとられている。

曲輪Ⅰへの出入口(図6のA)、つまり虎口は一カ所で、南に向かい曲輪Ⅱに連絡している。虎口両脇の石積みは幅3m、高さ2mとしっかりした琉球石灰岩の石積みになっており、侵入者に対し石積みの上から防戦できるようになっている。

曲輪Ⅱが一番広く東西30mほどある。二重の石積みによって囲まれ外からの侵入者に対し神経質なほどガードが堅い。虎口は一カ所で東南東の方向に向き相横矢を効かす工夫がされている(図5のB)。石積みの幅は2.5m、高さ2mほどで野面石積みとしては比較的厚く、しかもがっちり積まれている。曲輪Ⅱを取り巻く石積みの外側、つまり曲輪Ⅶは曲輪Ⅱから完全に切り離されており、曲輪Ⅱの外郭を構成する帯曲輪といえるものである。この曲輪は、内郭にあたる曲輪Ⅱや主郭の曲輪Ⅰを守るためにめぐらされた石積みでその重要さから屈曲が著しい。このあたりの城郭外周辺は、平地に続くため敵の侵入に対し最も弱点になり、その防御にあたって最大の注意が注がれたことを裏付ける石積み構造といえる。

曲輪Ⅱの虎口の前に粗末な小さな石積みが認められ(図5のC)、その外側にあたかも虎口を塞ぐよ

うに左側(東)から鍵状に伸びる石積みがある(図5のD)。この遺構は一種の甕城といえるものであり、その機能は虎口に殺到する敵に横矢を掛けたり、石を投げたりして侵入者の侵攻を防ぐため工夫されたものである。このような虎口構造をとるスクやグスクは、先島地方やあるいは沖縄本島でもあまり例をみない。ユンドウレスクは、まさに小規模ながらも貴重な遺構を残すスクとして評価できるところである。

曲輪群の東側に隣接して船揚場に利用できる小さな浜(図6のE)がある。この一帯の海岸で陸と海の往来ができるところは唯一ここだけで、別の海岸線から海に出ようとしても海食崖の発達で不可能である。以上のことなどからこのユンドウレスクこそは、海に面して立地し、海に関わって機能した城であり、「海城」と呼ぶに相応しい縄張り構造を有しているといえよう。

では、このユンドウレスクの築城主体はだれであろうか。残念ながらこの貴重な遺構を有するスクの築城主体は不明である。これだけの縄張り構造をもつスクが何時頃、誰によって、何のために築城されたのか全くわからないというのはこの島の歴史を解明していく上で大変惜しいことだといわざるを得ない。現在の私たちにはユンドウレスクの意義について数年に一度という割合で祭事が行われる聖地であり、島人から厚く信仰されている聖域だとしか認識されてないのである。ウテイスク山の場合もそうだがユンドウレスク等の御嶽と重なっている遺跡についてもっと学問的な光りをあてたいものである。

- 註1 『沖縄県の地名』平凡社 2002年 728頁  
註2 『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅶ』沖縄県教育委員会 1990年  
註3 『沖縄大百科事典(中)』沖縄タイムス社 1983年 143頁  
註4 山城浩『小濱島誌』小浜島郷友 1972年 57頁



写真1 ウティスク山遺跡（正面の小高い森）西から



写真2 ウティスク山遺跡の石積



写真3 ユンドゥレスク（ノッチ状になった海食崖の上のユンドゥレスク）



写真4 ユンドゥレスクの虎口（第6図ユンドゥレスク縄張図のBの虎口）



写真5 ウティスク山遺跡の西側の砂浜（前面の海上に浮かぶ島が嘉弥真島その手前が水路）



写真6 ユンドゥレスクに隣接する浜の漂着物（図6ユンドゥレスク縄張図のE）。この浜は海流のためか漂着物が多い。

## 小浜島から流出した古記録と「沖縄文化展」について

園原 謙\*

### Outflow of Ancient Documents from Kohamajima Island and "Exhibition about the Okinawa Culture"

Ken SONOHARA\*

#### はじめに

1972年に上梓された『小浜島誌』は、島の歴史、民俗、文化に関して著された力作の島誌である。著者の山城浩氏は小浜島出身の元教師で、40年余り学校教育に携わった人である。同氏は、小浜島民俗芸能保存会の立ち上げに尽力し、その初代会長を務められた方でもある。

『小浜島誌』の巻末には、小浜島の古記録に関し、「夢の文献」という題で本人の心残りの筆が次のように認められている。

「小浜島、石垣安蔵氏(ちんちにや)の秘蔵に島の重要記録が現存していたようである。ところで、崎原孫基氏が借覧され、物故された後は、文(崎原氏娘)保管中、昭和27年頃、三重県立博物館主事であった古江信氏により持ち去られてしまった。その証には、金城聖吉氏へ感謝状が贈られている。その経緯を察知し、関係者の承諾を得て、古江信氏と文書を取り交わし、その現存を確認し、更には仲盛憲一氏が本土研修旅行中面談の結果近く送達する意図を伺えて、一日千秋の思いで、鶴首したが遂に空念仏に終る。同古記録は、何でも”沖縄郷土館”開設の資料に供されているとも伝え聞いている。このように、島の古記録など秘蔵されていたようだが、尊い文献として発掘されない間に散逸したり、無関心の中に思いがけないとんびにさらわれた格好になっ

ている。今にして思えば、遺憾千万遣る方無しの夢の文献となってしまっている。」(山城浩『小浜島誌』p.200)

小浜島誌の執筆にあたり、金城家から流出した古記録について、同誌の中で言及できなかった無念の言となっており、その存在に言及している。

そこで、本稿ではまず、この古記録の存在の有無を確認したいと考えた。もし可能であれば、翻刻を含め、その内容について言及することができる。それで山城氏の思いが解消されることになるからである。

古記録の行き先とされる三重県立博物館へ照会するとともに三重県へ出向き、山城氏が言及した当時の博物館員の古江信氏に面談し、同記録の流出の顛末について書き記すことにした。また、何故三重県立博物館が沖縄関係資料を蒐集したのか、その目的と意義についても合わせて考えてみたい。

#### 三重県立博物館の沖縄文化展

三重県立博物館は、昭和28年(1953)6月に開館した総合博物館である。三重県内で採集、発掘した資料等の展示のほか、郷土の自然と文化に関する調査研究活動、自然科学、歴史の様々な教育普及活動を行っている。また、収蔵資料は考古、歴史、美術工芸、民俗関連資料や動植物、化石、鉱物資料など

\* 〒900-0029 沖縄県那覇市旭町1番地(県南部合同庁舎8階) 沖縄県教育庁文化施設建設室

\* Cultural Facilities Construction Office, Education Department, Okinawa Prefectural Government, 1Asahimachi, Naha, Okinawa 900-0029, Japan

44,000点を収蔵している。特に、特別天然記念物オオサンショウウオの飼育、平成8年に鳥羽市で発見された恐竜化石に関する資料、植物や貝類コレクションは有名である。

実は、この東海地区の一地方博物館は、昭和37年(1962)に全国に先駆けて「沖縄文化展」という展示会を開催している。同展開催にあたり、沖縄展後援組織委員会が設置されており、当時沖縄出身の出世頭であった大浜信泉早稲田大学総長が名誉顧問に据えられ、三重県知事が顧問、三重県教育委員会教育長が会長に就いている。また、琉球側の参与として、琉球政府文化財保護関係者、宮古・八重山教育長など多くの沖縄関係者など、さらに日本側の参与として鎌倉芳太郎や東恩納寛博など本土在住の沖縄研究者などが関わり大規模な後援組織のもとで、開催されたことがわかる(表1 三重県立博物館主催「沖縄文化展」後援組織委員会一覧を参照)。

沖縄文化展の開催形態をみると、主催は三重県立博物館・三重県教育委員会、後援に文部省、文化財保護委員会、東京大学人類学教室、日本民族学博物館、早稲田大学、立教大学、女子美術大学、NHK、中部日本新聞社、川崎市教育委員会と名を連ねている。さらに、協賛団体には近畿日本鉄道、三重交通、大阪琉球物産幹旋所、三重県婦人会、三重県遺族会となっている。

同展図録に「沖縄展開催に当って」の開催趣旨文が記されているので紹介しよう。

「沖縄は古くから日本と支那との文化を吸収し、独特の文化を生み出した。誠に些々たる孤島にもかかわらず、文学をもち、音楽と舞踊をもち、工芸をもち、さらに特殊な言語と民俗をもち、そのなかには、三重県の古銭(伊勢の鳩目銭)が海を渡って、琉球の鳩目銭を生み、また三重県重要文化財の白子の型紙の源流を思わせる紅型など、まことに興味深き問題が多々包含されています。

この幾多の文化の跡をたずね、同時に沖縄問題がクローズアップされている今日、第二次世界大戦中2,387柱の肉親や友が悲しくも散って行った沖縄に思いをはせ、哀悼の念を新たにするとともに、われわれの同胞沖縄を深く深く理解すべき時がきたのではないのでしょうか。公平な視野に立脚して、その全貌を展覧し、一般の人々に沖縄に対する正しい認識

を与えることといたしました。

本展示会によって、東洋のハワイと呼ばれる果てしない沖縄の文化の情緒に直面せる時代の脈博を感じることができれば幸いです。

今回諸先生方の特別のご好意により、全国にさきがけて、貴重な資料が県下に初公開されるようになりましたことは深く感謝致します」(三重県立博物館『沖縄文化展』(図録)p.2)。

この序文から展示会開催の趣旨が理解される。そのひとつは、三重県人の沖縄戦戦没者が2,387人に上ったことである。三重の人々に沖縄の地で亡くなったことに対する哀悼の念を想起させ、日本から隔絶された沖縄を理解し、沖縄に対する正しい認識を与えることが、この展示会開催の一義的な目的であったのだ。

戦後10数年を経た日本本土における、それも一地方人の対沖縄観、すなわち沖縄に対する理解はどの程度のものであつたらうか。

同展開催期間中の昭和37年4月から6月の3ヶ月間の地元新聞の中部日本新聞社(昭和39年12月31日から中日新聞に社名変更)の紙面をみると、沖縄問題についての記事は3本ほど確認できた。その記事の内容は、日米両政府の沖縄に対する施政権の対応等についてのものである。これだけの頻度でもって、情報が多いいとはいえないが、一般的本土人にとって、沖縄に関する情報が全く入手できなかったわけではなかった。しかしながら、少なからず、米国施政権下における沖縄の人々の生活実態に関する情報は、三重県人に限らず、多くの一般的日本人には知る由もなかった。

戦後間もなく刊行された石野径一郎の小説『ひめゆりの塔』を原作にした今井正監督の同名映画「ひめゆりの塔」(1953年1月封切)で知られる悲劇の南島・沖縄が、本土人の一般的な沖縄観として支配的であつたのではなからうか。

沖縄戦に動員された県立師範学校女子部と県立女子一高女の女子学徒の最後を描いたこの映画は、沖縄はもとより、全国で大ヒットした。三重県人にとっても、他県人同様沖縄の地は、ひめゆりの学徒と同じ末路をたどった親、兄弟など肉親の生命を散らせた忌まわしい悲劇の南島であつたにちがいない。

この展示会の協賛団体に、三重県遺族会が名前を

連ねていることは興味深いし、また大浜早大学長が名誉顧問に就任したことについても、氏の沖縄問題との関わりをみる上で興味を引く。

大浜氏は外国法律の専門家であり、弁護士事務所も開業した実業家タイプであった。学校行政にその敏腕をふるい、54年から66年まで三選12年の長期にわたって早大総長を務めている。また、郷里沖縄についての思いは深く、戦前は東京八重山郷友会会長（1925）、在京沖縄県人会副会長（1936）に就任、戦後は沖縄諸島日本復帰期成会の陳情活動に関わっている。53年には沖縄戦災校舎復興期成会の寄付募集に協力する一方で、61年9月には南方同胞援護会会長（57年から理事）に就任し、沖縄復帰の推進に努めた。また、62年には、茅誠司や大河内一男ら有志で「沖縄問題を話し合う会」をつくり、その後の佐藤首相のブレインとして、「核ぬき本土なみ基地での返還」政策を試みようとして活躍したことは周知のことである。

沖縄の日本復帰などいわゆる「沖縄問題」について国民の共通理解と世論形成は、日米両政府に対する沖縄の返還の働きの上で大きな原動力になることを理解していた大浜にとって、三重県立博物館の沖縄文化展の企画は、たとえ東海地区の一地方の三重であっても、本土人に沖縄に関する情報発信の契機をつくる上でタイムリーであり、かつ有益であったと思われる。また、61年に就任した南方同胞援護会長として援護業務に関わる立場から、その申し出を断る理由など見当たらない。

大浜にとって、三重県立博物館の沖縄文化展開催及び同展後援組織委員会名誉顧問への就任依頼は、まさに時宜を得たものであった。同展の関連催事として、沖縄民謡鑑賞会と大浜信泉の文化講演会、三重県立大学空手部による空手演武が、5月3日～6日まで、伊勢市、松坂市、四日市市、津市の4会場で開催されている。この4日間の講演活動そのものにも、大浜早大学長の熱の入れようを伺い知ることができる。

実際にこの展示会を契機に、遺族連合会が関わった意味については後で言及したいと思う。

では、多忙な大浜をそこまでその気にさせた展示会とはどんなものであったのか。具体的にどのような資料構成で、沖縄を理解させようと考えて、沖縄

文化展は開催されたのであろうか。当時の図録から出品一覧を抜き出したのが表2である。

出品資料の総数は、考古資料、歴史資料、民俗資料、美術工芸資料合わせて237件524点に上る。うち、借用資料先は2博物館、3大学、1教育委員会、7個人の13ヶ所であった。件数の多い順に列記すると、東京国立博物館（52件74点）、民族学博物館（28件33点）、東恩納家（16件115点）、井伊家（8件10点）、石川家（7件7点）、早稲田大学（6件108点）、鎌倉家（5件52点）、古江家（5件7点）、東京大学（4件4点）、沢田家（3件7点）、川崎市教育委員会（2件2点）、山辺家（1件4点）、女子美術大学（1件1点）という内訳になる。また、これら借用資料に加え、同展示会のため三重県立博物館が独自に蒐集した資料が99件99点<sup>(註1)</sup>ある。資料の蒐集先は、宮古・八重山地域が主であり、展示会開催前年の1961年12月に蒐集されたものである。

展示会図録に掲載された古江信氏の調査日記<sup>(註2)</sup>によると、沖縄調査旅行は、1961年の11月28日～12月30日頃までの約1ヶ月間であったことがわかる。日程を拾って列記してみる。

- 11月28日 三重出発。鹿児島へ向かう。
- 11月29日 線路鹿児島入り、沖縄人の経営する松本荘で宿泊。全国公民館大会出席、帰国途中の小浜島公民館長の金城氏（聖吉）と懇親。
- 11月30日 鹿児島港にて出国手続き、通関を経て、沖縄丸にて沖縄へ
- 12月1日 海路沖縄丸で沖縄入り。
- 12月2日～4日 本島南部・中北部を視察。
- 12月5日 宮古入り。
- 12月6日 新里で12,3点、下地で10数点の資料蒐集。
- 12月7日 久松で20数点蒐集。
- 12月8日 狩俣で地機を入手。
- 12月9日 保良で貝の湯わかし蒐集。
- 12月10日 池間でこれら蒐集品の中で最大の資料サバニを購入。
- 12月11日～12日 宮古での蒐集資料の整理、同資料の那覇向け発送。
- 12月12日 空路宮古から八重山入り。
- 12月13日 石垣島内視察（教育長が案内）
- 12月14日～15日 石垣市の喜舎場先生訪問、民俗

の調査について学習を行う。

12月16日 石垣で10数点入手。

12月17日～20日 石垣から竹富島へ。資料館を営む上勢頭家で懇親、帰島時に資料もらう。

12月20日 石垣島から小浜島へ、金城氏の努力で20数点を蒐集。

12月21日 小浜島から石垣島へもどり、八重山での蒐集資料の整理と同資料の那覇向け発送。

12月22日 空路石垣から那覇入り。

12月23日 大浜早大学長と那覇で面談し、調査の経過報告。

12月24日 那覇から久米島へわたる。

12月25日 上江洲家を見て、那覇へもどる。

12月26日 本島最北端辺戸岬へ。

12月27日 先島の荷物をまとめて税関手続きを経て発送。琉球石油の稲嶺氏から陶器もらう。

12月28日 蒐集資料の再検討、補足資料を那覇で購入。

12月29日 海路帰国

約1ヶ月のハードな調査旅行であったことが伺える。ここで、本稿の目的のひとつである小浜島から流出した古記録の所在について確認しておきたい。まず、表2の出品リストを見る限り、小浜島で蒐集された資料は4点しか展示会には出品されていない。表2資料リスト番号を参照すると、No111きり、No186引臼、No194の書類入、No198漁業用（道具入れ）の4点のみである。実際の資料蒐集においてはどうか。小浜島での資料蒐集に関しては、調査日誌の12月17日の欄には次のように記される。

「・・・その日のうちに小浜へ渡った。小浜島は、果報の島と歌われる程非常に豊かな島であり、アカマタ、クロマタの古い年中行事も伝えられる民族学の宝庫である。鹿児島島の宿で親しくお世話下さった金城民（「氏」の誤植）の船で島を案内され、彼の努力でえがたき資料を20数点蒐集することができた。」とされる（括弧内は筆者による）。

竹富島で資料館を営む上勢頭亨氏との話が弾み、宿営が長引き、当初の小浜島訪問が予定より2日ほど遅れたようであるが、小浜島では鹿児島島の松本荘で親しくなった公民館主事の金城聖吉氏にお世話になった。金城氏は小浜公民館主事として沖縄文化展後援組織委員会にも琉球側委員として名を連ねてい

る。小浜島で蒐集した資料は「20数点」と記される。問題は、その20数点のうちに、古記録なる資料が含まれたかどうかという点にある。この部分については、実際のところ当事者にしか分からないことである。20数点の内訳については不明である。展示に供されたのは、これらのうち4点のみである。

三重県立博物館の民俗に関する資料目録<sup>(註3)</sup>は、昭和62年3月末までに同館が所蔵している民俗資料を総覧としてまとめたものであるが、資料の種類が10種に分類されている。すなわち「伊勢型紙、沖縄関係資料、海事資料、海女関係資料、松阪木綿、軽粉資料、郷土玩具、しめ縄、農具、その他」で、その地域の資料構成を反映していて大変興味深い。しかし、その中の「沖縄関係資料」だけは異色である。これは、当時開館来て最も大規模な展示会であった沖縄文化展の開催に伴って蒐集された資料によるものである。実際の蒐集資料の総数は不明だが、少なくとも展示に供された99点の資料があった。そして、展示会開催から42年を経た今日、前掲の資料目録の上で確認できる沖縄関係資料は、29点のみである。残念ながら、その中には、小浜島の古記録に関する資料の所在は確認できない。仮に文書記録であれば、分類上、民俗資料の中の「沖縄関係資料」に含めるか、あるいは、文書や古文書資料の中に含めるかは、各博物館の資料分類方針や担当学芸員の裁量によることになる。

今から42年前の記憶を遡り、その真偽を検証することは不可能に近い。しかしながら、資料収集や受領の状況を把握することは決して無駄ではないと思われる。そこで、当時の三重県立博物館学芸員の古江信氏（73歳）と金城聖吉氏（79歳）とその夫人の文さん（79歳）から聞き取り調査を行い、その状況を確認することにした。

金城ご夫妻からは、平成14年2月14日に小浜島を尋ねて話を伺った。また、古江氏からは、平成15年9月18日に三重県立博物館で聞き取り調査を行った。

### 当事者の証言による古記録の行方の可能性

山城浩氏によると、古記録のもともとの所有者は、「石垣安蔵氏（ちんちにや）の秘蔵」とされていることから石垣家のものと思われる。それを崎原孫基

氏が借覧し、崎原氏が亡くなった後は、「娘の文（崎原氏娘）が保管」とある。文とは、金城聖吉氏夫人の金城文さんのことである。

まず、文さんからの聞き取りで分かったことは、古記録は、手文庫のような蓋付きの塗物（はげ落ちた朱色）に保管されていたようで、その中味は系図や人頭税関係など封筒類がたくさん入っていたように記憶している、ということであった。「夫は、（古江さんを）『喜ばそうとして、何でもかんでもあげた』」と証言した。

当時金城聖吉さんは、小浜公民館主事で全国公民館大会から帰路、鹿児島の旅館で古江氏と出会った。沖縄文化展を開催するため、教育長から特命を受け、知事から激励を受けて資料収集調査のために初めて沖縄を訪問する古江氏との遭遇がそこにあった。先島を調査対象とする古江氏にとっては小浜島公民館主事との出会いは、思いがけないすばらしい出会いであった。早速、懇親を深めることになり、小浜島での再開の約束になったにちがいない。

金城さんは、旅館業を営み、船を持っていたので、船で島を案内するとともに自身の旅館に古江氏を泊め、親好を暖めることになった。金城氏の聞き取り調査では、経年のせいか、その頃の記憶はあまり鮮明でない。旅館に泊め、島を自船で案内したということは確認できたが、古記録が収納されていたと思われる、手文庫のような箱を古江氏に提供したことについての記憶は不明である。金城氏のところで唯一の確かな物証は、三重県立博物館長から金城氏へ贈られた感謝状のみである。文面にはこうある。

#### 感謝状

金城聖吉殿

貴下は当館沖縄文化展の開催にあたり沖縄民族考古資料の調査と収集に格別の御協力をいただきましたことはまことに感謝に堪えないところでありますここに深甚なる感謝の意を表します

昭和三十七年五月十日

三重県立博物館長 松島博

古江氏の調査日記によると、20数点の資料が金城

氏の尽力によって小浜島で収集された。その協力に対する感謝のしるしがこの感謝状である。この感謝状は現在でも金城家の応接室に飾られている。

さて、資料を受領した古江氏の記憶は、資料の直接収集者であることから、一番鮮明であった。

古江氏の記憶によると、12月21日朝に小浜島で収集された資料20数点は、サバニによって石垣島に運搬された。その時に、紅型の風呂敷に包まれた物が金城さんからサバニに乗っている古江氏に投げこまれたという。古江氏の資料収集の対象は民俗資料であった。古文書等の文書資料は対象にならなかったというが、風呂敷ものについては、そのままいただくことになったようである。

資料目録に収録されている中で、文書資料が入りそうな資料をさがすとすると、No194の書類入、No198漁業用（道具入）の2点の可能性が浮かぶ。

そのことについて確認すると、一点目の漁業用の道具入れとは、本土でいう「船ダンス」のようなものであった。それには、折りたたみ用の木製枕、釣り針などの釣りに関わる資料が入っていたという。2点目の書類入とは、黒塗の蓋付きの長箱（約25cm×5.6cm×2cm）のことで、中には何も入ってなかったという。また、資料目録には含まれない風呂敷に包まれたものの中味とは、織物の裂地や杼、糸などが入っていたという。

ここで蒐集品リストの中味と証言を整理してみると、文さんの言及した「（古江さんを）喜ばそうとして、何でもかんでもあげた」ものの中に、朱塗りの手文庫があった。古記録などの文書が収納できるものとして、「手文庫のような蓋付きの塗物（はげ落ちた朱色）」は適当なものと思われる。それと、資料目録に掲載される「書類入」とは近似する。ただし、古江氏は朱塗りの箱ではなく、黒塗りの蓋付き箱と認識しており、塗りの色の食い違いが生じている。問題は、その中に書類が入っていたかどうかである。この点については、寄贈側の金城氏と受領した方の古江氏の両者の記憶は曖昧である。

これら証言を基に、現段階で流出したと思われる古記録についていえることは、仮に三重県博に持参されたのであれば、登録資料としては確認できないことから、いわゆる、登録されない「学芸資料」として収蔵されているか、あるいは消失したかとい

う二つの可能性が生じることになる。また、今ひとつは文さんの記憶違いで、古江氏に差し上げる時点で、その書類入に系図や人头税関係の書類が入っていない可能性も浮かぶ。古江氏の証言では、書類入には、文書資料は入っていなかったことになっている。そのとおりであれば、これら資料は依然として小浜島にあることになる。

ここで、本稿を書く動機を与えた山城氏の記した冒頭の言葉を再確認してみる。まず、古記録が流出した年についての記述であるが、「昭和27年頃」と記されているが、それは「昭和37年頃」の意味で、「27年」と記されたのは、単純な誤記であろう。それは、感謝状の日付（昭和37年5月10日）を根拠にしていることから理解される。また、「古江氏により持ち去られてしまった」という記述については、資料受領の状況を反映した適切な表現ではないように思える。島の郷土史家の言い分として、実態としては、「持ち去られ」、資料が無くなったことを強調したいという心情は十分理解できる。しかしながら、資料受領に際しては、両者の了解もとの合理性があり、「持ち去る」という表現は誤解を与える懸念がある。

### 沖縄文化展と慰霊塔建立

三重県立博物館の沖縄文化展は、開館9年来の大きかりな展示会であった。大規模な後援組織委員会が設置され、その協賛団体には三重県遺族会が含まれる。展示会の趣旨に記されるように、三重県人の沖縄戦における戦没者の霊を弔う慰霊の意味もこめられた展示会でもあった。施政権が米軍に委ねられ、日本から隔絶され南海の孤島化しつつある沖縄に対する正しい理解を行うことが、肉親が亡くなった地への手向けにつながるという認識が、担当者にはあったのであろう。

戦後、本土一般人の対沖縄観や理解については、映画「ひめゆりの塔」の印象が強い。ひめゆりの塔は、沖縄戦に限らず、戦後沖縄や沖縄人に関する広報宣伝、情報発信の先駆的なものであったと思われる。

今でこそ、沖縄への観光入域者数は、年間500万人を越えているが、復帰以前の観光客数は統計資料

のある昭和38年が47,239人、10万人を越えた年が昭和42年で、112,117人。昭和45年が172,349人、46年203,768人、復帰の年の47年が443,692人となっている<sup>(註4)</sup>。そして、復帰以前の沖縄観光の目玉は、何と言っても慰霊巡礼の旅であった。

沖縄県が刊行した『昭和47年度版観光要覧』によると、入域観光客の地域別施設利用状況では、本島南部地区が50.8%、中部14.7%、北部31.2%、先島3.3%となっている。また、施設別利用状況は、ビーチ、公園、史跡その他に3つに分類されており、公園45.5%、ビーチ29.5%、史跡その他25%の比率になっている。分類中の「公園」には、戦跡国定公園である沖縄戦における最後の激戦地となった沖縄本島南部の糸満市摩文仁を中心とした「南部戦跡」が含まれる。県内には沖縄戦等における慰霊塔・碑が330塔碑ある<sup>(註5)</sup>。この数字の中には、沖縄県を除く46都道府県の慰霊塔が含まれている。

表3は、各都道府県別慰霊塔建立の概要をまとめてみたもので、建立年月日順に並べてみた<sup>(註5)</sup>。それをみると、各県の慰霊塔建立年の傾向がみてとれる。昭和40年以前の建立は14道県（29年1道、36年1県、37年3県、38年2県、39年7府県）、40年11府県、41年13県、42年以降は8都県（42年1県、43年3県、44年1県、46年2都県、51年1県）になる。

戦後20年目までに過半数の都道府県が慰霊塔を建立している。特に昭和39年から41年の3カ年にかけては、31府県による建立ラッシュ現象が起きている。戦没者数の多寡と慰霊塔建立の遅速に何らかの相関関係があるのか。沖縄戦戦没者のみに限れば、東京都の6,500人、福岡県4,055人、兵庫県3,073人、愛知県の2,953人、三重県2,600人、鹿児島県2,582人、京都府2,536人、大阪府2,400余、愛媛県2,077人の順になる。

各都道府県にとって、慰霊塔建立事業は、遺族会の陳情要請や世論などの様々な事情があったにちがいない。復帰以前の沖縄は、各県にとって、国内ではなく、国外であった。国外に慰霊塔を建立するためには建設調整に時間がかかることになる。建立の遅速にどのような意味を持たせるかについては議論が分かれるが、戦没者の霊を早い時期に弔うことが意欲の多少に関係があるとすれば、沖縄戦戦没者数が多い府県ほど、比較的早い時期（昭和40年まで）

に慰霊塔の建立がなされている。ただし、沖縄における各県の慰霊塔に合祀された戦没者は、沖縄に限らず、ダバオ、サイパンなど南方諸地域における戦没者も含まれている。

昭和37年に開催された沖縄文化展における展覧会は、三重県立博物館での本展に加え、四日市市などでの巡回展も行われ、延べ入館者数20万人を数えたという。この展覧会を契機に沖縄理解が深まり、慰霊塔建立の世論が形成されることになったと古江氏は指摘する。

慰霊塔建立のきっかけが、沖縄の歴史・文化の理解から行われたことは注目される。三重県の沖縄等南方諸地域を含めた戦没者慰霊塔「三重の塔」は昭和40年6月26日に建立されている。比較的早い時期の慰霊塔建立である。沖縄文化展から3年を経て三重の塔は竣工を見ることとなった。表4は他県で開催された主だった沖縄（人文系）に関する展示会をまとめてみたものである<sup>(注6)</sup>。

沖縄の歴史・文化に関する展示会が主で、その中に沖縄戦に関する資料展が含まれる。また、開催の時期については、沖縄の復帰10周年、20周年、30周年の節目に行われる傾向がある。この表で拾い上げた24件の展覧会のうち、殆どは焼物、染織品、漆工品を中心とした美術工芸資料が中心となっている。

ここで重要なことは、復帰前に行われた三重県立博物館の沖縄文化展は、戦後日本において沖縄の歴史・文化を紹介した先駆的な展示会であったのではないかということである。それは当時の世相を反映し、沖縄をはじめ南方諸地域で戦没した三重県人の霊を弔う慰霊塔を沖縄に建立する契機、運動のきっかけをつくることになった。別の言い方をすれば、慰霊塔建立計画の流れの起点に、展示会があったといえるかもしれない。そのために知事を会長に置いた後援組織委員会まで組織されたと理解した方がいかもしれない。

小浜島から流出したと思われる古記録の所在は現段階では所在がつかめない。この展示会の資料収集事業がきっかけで、その所在が不明になったとされているが、これも実のところ不明である。いずれにしても、それら資料収集を通して開催された沖縄文化展によって、慰霊塔建立という社会運動の契機を与えたことは、興味深く、注目される。

## 謝 辞

巻末ではありますが、聞き取り調査に御協力いただいた古江信氏、三重県立博物館、金城聖吉氏、金城文さんに感謝いたします。

## 脚注

- 注1：三重県立博物館収蔵品は、『沖縄文化展』（図録）（32pp. 三重県立博物館1962）の図録に掲載されているが、資料点数については記載がない。資料点数について各1点としたのは、同掲書の「沖縄調査日記より」に各集落での資料収集状況が記されていることから、各資料点数を1点とした。
- 注2：「沖縄調査日記より」『沖縄文化展』（図録）pp.23-26 三重県立博物館1962)
- 注3：『三重県立博物館資料目録Ⅲ 民俗』（昭和62年3月三重県立博物館）の凡例では、「昭和62年3月末現在収蔵している民俗資料について収録したものである」と記されており、また、「収蔵番号は今回の整備で新しく付けたものである」と、収集資料の資料の整備事業を経たものと記される。
- 注4：『昭和47年度版観光要覧』によると、「年次別空海別入域観光客数」として昭和38年からの暦年の統計資料がある（p.15）。
- 注5：『沖縄の慰霊塔・碑』（pp.163-164）の沖縄県下の「市町村・慰霊塔建立関係者別集計表」による。
- 注6：この一覧は沖縄県立博物館から資料貸出をしたものや、同館へ送付された展示会図録などを中心にまとめたもので漸定的なものである。改めて全国の博物館・美術館に対して沖縄に関する展示会の開催等について調査する必要がある。

## 参考文献

- 『小浜島誌』 山城 浩 1972年  
『沖縄文化展』（図録） 三重県立博物館1962年  
『沖縄タイムス大百科事典』 沖縄タイムス社1983年  
『沖縄県立博物館50年史』 沖縄県立博物館1996年  
『三重県立博物館資料目録Ⅲ 民俗』 三重県立博物館1987年  
『沖縄の慰霊塔・碑』 沖縄県1998年  
『昭和47年度版観光要覧』 沖縄県1973年

表1 三重県立博物館主催 「沖縄文化展」後援組織委員会一覧

| 役 職      | 氏 名                                                                                                                                                           | 所 属                                                                                                                                                                                    |
|----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 名誉顧問     | 大 浜 伸 泉                                                                                                                                                       | 早稲田大学総長                                                                                                                                                                                |
| 顧問       | 田 中 覚<br>小 原 茂                                                                                                                                                | 三重県知事<br>三重県教育委員会委員長                                                                                                                                                                   |
| 会長       | 神 谷 四 郎                                                                                                                                                       | 三重県教育委員会教育長                                                                                                                                                                            |
| 参与 琉球側   | 真栄田 義 見<br>山 城 善 三<br>金 城 増太郎<br>喜舎場 永 洵<br>与那覇 春 吉<br>糸 数 用 著<br>稲 嶺 一 郎<br>豊 平 良 顕<br>井 伊 文 子                                                               | 沖縄大学学長<br>琉球政府文化財保護委員会委員長<br>琉球政府博物館長<br>琉球政府文化財審議会委員<br>宮古教育長<br>八重山教育長<br>琉球政府KK社長<br>沖縄タイムス取締役<br>琉球王女                                                                              |
| 日本側      | 鎌 倉 芳太郎<br>東恩納 寛 惇<br>宮 良 当 壮<br>石 川 保<br>宮 本 馨太郎<br>酒 井 万 馬<br>山 本 栄 一<br>佐々木 仁三郎<br>川 田 準 造<br>竹 田 定 英<br>阪 本 薫 夫<br>中 村 稔<br>松 村 一 郎<br>田 中 作太郎<br>岡 田 青 慶 | 芸術大学教授<br>拓殖大学名誉教授<br>武蔵野女子大学教授<br>日本民芸協会<br>立教大学教授民族学博物館<br>三重県立博物館協議会長<br>四日市教育長<br>津市教育長<br>伊勢市教育長<br>神奈川県文化財保護審議会委員<br>三重県教育委員会社会教育課長<br>中部日本新聞社津支局長<br>滋賀県立短期大学教授<br>考古課長<br>日展画家 |
| 指導委員     | 滝 口 宏<br>中 川 成 夫<br>奥 平 英 雄<br>木 内 安 夫<br>古 江 静 江<br>古 江 亮 仁                                                                                                  | 早稲田大学教授<br>立教大学助教授<br>東京国立博物館<br><br>民族学博物館<br>川崎市教育委員会教育主事                                                                                                                            |
| 委員 琉球側   | 荻 堂 盛 進<br>外 間 正 幸<br>池 村 一 男<br>松 村 清 吉<br>池 村 正 義<br>下 地 恵 義<br>上勢頭 亨<br>仲 盛 毅<br>長 嶺 正 勝<br>金 城 聖 吉                                                        | 琉球政府文化財保護委員会事務局長<br>琉球政府立博物館<br>宮古教育委員会次長<br>宮古教育委員会教育主事<br>〃<br>池間島小中学校長<br>竹富島民芸家<br>八重山教育委員会教育主事<br>琉球石油KK調査部<br>小浜公民館主事                                                            |
| 展覧会事務局   | 松 島 博<br>西 浦 樹 一<br>孫 福 弘<br>青 木 信 生<br>角 田 保 考<br>内 田 英 二<br>中 林 幸 子<br>谷 本 幸 子<br>貝 発 玲 子<br>田 中 郁 子<br>古 江 信                                               | 三重県立博物館長<br>〃 事務長<br>〃 庶務係長<br><br>〃 職員<br>〃<br>〃<br>〃                                                                                                                                 |
| 展示会担当学芸員 | 古 江 信                                                                                                                                                         | 〃                                                                                                                                                                                      |

表2 沖縄文化展の資料出品目録

| No | 資料名           | 数量 | 小計 | 所蔵先     | 備考 | No  | 資料名            | 数量 | 小計  | 所蔵先             | 備考 |
|----|---------------|----|----|---------|----|-----|----------------|----|-----|-----------------|----|
| 1  | 頭巾            | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 61  | 供台             | 1  |     | 民族学博物館          |    |
| 2  | すでな           | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 62  | 柄杓             | 1  |     | 民族学博物館          |    |
| 3  | 花中着           | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 63  | えびかけ           | 3  |     | 民族学博物館          |    |
| 4  | 団扇            | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 64  | 紅型染衣裳          | 1  |     | 民族学博物館          |    |
| 5  | 頸飾            | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 65  | わらじ            | 1  |     | 民族学博物館          |    |
| 6  | 玉ほべる          | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 66  | 印籠             | 1  |     | 民族学博物館          |    |
| 7  | 勾玉            | 3  |    | 東京国立博物館 |    | 67  | 播かご            | 1  |     | 民族学博物館          |    |
| 8  | 簪             | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 68  | バナリ焼           | 1  |     | 民族学博物館          |    |
| 9  | すじ立て          | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 69  | 石敢当            | 1  |     | 民族学博物館          |    |
| 10 | 算盤            | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 70  | 帆              | 1  |     | 民族学博物館          |    |
| 11 | 剃刀            | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 71  | 火縄             | 1  |     | 民族学博物館          |    |
| 12 | 刃物            | 3  |    | 東京国立博物館 |    | 72  | 冠り物            | 1  |     | 民族学博物館          |    |
| 13 | 角宝蔵           | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 73  | 飯汁椀            | 2  |     | 民族学博物館          |    |
| 14 | 膚笥器           | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 74  | 平椀             | 1  |     | 民族学博物館          |    |
| 15 | 杓子            | 3  |    | 東京国立博物館 |    | 75  | 掛物             | 1  |     | 民族学博物館          |    |
| 16 | 大平            | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 76  | 小膳             | 1  |     | 民族学博物館          |    |
| 17 | 茶碗            | 5  |    | 東京国立博物館 |    | 77  | 位牌             | 1  |     | 民族学博物館          |    |
| 18 | 猪口            | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 78  | 獅子             | 2  |     | 民族学博物館          |    |
| 19 | 酎家            | 2  |    | 東京国立博物館 |    | 79  | 壺              | 1  |     | 民族学博物館          |    |
| 20 | 鉢             | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 80  | 糸車             | 2  | 33  | 民族学博物館          |    |
| 21 | 茶入            | 2  |    | 東京国立博物館 |    | 81  | 琉球通宝           | 2  |     | 東恩納家            |    |
| 22 | 密酥壺           | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 82  | 鳩目銭連束          | 1  |     | 東恩納家            |    |
| 23 | 水瓢            | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 83  | 鳩目銭(琉球)        | 83 |     | 東恩納家            |    |
| 24 | 水筒            | 2  |    | 東京国立博物館 |    | 84  | 鳩目銭(伊勢)        | 5  |     | 東恩納家            |    |
| 25 | 油注            | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 85  | 寛永通宝           | 1  |     | 東恩納家            |    |
| 26 | 酒瓶            | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 86  | 簪金             | 4  |     | 東恩納家            |    |
| 27 | 摺鉢            | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 87  | 簪銀             | 5  |     | 東恩納家            |    |
| 28 | 俎板            | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 88  | 簪アルミ           | 2  |     | 東恩納家            |    |
| 29 | マガイ           | 2  |    | 東京国立博物館 |    | 89  | 簪銅             | 1  |     | 東恩納家            |    |
| 30 | 鍋             | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 90  | 簪木             | 2  |     | 東恩納家            |    |
| 31 | 七輪            | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 91  | 簪鼈甲            | 2  |     | 東恩納家            |    |
| 32 | 釜             | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 92  | 朱塗鉢            | 1  |     | 東恩納家            |    |
| 33 | 置台            | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 93  | 朱漆文庫           | 1  |     | 東恩納家            |    |
| 34 | 釣人形           | 2  |    | 東京国立博物館 |    | 94  | 朱塗菓子器          | 1  |     | 東恩納家            |    |
| 35 | 将棋盤           | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 95  | 首里市街図          | 1  |     | 東恩納家            |    |
| 36 | 厨子甕           | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 96  | 冠り物            | 3  | 115 | 東恩納家            |    |
| 37 | 首里城花文鏡瓦       | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 97  | 八重山風俗図         | 14 |     | 鎌倉家             |    |
| 38 | 首里城花文平瓦       | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 98  | 沖縄風景           | 2  |     | 鎌倉家             |    |
| 39 | 殷元良筆 山水図      | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 99  | 紅型(型紙)         | 15 |     | 鎌倉家             |    |
| 40 | 王子按司大礼服並通常服装図 | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 100 | 紅型染布           | 20 |     | 鎌倉家             |    |
| 41 | 王女婦人大礼服並通常服装図 | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 101 | 流水菖蒲文衣         | 1  | 52  | 鎌倉家             |    |
| 42 | 大夫法服用図、内侍法服用図 | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 102 | 琉球王龍紋唐織衣       | 1  |     | 井伊家             |    |
| 43 | 一般平民礼服用図      | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 103 | 朱漆文庫           | 1  |     | 井伊家             |    |
| 44 | 山水堆錦硯箱        | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 104 | 朱漆尚家紋文庫        | 1  |     | 井伊家             |    |
| 45 | 描金東海盆         | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 105 | 黒漆尚家紋並王女紋螺鈿繪文庫 | 1  |     | 井伊家             |    |
| 46 | 朱漆茶誦盆         | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 106 | 朱漆茶盆           | 1  |     | 井伊家             |    |
| 47 | 菊堆錦食籠         | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 107 | 朱漆王女紋三重盆       | 3  |     | 井伊家             |    |
| 48 | 陶製組杯          | 5  |    | 東京国立博物館 |    | 108 | 黒漆螺鈿蒔絵机        | 1  |     | 井伊家             |    |
| 49 | 三人弁当箱         | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 109 | 朱漆鳳凰紋箱         | 1  | 10  | 井伊家             |    |
| 50 | 金泥絵茶庫         | 1  |    | 東京国立博物館 |    | 110 | 貝の湯沸かし         | 1  |     | 三重県立博物館収蒐出品(注1) | 保良 |
| 51 | 江(藍)型衣裳       | 4  |    | 東京国立博物館 |    | 111 | きり             | 1  |     | 三重県立博物館収蒐出品     | 小浜 |
| 52 | 琉球上衣          | 1  | 74 | 東京国立博物館 |    | 112 | 自在鈎            | 1  |     | 三重県立博物館収蒐出品     | 久松 |
| 53 | 山原船           | 1  |    | 民族学博物館  |    | 113 | 粟刈具            | 1  |     | 三重県立博物館収蒐出品     | 竹富 |
| 54 | 爬龍船           | 1  |    | 民族学博物館  |    | 114 | カラカサ           | 1  |     | 三重県立博物館収蒐出品     | 那覇 |
| 55 | 帆型風           | 1  |    | 民族学博物館  |    | 115 | 煙草入            | 1  |     | 三重県立博物館収蒐出品     | 池間 |
| 56 | 星形風           | 1  |    | 民族学博物館  |    | 116 | ブジョー           | 1  |     | 三重県立博物館収蒐出品     | 〃  |
| 57 | とんぼ風          | 1  |    | 民族学博物館  |    | 117 | 鞍              | 1  |     | 三重県立博物館収蒐出品     | 〃  |
| 58 | 人形風           | 1  |    | 民族学博物館  |    | 118 | 麩除             | 1  |     | 三重県立博物館収蒐出品     | 〃  |
| 59 | 琴             | 1  |    | 民族学博物館  |    | 119 | 網袋             | 1  |     | 三重県立博物館収蒐出品     | 〃  |
| 60 | 太鼓            | 1  |    | 民族学博物館  |    | 120 | きね             | 1  |     | 三重県立博物館収蒐出品     | 〃  |

| No  | 資料名      | 数量 | 小計 | 所蔵先         | 備考   | No  | 資料名            | 数量  | 小計  | 所蔵先         | 備考               |
|-----|----------|----|----|-------------|------|-----|----------------|-----|-----|-------------|------------------|
| 121 | 鍋蓋       | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 平良   | 181 | クバ笠            | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | ク                |
| 122 | ク        | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 石垣   | 182 | 刳舟             | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | 池間               |
| 123 | 穀物入れ     | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 新里   | 183 | 帆              | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | ク                |
| 124 | 荷網       | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 平良   | 184 | カイ             | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | ク                |
| 125 | 笠        | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 185 | ひっかけ           | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | ク                |
| 126 | ク        | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 186 | 引白             | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | 小浜               |
| 127 | ク        | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 187 | つき白            | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | 石垣               |
| 128 | ク        | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 188 | 引白             | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | 竹富               |
| 129 | ク        | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 石垣   | 189 | きね             | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | 石垣               |
| 130 | 籠        | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 新里   | 190 | みの             | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | ク                |
| 131 | 麦打具      | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 191 | うちわ            | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | ク                |
| 132 | 芋摩具      | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 192 | 帯              | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | 竹富               |
| 133 | ク        | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 竹富   | 193 | いも入れ           | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | ク                |
| 134 | 荷馬車鞍     | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 平良   | 194 | 書類入            | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | 小浜               |
| 135 | 除草具      | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 195 | 船旅行用箱          | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | 竹富               |
| 136 | 鋏        | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 196 | 除草用ヘラ          | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | ク                |
| 137 | 豆腐箱      | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 竹富   | 197 | 畑用ひっかけ         | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | ク                |
| 138 | 篋        | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 久松   | 198 | 漁業用            | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | 小浜               |
| 139 | 篋杓       | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 199 | 雑穀入れ           | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | 竹富               |
| 140 | あわび粟刈具   | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 竹富   | 200 | ひょうたん杓子        | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | ク                |
| 141 | 芋掘具      | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 平良   | 201 | 水汲み            | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | ク                |
| 142 | 水中眼鏡     | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 久松   | 202 | 穀物入れ           | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | ク                |
| 143 | 糸くり具     | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 新里   | 203 | 芋掘り具           | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | ク                |
| 144 | 糸まき      | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 204 | 蓋物             | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | ク                |
| 145 | 糸まきと具    | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 205 | 具頑具            | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | ク                |
| 146 | 地織おさ     | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 206 | 花笠             | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | 那覇               |
| 147 | ク        | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 狩俣   | 207 | ジーファー          | 1   |     | 三重県立博物館収蒐出品 | ク                |
| 148 | アダン葉物入れ  | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 新里   | 208 | チンチン馬          | 1   | 99  | 三重県立博物館収蒐出品 |                  |
| 149 | 箕        | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 下地   | 209 | 龍樋(石膏模型)       | 1   |     | 川崎市教育委員会    |                  |
| 150 | くばつるべ    | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 210 | 鬼瓦(ク)          | 1   | 2   | 川崎市教育委員会    |                  |
| 151 | アダン葉草鞋   | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 平良   | 211 | 紙本彩色首里那覇鳥瞰図    | 1   |     | 古江家         |                  |
| 152 | みの       | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 下地   | 212 | 紙本彩色琉球風俗絵      | 1   |     | 古江家         |                  |
| 153 | 木杓子      | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 池間   | 213 | 椰子グワア(ヤーン)     | 1   |     | 古江家         | 酒器<br>本瓦1<br>平瓦2 |
| 154 | ク        | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 214 | 首里城古瓦          | 3   |     | 古江家         |                  |
| 155 | くばづ      | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 下地   | 215 | 花染手中紙本彩色琉球風俗図巻 | 1   | 7   | 古江家         | 官古島              |
| 156 | のぞき水面眼鏡  | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 池間   | 216 | 紅葉白地水模様(子供用)   | 1   |     | 石川家         |                  |
| 157 | あずくや     | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 217 | 藍地水草模様         | 1   |     | 石川家         |                  |
| 158 | 魚具入      | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 218 | 黄地木綿梅紅葉模様      | 1   |     | 石川家         |                  |
| 159 | 水あかとり    | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 219 | 黄地絹地松竹梅模様      | 1   |     | 石川家         |                  |
| 160 | ク        | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 久松   | 220 | 手島織茶色          | 1   |     | 石川家         |                  |
| 161 | ク        | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 新(満) | 221 | 紅型風呂敷木綿大模様     | 1   |     | 石川家         |                  |
| 162 | もり       | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 池間   | 222 | 小片紅型木綿布        | 1   | 7   | 石川家         |                  |
| 163 | ク        | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 223 | 紅型衣裳           | 4   | 4   | 山辺家         |                  |
| 164 | ク        | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 224 | ジーファー          | 2   |     | 東京大学        |                  |
| 165 | 女子の下着    | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 225 | 陶器             | 1   |     | 東京大学        |                  |
| 166 | 種子入      | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 久松   | 226 | 小刀             | 1   |     | 東京大学        |                  |
| 167 | 漁獲具      | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 227 | 墨入             | 1   | 5   | 東京大学        |                  |
| 168 | 網針       | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 228 | 石器             | 25  |     | 早稲田大学       |                  |
| 169 | 飛魚網      | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 229 | 土器片            | 30  |     | 早稲田大学       |                  |
| 170 | ふかざり針    | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 230 | 貝製品            | 4   |     | 早稲田大学       |                  |
| 171 | かじき      | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 231 | 青磁断片           | 8   |     | 早稲田大学       |                  |
| 172 | まぐろ      | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 232 | 民具             | 12  |     | 早稲田大学       |                  |
| 173 | 弁当用籠     | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    | 233 | 沖縄写真           | 29  | 108 | 早稲田大学       |                  |
| 174 | 地機       | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 狩俣   | 234 | 紅型染め工程         | 1   | 1   | 女子美術大学      |                  |
| 175 | むしろ(スダレ) | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 平良   | 235 | 尚玉川子筆          | 2   |     | 沢田家         |                  |
| 176 | むしろ(藁)   | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 竹富   | 236 | 浦添王子筆          | 2   |     | 沢田家         |                  |
| 177 | 網袋       | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 石垣   | 237 | 漆器             | 3   | 7   | 沢田家         |                  |
| 178 | 海浜用わらじ   | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 池間   |     | 合計             | 524 |     |             |                  |
| 179 | 着物       | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | 石垣   |     |                |     |     |             |                  |
| 180 | クバ笠      | 1  |    | 三重県立博物館収蒐出品 | ク    |     |                |     |     |             |                  |

表3 各都道府県別慰霊塔建立一覧(建立年順)

| 建立年順 | 都道府県名 | 塔・碑名   | 建立年月日       | 建立場所                   | 建立者氏名          | 合祀柱数<br>(南方諸地域含む) |
|------|-------|--------|-------------|------------------------|----------------|-------------------|
| 1    | 北海道   | 北霊碑    | 1954年4月     | 糸満市米須嵩下原1448           | 北海道連合遺族会       | 640(40085)        |
| 2    | 和歌山県  | 紀乃国之塔  | 1961年11月30日 | 糸満市米須嵩下原1438           | 和歌山県           | (839)             |
| 3    | 秋田県   | 千秋の塔   | 1962年1月1日   | 糸満市字摩文仁ハナ上原649-1       | 秋田県            | 432(37,700)       |
| 4    | 愛媛県   | 愛媛之塔   | 1962年10月17日 | 糸満市字摩文仁ハナ上原664-2       | (財)愛媛県遺族会      | 2,077(2,077)      |
| 5    | 石川県   | 黒百合の塔  | 1962年11月7日  | 糸満市字摩文仁ハナ上原649-1       | 石川県            | 901(1,069)        |
| 6    | 群馬県   | 群馬の塔   | 1963年2月1日   | 糸満市字摩文仁ハナ上原662-2       | 群馬県遺族の会        | 850(30,771)       |
| 7    | 熊本県   | 火乃国之塔  | 1963年5月     | 糸満市字摩文仁ハナ上原649-4       | (財)熊本県遺族連合会    | (1,827)           |
| 8    | 長野県   | 信濃の塔   | 1964年4月1日   | 糸満市字摩文仁ハナ上原650-3       | 長野県            | 1,294(55,405)     |
| 9    | 京都府   | 京都の塔   | 1964年4月29日  | 宜野湾市字嘉数1067-1          | 沖縄京都の塔奉賛会      | 2,536(2,536)      |
| 10   | 兵庫県   | のじぎくの塔 | 1964年6月13日  | 糸満市字摩文仁ハナ上原662-3       | 兵庫県遺族会         | 3,073(3,073)      |
| 11   | 鹿児島県  | 安らかに   | 1964年11月    | 糸満市字摩文仁ハナ上原649-7       | 鹿児島県           | 2,582             |
| 12   | 青森県   | みちのくの塔 | 1964年11月11日 | 糸満市字摩文仁ハナ上原665-3       | 青森県遺族連合会       | 544(19,847)       |
| 13   | 茨城県   | 茨城の塔   | 1964年11月20日 | 糸満市米須嵩下原661-2          | 茨城県遺族連合会       | 610(約38,000)      |
| 14   | 滋賀県   | 近江の塔   | 1964年11月25日 | 糸満市字摩文仁ハナ上原664-3       | 滋賀県近江の塔維持管理会   | (1,697)           |
| 15   | 山形県   | 山形の塔   | 1965年2月6日   | 糸満市字真栄里ケル原1821-2       | 山形県            | 765(40,834)       |
| 16   | 大阪府   | なにわの塔  | 1965年4月26日  | 糸満市字摩文仁ハナ上原656-6       | 大阪府遺族連合会       | 2,400余(35,000余)   |
| 17   | 三重県   | 三重の塔   | 1965年6月26日  | 糸満市字摩文仁ハナ上原656-4       | 三重県            | 2,600(53,000)     |
| 18   | 岡山県   | 岡山の塔   | 1965年10月21日 | 糸満市字摩文仁ハナ上原664-1       | 岡山県            | 1,578(33,799)     |
| 19   | 愛知県   | 愛国知祖之塔 | 1965年11月    | 糸満市字摩文仁                | 愛知県            | 2,953(51,149)     |
| 20   | 富山県   | 立山の塔   | 1965年11月5日  | 糸満市字摩文仁ハナ上原657-2       | 南方戦没者沖縄慰霊塔奉賛会  | 872(14,872)       |
| 21   | 大分県   | 大分の塔   | 1965年11月17日 | 糸満市米須嵩下原1446           | 大分県遺族連合会       | 約1,430            |
| 22   | 宮崎県   | ひむかしの塔 | 1965年11月18日 | 糸満市米須西原138-1           | 宮崎県戦没者等慰霊奉賛会   | 1,848(31,237)     |
| 23   | 神奈川県  | 神奈川の塔  | 1965年11月26日 | 糸満市米須嵩下原662-5          | 神奈川県           | 1,678(40,680)     |
| 24   | 千葉県   | 房総の塔   | 1965年12月3日  | 糸満市米須嵩下原663-4          | 千葉県            | 1,586(35,694)     |
| 25   | 徳島県   | 徳島の塔   | 1965年12月5日  | 糸満市字摩文仁ハナ上原655-3       | 徳島県遺族会         | 941(1,597)        |
| 26   | 岐阜県   | 岐阜県の塔  | 1966年4月30日  | 糸満市字摩文仁ハナ上原656-55      | 岐阜県            | 907(26,831)       |
| 27   | 静岡県   | 静岡の塔   | 1966年4月30日  | 糸満市字摩文仁                | (財)静霊奉賛会       | 1,693(40,495)     |
| 28   | 長崎県   | 鎮魂長崎の碑 | 1966年9月     | 糸満市字摩文仁ハナ上原651-5       | 長崎県殉国慰霊奉賛会     | 1,800(35,000)     |
| 29   | 福井県   | 福井の塔   | 1966年10月17日 | 糸満市字摩文仁ハナ上原662-4,663-3 | 福井県英霊顕彰奉賛会     | 1,182(24,507)     |
| 30   | 佐賀県   | はがくれの塔 | 1966年10月17日 | 糸満市字摩文仁ハナ上原650-3       | 佐賀県遺族会         | 914(約28,000)      |
| 31   | 岩手県   | 岩手の塔   | 1966年10月20日 | 糸満市字摩文仁ハナ上原656-6       | 岩手県            | 653(34,860)       |
| 32   | 福島県   | ふくしまの塔 | 1966年10月26日 | 糸満市字摩文仁ハナ上原650-5       | 福島県遺族会         | 942(66,304)       |
| 33   | 山口県   | 防長英霊の塔 | 1966年11月6日  | 糸満市字摩文仁ハナ上原649-12      | 山口県沖縄戦没者慰霊奉賛会  | 1,043(24,447)     |
| 34   | 山梨県   | 甲斐の塔   | 1966年11月8日  | 具志頭村字具志頭須武座原1465-1     | 山梨県            | 524(22,048)       |
| 35   | 高知県   | 土佐之塔   | 1966年11月8日  | 具志頭村字具志頭須武座原1457       | 高知県            | 832(18,545)       |
| 36   | 栃木県   | 栃木の塔   | 1966年11月9日  | 糸満市字摩文仁ハナ上原642-3       | 栃木県遺族連合会       | 676(31,495)       |
| 37   | 埼玉県   | 埼玉の塔   | 1966年11月25日 | 糸満市米須嵩下原655-3          | 埼玉の塔管理委員会      | 1,040(28,031)     |
| 38   | 福岡県   | 福岡の塔   | 1966年12月5日  | 糸満市字摩文仁ハナ上原656-7       | 福岡県            | 4,055(4,055)      |
| 39   | 奈良県   | 大和の塔   | 1967年11月16日 | 糸満市米須嵩下原1448           | 奈良県            | 556(15,871)       |
| 40   | 宮城県   | 宮城の塔   | 1968年2月     | 糸満市字摩文仁ハナ上原651-6       | 宮城県            | 582(45,500)       |
| 41   | 香川県   | 讃岐の奉公塔 | 1968年5月18日  | 糸満市米須嵩下原1455-3         | (財)讃岐の奉公塔慰霊奉賛会 | 1,120(32,413)     |
| 42   | 広島県   | ひろしまの塔 | 1968年5月23日  | 糸満市米須嵩下原1447-2         | 広島県            | 1,270(34,634)     |
| 43   | 鳥取県   | 鳥根の塔   | 1969年3月28日  | 糸満市米須嵩下原1445-1         | 鳥根県遺族連合会       | 908               |
| 44   | 東京都   | 東京之塔   | 1971年10月27日 | 糸満市米須山城南コナ原568         | 東京都            | 6,500(103,000)    |
| 45   | 鳥根県   | 因伯の塔   | 1971年11月4日  | 糸満市米須山城南コナ原572         | 鳥取県            | 539(13,904)       |
| 46   | 新潟県   | 新潟の塔   | 1976年12月8日  | 糸満市字摩文仁                | 新潟の塔奉賛会        | 1,117(41,960)     |

表4 他県で開催された主だった沖繩に関する展示会(人文系)一覽

| No | 展示会名                                            | 会場                                                       | 開催形態                                                                                                                               | 期間(※貸出期間)                                                                                         | 展示内容                                                                    | 展示資料                                    | 備考                                      |
|----|-------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------|-----------------------------------------|
| 1  | 沖繩文化展                                           | 三重県立博物館                                                  | 主催：三重県立博物館・三重県教育委員会後援：文部省、文化財保護委員会、東京大学人類学教室、日本民族学博物館、早稲田大学、立教大学、女子美術大学、NHK、中部日本新聞社、川崎市教育委員会協賛：近畿日本鉄道、三重交通、大阪琉球物産幹線所、三重県婦人会、三重県遺族会 | 1982年4月6日～5月6日                                                                                    | 民俗、歴史資料を中心に展示                                                           | 237件524点                                |                                         |
| 2  | これが沖繩だ展                                         | ①東京・日本橋三越②名古屋・名鉄百貨店③大阪・近鉄百貨店(アベノ店)④福岡・岩田屋⑤熊本・鶴屋          | 主催：沖繩タイムス社・朝日新聞社後援：沖繩芸能協会、琉球政府立博物館、琉球政府文化財保護委員会<br>協賛：日本航空、琉球運                                                                     | ①1968年4月23日～28日②5月2日～8日③5月17日～22日④5月28日～6月2日⑤6月7日～12日                                             | 沖繩の歴史を戦前、戦中、戦後の3つの時期に分けて、総合的かつ系統的に紹介する展示。王府時代の美術工芸品、戦争遺品、戦後の民衆資料や写真等で構成 | 美術工芸品約90点、沖繩戦関係資料約100点、写真、戦後を含む戦後資料約50点 | 沖繩県立博物館(沖繩県博)貸出資料100点沖繩タイムス本社創立20周年記念行事 |
| 3  | 琉球の文化<br>沖繩美術展                                  | 徳川美術館                                                    | 主催：徳川美術館・中日新聞社<br>後援：琉球政府文化財保護委員会、名古屋市長・愛知県・岐阜県・三重県教育委員会                                                                           | 1968年4月27日～5月26日                                                                                  | 琉球の美術工芸品の展示(沖繩からは大編織コレクション、その他民芸館資料も含まれる)                               | 染物20点織物19点漆器44点漆器25点、陶磁器26点、書画4点        |                                         |
| 4  | 沖繩染織展                                           | サントリイ美術館                                                 | 主催：サントリイ美術館                                                                                                                        | ※1968年10月22日～11月22日                                                                               |                                                                         |                                         | 沖繩県立博物館(沖繩県博)貸出資料・染織品20点                |
| 5  | 沖繩の工芸                                           | 京都国立近代美術館                                                | 主催：京都国立近代美術館                                                                                                                       | 1974年10月1日～11月17日                                                                                 | 陶芸、漆芸、染織など沖繩の工芸全体の過去と現在を含めた展示会、現代作家26点の資料も含む                            | 染物44点織物82点陶器82点漆器53点、楽器21点              | 沖繩県博貸出資料・美術工芸43点                        |
| 6  | あれから35年一<br>鉄の暴風、沖繩<br>戦の全容「ひめ<br>ゆりの乙女たち」<br>展 | ①東京・上野松坂屋②名古屋松坂屋③大阪松坂屋④静岡松坂屋⑤千葉そごう⑥山形松坂屋⑦仙台藤崎⑧横浜松坂屋⑨那覇三越 | 主催：朝日新聞社・沖繩タイムス社                                                                                                                   | ①1980年7月16日～22日②7月24日～29日③7月31日～8月5日④8月7日～12日⑤8月22日～27日⑥8月29日～9月3日⑦9月12日～17日⑧10月9日～14日⑨10月18日～30日 | 男女学徒の生と死の記録を基に、19万人の犠牲者をだした沖繩戦の全容を語る歴史展示                                | 沖繩戦に関する一次資料、証言集など二次資料を含めて約120件          | 戦後35周年                                  |
| 7  | 琉球漆器展<br>未公開コレクション                              | 板橋区立美術館                                                  | 主催：板橋区立美術館・毎日新聞社<br>協賛：沖繩開発庁                                                                                                       | 1983年4月9日～5月8日                                                                                    | 従来「唐物」といわれた琉球漆器コレクションの展示                                                | 漆器110点                                  | 「復讐10周年記念」と銘打                           |
| 8  | 沖繩の美—風土<br>と美術工芸                                | 熊本県立美術館                                                  | 熊本県立美術館                                                                                                                            | ※1983年11月8日～12月11日                                                                                |                                                                         |                                         | 沖繩県博貸出資料・500点                           |
| 9  | 琉球尚王家秘宝<br>展                                    | 西部百貨店池袋店8階(西部アクト・フォーラム)                                  | 主催：西部百貨店池袋店                                                                                                                        | 1984年5月25日～6月6日                                                                                   | 尚家所蔵の秘藏品展                                                               | 衣裳28点漆器8点陶器3点刀2点、金工品2点紅型型紙              |                                         |
| 10 | 海上之邦おきな<br>わ                                    | 埼玉県立博物館                                                  | 主催：埼玉県立博物館                                                                                                                         | ※1986年10月24日～12月17日                                                                               |                                                                         |                                         | 沖繩県博貸出資料・歴史資料137点                       |
| 11 | 沖繩の雅び—琉<br>球王朝の美—                               | 名古屋城天守閣二階展示室                                             | 主催：名古屋城美術展開催実行委員会(名古屋市長・中日新聞社、東海テレビ放送、東海ラジオ放送、名古屋タイムス社、(株)名古屋城振興協会)                                                                | 1991年10月25日～11月24日                                                                                | 琉球漆器や染織を中心に展示                                                           | 67点                                     | 沖繩県博貸出資料・美術工芸25点                        |

|    |                           |                                          |                                               |                     |                                            |                                   |                                 |
|----|---------------------------|------------------------------------------|-----------------------------------------------|---------------------|--------------------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------|
| 12 | 海上の道—沖繩の歴史と文化—            | 東京国立博物館東洋館特別展示室<br>後援：沖繩県教育委員会<br>協賛：JCB | 主催：東京国立博物館・読売新聞社                              | 1992年1月7日～2月16日     | 考古学遺物をもとに南島の先史文化からグスク時代、琉球王朝の歴史と文化を体系化した展示 | 考古、歴史、美術工芸、民俗資料236点               | 「復讐20周年記念特別展」と銘打                |
| 13 | 海上の道—沖繩の文化—               | 名古屋博物館                                   | 主催：名古屋博物館                                     | 1992年2月17日～4月20日    | 沖繩の歴史と文化を通してアジアの中の沖繩の文化、日本文化を再考する展示会       | 歴史、考古、民俗、工芸資料199点                 | 沖繩県博貸出資料・歴史資料他85点               |
| 14 | 琉球王朝の美                    | 京王アパルト新宿店                                | 主催：沖繩県、(社)沖繩県物産公社                             | ※1992年4月27日～5月19日   | 沖繩の自然、歴史、文化を総合的に紹介する展示                     | 自然史、考古、歴史、美術工芸105件144点を中心に物産資料も展示 | 沖繩県博貸出資料・自然史、考古、歴史、美術工芸105件144点 |
| 15 | 琉歌—南のうたの心                 | 日本書道美術館                                  | 主催：(財)日本書道美術館                                 | ※1992年9月28日～12月7日   |                                            |                                   | 沖繩県博貸出資料・書道資料17点「復讐20周年記念」と銘打   |
| 16 | 沖繩ものがたり                   | 岡山城                                      | 主催：岡山市、山陽新聞社                                  | ※1998年9月20日～11月30日  |                                            |                                   | 沖繩県博貸出資料・自然・歴史資料61点             |
| 17 | 琉球王朝の美                    | 彦根城美術館                                   | 主催：彦根城美術館                                     | ※1998年10月13日～12月10日 |                                            |                                   | 沖繩県博貸出資料・歴史・美術工芸資料37点           |
| 18 | 紅型—琉球衣裳の美—                | 北海道立近代美術館・北海道立帯広美術館                      | 主催：北海道立近代美術館・北海道立帯広美術館                        | ※1994年6月28日～9月30日   | 沖繩の染ものを代表する「紅型」を中心とした展示                    |                                   | 沖繩県博貸出資料・紅型資料30点                |
| 19 | 沖繩の工芸美術展                  | 奈良県立美術館、長野県立信濃美術館、千葉県立美術館、千葉県立美術館        | 主催：奈良県立美術館、長野県立信濃美術館、千葉県立美術館                  | ※1995年6月20日～10月20日  | 沖繩の工芸の体系的展示                                |                                   | 沖繩県博貸出資料・工芸資料103点               |
| 20 | 南海の国・沖繩をたずねて—沖繩復讐25周年記念展— | 通信博物館                                    | 主催：通信博物館<br>協力：沖繩県立博物館、京都市美術館、国立科学博物館、沖繩通信博物館 | 1997年4月25日～5月11日    | 琉球切手やその原画を中心に展示                            | 325点                              |                                 |
| 21 | 沖繩のやきもの—南海のからの香り—         | 佐賀県立九州陶磁文化館                              | 主催：佐賀県立九州陶磁文化館                                | 1998年9月11日～10月25日   | 完品や考古資料を含めた「沖繩のやきもの」の体系的展示                 | 329点                              |                                 |
| 22 | 沖繩のやきもの展                  | 富山市豊牛人記念美術館                              | 主催：富山市教育委員会                                   | 1999年10月9日～11月28日   | 土器、パナリ焼、喜名・知花焼、八重山焼、古我知焼、薄田焼、壺屋焼           | 陶器74点                             |                                 |
| 23 | 尚王家と琉球の美展                 | MOA美術館                                   | 主催：MOA美術館協賛：日本航空                              | 2001年10月26日～11月21日  | 那覇市所蔵の尚家継承文化遺産の衣裳類40点と漆工品の展示               | 衣裳40点漆器65点出土遺物1件                  |                                 |
| 24 | 沖繩の染めと幻の花織—南の国の色とアサイン—    | サントリ—美術館                                 | 主催：サントリ—美術館                                   | 2002年2月12日～3月24日    | 紅型と花織の多彩な色彩と意匠の染織展示                        | 染織資料255点                          | 「返還30周年記念」と銘打                   |

## 小浜国民学校について

前田 真之\*

### Kohama Elementary School during World War II

Masayuki MAEDA\*

#### はじめに

戦前の教育史について語るとき、国民学校の時代は考察の対象として避けて通ることができない重要な時代である。

国民学校は、1941年(昭和16年)に開設されたが、それ以前の学校とは質的にも一線を画す重要な役割を持っていた。

まず第一に国民学校は、1941年3月に発布された国民学校令に基づき開設されたということである。国民学校令第1条には「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ錬成ヲ成スヲ以テ目的トス」(傍線は筆者による)と目的が定められ、太平洋戦争に向けて学校教育の体制を整えていくことに大きなねらいがあった。

第二に国民学校においては、義務教育の年限が、これまでの6年から初等科6年、高等科2年の計8年に延長されたことである。

第三に教科の内容が、国民科(修身、国語、国史)、理数科(算数、理科)、体錬(体操、武道)芸能科(音楽、習字、図画工作)で構成され、国民学校令施行規則第1条第5項により「各教科並ニ科目ハ其ノ特色ヲ發揮セシムルト共ニ相互ノ関連ヲ緊密ナラシメ之ヲ国民錬成ノ一途ニ帰セシムベシ」(傍線は

筆者による)と方向づけが成されている。

さてこのような性格づけが成されてスタートした国民学校であるが、その実際の様子は、どうであったろうか。残念ながらその当時の状況を知る手がかりとなる資料については、入手が困難な状況にある。その大きな原因としては、沖縄戦の激しさと戦後の占領政策の動きがあげられる。1945年10月22日に連合軍総司令部から出た指令すなわち「日本教育制度に対する管理政策に関する件」は、学校から超国家主義的・軍国主義的なものを排除する内容を含んでいた。そのためそのような内容を含む学校関係の資料等が焼却され、物的証拠を湮滅する動きが全国的に行われたことである。<sup>註1</sup>

沖縄については戦後の動向もさることながら、むしろ沖縄戦による焼失が大きく影響し、資料に基づく考察を困難なものにしている。<sup>註2</sup> 国民学校時代の学校教育を知る手がかりとなるのは、西平秀毅氏が著した「伊良部町教育史」(1977年、自費出版)及び「戦時下の沖縄教育」(沖縄時事出版社、1980年)の二著書に、那覇市教育委員会が編集した「那覇市教育史資料編」くらいのものである。市町村が発行した刊行物や学校の記念誌で触れる国民学校に関する記述は、ほとんどが西平秀毅氏の引用に負うところが大きい。この原因は、もともとなる資料にもとづ

※ 〒901-2203 沖縄県宜野湾市野嵩1丁目23番1号

\* Present Address 1-23-1, Nodake, Ginowan, Okinawa 901-2203, Japan

註1 戸田金一「国民学校 皇国の道」(吉川弘文館、1997年)4頁以下で、学校文書の焼却について触れている。

註2 「那覇市教育史 資料編」では、「那覇市内の国民学校の教育関係書類は、第二次大戦の沖縄戦で大半が焼失し」(401頁)とあるように、資料の入手の困難さを指摘している。

き各地域の国民学校の様子を明らかにすることが困難な状況にあることが起因している。西平秀毅氏は、まとめるにあたり「伊良部小学校沿革誌」、「佐良浜小学校沿革誌」のほか金城英浩氏の「伊良部国民学校経営案（昭和16年）」の資料に依拠しながら考察を行っている。

このような資料入手の困難性という問題をふまえたとき、国民学校の実相に迫るためには、どのような方法が必要となってくるのかが重要となってくる。

この方法としては、まず第一に現存する「学校沿革誌」を手がかりにしなが、各国民学校に共通するものを明らかにしていくことが必要となってくる。第二に国民学校時代の訓導や生徒から当時の様子について聞き取りを行い、共通するところとその学校の特徴とを明らかにし、資料の不十分さを補っていく作業が必要となってくる。拙稿「波照間と皇民化」（沖縄県立博物館「波照間島総合調査報告書」1998年）では、学校沿革誌をもとに波照間国民学校の状況について明らかにしてきたが、小浜国民学校については、「学校沿革誌」が1957（昭和32）年の火事による焼失のため、当時の訓導や生徒から聞き取ることが国民学校の実相に迫る唯一の方法となる。

## 小浜国民学校に関する聞き取りについて

### 当時の国民学校の校舎配置について

当時の国民学校の様子については、平成14年1月23日から25日にわたり平田清さん（当時国民学校の生徒）から聞き取りを行った。また平成15年2月26日には、宇保英一さん（昭和17年に小浜国民学校の訓導）、慶田盛正光さん（昭和17年に小浜国民学校の代用教員）から、翌27日には大久英子（旧姓。当時国民学校の生徒）、大盛哲雄さん、大盛キヨさん（いずれも国民学校の生徒）から聞き取りを行った。学校沿革誌が1957年に焼失のため学校における1年間及び1日の活動状況については分からない。この6名の方からの聞き取りをもとに、断片的な情報をつなぎ、点を線につなぐことが必要である。まず校舎の配置について図案化してみた。聞き取る側の不十分さゆえ、さらに聞き取りをふやし訂正していくことの作業ももちろん必要である。

下記の図1の小浜国民学校の校舎配置についてみると、①ご真影室が職員室と高等科1年の教室の間に設けられている。②各教室には神棚が設置され、入室の際、神棚へ向かって拝礼が行えるようになって

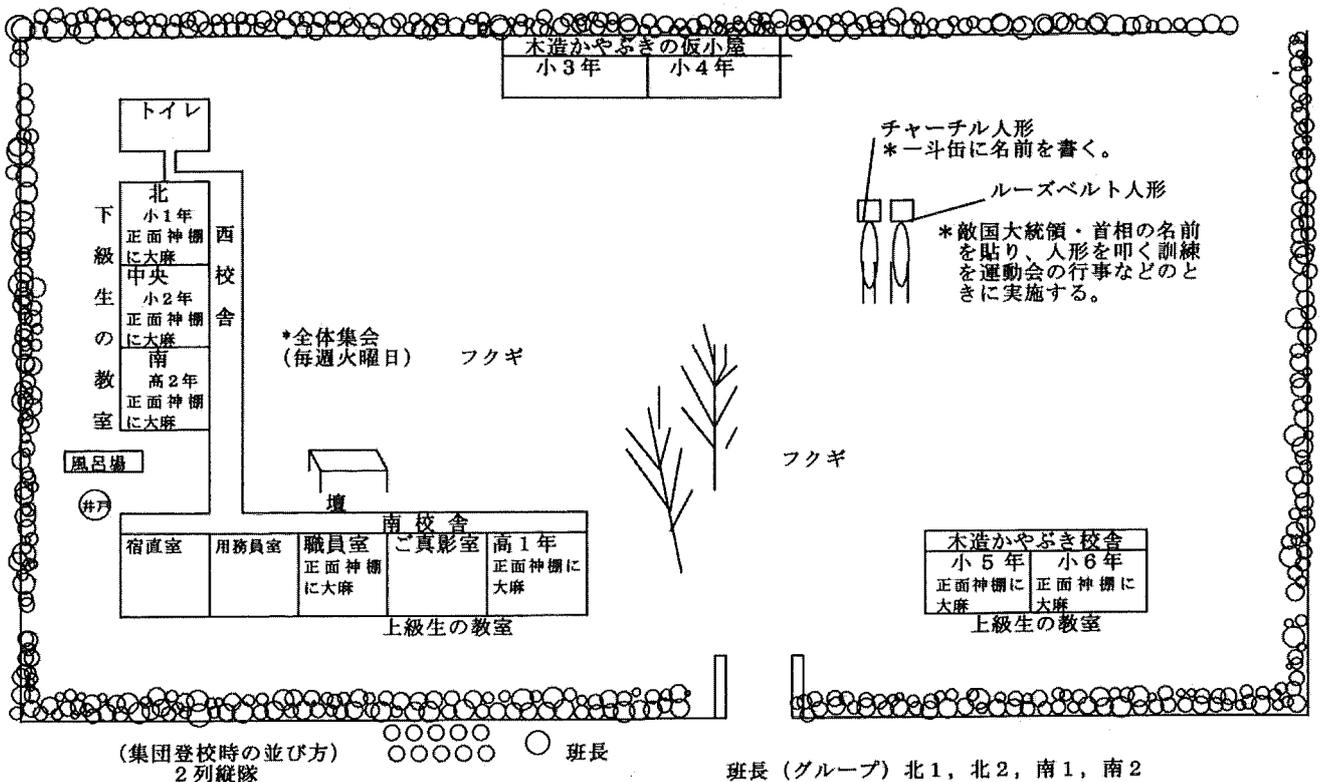


図1 小浜国民学校の校舎配置

ている。③全体集会は、毎週火曜日に行われている。  
④錬成の一環としてチャール人形やルーズベルト人形を運動場の一角に設け訓練を行っている。

### 聞き取りの内容

#### 1)大盛哲雄

- ・国民学校生14才当時よく覚えているのは、陸軍記念日・海軍記念日の遠足の思い出
- ・全校朝会（毎日）のときに宮城遙拝があった。
- ・毎週土曜日に全体訓練があり、行進を行った。
- ・教育勅語を暗誦できないものは、浜まで走らされた。
- ・大榎大尉の講話があった。
- ・学芸会では、「九段の母」「水平の母」が演じられた。

#### 2)大盛キヨ

- ・学芸会「水平の母」で、死ぬのは美德だというせりふがあったが、兵隊に行っている親からその役をさせるなどの申し出で役を交代。
- ・御真影の受け入れのとき、部落総出で対応した。女の先生は、紋付き袴、生徒は女生徒がセーラー服、男生徒はしもふりを着て迎える。
- ・当時の遊びのなかで、乃木大将や杉野大尉の歌が出てきた。
- ・当時の校長は、神様校長といわれた。
- ・大詔奉戴日には、各家庭で大麻に拝礼のあと、嘉保根御嶽に行き、拝礼してから登校した。



写真1 学校の裏から港の方へつながる道路。この道を利用して御真影が小浜国民学校へ下賜された。

#### 3)大久英子

- ・御真影が下賜されたとき、4年生は港の近くの方で、両側に1間おきに並んで迎えた（写真1）。当時婦人会長をしていた母は、留め袖を着て迎えた。

#### 4)宇保英一

- ・当時小浜国民学校の訓導であった。御真影は、戦火を免れるため、学校裏に仮の奉護所を設置して安置した（写真2）。

### 聞き取りの課題

小浜国民学校について聞き取りを行ったが、この中で課題も明らかになってきた。当時の国民学校の訓導であった宇保英一さんは、1915（大正4）年生まれで、当年88才である。国民学校のことについては、当時の学校教育との関わりで、教師の立場から学校の様子分かる数少ない聞き取り対象者である。波照間国民学校で行われていた1日の錬成行事、週中の錬成行事、月中錬成行事と比較しながら小浜国民学校の学校経営についても聞き取るつもりでいたが、詳しい内容は人間の記憶に限りがあり、課題が残った。これからの方向としては、宇保さんから継続して聞き取りを行い、小浜国民学校の経営がどのように行われていたのか、他の国民学校と比較しながら明らかにしていく必要がある。<sup>註3</sup>

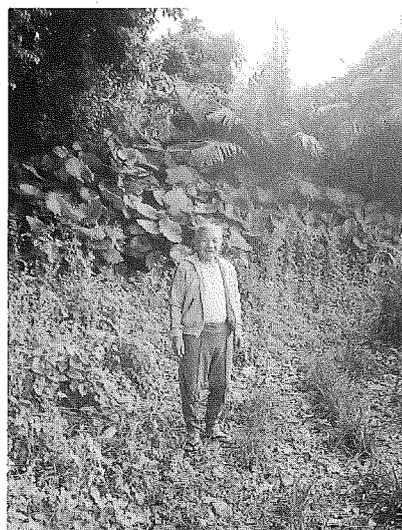


写真2 宇保さんが御真影を安置した場所



| 国民学校名             | 「我が学校経営の重点」久茂地国民学校学校長玉城常和                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|-------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 緒言                | <p>（前略）国民学校が、大乘の立場から基礎的問題を具体化して之を實踐部にまで及ぼさなければならぬ事を緊要とされてゐる今日、我が校の経営も検討に検討を重ね、場合によっては再出發をしなければならないことも豫想されるからである。この意味において筆を執るに當り学校経営案の形式を執らず特に重要問題のみを列挙して先輩のご指導を仰がんとするものである。</p>                                                                                                                                                                                                                                                 |
| 国民学校教育實施に對する態度    | <p>国民学校の本旨を體得するのは教育精神と内容、教育方法の統一原理、児童身心の發達と男女の特性個性の發揮、興味の喚起と自習の週間養成等随分だが、これ等諸問題を經營の實際に織込むにはどうしても態度を明確にしてその體制を整へて置くことが緊要の問題であらう。その意味に於いて左に列挙すれば</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>一、教職員の體制を整へること</li> <li>二、我々の頭にある教育精神と内容、教育方法等を一應検討すること</li> <li>三、学校學級の機構を替へること</li> <li>四、實施に當っては大乘の立場から物の見方考え方行ひ方をなすこと</li> <li>五、具體的實踐に當り誤れることが知れたら直ちに検討して再出發を辭せざる態度辭を堅持すること</li> <li>六、家庭との協力に一層努めること</li> </ol>                 |
| 学校學級の機構と教職員の體制    | <p>従来の國家觀世界觀人生觀を轉廻して愈々國體に對する信念を深くし、個人主義自由主義を排除し日本民族古來の姿に於いて獨時自の良心に歸り國民全體が大御心を體して一億一體となり八紘一宇肇國の代精神をけん顯するに當っては雄大な心を育成して大國民たり得る國家社會體制に學校を整へ置くことが喫緊の問題と考へられる。而してこれが實際問題について常に「全體」から出發して全體に歸入する」態度が必要となつて來る。今實際問題として左記四項について述べることにする。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 中心への統合<br/>.....</li> <li>(2) 有機的活動としての機構<br/>.....</li> <li>(3) 學級王国を是正<br/>.....</li> <li>(4) 學級の機構<br/>.....</li> </ol>                      |
| 師弟同行の關係           | .....                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| 指導過程及び指導形態        | .....                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| 學校過程社會の聯絡         | .....                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| 儀式及び學校行事の重視と教科の統合 | <ol style="list-style-type: none"> <li>一、儀式や行事は鄭重にして意味ある生活たらしめることで即ち神や佛に仕へる態度を以て神に奉仕し靈感を慰める氣持でなければならぬ。そのためには單に授業を休むとか校長の話聞くだけではいけない。子供自らが實踐することである。</li> <li>二、行事は多くしないこと</li> <li>三、儀式や行事の組織化國家的行事、民族的行事、學校行事等を一ヶ年に組織化する</li> <li>四、儀式や行事を教科の教授と統一内容により國語で授けべきか、修身で教へべきか或は兒童の實踐によるか定めて指導實際に當っては行事實踐型態が系統的に出來て居らんと困る。幸い那覇市では研究中であるから近く立案されることであらう。</li> <li>五、諸種の場における統合を考へること例家庭に於いて<br/>赤飯、國旗掲揚、神佛の前を清掃、家族揃って神社參拜</li> </ol>  |
| 團體訓練              | <p>指導の目標</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>一、全体から發出して全體に歸個人の養成</li> <li>二、如何なる團體に参加しても全體の中の1人として行動し得る全體性の養成實施</li> </ol> <ol style="list-style-type: none"> <li>一、學級として.....清掃</li> <li>二、班として.....朝の働、團體登下校</li> <li>三、町として.....作業、神社參拜</li> <li>四、全校として.....朝禮、冷水摩擦</li> </ol> <p>少年團の訓練は前記各種の團體に編成しつつ、訓練す。<br/>實際問題として<br/>御製朗唱.....全体 國民體操.....全體<br/>班別行進 視閲.....班別 歩行訓練.....學級單位<br/>分列.....町別 海行かばの歌.....全體</p> |
| 設備問題              | <p>那覇市、首里市国民学校設備標準が兩市の委員によって作製されている。この案の目標、内容等については機会を得て發表することゝし度い。「沖繩教育」306号、沖繩県教育会、1942年</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |

## 小浜島の染織概観

與那嶺 一子\*

### Overview of the Dyeing and Weaving in Kohamajima Island

Ichiko YONAMINE\*

#### はじめに

琉球王国時代、成人男女は米や織物等の納税が割り賦られていた。八重山嶋（八重山群島のこと）では特に上布を賦課され、廃藩置県後の地租改正まで貢納が義務付けられていた。その後、かつての税（貢布）は、伝統産業として、その技術は受け継がれ、「八重山上布」の名で、今日まで、織り続けられている。残された史料<sup>(註1)</sup>から、八重山の島々では上布、縮布、芭蕉布、木綿布などが織られていたことがわかっており、小浜島でも例外なく、15歳～50歳までの男女に対し、定納布として上布、中布、下布などが割り当てられていた。これらの織物が、どのように割り振られ、どのような技術であったのか、史料からは見えてこないが、小浜島に伝わる織物やその技術からは、その姿の片鱗をみることができる。

貢納を解かれた後、これらの織物の一部（上布）は石垣島の上布産業の中に組み込まれ、継続することになるが、小浜島における染織の特徴は、島内の祭りを彩る染織品として、島の生活の中で使われ、その技術を今日まで伝えていることである。今回、小浜島の調査で得た結果として、大正～昭和初期、現在の状況も含めて、小浜島の染織の姿を次のとおり報告したい。

#### 調査の時期と方法

調査は平成13年1月15日～17日（一回目）、平成14年3月15日～17日（二回目）の2回、小浜島に現存する染織品の調査と染織技術に係わる調査を行った。

染織品調査は、小浜民俗資料館、大嵩昭氏宅、花城キミ氏宅、稲福ウメ氏宅の4ヶ所で撮影と実測を行った。その結果、「小浜島に残る染織品一覧」の通り19件の染織品が確認できた。また、この一覧には、小浜島の染織を俯瞰するために、小浜島で製織された資料と、小浜島以外で織られ、縫製され、小浜島に伝わる資料等も含めた。また、調査時間の不足により、詳細調査ができなかった染織品は、その名称と素材、技法等の概略を一覧の中で紹介した。二回という限られた調査であったので、沖縄県教育委員会が実施した「県内所在染織品調査」<sup>(註2)</sup>で調査済みの小浜島の染織品（平成7年1月調査）については、今回、調査を省いたが、一覧では、小浜島の染織の全体像を知る意味で、「県内所在染織品調査」の染織品のデータも加え28件を報告した。

染織技術調査では、大嵩昭氏、花城キミ氏、慶田盛英子氏、白保シズ氏、宮良キミ氏<sup>(註3)</sup>から、聞き取りし、主に繊維素材、染料素材、染色方法等の調査を行った。藍製造と染色の技術は、小浜島に長く伝わる方法で、現在も藍造りが行われていることが確認できた。繊維、染料植物の生育の様子も撮影で

※ 〒900-0029 沖縄県那覇市旭町1番地（県南部合同庁舎8階）沖縄県教育庁文化施設建設室

\* Cultural Facilities Construction Office, Education Department, Okinawa Prefectural Government,  
1 Asahi-machi, Naha, Okinawa 900-0029, Japan

きた。

調査には、赤嶺新子氏（調査時：沖縄県立博物館臨任／平成13年）、山川暁氏（京都国立博物館研究員／平成14年）が同行、両氏より協力を得た。

## 調査の結果

結果を述べる前に、八重山地方の賦課された貢布について少し触れたい。貢布はカナイ（貢納）布と呼ばれ、それには、「御用布（グイフ）」と「定納（ジョウノウ）」の二種類があるが、それらがどのように賦課され、どのように織り納められたか詳細は不明である。定納布は白上布、白中布、白下布等で、紺嶋上布、赤嶋上布等は御用布であった<sup>(註4)</sup>。廃藩置県後も継続していた貢納の制度は、明治36年（1903）の廃止から百年が経過しており、これについての聞き取りを行う事はできなかったが、織物技術の調査や残された染織品により、大正～昭和初期まで小浜島では、芭蕉、苧麻、木綿、絹の繊維素材が使われ、藍、クール、フクギ等の植物により染色が施され、縞、緋、花織が織られていたことが確認できた。また、その現状についても確認を得た。小浜島に伝わる紅型の踊り衣裳や舞台幕は、当時の紅型技術や用途を知る手がかりとなるものである。

また、沖縄に舶載され、小浜島に伝わる染織品からは、小浜島の役人達がどのような染織品を身につけていたかをうかがい知ることができる。

今回の調査では、特に、小浜民俗資料館、稲福ウメ氏、大嵩昭氏、花城キミ氏、慶田盛英子氏、宮良キヨ氏、白保シズ氏のご協力を得たことを記してお礼申しあげる。

### 繊維素材

史料<sup>(註5)</sup>によると、小浜島に賦課された貢布には「白上布、白中布、白下布」「木綿布、縮布」等とあり、苧麻、木綿の繊維素材があった事がわかる。また、賦課された定納布や御用布には「芭蕉布」の名はみられないが、『与世山親方農務帳』<sup>(註6)</sup>には、芭蕉布の栽培方法が記されており、また「沖縄縣八重山嶋統計一覽略」<sup>(註7)</sup>（明治25年）には「小浜島の産物」として「芭蕉布 205反」とあり、芭蕉も小浜島に長くから伝わる繊維素材のひとつであった。

苧麻と芭蕉の糸績みの方法は、経糸用の繊維を二つに割り双方を縫り繋いでいく方法と、一本の繊維を縫り倒しながら繋いでいく方法の二つが確認できた。

### 1) 苧麻

苧麻は葉裏の白い、竹富苧（タケトミブ）と呼ばれる種類で、屋敷内や集落外にある畑で栽培されていた。現在も糸績みが行われ、島の祭などで着用する衣装を織る素材である。大正年間、八重山上布において台湾麻を使っていた時期があり<sup>(註8)</sup>、小浜島でも台湾から繊維を買い取り、糸を績んでいた。白地の苧麻織物（グンボウなども）は、大正末から昭和初め頃までは、海晒しが行われていた。上布仕上げの砧打ちも大正期頃までは行われていた（大嵩氏談）。

苧麻は、経緯とも同素材の場合の他に、木綿や絹、芭蕉などとの交織で反物が織られる場合もあり、小浜島では、換金の上布は勿論、家族のための着物が現在も織られ続けている。祭祀を司る神女のうち、ウツカサ（本ツカサ）の側に仕えるツカサの衣装は苧麻による（資料No12）。

### 2) 芭蕉

繊維を取る糸芭蕉（リュウキュウバショウ）は、苧麻同様に屋敷の裏側や集落外の畑で確認された。現在は、自然に育つ糸芭蕉から繊維を得る場合もあり、芭蕉糸の全てが栽培によるものではない。芭蕉布は、男性の黒い衣装（資料No3、4、13）やウツカサの衣装（資料No11）に使用されていた。

### 3) 木綿

今回の調査の結果、木綿の栽培と糸作りの技術は途絶えていたが、終戦後まで行われていた事を確認できた。栽培された木綿は綿繰り機（パナホーシヤマ）で種と繊維に分けられ、綿打ち用の弓で弾きながら不純物を除き綿を作る。その後、糸を紡ぎ、染色を施し布を織る一連の作業が行われていた（大嵩氏談）。また、バナヌヌ（木綿花織）も確認できた（資料No9）。この染織品はウツカサが着用したものであるが、バナヌヌは貢布として賦課される反物の一つでもあった<sup>(註9)</sup>。

### 4) 絹

養蚕は、戦前まで行われていた。石垣島や本島の那覇で養蚕講習を受けた後、島内で養蚕を行い、座

繰りによる糸取りを行っている。桑木は屋敷内に植えられていた。養蚕の主な目的は、他の八重山の島々と同様に繭出しであったと思われるが、自家用に織った反物で着物を仕立てた例もあったようだ。また、玉繭などは四角い真綿を作り換金していた（大嵩氏、花城氏談）。

帕（資料No 6、14）や大帯（資料No 2）には絹糸が使われているが、これは小浜島で繰糸されたものではない。

### 染料素材と染色

史料<sup>(註10)</sup>によると、八重山地方で使われた染料は「楊梅皮」「くうる根」「紅花」「藍」となる。明治以後の染料植物については、『八重山生活誌』<sup>(註11)</sup>に「藍、紅露（クール）、タラーハナ（紅花）、フクヌカー（福木の皮）、うっきん（鬱金）、ムンガー（楊梅皮）、ピキニー（ひる木）、トゥカージ（車輪梅）」と種類が述べられている。今回の調査では、藍、クール、ヒルギ、フクギの利用が確認された。少ない例だが、田泥による媒染等も行われていた。

藍：

小浜島では、ナンバンコマツナギ、タイワンコマツナギの二種類の豆科の植物を使い藍造りと染色が行われている。この藍は琉球藍、蓼藍に対してインド藍と一般に呼ばれている。この藍について、小浜島特有の呼称はない。大嵩氏の母親（明治20年代生まれ）や祖母（明治10年代生まれ）、慶田盛氏の祖母（明治10年代生まれ）の世代も藍造りをしており、王府時代の末期には既に現在と同様の藍造りが行われていたものと思われる。現在、藍造りを行っているのは大嵩氏、花城氏、成底氏、慶田城氏、大工氏、黒島氏、宮良氏、慶田盛氏など数名いるが、常に行っているのは、大嵩氏、花城氏、慶田盛氏、宮良氏であった。また、琉球藍の導入や需要の減少により、藍造りそのものも減ってきている。藍造りは、各個人によって、微妙に異なるが、基本的な製造方法と藍建て、染色方法を記しておく。藍造りは、かつては甕を用いていたが、現在は、ポリバケツで行われている。

#### 【基本的な藍造り方法】

① 枝ごと藍葉を刈り取る。葉の付いていない枝の

部分を切り落とす。

- ② 藍葉を容器に詰め込み、水を加える。
- ③ 一昼夜（18～24時間）おいて、発酵すると、藍葉を両手で絞りながら藍汁を出し、葉を取り除く。  
この作業は琉球藍製造ではみられない工程である。
- ④ この後、藍汁に石灰を投入し攪拌を行う。小さい容器で液を高く持ち上げながら攪拌する作業は液の色が黄色から紺色に変わるまでの、20～30分程度行う。
- ⑤ 攪拌後、翌日まで静置すると、藍の色素は石灰と化合し、容器の底に沈殿する。その上澄み液を捨て、沈殿した泥上の藍玉を別の容器に移しかえる。この作業を繰り返して、染色に必要な一定量をつくる。

#### 【藍建てと染色方法】

このようにして精製された藍は、染色のため、ガジュマルを焼いた木灰といっしょに水に入れ、藍建てを行う。その最に、琉球藍の藍建てで行われる泡盛や水飴等を入れる作業は全く行われぬ。藍がうまく建たない場合は、容器に直接藍葉を追加して入れる。藍葉の入れ方は個人によって異なる。

小浜島の祭り衣装に欠くことのできない黒に近い濃紺の色は3～4回の染色で得られ、芭蕉の根、アコウ、アクツの木の皮を煎じ、その液に浸し色止めを行う。

### 織の技法

小浜島で織られたと思われる「白上布、白中布、白下布」や「紺嶋細上布、赤嶋細上布」は平織であり、史料のみで確認される「縮布」も平織である。今回、資料として確認できたパナヌヌ（木綿花織／資料No 9）は、平織の地組織が浮く両面浮花織である。

かつて、御用布として一年間に賦課された五反には、白布、赤縞、紺縞、カナイ布、パナ布があったと言われ<sup>(註9)</sup>、このような花織布も含まれていたと思われる。小浜島では、現在、花織の技法は伝承されておらず、平織のみが受け継がれている。

## 織の模様

小浜島に残されている染織品は、紺、浅葱色或いは生成の無地、経縞模様、格子縞模様、格子縞に緯縞模様、経縞模様であった。

「聞き書き 御用布物語」<sup>(註9)</sup>によると「柄はピタマ、メヌハナ、アカスマメヌハナ、コンスマメヌハナ」とある。「アカスマ」「コンスマ」は史料の「赤嶋、紺嶋」の意であろうと思われる。

史料<sup>(註12)</sup>には、「赤苧地紺嶋赤島交布、紺地紺嶋赤島交布、水色地紺嶋赤島交布、赤苧地紺嶋布、赤苧地ニ赤嶋布」等の織物名もみられ、ここでいう「嶋」または「島」は「縞模様」の事ではなく、「縞」も含めた模様の意味だと解釈される。それによると「赤苧地紺嶋赤島交布」は、桃色地に紺や赤茶の縞模様という意味になる。「赤嶋」「紺嶋」はおそらく、白地茶縞、白地紺縞の事ではないかと思われる。史料からは、様々な色や縞模様の上布が織られていた事が推察されるが、王府末期には白地に紺や赤茶の縞上布が盛んに織られていた様子がうかがえる。

現在、小浜島で織られる織物の大半は、無地、縞が殆どで、縞は経縞或いは緯縞のみの模様で、かつての複雑な縞模様は織られていない。

註1 「酉年定納布并年貢割符 仕上世座」(翻刻：  
玻名城泰雄)

「八重山人頭税賦課台帳」新本家文書

P72 宮城文『八重山生活誌』昭和48年

「聞き書き 御用布物語」『八重山文化 第  
3号』東京・八重山文化研究会 昭和50年

註2 P157、176、177「沖縄県史料調査シリーズ  
第1集 沖縄県文化財調査報告書第126集 沖  
縄の染織 (I) 染織品編」沖縄県教育委員会  
平成9年

註3 大嵩昭：大正2年生 旧姓花城／平成15年1  
月、平成16年3月調査

花城キミ：大正14年生 旧姓登野／平成15年  
1月、平成16年3月調査

慶田盛英子：昭和6年生 旧姓大久／平成15  
年1月、平成16年3月調査

白保シズ：明治40年生／平成15年1月調査

宮良キヨ：旧姓花城 大嵩氏妹／平成16年3  
月調査

註4 「酉年定納布并年貢割符 仕上世座」(翻刻：  
玻名城泰雄)

P72 宮城文『八重山生活誌』昭和48年

「聞き書き 御用布物語」『八重山文化 第  
3号』東京・八重山文化研究会 昭和50年

「富川親方八重山島御用布座公事帳」

註5 「酉年定納布并年貢割符 仕上世座」(翻刻：  
玻名城泰雄)

註6 「与世山親方八重山嶋農務帳」

註7 「沖縄縣八重山嶋統計一覽略」(明治25年)：  
織物の欄に苧布(97反)木綿布(134反)芭  
蕉布(205反)とある。

註8 「八重山上布の勁敵が現はれる」八新 大正  
11年8月1日(「史料編 新聞集成」『竹  
富町史 第11巻』平成7年)：

「一略一 価格の低下を計り競争に応ぜんとして台湾麻を使用する為め品質低下の傾向となった」

註9 松原オナリ「聞き書き 御用布物語」『八重  
山文化 第3号』東京・八重山文化研究会  
昭和50年

註10 「富川親方八重山嶋仕上世例帳」

註11 P86宮城文『八重山生活誌』昭和48年

註12 「与世山親方八重山嶋公事帳」1890年(翻刻：  
玻名城泰雄)

小浜島の染織品一覧

平成14年3月現在

| No | 資料名               | 繊維    | 織技法    | 染技法    | 形態           | 産地     | 所蔵先     |   |
|----|-------------------|-------|--------|--------|--------------|--------|---------|---|
| 1  | 木綿紺地カカン           | 木綿    | 平織     | 糸染(藍)  | 下裳<br>(カカン)  | 舶載品か   | 稲福義男    | * |
| 2  | 大帯                | 絹     | 経五枚縺子  | 糸染     | 帯            | 舶載品か   | 稲福義男    | * |
| 3  | 芭蕉紺地着物(朝衣)        | 芭蕉    | 平織     | 糸染     | 着物(男物)       | 不詳     | 稲福義男    |   |
| 4  | 芭蕉紺地着物(朝衣)        | 芭蕉    | 平織     | 糸染     | 琉装の着物        | 不詳     | 大嵩昭     | * |
| 5  | 木綿仕立帯             | 木綿    | 平織     | 糸染(藍)  | 帯            | 不詳     | 大嵩昭     | * |
| 6  | 帕                 | 絹     | 平織(縮緬) | 糸染(朱)  | 帕            | 舶載品か   | 大嵩昭     | * |
| 7  | 木綿芭蕉経縺着物          | 木綿・芭蕉 | 平織     | 糸染(藍)  | 着物           | 小浜島    | 大嵩昭     |   |
| 8  | 苧麻紺地着物            | 苧麻    | 平織     | 糸染(藍)  | 着物           | 小浜島    | 大嵩昭     | * |
| 9  | 木綿紺地花織スディナ        | 木綿    | 両面浮花織  | 糸染(藍)  | 胴衣<br>(スディナ) | 小浜島    | 小浜民俗資料館 | * |
| 10 | 木綿白地下裳(カカン)       | 木綿    | 平織     | 白無地    | 下裳<br>(カカン)  | 小浜島    | 小浜民俗資料館 | * |
| 11 | 芭蕉着物              | 木綿    | 平織     | 白無地    | 琉装の着物        | 小浜島    | 小浜民俗資料館 |   |
| 12 | 苧麻白地格子に緯縺着物       | 苧麻    | 平織・格子  | 糸染     | 着物           | 小浜島    | 小浜民俗資料館 |   |
| 13 | 芭蕉紺地着物            | 芭蕉    | 平織     | 糸染(藍)  | 琉装の着物        | 小浜島    | 小浜民俗資料館 |   |
| 14 | 帕                 | 絹     | 平織(縮緬) | 糸染(赤紫) | 帕            | 舶載品か   | 小浜民俗資料館 |   |
| 15 | 苧麻型付着物            | 苧麻    | 平織     | 型染     | 着物           | 生地は小浜か | 花城キミ    | * |
| 16 | 木綿浅地着物            | 木綿    | 平織     | 糸染(藍)  | 着物           | 小浜島    | 花城キミ    | * |
| 17 | 苧麻紺地着物            | 苧麻    | 平織     | 糸染(藍)  | 着物           | 小浜島    | 花城キミ    | * |
| 18 | 木綿紺地縺(経縺)着物       | 木綿    | 平織・経縺  | 糸染(縺)  | 着物           | 小浜島    | 花城キミ    | * |
| 19 | 芭蕉無地着物            | 芭蕉    | 平織     | 白無地    | 着物           | 小浜島    | 花城キミ    |   |
| 20 | 木綿花色地震枝垂桜文様紅型衣裳   | 木綿    | 平織     | 型染     | 琉装の着物        | 不詳     | 小浜南部落   | * |
| 21 | 木綿花色地震枝垂桜文様紅型衣裳   | 木綿    | 平織     | 型染     | 琉装の着物        | 不詳     | 小浜南部落   |   |
| 22 | 木綿黄色地牡丹桐鳳凰文様紅型衣裳  | 木綿    | 平織     | 型染     | 琉装の着物        | 不詳     | 小浜南部落   |   |
| 23 | 木綿黄色地牡丹桐鳳凰文様紅型衣裳  | 木綿    | 平織     | 型染     | 琉装の着物        | 不詳     | 小浜南部落   |   |
| 24 | 苧麻紺地丸文様松竹梅文様紅型舞台幕 | 苧麻    | 平織     | 筒描き    | 幕            | 不詳     | 小浜南部落   |   |
| 25 | 苧麻紺地松竹梅鶴亀文様紅型舞台幕  | 苧麻    | 平織     | 筒描き    | 幕            | 不詳     | 小浜南部落   | * |
| 26 | 木綿花色地松竹梅流水文様紅型衣裳  | 木綿    | 平織     | 型染     | 琉装の着物        | 不詳     | 小浜北部落   | * |
| 27 | 木綿花色地松竹梅流水文様紅型衣裳  | 木綿    | 平織     | 型染     | 琉装の着物        | 不詳     | 小浜北部落   |   |
| 28 | 苧麻紺地松竹梅鶴亀文様紅型舞台幕  | 苧麻    | 平織     | 筒描き    | 幕            | 不詳     | 小浜北部落   |   |

凡例

- この一覧は、平成14年3月までに確認された小浜島の染織品である。
- 資料No1～19は、平成13年、14年の調査結果である。
- 資料No20～28は平成7年、沖縄県教育庁文化課が行った県内染織品所在調査の結果である。
- 数量は、一点。寸法の単位はcm
- \*印の資料は、次ページで写真と詳細データを掲載
- 織密度は1cm間の経糸、緯糸の本数で、タテ×ヨコで示した。

## 附) 染織品の図版とデータ

資料 No : 1

資料名称: 木綿紺地カカン

寸法: 丈89.3 胴回り102.6

繊維素材: 木綿

織技法: 平織 (織密度: 19×11)

染技法: 糸染 (藍)

形態: 下裳 (カカン)

所蔵: 稲福義男

備考: 南風川田於奈利着用。仕立ては七枚剥ぎ。一枚は布幅の半分。布幅107.2cm。布幅が大きく舶載品の可能性がある。

紐には次の三種類の布が使われている。

①浅地苧麻 (甘いZ撚り)

②木綿格子縞 (経緯ともZ撚り)

③型染 (糊防染・浸染/経緯とも木綿のS撚り/文様: 市松、斜格子のあられ)



資料 No : 2

資料名称: 大帯

寸法: 幅15.0 長さ436.0

繊維素材: 絹

織技法: 経五枚縞子

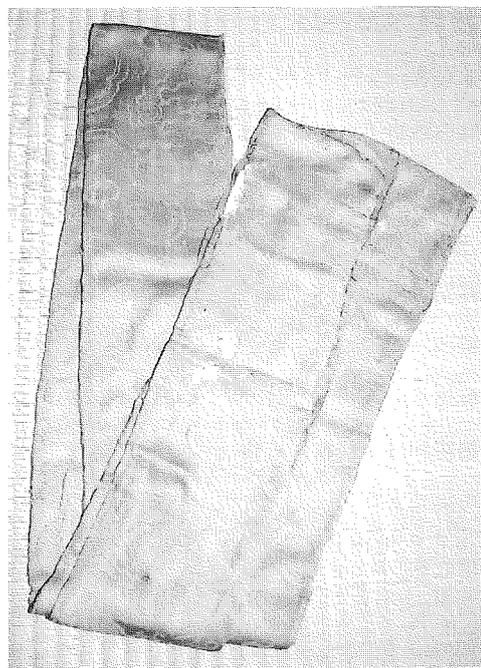
染技法: 糸染 (染料は不詳)

形態: 帯

所蔵: 稲福義男

備考: 竹富町指定有形文化財

帯の芯は白の苧麻布。幅30cmの緞子を半分に折り、輪にして縫製。緞子は片方は織り耳、もう一方は裁ち目であるため布幅は不明。文様は瑞雲に四爪龍。緞子は舶載品。



資料 No : 4

資料名称: 芭蕉紺地着物 (朝衣)

寸法: 丈136.9 衿71.8

繊維素材: 芭蕉

織技法: 平織 (織密度: 28×13)

染技法: 糸染 (藍)

形態: 琉装仕立の着物

所蔵: 大嵩昭

備考: 小浜島で織られたものかどうか不明。着物は王府時代の男性の正装で、帕 (資料No 6) を被る際に着用。



資料 No : 5

資料名称 : 木綿仕立帯

寸 法 : 幅15.6 長さ170.6

繊維素材 : 木綿

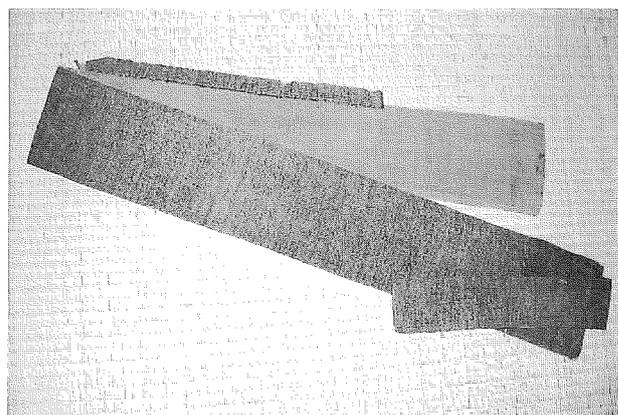
織 技 法 : 平織 (織密度 : 22×15)

染 技 法 : 糸染 (藍)

形 態 : 仕立帯

所 蔵 : 大嵩昭

備 考 : 小浜島で織られたものかどうか不明。



資料 No : 6

資料名称 : 帕

寸 法 : 頭19.4×20.8 高さ7.7

繊維素材 : 絹

織 技 法 : 平織 (縮緬)

染 技 法 : 糸染 (朱)

形 態 : 帕

所 蔵 : 大嵩昭

備 考 : 大嵩家の四代前の加武多寿 (カブター : 享年88歳) が筑登之の位に就いたときに被ったもの。保存状態が悪く、竹を組んで作られる天の芯は欠損し、布帛は底に落ち込む。後頭部下の襷状部分は芯となる板ごとはずれている。



資料 No : 8

資料名称 : 苧麻紺地着物

寸 法 : 丈121.5 衿59.8

繊維素材 : 苧麻

織 技 法 : 平織 (織密度 : 14×14)

染 技 法 : 糸染 (藍)

形 態 : 着物 (和服仕立)

所 蔵 : 大嵩昭

備 考 : クンジのブーキン。大嵩氏が藍染めし製織。戦前 (昭和初期)、主人のために仕立てたもの。



資料 No : 9

資料名称：木綿紺地花織スディナ

寸法：丈123.0 衿57.0

繊維素材：木綿（手紡ぎの単糸：Z撚）

織技法：両面浮花織（織密度：26×19）

染技法：糸染（藍）

形態：胴衣（スディナ）

所蔵：小浜民俗資料館

備考：明治末～大正期。慶田盛正光氏祖母（ウーツカサ：祭祀を司る）が着用。スディナは八重山地方に見られる長めの胴衣のことで、下裳（カカン）と対で着用する。潤年の祭祀の最に紺地のスディナとカカンを着用。

木綿糸は手紡ぎの単糸で小浜島にて紡がれたものと思われる。



資料 No : 10

資料名称：木綿白地下裳（カカン）

寸法：丈87.5 胴廻り97.0

繊維素材：木綿

織技法：平織

染技法：白無地

形態：下裳（カカン）

所蔵：小浜民俗資料館

備考：明治末～大正期。慶田盛盛光氏の祖母（ウーツカサ：祭祀を司る）が着用。資料No9のスディナと対をなして着用。幅33.5～34.5cmの布を12枚継いで仕立てられる。裾回りは395.0cm。



資料 No : 15

資料名称：苧麻型付着物（カタチキ）

寸法：丈112.0 衿64.0

繊維素材：苧麻

織技法：平織（織密度：18×12）

染技法：型染（白地型）

形態：着物

所蔵：花城キミ

備考：花城氏の実母、登野貞氏（小浜島佐久伊嶽のツカサ）の旧蔵品。戦前のもの。布は小浜島で糸績みされ、製織され、型染は沖縄本島で行ったと思われる（花城氏談）。仕立ては和琉折衷。



資料 No : 16

資料名称 : 木綿浅地着物

寸 法 : 丈129.0 衿70.0

繊維素材 : 木綿

織 技 法 : 平織 (織密度 : 24×21)

染 技 法 : 糸染 (藍)

形 態 : 着物

所 蔵 : 花城キミ

備 考 : 花城氏が製織。祝い着。木綿の糸は経緯ともに購入したもの。製造した藍で染色。



資料 No : 17

資料名称 : 苧麻紺地着物

寸 法 : 丈136.0 衿65.5

繊維素材 : 苧麻

織 技 法 : 平織 (織密度 : 14×18)

染 技 法 : 糸染 (藍)

形 態 : 着物

所 蔵 : 花城キミ

備 考 : 花城氏が製織。豊年祭用の衣装。男性用。製造した藍で染色。



資料 No : 18

資料名称 : 木綿紺地緋 (経緋) 着物

寸 法 : 計測なし

繊維素材 : 木綿

織 技 法 : 平織・経緋 (織密度 : 24×20)

染 技 法 : 糸染 (緋)

形 態 : 着物

所 蔵 : 花城キミ

備 考 : 花城氏が製織。実母 (登野貞氏) が織った着物と類似の柄。緋名はコトノウマー (琴の馬)。糸は購入したもの。



資料 No : 20

資料名称 : 木綿花色地震枝垂桜文様紅型衣裳

寸 法 : 丈129.0 衿69.0

繊維素材 : 木綿

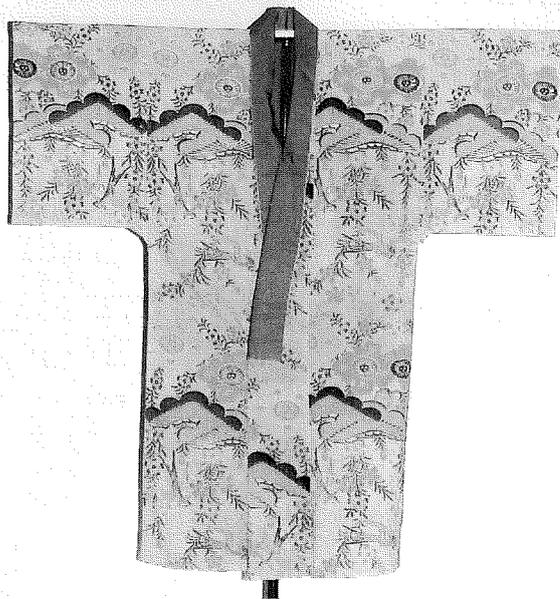
織 技 法 : 平織 (織密度 : 32×19)

染 技 法 : 型染 (白地型)

形 態 : 着物 (琉装仕立)

所 蔵 : 小浜南部落

備 考 : 結願祭の踊り衣裳。片面染。染めは王府時代末期の首里か。裏地は紫地ブロードで、平成5年頃仕立て直す。



資料 No : 25

資料名称 : 苧麻紺地丸文様松竹梅文様紅型舞台幕

寸 法 : 丈189.0 幅477.0

繊維素材 : 苧麻

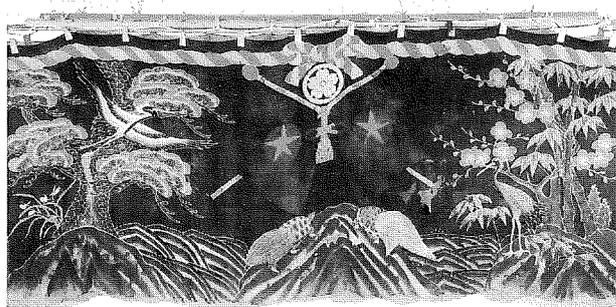
織 技 法 : 平織 (織密度 : 12×10)

染 技 法 : 筒描き

形 態 : 幕

所 蔵 : 小浜南部落

備 考 : 昭和初期に製作。中央の星部分は、日章旗を墨で塗り潰しされてる。戦後、そこは星型に染め直す。最近、再度、元の日の丸に染め戻す。資料写真は平成7年のもの。



資料 No : 26

資料名称 : 木綿花色地松竹梅流水文様紅型衣裳 (バティン)

寸 法 : 丈132.0 衿71.5

繊維素材 : 木綿

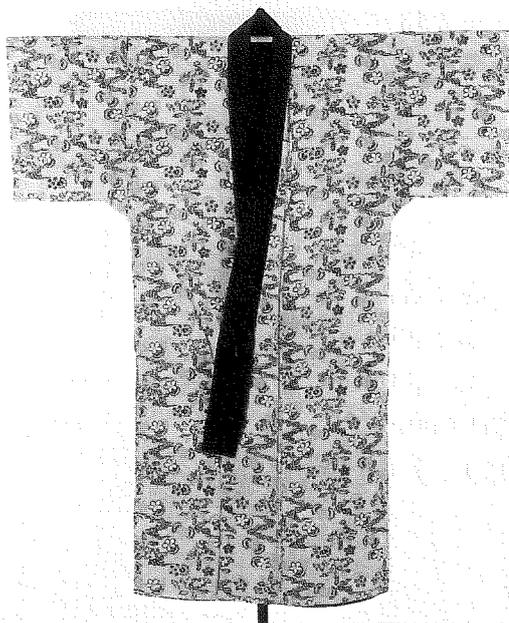
織 技 法 : 平織 (織密度 : 20×14)

染 技 法 : 型染 (白地型)

形 態 : 着物 (琉装仕立)

所 蔵 : 小浜北部落

備 考 : 結願祭の踊り衣裳 (ウービキ)。染めは王府時代末期の首里か。裏地は濃紺地木綿。高那部落 (西表島) がマラリヤで全滅したので小浜島へ持ち帰ったもの。



## サトウキビ栽培と島の暮らし

玉 城 善 哲\*

### Sugar Cane Cultivation and Life on Kohamajima Island

Yoshitetsu TAMAKI\*

#### はじめに

小浜島には、小浜節で名高い海拔99.4mのウフダキ(大岳)があり、起伏に富んだ地形をしている。ウフダキ頂上からの眺望は、風光明媚で、晴れた日には与那国を除く八重山群島の島々を一望に見渡すことができる。

島は、畑地や水田はもとより保安林、竹林、草地からなり、「小浜節」に「小浜ている島や 果報ぬ島やりば」の歌詞があるように、昔から自給自足のできる果報の島と謳われてきた。総世帯数は277世帯(字小浜253世帯、字細崎24世帯)、人口は546人(男275人、女271人)(平成15年12月現在)、農家戸数は約80戸~90戸で推移している。

農業は、さとうきびを中心に畜産(和牛の子牛生産)との2本柱からなっている。農地の基盤整備も、昭和51年に竹富町最初の土地改良事業がスタートし、小浜島のテナ原地区(42ha)が実施され、以後、ミニ総合パイロット事業(38ha)や大岳地区土地改良事業(97ha)等で合計177haの農地整備がされ、さとうきび栽培を中心にした計画的な土地利用が推進されている。また、近年、ふるさとUターン組の若年層による畜産農家が増え、島の丘陵地を利用した和牛の放牧も盛んになり、畜産が急激に伸びてきた。

漁業は、クマンザキ(細崎)集落(24世帯67人:男35人、女32人)で営まれ、近海漁業での刺し網漁、

栽培漁業(モズク、貝類)、稚魚の放流事業等が主に営まれている。一方観光事業は、ヤマハのリゾートホテルはいむるぶし(南十字星の意)の長期滞在型宿泊施設やユニマットグループゴルフ場ハイムルミラージュカントリークラブ、マリンレジャー(観光ダイビング・シュノーケリングなど)の盛況により観光客も年々増加している。また、NHKによる朝のドラマ「ちゅらさん」の放映により、小浜島が全国へ大々的に紹介され、観光入域客数も急激に増えてきた。さらに、夏場になると、小浜島の北の海上に浮かぶ無人島の嘉屋真島は、リゾートアイランドカヤマとして、海水浴やキャンプ場、野生化したウサギとのふれあい等、修学旅行や一般旅行者の人気スポットになっている。リゾートブームの波に乗って島の暮らしが変容していくことに対する島の中の評価は賛否両論である。島の地形や景観が著しく変貌し続ける小さな島に生息している動植物の生態系や自然環境の破壊が危惧されることは述べるまでもないであろう。

この報告書は、[サトウキビ栽培と島の暮らし]という視点から調査し、島嶼の暮らしの一考察であることと、十分な聞き取りができなかったことをあらかじめお断りしておく。

#### 小浜島の位置と地形

小浜島は、行政区が八重山郡竹富町に属し、石垣

※ 〒903-0823 沖縄県那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

\* Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

島より南西に17.7 km、西表島の東約2.5 km離れた位置にあり（図1）、周囲は13.49 km、面積が814 haある。竹富町を構成する島嶼には、沖縄県第二の大きさを誇る西表島をはじめ、波照間島、黒島、小浜島、竹富島、新城上地島、新城下地島、鳩間島、由布島、外離島、内離島、中御神島、嘉弥真島などがある。その中でも小浜島は海岸線が複雑で地形も起伏に富んでいる。地形的に観ると、島の中央部にある大岳をのせるドーム状丘陵の部分と、その南東の標高32.6mを最高とする丘陵と島の南西に位置する標高34mを最高とする丘陵との三つの部分に分けることができる。これらの丘陵のいずれもが周縁部で傾斜を急にしている。特に、大岳をのせる丘陵の北側の斜面は急な傾斜で海に臨んでいる。地質的には、島の中央部の安山岩と東部の砂岩などが基盤をなし、北部の海岸と東部及び南部の海岸付近は、隆起サンゴ礁の琉球石灰岩で形成されている。

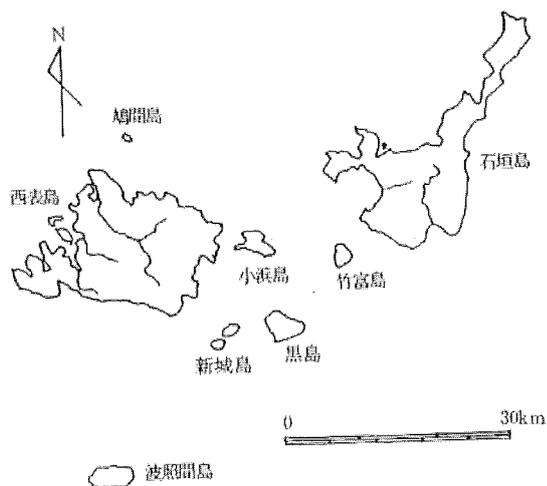


図1 小浜島位置図

### 小浜島の自然環境

八重山諸島は、気候的には亜熱帯海洋性気候にあって、年平均気温は約23.3度と比較的暖かく、最低気温でも10度を下る日はきわめて少ない。年間の降雨量は2,600mmで、7月から9月にかけて年間約3～4個ほどの台風が接近し、集中的に降雨をもたらす（表1）。部落の集落地では、台風による塩害や風よけとしての防風林が見られる他に琉球石灰岩の石垣やヒンプンも見ることができる。

表1 小浜島に近い竹富島の月平均気温と降水量  
平成11年度版「竹富島の概要」（西表島測候所）

| 月         | 1     | 2     | 3     | 4     |
|-----------|-------|-------|-------|-------|
| 平均気温 (°C) | 17,6  | 18,1  | 19,8  | 22,6  |
| 降水量 (mm)  | 172,3 | 161,4 | 153,2 | 163,6 |

| 月         | 5     | 6     | 7     | 8     |
|-----------|-------|-------|-------|-------|
| 平均気温 (°C) | 25,2  | 27,2  | 28,4  | 27,0  |
| 降水量 (mm)  | 210,6 | 196,1 | 193,2 | 244,4 |

| 月         | 9     | 10    | 11    | 12    |
|-----------|-------|-------|-------|-------|
| 平均気温 (°C) | 27,0  | 24,9  | 22,1  | 19,1  |
| 降水量 (mm)  | 248,1 | 222,8 | 224,1 | 152,9 |

### 小浜島の土壌

小浜島の土壌は、90%以上が国頭マーヅで占められており、大岳周辺と北側丘陵地、島の南東部に位置するヤマハリゾート「はいむるぶし」周辺からシュガーロード（「ちゅらさん」の通学路）周辺と島の南西部の丘陵地が国頭マーヅの土壌（黒塗り部分）である。島尻マーヅは、県道210号小浜線の通る字小浜の集落を中心にその周辺に広がっている。カニク（海成沖積土壌）の土壌は、東部と南部の海岸線付近と大岳北側の三カ所に散在している（図2）。

### 国頭マーヅ土壌

この土壌は、土色が赤黄色系で有機質に乏しく、土壌流亡を生じやすい性質のある酸性土壌である。土壌に酸性の度合いが強くなると根の働きを直接妨げて養分の吸収を悪くし、作物に害をあたえる。この土壌は酸性土壌であるため、パイナップルや茶樹、果樹などの好酸性作物の栽培には適しているが、サトウキビの栽培も盛んである。一般的に地力が低く、施肥量を減ざると作物の生育に大きく影響する。

### 島尻マーヅ土壌（隆起サンゴ礁石灰岩土壌）

この土壌は、土色が赤黄色系統で中性ないしアルカリ性を呈し、珊瑚石灰岩が風化してできた土壌である。この基岩になっている石灰岩は、土層の層厚の変化も大きく、場所によっては基岩が地表近くまで露出しているところも見られる。構造上保水力が

小さいだけでなく、根の伸長を阻害されたり、干ばつの被害を受けたりすることが多く、農作物の生産を安定させるには、土層の薄い場所には客土したり、かんがい用水を施したりする必要がある。土壌の色ではやや国頭マーヅと似ているが、肥沃度や肥料分を保持する能力（保肥力）においては島尻マーヅが優っている。栽培される作物はサトウキビを主体にしてイモ類、野菜類が多い。

#### カニク

海岸に面した沖積地にみられる砂質土の土壌で、沖縄ではカニクと呼んでいる。アルカリ性を呈する

が養分含量が少なく、海岸地帯のカニク畑で生育している株だしサトウキビに養分欠乏が生じる場合がある。一昔前の小浜島では、カニクの利点である保肥力を生かして水稻栽培が盛んに行われていた。

#### 小浜島のサトウキビ栽培

小浜島の農業変遷を大別すると、第二次世界大戦前の農業、大戦後の農業、本土復帰後の農業に分けることができる。

戦前の島における農業は、主に水稻、さつまいも、麦類、豆類等の食料農作物を中心に、サトウキビの

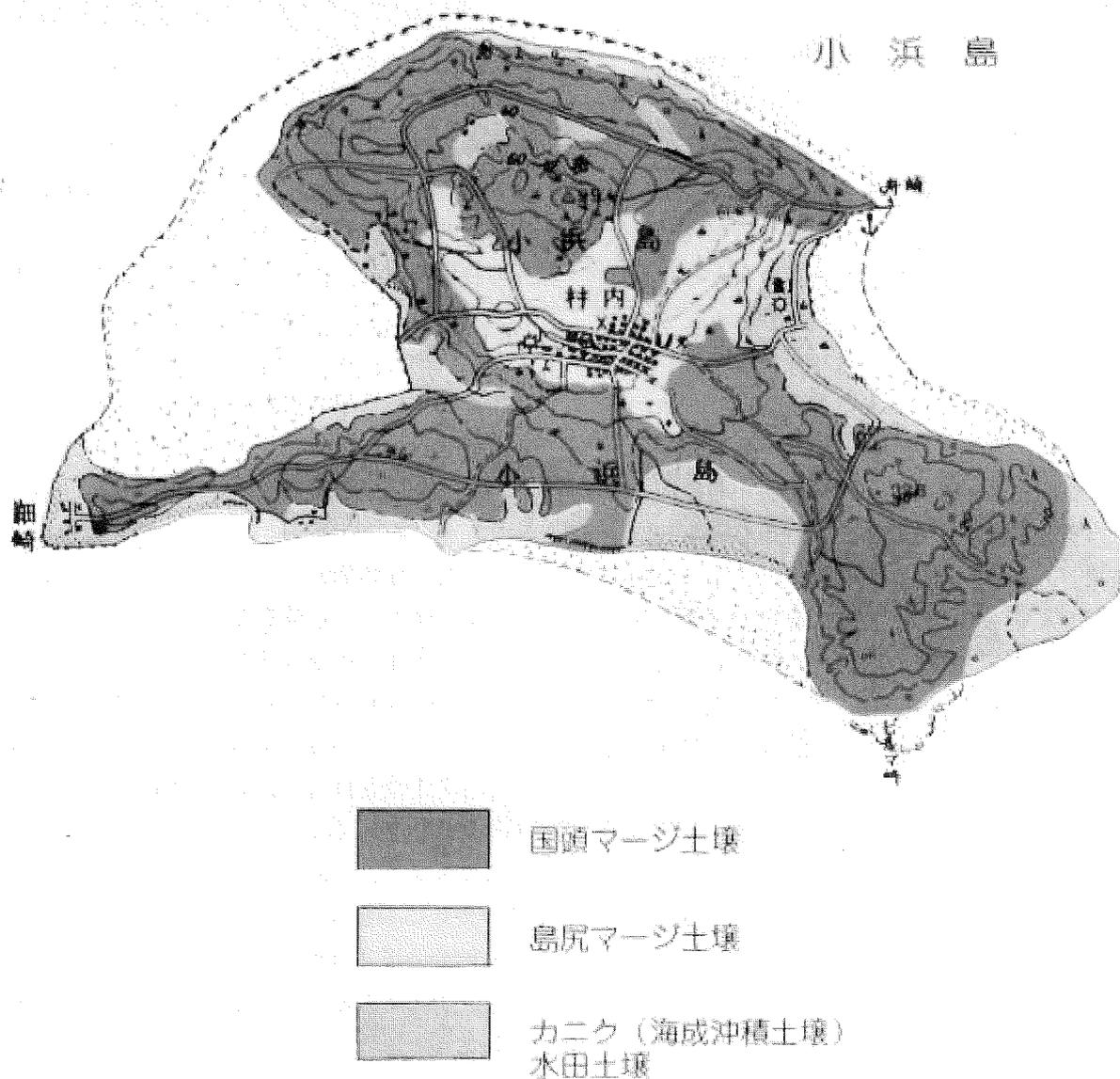


図2 小浜島の土壌分布

生産が行われ、多種多様な作物が栽培されていた。

戦後（1950年代）になると、価格の安い海外からの食料農産物の輸入などの影響を受けて穀物生産が激減し、サトウキビやパインナップルの原料農作物が普及した。

本土復帰後は、農道の整備やかんがい施設、農用地開発などの公共事業が推進された。土地改良事業では、1期目に島の南西に位置する丘陵地（通称：テンナバル）、2期目に南東に位置する丘陵地（通称：ハインダバル<南風田原>）、3期目に大岳周辺丘陵地（通称：コーキバル）が整備された。

## 糖業

明治14年（1881）沖縄県庁よりサトウキビの苗三株が八重山地域（石垣島）に移入され、大正時代になって、そのサトウキビの苗（読谷山種）を、小浜島に移入栽培し、増殖普及したのが小浜島での糖業の始まりである。昭和5年（1930）には沖縄県の奨励品種の大茎種が優良種として普及し、栽培面積も増大していった。小浜島は、昭和5年～9年にかけて、動力圧搾製糖工場が施設され、これと平行して改良窯が考案されるのに伴い、糖業は軌道に乗り、生産高も増加し、安定した唯一の換金作物として農業経営の基盤をなすに至った。太平洋戦争中は、食糧作物増産のためにサトウキビ栽培は減産し、殆ど糖業は全滅寸前の状態であった。戦後、島における食糧事情の好転に伴い、換金作物の復興が叫ばれ、サトウキビ苗の増殖生産と島外からの苗移入などに努めた結果、サトウキビは大幅に増産し、小型の動力製糖工場が施設され、小浜島での糖業が再会される運びとなった。その後、昭和37年（1962）、大洋漁業（株）が島にある小型製糖工場を買い上げて50t工場を創立し、昭和47年（1972）までに11期操業するが、経営困難を理由に昭和48年（1973）に解散する運びとなった。島での製糖工場が廃止になると、サトウキビ栽培で生計を立てている栽培農家の死活問題ともなり、対策を協議した結果、小浜島で工場を買い取ることが決議され、竹富町当局からの補助金1,500万円を受けて、昭和49年（1974）2月、照島糖業株式会社（資本金500万）が設立された。操業開始当初の48年・49年期は、原料不足のために片番操業という変則的な操業を続けながら原料増

産を図り、49・50年期からは正常に操業できるまでとなった。工場設備の老朽化もあるが、設備改善の工事を年次的に実施しながら、昭和63年（1988）9月、照島糖業株式会社から小浜糖業株式会社（資本金4,957万円）（写真1）に社名変更をして現在に至っている。

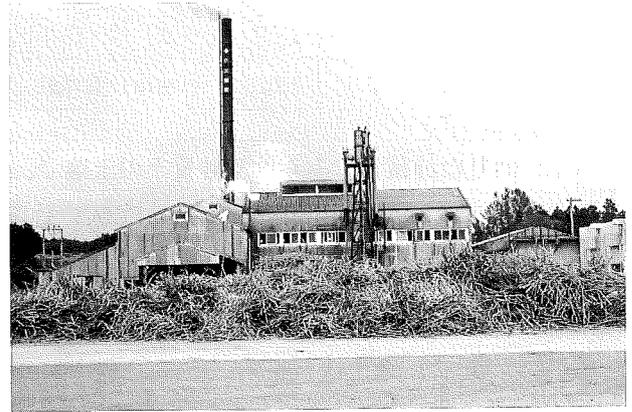


写真1 小浜糖業全景

## サトウキビ栽培

サトウキビは、根で吸収した養水分と葉で光合成した炭水化物を使って、成長しながら糖分を茎に蓄積する作物である。従って、収量と品質は、根と葉の多少や活力によって決まることになる。

### 1) 耕起及び整地

耕起と整地は根の活力を高めるための作業である。耕起は、パワーショベル（写真2）やトラクター等で行い、耕土の深さは、40cm～80cmを目度に留意しながら行う。耕土した土壌は破碎し、土壌を保全する面から承水路を設ける等の排水対策も肝心である。小浜島の国頭マージは、酸性土壌である。土壌の酸性、アルカリ性の強さや反応を表すのにpH（ペーハー）を用いる。pHの目盛りは0～14まであり、7を中性として、数字が小さくなると酸性度合がだんだん強くなり、逆に7から数字が大きくなるにしたがってアルカリ性の度合がだんだん強くなることを表す。土壌は、雨期が長くなると酸性化していく。これは、土壌の表面部分の塩基（カルシウムイオン、マグネシウムイオン等）が雨で洗い流されて水素イオンに置き換えられるためである。土壌が酸性化すると根の働きを直接妨げて養分の吸収を悪くし、作物に害をあたえる。小浜島では酸性土壌が多く、耕起

時に堆きゅう肥を施用したり前作に緑肥作物を栽培するなど、土壌pH5、5～6.5程度をめやすくして有機物の補給に努めることが単収増加につながると思われる。



写真2 耕起用パワーショベル

## 2) 畝立てと植え付け

畝立て作業（植溝掘り）と植え付けの作業は、以前はスコップを使って、畝幅をスコップの長さ（約1m）に採り、人力で植溝を掘り、採苗をした後に植え付けと踏み付けをする工程での人力による重労働の作業であった。現在では、畝立てと植え付け・踏み付けの作業工程を二通りの方法で行っている。ひとつは、中型トラクター（通称：ブルトラ）に運転手（オペレーター）の他に一人の植え付け作業員が乗り込み、畝立てをしながら、カゴに準備されたサトウキビの苗（短茎でチョッピングされている。）を畝に落としていく方法である。作業は、畝立てと植え付けを同時に行い、覆土と踏み付けは植え付け完了後人力で施している。もう一つの方法は、大型トラクターにオペレーターと植え付け作業員が乗り込み、大型トラクターのプランターにセットされた長茎のサトウキビをカットしながら畝に落とし、同時に覆土と踏み付けを実施して植え付け作業の工程を進めていく方法である。トラクターによる畝幅は約145cm、植溝の深さは約25cmである（写真3）。現在ではサトウキビ栽培農家の80%が機械化による畝立て・植え付けの同時作業を取り入れている。

小浜島で栽培されているサトウキビは、沖縄県で1994年に奨励品種となった農林8号が多い。農

林8号は、早期高糖性品種で耐風性の高い品種であるが、株出しでの茎の揃いが多少低くなる。島の南東部に位置するハインダバル（南風田原）のカニク地は、砂質土で水田土壌の肥沃地であり、農林8号の栽培には適しており、茎の伸長が早く、梢頭部まで2.5m～3mもある長茎のサトウキビを観察することができた。



写真3 植え付け後のサトウキビ畑

## 3) 植え付け時期

サトウキビの植え付け時期には春植えと夏植えがある。春植えは、サトウキビの刈り取り作業と併行しながら、株の切り替え地を耕起し、2月上旬頃から3月下旬頃までに植え付けを終了する。夏植えは、4月から6月にかけて作付け地の耕起と整地をして乾燥させた後、8月上旬頃から9月下旬頃までに植え付けをする。島におけるサトウキビの栽培型は、夏植えと株出しが殆どで、春植えは僅かである（表2）。

## 4) 施肥

サトウキビ栽培には、葉や茎の生育を促進したり、根や茎を丈夫にして、暑さや寒さに対する耐候性、病害虫に対する抵抗性を高めるためにチッソ（N）、リンサン（P）、カリウム（K）の化学肥料が多く使用される。国頭マージ（酸性土壌）では、地力を高め、作物の生育バランスを保つために、島尻マージやジャーガル土壌よりも化学肥料の施肥量が多くなる。ジャーガル土壌の夏植えと株出しの施肥量を面積あたりで比べてみると、チッソで約1.3～1.5倍、リンサンで約2.5倍、カ

表2 45/53年期作型別植付面積 単位 (ha)

|         | 夏植え  | 春植え | 株出し  |
|---------|------|-----|------|
| 45/46年期 | 49,2 | 1,8 | 45,5 |
| 46/47年期 | 30   | 0   | 24   |
| 47/48年期 | 47,9 | 0,2 | 9,3  |
| 48/49年期 | 21   | 0   | 7    |
| 49/50年期 | 20   | 0   | 15   |
| 50/51年期 | 35   | 0   | 16   |
| 51/52年期 | 55   | 0   | 28   |
| 52/53年期 | 49   | 0   | 19   |

リウムで約3.5倍も多く使用している。サトウキビ栽培で化学肥料だけを使用すると、地力がさらに低くなり、収量や品質にも大きな影響がでてくるのは言うまでもない。サトウキビは生育期間が長いので、国頭マージ土壤の地力を高めるためには、堆きゅう肥、緑肥等を増肥し、土壤中の腐食を多くして土の構造や性質を生産性の高い土壤に変えていくことが重要である。腐植は植物の遺体（根、茎、葉など）を腐らすのに役立つ土中の微生物の死体がもとになっている。堆きゅう肥や緑肥を土に施すことによって、土と土の結びつきが大きくなり、空気や水の通りも良くなるので作物根の伸長が促進される。また、多くの雨が降っても、土のすき間を通して過剰な水が地下へ流れていき、土壌流出等の湿害を受けることも少なくなる。特に国頭マージ（酸性土壌）の多い小浜島では、農作地での活力を高め、生産性を向上させる

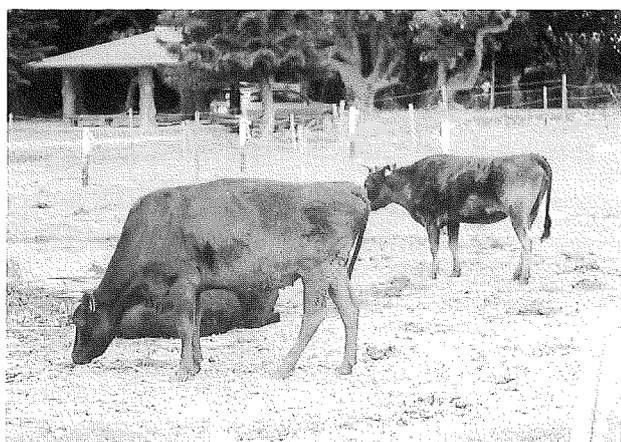


写真4 放牧地での和牛

ためには、畜産（写真4）によって生まれる堆肥の利用や緑肥作物の計画的な輪作等が重要になると思われる。

### 5) 培土

培土には平均培土と高培土がある。培土の時期としては、夏植えの場合、平均培土が10~11月、高培土が2~4月に施される。培土は、サトウキビが倒伏するのを防止するためと茎や根の活力を高めるために行われる作業である。培土が早すぎたり、遅すぎたり、干ばつ時に作業したりすると、茎や根に損傷を与えて生育を抑制する場合があるので十分な注意を払う必要がある。

培土作業は、主に、小型のトラクター（24馬力未満）で行われる（写真5）。小浜島にはトラクターが約31台あり、27台が小型トラクター（通称：ブルトラ）である（平成15年度竹富町役場調査）。字小浜は、小型トラクターの個人所有率が高く、培土作業も個人で行っているところが多い。また、最近では、島でサトウキビ栽培に従事している農家（85戸）の高齢化もあり、作付け地の耕起から植え付け、肥培管理、収穫作業までの一切を農業生産法人小浜島ファームに委託する農家も増えつつある。



写真5 小型トラクターによる高培土

### 6) 除草

雑草は、養水分を吸収するだけでなく、日光を遮断し、サトウキビの分けつ茎の発生を抑制して茎数を減少させるとともに減収をもたらす。小浜サトウキビ栽培地では、雑草を押さえる工夫とし



写真6 夏植え後の間作

て、夏植え後に畝間を利用した作物栽培（間作）を見ることができる（写真6）。

### サトウキビの収穫

サトウキビは、上、中、下部節位のブリックス差が最も小さくなったときに収穫する。未熟の蔗茎は、下部節位のブリックスが上部節位より高く、過熟の蔗茎は逆に、上位節位が下部節位よりも高くなる。従って、刈り取り作業は、品質の高いほ場から計画的に収穫し、刈り取ったサトウキビは直ちに工場へ搬出して鮮度の保持に努めることが良質の黒糖づくりにつながる。

#### 1) サトウキビ生産高の推移

小浜糖業（株）における、昭和50/51年期から平成13/14年期までの原料処理量は、約130,615吨で、年期平均は、約4,838吨である（小浜糖業資料参照）。そして、サトウキビ生産農家一戸当たりの生産高平均は、約55～60吨で推移している。サトウキビの植え付け作業、肥培管理、収穫作業等の重労働量、農業従事者の高齢化から考えると、一戸当たりの生産高の数字の高さには驚きである。

#### 2) 刈り取り作業

製糖期の小浜島は、活気に満ちあふれている。製糖期の島は、昔懐かしいムチャの臭いが漂って、心癒される思いがする。筆者の出身地が、当時、沖縄本島でも有数のサトウキビ生産地であった旧三和村である。部落にはサーターヤーがあり、製糖期になると学校帰りにサーターヤーに立ち寄

り、知恵を絞りながらシーザー（黒糖づくりの熟練職人）からムチャを頂いたものである。

小浜島では製糖期になると、サトウキビ畑で刈り取り作業に精出す小集団のグループを見かけることが多い。キビ刈り作業をしている若年層の小集団グループのほとんどが、県外出身者で構成されている（写真7）。



写真7 キビ刈り作業中の若者

地元沖縄の若者が重労働となるサトウキビの刈り取り作業を敬遠する中で、黙々と作業している姿を見ていると、現代社会の様々な状況が頭の中をよぎっていくのを感じた。県外の若者達が季節労働者となり、製糖期の小浜島でキビ刈り作業要員として働く仕組みや方法について調査してみると、4通りあることがわかった。

- ①職業安定所の紹介による小浜糖業での賃金労働
- ②農業生産法人小浜島ファームでの賃金労働
- ③キビ栽培農家の直接雇用による賃金労働
- ④宿泊無料、食事付きの民宿、「ふるさと農場倶楽部」（通称：援農隊）での無賃労働

小浜島ではサトウキビの刈り取り作業に収穫機を導入していない。収穫機（ハーベスタ等）を導入しない大きな理由に、製糖工場の原料処理能力（1日50吨）と工場設備の老朽化が揚げられる。それとともに、新鮮な原料によって生まれてくる品質の高い黒糖を製品化する過程（写真8、9）でのバランスが考えられていると思われた。

小浜島でのキビ刈り作業は、手斧でサトウキビ



写真8 小浜糖業での黒糖の袋づめ作業



写真10 サトウキビを運ぶトラクター



写真9 小浜糖業（株）の小浜島名産黒糖



写真11 サトウキビの下に敷かれたロープ

を倒した後、鎌を使って梢頭部を切り落とし、枯れ葉を取り除きながらサトウキビ畑の中にひと山ずつ置いていく。一束ずつ束ねる作業は一切しない。一本一本積み重ねてひと山（約500kg）になったサトウキビは、道路近くの畑内に敷かれたロープの上に中型のトラクター（通称：ブルトラ）で運んでいき、製糖工場まで運搬する大型トラックに作業を引き継いでいく（写真10、11）。

### 3) サトウキビの運搬

サトウキビは、大型トラックに装備されたユニットで吊り上げて荷台に載せられ、製糖工場まで運ばれていく（写真12、13）。サトウキビの積み込み作業は、大型トラックの運転手（オペレーター）と助手が一緒になって行うことが多い。製糖工場に運ばれてきたサトウキビは計量され（写真14）、ブリックス検査を受けて、製糖工場構内のサトウキビ置き場の作業員によって手際よく搬入順にま

とめられていく。

### 4) 畑小屋

小浜島では以前より少なくなったが、畑小屋を見かける（写真15、16）。畑小屋のことを小浜では、ハタキヤーと言っている。ハタキヤーが現在も存在していることは、稲作が盛んだった頃の名残である。細崎で見かけることはできなかったが、小浜では大岳周辺と島の南東部で見ることができた。1953年7月8日発行の八重山毎日新聞の紙面に小浜島生態紀（上）の記事がある。新聞記事によると、「特産物はやはり米。一期、二期米で年間六十万斤を収穫する。田圃は120町歩で主として天水田で……」とある。面積約119ヘクタールで約360屯（一斤は約600g）の米を収穫していたことになる。米の一俵が約60kgなので、約6,000俵になる。ところが、昭和38年（1963）の大干ばつ以来、サトウキビ増産ムードに後押し



写真12 積み荷作業する大型トラック

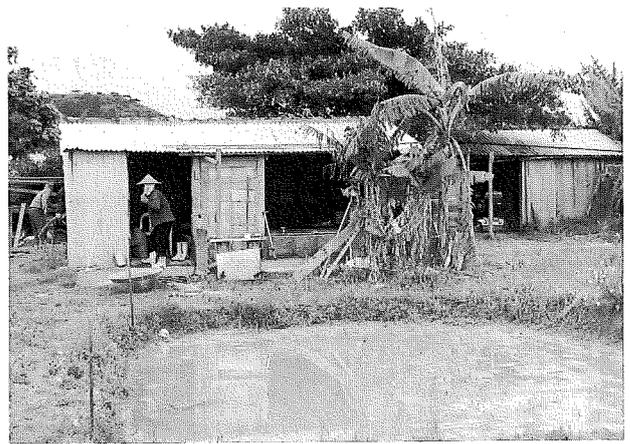


写真15 水田の畑小屋



写真13 サトウキビ満載の大型トラック



写真16 サトウキビ畑の畑小屋



写真14 サトウキビ計量中の様子

されながら水田地帯が畑地に転換されることが多くなり、さらに安価で良質の外来米への依存度の高まりとサトウキビ栽培との労働面の競合等で稲作面積が年々減少していった。食糧不足対策の一環として稲作生産が拡大していた頃（昭和30年代）は、ハタキヤーが多かったという。その頃のハタ

キヤーは、労働の疲れを癒すための一時的な休憩所となったり、炊飯や食事をする場所になったり、農具置き場、収穫後の作物を一時的に収納する場所となったり、多目的に使用されていたこのことである。

### 黒糖づくり

小浜糖業の前身である大洋漁業（株）が糖業開始をする以前の小浜島には、小浜集落を取り囲むように中型の15屯工場が集落の周辺に3カ所あった。小浜小中学校の北側にある「かぶにわんお嶽」を挟んで東側に東工場、西側に中工場、そして小浜集落の西側には西工場があった。当時、東工場で黒糖づくりの仕事をしていた前仲氏（現在76歳）に当時の様子を聞くことができた。前仲氏によると、自家発電の圧搾機で搾られた蔗汁は、五つの平ナベ（約180cm×180cm）を使って黒糖づくりをしていた。熟

練された黒糖づくりの職人によって、最初の一番ナベでアク取り作業が行われ、二番ナベ、三番ナベ、四番ナベで濃縮ながら石灰を投入し、最後の五番ナベで仕上げていく作業工程で黒糖が作られていった。生まれた黒糖は、樽（120斤：約72kg）に入れられて石垣島経由で沖縄本島に出荷していたとのことである。現在も黒糖づくりの作業行程においては、機械化はされているが、大きな違いはない。サトウキビ栽培農家や工場スタッフの温かい心によってつくられた小浜の黒糖は味・品質ともに評判が高い。

## 考 察

小浜島は、恵まれた大自然の豊かな環境に包み込まれている。島の中は勿論のこと、島の周辺も含めて、自然がつくりあげてきた宝物がいっぱいあった。正直なところ、たった4日間の調査で、「サトウキビ栽培と島の暮らし」を論述することは心忍びない思いである。今回の調査は、調査の不十分さと筆者の力量不足で満足できる調査が出来ず、現況報告になってしまった。2度の調査で印象深いのは、島の若い人に人気のある畜産の広がりやサトウキビ栽培農家の高齢化である。島の活力は、豊かな自然が築きあげたエネルギーの中から生まれてくるものと、筆者は思っている。小浜節は八重山地方だけでなく、沖縄本島でもよく知られた歌である。全体的にミルク世界報の島を表現した歌である。「大岳バ後（クシャ）ティ、白浜前ナシ」の句にみられる白浜の浜

も護岸工事ですっかり変貌している。小浜島には自然がつくりあげてきた小浜島だけの豊かな環境がある。筆者の考えている豊かな自然とは、水や空気であり、地形や地質であり、地形や地質が基になってできた土壌であり、島で生活する動植物すべてである。島の先人達が築いてきた、自然を基にした生活の知恵を土台にして、他の島々にはない、小浜島だけの島しょ観から生まれるべきサトウキビ栽培と島の暮らしを望みたい。

## 謝 辞

本調査については、金城聖吉（小浜糖業社長）・白保永太郎（小浜糖業常務）・慶田盛正光（小浜民俗資料館館長）・黒島耕耕（竹富町教育委員会教育長）・花城栄行（竹富町文化財保護審議会会長）・前本幸一・前仲信英・根原清一の各氏に様々な情報をいただいた。厚くお礼申し上げます。

## 文 献

- 八重山農業改良普及所. 1981. 『八重山の土壌』  
八重山農林土木事務所. 1996. 『八重山農漁業基盤整備—島々の美しき世界報村づくり—』  
竹富町役場. 1978. 町制30年のあゆみ.  
記念誌委員会（編）. 1997. 『創立100周年記念誌『うふたき』竹富町立 小浜小学校』

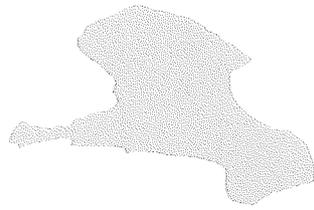
---

## 小浜島総合調査報告書

発行 2004年3月29日  
編集発行 沖縄県立博物館  
〒903-0823  
沖縄県那覇市首里大中町1-1  
TEL 098-884-2243  
FAX 098-886-4353

印刷 株式会社 東洋企画印刷  
〒900-0024  
沖縄県那覇市古波蔵4-1-1  
TEL 098-831-7404

---



小浜島総合調査報告書  
沖縄県立博物館

正誤表

p. 30の表6を以下のように訂正

| 種名 | 学名 | 今回<br>確認 | 八重山諸島での記録 |   |   |   |   |   |   |   |
|----|----|----------|-----------|---|---|---|---|---|---|---|
|    |    |          | 小         | 石 | 西 | 竹 | 黒 | 新 | 鳩 | 波 |

<両生綱 無尾目に次の2種を挿入>

|            |                            |  |  |   |   |  |  |  |  |  |  |  |  |
|------------|----------------------------|--|--|---|---|--|--|--|--|--|--|--|--|
| オオハナサキガエル  | <i>Rana supranarina</i>    |  |  | ○ | ○ |  |  |  |  |  |  |  |  |
| コガタハナサキガエル | <i>Rana utsunomiyaorum</i> |  |  | ○ | ○ |  |  |  |  |  |  |  |  |

<爬虫綱 有鱗目 トカゲ亜目に次の種を挿入>

|             |                                  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |   |  |
|-------------|----------------------------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|---|--|
| ヨナゲニキノボリトカゲ | <i>Japalura polygonata donan</i> |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | ○ |  |
|-------------|----------------------------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|---|--|

<サキシマキノボリトカゲの「八重山諸島での記録」の「与」から○を削除>